

平成23年度
神戸市埋蔵文化財年報



2 0 1 4

神戸市教育委員会

平成23年度
神戸市埋蔵文化財年報

2 0 1 4

神戸市教育委員会



fig.1 北青木遺跡第7次調査B59-B区方形周溝墓全景

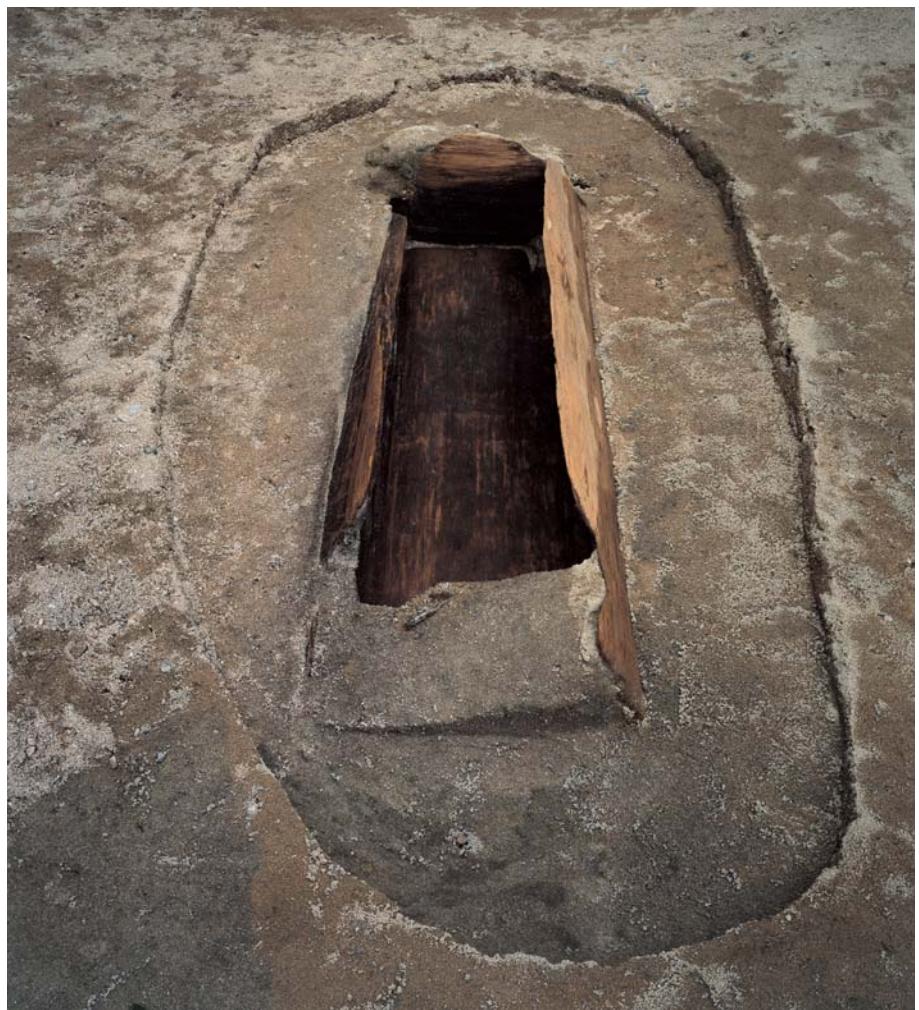


fig.2 同上ST302 全景



fig.3
祇園遺跡第14次調査
調査区全景〔平安時代～中世〕



fig.4
出合遺跡第46次調査
第17・18トレンチ全景



fig.5
潤和横尾遺跡第1次調査
1区全景



fig.6
同上
調査地遠景



fig. 7
深江北町遺跡第 12 次調査
出土木簡〔赤外線写真〕



fig. 8
北青木遺跡第 7 次調査
出土土器



fig. 9
篠原遺跡第 30 次調査
出土繩文土器



fig.10
二葉町遺跡第23次調査
出土土器



fig.11
潤和横尾遺跡第1次調査
出土遺物

序

私たちのふるさと、神戸の街では、私たちの祖先が古の時代から生活を営んできました。

今、私たちは直接その様子を目の当たりにすることはできませんが、発掘調査によってその一端を知ることができます。開発行為によって、これらの多くは残念ながら消滅してしまいますが、現代に生きる私たち自身が大切に記録を残し、未来へと伝えていかなければならぬと考えています。

本書に掲載しております調査成果は、このように発掘調査によって得られた大切な記録であり、今後大いに活用されることが期待される資料です。本書が私たちの住む地域への愛着をさらに深める上で、その一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査および本年報を作成するにあたり、ご協力いただきました関係諸機関ならびに関係者各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成26年1月

神戸市教育委員会

例　　言

- 本書は、神戸市教育委員会が平成23年度に実施した埋蔵文化財発掘調査事業の概要である。事業に関わる発掘調査は、下記の調査組織によって実施した。

調査関係者組織表

神戸市文化財保護審議会 (史跡・考古資料担当)
工　樂　善　通　　大阪府立狭山池博物館館長
和　田　晴　吾　　立命館大学文学部教授

教育委員会事務局

教　　育　　長	永井秀憲			
社　会　教　育　部　長	大寺直秀			
参事 (文化財課長事務取扱)	安達宏二			
主幹 (埋蔵文化財係長事務取扱)	千種 浩			
文　化　財　専　門　役	丸山 潔			
文　化　財　課　主　查	丹治康明	安田 滋	斎木 巖	
事　務　担　当　学　芸　員	佐伯二郎	井尻 格	中谷 正	小林さやか
調　査　担　当　学　芸　員	西岡巧次	口野博史	谷 正俊	須藤 宏
	富山直人	池田 毅	内藤俊哉	浅谷誠吾
	川上厚志	石島三和	阿部 功	佐藤麻子
埋蔵文化財センター担当学芸員	黒田恭正	西岡誠司	山口英正	阿部敬生
保存科学担当学芸員	中村大介			

- 本書に記載した位置図は、神戸市発行5万分の1神戸市全図を、各遺跡の位置図は、神戸市発行2,500分の1都市計画図を使用した。調査範囲が広域な遺跡や目標となるものが入らない地点の遺跡の位置図については、キャプションに縮尺を表記している。
- 本書は、埋蔵文化財発掘調査一覧表に示した各調査担当学芸員が執筆し、I. 平成23年度事業の概要1～3については千種 浩が執筆し、I-4については斎木 巖が執筆した。また、平成23年神戸市埋蔵文化財調査地点図と調査地点位置図については丸山 潔が作成した。編集は阿部敬生が行った。
- 挿図写真の撮影、遺構図のトレースについては、fig. 33・34・36・37は丸山が、fig. 233・244は杉本和樹氏 (西大寺フォト) が撮影を行い、その他のものについては各調査担当者が行った。
- 巻頭カラーは、fig. 1～3・5は丸山 潔が、fig. 4は (株) GEOソリューションズが、fig. 6は (株) アコードが、fig. 7は (独) 国立文化財機構文化財研究所奈良文化財研究所中村一郎氏が、fig. 8～11は杉本和樹氏がそれぞれ撮影を行った。
- 表紙写真は北青木遺跡第7次調査 (本文29頁) 出土の木棺で、裏表紙写真は祇園遺跡第14次調査 (本文59頁) 出土の青白磁合子である。撮影は、杉本和樹氏が行った。
- 市内各遺跡の調査次数については、現在改正作業中である。

目 次

序

例言

I.	平成23年度 事業の概要	1
	平成23年度 埋蔵文化財発掘調査一覧	12
	平成23年度 神戸市埋蔵文化財調査位置図	15
II.	平成23年度の発掘調査	
1.	深江北町遺跡 第12次調査	19
2.	深江北町遺跡 第13次調査	25
3.	北青木遺跡 第7次調査	29
4.	本山遺跡 第38次調査	35
5.	西岡本遺跡 第9次調査	37
6.	郡家遺跡 第86次調査	41
7.	郡家遺跡 第87次調査	45
8.	篠原遺跡 第30次調査	49
9.	二宮東遺跡 第4次調査	51
10.	雲井遺跡 第34次調査	53
11.	祇園遺跡 第14次調査	59
12.	祇園遺跡 第15次調査	61
13.	楠・荒田町遺跡 第51次調査	65
14.	兵庫津遺跡 第54次調査	69
15.	兵庫津遺跡 第55次調査	77
16.	兵庫津遺跡 第56次調査	81
17.	塚本遺跡 第5次調査	87
18.	上沢遺跡 第59次調査	89
19.	中遺跡 第30次調査	93
20.	山田・中遺跡 第7次調査	97
21.	御蔵遺跡 第69次調査	99
22.	御蔵遺跡 第70次調査	101
23.	若松町東遺跡 第6次調査	103
24.	二葉町遺跡 第23次調査	105
25.	戎町遺跡 第68次調査	109
26.	千歳遺跡 第5次調査	113
27.	古川町遺跡 第1次調査	117
28.	南別府遺跡 第5次調査	119
29.	潤和横尾遺跡 第1次調査	127
30.	馬掛原遺跡 第2次調査	141
31.	潤和遺跡 第5次調査	143
32.	今池尻遺跡 第4次調査	145
33.	出合遺跡 第46次調査	147
III.	平成23年度の保存科学調査・作業の概要	151

挿図目次

fig. 1	北青木遺跡第7次調査B59-B区方形周溝墓全景〔巻頭カラー〕	
fig. 2	同上ST302全景〔巻頭カラー〕	
fig. 3	祇園遺跡第14次調査調査区全景〔巻頭カラー〕	
fig. 4	出合遺跡第46次調査第17・18トレンチ全景〔巻頭カラー〕	
fig. 5	潤和横尾遺跡第1次調査1区全景〔巻頭カラー〕	
fig. 6	同上調査地遠景〔巻頭カラー〕	
fig. 7	深江北町遺跡第12次調査出土木簡〔巻頭図版〕	
fig. 8	北青木遺跡第7次調査出土土器〔巻頭カラー〕	
fig. 9	篠原遺跡第30次調査出土繩文土器〔巻頭カラー〕	
fig. 10	二葉町遺跡第23次調査出土土器〔巻頭カラー〕	
fig. 11	潤和横尾遺跡第1次調査出土遺物〔巻頭カラー〕	
fig. 12	企画展示「神戸古代史探検」〔写真〕	12
fig. 13	出張講座「土器づくり体験」〔写真〕	12
fig. 14	出張授業「大開ムラの再現」〔写真〕	12
fig. 15	「その道の達人に学ぶ体験講座」堅穴住居をつくろう〔写真〕	12
fig. 16	特別講演会「銅鏡のなぞに迫る」〔写真〕	12
fig. 17	企画展示「昭和のくらし・昔のくらし6」〔写真〕	12
fig. 18	平成23年度 埋蔵文化財年報掲載遺跡位置図	15
fig. 19	調査地点位置図（1）	16
fig. 20	調査地点位置図（2）	16
fig. 21	調査地点位置図（3）	17
fig. 22	調査地点位置図（4）	17
fig. 23	調査地点位置図（5）	18
fig. 24	調査地点位置図（6）	18

fig. 25	調査地位置図	19	fig. 73	古墳時代遺構平面図	52
fig. 26	B81-A区平面図	23	fig. 74	調査地位置図	53
fig. 27	調査地位置図	25	fig. 75	調査区中央土層断面図	53
fig. 28	第2遺構面平面図	26	fig. 76	第1遺構面平面図	54
fig. 29	第3遺構面平面図	27	fig. 77	第1遺構面出土遺物実測図	55
fig. 30	2区第4遺構面全景〔写真〕	28	fig. 78	第2遺構面平面図	56
fig. 31	第4遺構面平面図	28	fig. 79	第2遺構面出土遺物実測図	58
fig. 32	調査地位置図 1:5,000	29	fig. 80	調査地位置図	59
fig. 33	B47区方形周溝墓全景〔写真〕	32	fig. 81	調査範囲位置図	59
fig. 34	同左周溝土層断面〔写真〕	32	fig. 82	調査区平面図	60
fig. 35	B59-B区遺構平面図	33	fig. 83	調査地位置図	61
fig. 36	B59-B区方形周溝墓全景〔写真〕	33	fig. 84	調査区割図	62
fig. 37	同左周溝内遺物出土状況〔写真〕	33	fig. 85	SX107平面図	63
fig. 38	調査地位置図	35	fig. 86	調査地位置図	65
fig. 39	調査区平面図	35	fig. 87	調査範囲位置図	66
fig. 40	湿地全景〔写真〕	35	fig. 88	北東部第2期遺構面全景〔写真〕	66
fig. 41	調査区西壁土層断面図	36	fig. 89	第2期遺構面平面図	66
fig. 42	調査地位置図	37	fig. 90	S B01平・断面図	66
fig. 43	調査範囲位置図	37	fig. 91	第1期遺構面平面図	67
fig. 44	調査区中央土層断面図	38	fig. 92	西部第1期遺構面全景〔写真〕	67
fig. 45	SK22平・断面図	38	fig. 93	東部第1期遺構面全景〔写真〕	67
fig. 46	SK22遺物出土状況〔写真〕	38	fig. 94	遺物包含層出土遺物実測図	68
fig. 47	調査区平面図	39	fig. 95	調査地位置図	69
fig. 48	I区全景〔写真〕	39	fig. 96	調査区中央土層断面図	69
fig. 49	II区全景〔写真〕	39	fig. 97	調査範囲位置図	70
fig. 50	出土遺物実測図	40	fig. 98	第1遺構面平面図	70
fig. 51	調査地位置図	41	fig. 99	北地区第1遺構面全景〔写真〕	70
fig. 52	調査区地区割図	41	fig. 100	S B101全景〔写真〕	70
fig. 53	A-2区北壁土層断面図	42	fig. 101	第2遺構面平面図	71
fig. 54	第1遺構面平面図	42	fig. 102	北地区第2遺構面全景〔写真〕	71
fig. 55	A-1区SB101全景〔写真〕	43	fig. 103	南地区第2遺構面全景〔写真〕	71
fig. 56	B区SB101全景〔写真〕	43	fig. 104	第3遺構面平面図	72
fig. 57	第2遺構面平面図	43	fig. 105	北地区第3遺構面全景〔写真〕	72
fig. 58	B区SB201全景〔写真〕	44	fig. 106	第4遺構面平面図	73
fig. 59	調査地位置図	45	fig. 107	北地区第4遺構面全景〔写真〕	73
fig. 60	調査範囲位置図	45	fig. 108	SK415全景〔写真〕	73
fig. 61	調査区東壁土層断面図	46	fig. 109	第5遺構面平面図	74
fig. 62	第1遺構面平面図	46	fig. 110	北地区第5遺構面全景〔写真〕	74
fig. 63	第2遺構面平面図	47	fig. 111	S X505遺物出土状況〔写真〕	74
fig. 64	SB201全景〔写真〕	47	fig. 112	出土遺物実測図(1)	75
fig. 65	SB201カマド遺物出土状況〔写真〕	47	fig. 113	出土遺物実測図(2)	76
fig. 66	第2遺構面全景〔写真〕	48	fig. 114	調査地位置図	77
fig. 67	調査地位置図	49	fig. 115	第1遺構面平面図	78
fig. 68	調査範囲位置図	49	fig. 116	第1遺構面全景〔写真〕	78
fig. 69	調査区東壁土層断面図	50	fig. 117	第2遺構面全景〔写真〕	79
fig. 70	調査区平面図	50	fig. 118	第2遺構面平面図	79
fig. 71	調査地位置図	51	fig. 119	第3遺構面全景〔写真〕	79
fig. 72	調査区中央土層断面図	52	fig. 120	第3遺構面平面図	79

fig. 217 S B 201全景 [写真] ······	139	fig. 238 貝類等遺存体出土状況 [写真] ······	151
fig. 218 S B 202全景 [写真] ······	139	fig. 239 周囲土壤掘削作業 [写真] ······	151
fig. 219 S B 203全景 [写真] ······	139	fig. 240 ウレタンフォームでの梱包作業 [写真]	151
fig. 220 S B 405全景 [写真] ······	139	fig. 241 開梱・下部土壤掘削作業 [写真] ······	152
fig. 221 S B 407全景 [写真] ······	139	fig. 242 遺物下面検出状況 [写真] ······	152
fig. 222 S B 408全景 [写真] ······	139	fig. 243 バックアップ材設置作業 [写真] ······	152
fig. 223 出土遺物実測図 ······	140	fig. 244 完成状況 [写真] ······	152
fig. 224 調査地位置図 ······	141	fig. 245 転写土層および専用パネル [写真] ······	153
fig. 225 調査区北・西壁土層断面図 ······	141	fig. 246 転写土層シート貼付け作業 [写真] ······	153
fig. 226 調査区平面図 ······	142	fig. 247 剥落止め用樹脂塗布作業 [写真] ······	153
fig. 227 調査地位置図 ······	143	fig. 248 完成状況 [写真] ······	153
fig. 228 調査範囲位置図 ······	143	fig. 249 低層配水池の建設工事（大正6年） [写真]	154
fig. 229 調査区平面図 ······	144	fig. 250 杭① 処理経過 ······	154
fig. 230 II区全景 [写真] ······	144	fig. 251 杭①搬入時状況 [写真] ······	155
fig. 231 調査地位置図 1 : 5,000 ······	145	fig. 252 杭①クラック状況（搬入時） [写真] ······	155
fig. 232 調査範囲位置図 ······	145	fig. 253 杭②乾燥処置後状況 [写真] ······	155
fig. 233 出土遺物 [写真] ······	146	fig. 254 搬入後仮保管状況 [写真] ······	157
fig. 234 調査区平面図 ······	146	fig. 255 搬入時状態記録作業 [写真] ······	157
fig. 235 調査地位置図 ······	147	fig. 256 真空凍結乾燥作業 [写真] ······	157
fig. 236 17・18トレンチ第1遺構面平面図 ······	148	fig. 257 乾燥処理終了後梱包作業 [写真] ······	157
fig. 237 20~22トレンチ第2遺構面平面図 ······	149		

表目次

表 1 文化財保護法に基づく届出・通知等件数一覧	1	表 15 講座「神戸の歴史探検」 ······	11
表 2 発掘調査面積 ······	1	表 16 平成23年度埋蔵文化財発掘調査一覧（1）	13
表 3 発掘調査面積別件数 ······	1	表 17 平成23年度埋蔵文化財発掘調査一覧（2）	14
表 4 図面・写真貸出一覧（1） ······	3	表 18 平成23年度埋蔵文化財出土遺物整理一覧	14
表 5 図面・写真貸出一覧（2） ······	4	表 19 深江北町遺跡第12次調査調査内容一覧 ······	20
表 6 図面・写真貸出一覧（3） ······	5	表 20 北青木遺跡第7次調査調査内容一覧 ······	30
表 7 図面・写真貸出一覧（4） ······	6	表 21 潤和横尾遺跡1・2・4区竪穴建物一覧	129
表 8 館外貸出一覧（1） ······	6	表 22 神戸市内大型竪穴建物一覧 ······	130
表 9 館外貸出一覧（2） ······	7	表 23 兵庫県下鉄鎌出土弥生時代遺跡一覧 ······	138
表 10 館外貸出一覧（3） ······	8	表 24 乾燥前後状況 ······	155
表 11 特別利用一覧（1） ······	8	表 25 被災文書類乾燥処理結果 ······	156
表 12 特別利用一覧（2） ······	9	表 26 平成23年度出土保存科学関連遺物一覧 ······	158
表 13 特別利用一覧（3） ······	10	表 27 平成23年度自然科学分析一覧 ······	158
表 14 平成23年度の企画展示 ······	11		

I . 平成23年度 事業の概要

1. 体制

本市における埋蔵文化財に係わる業務については、平成22年度までは、埋蔵文化財指導係、埋蔵文化財調査係、埋蔵文化財センターの3つの係で分担してきた。主に埋蔵文化財指導係は、文化財保護法に係わる窓口業務、試掘調査、埋蔵文化財調査係は、発掘調査と出土品等の修復と保存及び管理、埋蔵文化財センターは展示等の啓発事業を行ってきた。平成23年度以降は、これらを一元的に行うために体制を一新し、すべてを新たに「埋蔵文化財係」として対応している。

2. 開発指導

周知の埋蔵文化財包蔵地内における土木工事等については、文化財保護法第93条・第94条に基づく届出・通知が必要であり、各事業者に対して必要とされる保護措置を示している。また、建築確認申請に伴う事前届出書の閲覧を実施し、周知の埋蔵文化財包蔵地内における建築行為については埋蔵文化財発掘届出書の提出を促している。

平成23年度の文化財保護法に基づく届出・通知件数は、708件（前年度708件）であり、このうち、民間事業者・個人による第93条の届出が643件（前年度651件）であった。また、開発行為事前審査願148件（前年度115件）、試掘調査依頼は202件（前年度229件）であった。届出・試掘調査の件数は平成22年度に比べてほぼ横ばいの状況である。このように、周知の遺跡の範囲内では、開発事業は減ずることなく行われているようである。窓口での埋蔵文化財包蔵地の確認、問い合わせは年間で約6,000件であった。

これらの届出や問い合わせに対して、試掘調査によって得られた情報や既存情報を基に、可能な限り新築される建物の基礎が遺跡に影響を与えないように、設計変更を求めている。そのことによって、発掘調査を回避し、新たな建物等の下に遺跡の一部を保護している件数も多い。

表1 文化財保護法に基づく届出・通知等件数一覧

No.	内 容	件数
1	発見・発掘届（保護法93・94条関係）	708件
i	民間の事業に伴う発掘届（93条）	643件
ii	公共の事業に伴う発掘通知（94条）	65件
iii	発掘届・発見通知（92条）	0件
2	発掘調査の報告（99条）	37件
3	開発行為事前審査等各種申請	148件
4	試掘調査（依頼件数）	202件
5	発掘調査（大規模確認調査も含む）	38件
i	民間事業に伴う発掘調査	33件
ii	公共事業に伴う発掘調査	5件
iii	圃場整備事業に伴う発掘調査	0件
6	工事立会	60件
7	整理作業（復興調査整理作業を含む）	2件

表2 発掘調査面積

	民間関連事業	公共関連事業	合 計
調査面積	20,677	2,370	23,047
延べ調査面積	34,127	3,450	37,577

表3 発掘調査面積別件数

調査面積	件数	%	調査面積	件数	%
~100m ²	15件	38	1,001~2000m ²	2件	5
101~300m ²	11件	28	2001~5000m ²	1件	3
301~500m ²	3件	8	5,000m ² 以上	1件	3
501~1,000m ²	6件	15	合計	39件	100

※調査件数39件は表1 発掘調査件数38件のうち同一事業に伴って実施した潤和横尾遺跡と馬掛原遺跡を個別に集計したことによる

3. 埋蔵文化財調査事業

平成23年度に実施した埋蔵文化財調査事業は38件で、それに要した経費（出土品整理・保存処理を含む）の総額は、272,504千円であった。

国庫補助事業

発掘調査事業の内、その原因が個人住宅や個人事業者、零細事業者による場合は、国庫補助事業として、規程と基準により公費を充当している。平成23年度の緊急発掘調査事業費は63,000千円であった。この事業の一つとして、脆弱遺物の恒久的な保存を目的として端谷城跡第5次調査出土の鉄製胴丸などの保存処置を継続して実施した。また、復興調査整理として、平成8・9年度に調査を実施した震災復興事業に伴う上沢遺跡の出土遺物の整理を継続して行った。

市内発掘調査

昨年度と同様に、発掘調査件数は、基礎構造の設計変更により、発掘調査が回避された結果、昨年度よりも減少している。一方で回避を確認するための工事立会が増加している。

発掘調査面積は23,047m²（延べ37,577m²）で、このうち民間関連事業によるものが20,677m²（延べ34,127m²）と約9割を占め、引き続き公共工事に伴う発掘調査が減少している。面積別でみると、300m²以下の件数比率が39%と平成22年度の36%から微増しているが、1,000m²以上は平成22年度の12%から26%と大きく増加している。平成22年度においては大規模調査は少なかったが、平成23年度は大小の2極化傾向が顕著に表れた。大規模調査は年度により、その発生にはばらつきがあるが、個人住宅や店舗等建替えなどの調査需要が安定していることを表している。

現地説明会等

発掘調査の現場において、実際に遺跡を体感する機会として、現地説明会や近隣を対象とした現地公開を行った。

平成23年7月9日、北青木遺跡第7次調査の現地説明会を開催し、猛暑にもかかわらず500名の参加があった。弥生時代の砂丘の上で方形周溝墓を確認し、時代による地形の変化とそれに伴う土地利用の変遷が明らかになった。当日は、第5次調査で出土した北青木銅鐸の展示を行い、地元で初めてのお披露目となった。

平成23年11月3日、平家関連遺構を検出した祇園遺跡第14次調査の現地説明会を開催した。翌平成24年に放映されるNHK大河ドラマ「平清盛」の影響もあり、近隣住民の関心が非常に高く、また遠方から多くの参加があり、参加者は1,750名に上った。

平成23年12月3日、潤和横尾遺跡第1次調査の現地説明会を開催した。寒風の中、57名の参加があった。明石海峡を見下ろす弥生時代の高地性集落であり、大型建物への関心が集まった。

資料の活用

発掘調査によって保存された資料には、主に出土品と写真や図面の記録類があり、これらは他の機関等からの要望があれば、貸出等を行っている。写真については、平成23年度は58件の依頼があり182点を貸出した。貸出資料としては、平成22年度までは五色塚古墳関係が最も多かったが、平成23年度はNHK大河ドラマ「平清盛」の影響で、祇園遺跡と楠・荒田町遺跡、及び兵庫津遺跡が19件と最も多く、五色塚古墳関係の14件と合わせると半数を超えている。これらは主に学校教育関連、博物館等の展示、歴史関係図書類、情報誌類などへの掲載を利用目的としている。利用手段としては、印刷物への掲載だけでなく、インターネット上の公開やデジタル配布を手法とする依頼がさらに増えている。

出土遺物の貸出は12件、252点あり、昨年度から大幅に増加している。大河ドラマの影響もあるが、新方遺跡、大開遺跡の弥生時代の資料や、天王山5号墳、白水瓢塚古墳の古墳出土品などが県内外の博物館などで展示され活用された。

その他に、特別利用として、出土品についての資料調査・閲覧の依頼が29件、1,753点に対してあり、大学生、研究者が篠原遺跡、大開遺跡、西求女塚古墳などの資料を調査している。

刊行物一覧

平成23年度に刊行した発掘調査報告書等は、下記のとおりである。

『北青木銅鐸』頒価600円、『兵庫津遺跡第53次発掘調査報告書』頒価1,000円、『平成21年度神戸市埋蔵文化財年報』頒価1,300円、『神戸市埋蔵文化財分布図（平成24年度版）』頒価450円、『神戸の遺跡シリーズII 平氏と神戸の遺跡』頒価200円。

北青木銅鐸の現地の発掘調査は、平成18年度に実施したものであるが、保存修復作業が完了したため報告書を刊行した。兵庫津遺跡第53次調査は、平成22年度に発掘調査を実施したものである。

表4 図面・写真貸出一覧（1）

No.	申請者（団体名・個人名）	利用目的・内容	資料名	資料点数
1	（株）誠文堂新光社	『教養のための社会 日本の歴史』に掲載のため	白水遺跡ほか出土木製農耕具 画像データ1点	1
2	（株）洋泉社	『歴史REAL・3号』「広瀬和雄（国立歴史民俗博物館教授）インタビュー」に掲載	五色塚古墳 画像データ1点	1
3	（株）山川出版社	『中世都市研究16 都市のかたち』（中世都市研究会編）に掲載	楠・荒田町遺跡 壁断面写真 画像データ1点	1
4	西区役所まちづくり課	『神戸市広報紙 7月号』 区民広報紙に掲載	白水瓢塚古墳 腕輪型石製品 画像データ1点 神戸市埋蔵文化財センター展示室 画像データ1点	2
5	灘区役所まちづくり課	『灘区の遺跡』に掲載するため	桜ヶ丘遺跡 ナイフ形石器 画像データ1点 滝ノ奥遺跡 有茎尖頭器（槍先） 画像データ1点 篠原遺跡 龜ヶ岡式土器 画像データ1点 篠原遺跡 遮光器土偶 画像データ1点 都賀遺跡 深鉢 画像データ1点 都賀遺跡 石鏡 画像データ1点 西求女塚古墳 青銅鏡（集合写真） 画像データ1点 西求女塚古墳 発掘調査状況 画像データ1点 滝ノ奥経塚 出土品 画像データ1点（『神戸考古学BEST50』掲載分）	9
6	（株）文英堂	『巨大古墳の出現』（一瀬和夫著）に掲載	西求女塚古墳 堅穴式石室仕切石 画像データ1点 （『西求女塚古墳発掘調査報告書』 卷頭図版5掲載分）	1
7	（株）ゼンリン	『Actiz mi-ru-to 神戸市西区』に掲載するため	神戸市埋蔵文化財センター外観写真 画像データ1点	1
8	（株）山川出版社	『物語の舞台を歩く 純友追討記』に掲載するため	深江北町遺跡 複弁十九葉蓮華文軒丸瓦・円面鏡・土器類の写真 画像データ1点	1
9	兵庫県立考古博物館	平成23年度特別展「みほとけの考古学」の展示図録および博物館NEWS VOL.8・展示パネルに掲載するため	滝ノ奥経塚 出土品集合写真 カラー写真データ1点 滝ノ奥経塚 独鉢杵 カラー写真データ1点 滝ノ奥経塚 2号鏡 カラー写真データ1点 滝ノ奥経塚 5号鏡 カラー写真データ1点 滝ノ奥経塚 7号鏡 カラー写真データ1点 滝ノ奥経塚 9号鏡 カラー写真データ1点 滝ノ奥経塚 10号鏡 カラー写真データ1点 滝の奥経塚 11号鏡 カラー写真データ1点 滝ノ奥経塚 13号鏡 カラー写真データ1点 滝ノ奥経塚 青白磁合子身・蓋セット カラー写真データ1点 滝ノ奥経塚 青白磁壺形合子身・蓋セット カラー写真データ1点 滝ノ奥経塚 白磁壺形合子身・蓋セット カラー写真データ1点 滝ノ奥経塚 凤凰飾金具 カラー写真データ1点	13
10	兵庫県立考古博物館	企画展『はかせからの挑戦状 古墳のナゾをとけ』でパネル展示するため	舞子浜遺跡 墳輪棺の中の人骨 画像データ1点 （『神戸の古墳』35頁掲載分） 五色塚古墳と小壺古墳 画像データ1点 （『史跡五色塚古墳 小壺古墳発掘調査・復元整備報告書』図版2掲載分）	2

表5 図面・写真貸出一覧（2）

No.	申請者（団体名・個人名）	利用目的・内容	資料名	資料点数
11	（株）河出書房新社	書籍『図説 平清盛』の「福原京」に掲載するため	祇園遺跡出土 玳玳天目小碗 画像データ1点 （『平家と福原京の時代』カバー裏面掲載分）	1
12	播磨町郷土資料館	平成23年度播磨町郷土資料館特別展における展示及び図録・広報のため	五色塚古墳 CG復元 電子データ（カラー） 五色塚古墳 全景（航空写真） 電子データ（カラー） 五色塚古墳 前方部から後円部 電子データ（カラー） 五色塚古墳 舜石検出状況（前方部東） 電子データ（カラー） 五色塚古墳 墓輪復元 電子データ（カラー） 五色塚古墳 出土埴輪集合 電子データ（カラー） 高津橋大塚遺跡 石見型埴輪・人物埴輪 電子データ（カラー） 高津橋大塚遺跡 高津橋大塚古墳遠景 電子データ（カラー）	8
13	兵庫県立考古博物館	平成23年度 特別展「みほとけの考古学」展示図録および展示パネルに掲載するため	滝の奥経塚全景写真 写真データ1点 （『特別展 神戸の文化財II』 12頁上段掲載分）	1
14	（株）オメガ社	『身近な金属』（仮）に掲載するため	西求女塚古墳 出土鏡群 画像データ1点 （『西求女塚古墳発掘調査報告書』巻頭図版7掲載分）	1
15	個人	大阪歴史学会 9月例会発表（平成23年9月10日） 「旧神戸外国人居留地遺跡の発掘調査成果」で使用	旧神戸外国人居留地遺跡 第1次調査画像データ15点 （『旧神戸外国人居留地遺跡発掘調査報告書』写真2、10、12～22、26、27掲載分）	15
16	（株）十象舎	デアゴスティーニ・ジャパン「戦国武将データファイル」第80号 戦国武将ゆかりの温泉地特集中で掲載するため	湯山遺跡 画像データ1点（『ゆの山御てん』35頁・62掲載分）	1
17	垂水商店街復興組合	『垂水満喫』（産業振興局商業課助成事業によるガイドブック）に掲載するため	五色塚古墳 画像データ2点 （『史跡五色塚古墳 小壺古墳発掘調査・復元整備報告書』図版1の1、図版2の1掲載分）	2
18	（株）平凡社	雑誌『別冊太陽 平清盛』に図版として掲載するため	祇園遺跡出土 玳玳天目小碗 画像データ1点	1
19	伊丹市立博物館	伊丹市立博物館 秋季企画展『有岡城から伊丹郷町まで』図録及び展示に掲載するため	別所長治 羽柴秀吉対陣図 画像データ1点	1
20	（株）帝国書院	『アドバンス 中学校歴史資料』に掲載するため	祇園遺跡出土 石鎌 画像データ1点 出合遺跡出土 石鎌 画像データ1点	2
21	個人	古代学研究会 10月例会発表（平成23年10月15日） 「神戸市内の近代遺跡の発掘調査から」で使用	旧神戸外国人居留地遺跡 画像データ9点 （『旧神戸外国人居留地遺跡発掘調査報告書』写真2、10、12～22、26、27掲載分） 神戸臨港線南本町架道橋跡遺跡 画像データ5点 （『神戸臨港線南本町架道橋範囲確認調査報告書』4頁上段、5頁、6頁、8頁上・下段掲載分）	20
22	神戸市建設局中部建設事務所	地元主催のイベントでパネル展示するため	神戸臨港鉄道南本町架道橋台 画像3点	3
23	兵庫県立神戸生活創造センター	「神戸生活創造しんぶんPiPin 第112号」に掲載 神戸生活創造センター ホームページに掲載	五色塚古墳 画像データ2点 （『史跡五色塚古墳 小壺古墳発掘調査・復元整備報告書』報告書図版2の1、3の1掲載分）	2
24	一般社団法人 神戸港振興協会 （神戸海洋博物館）	企画展「市内に残る清盛の足跡」解説パネルで展示するため	「祇園遺跡出土 玳玳天目小碗」 写真資料1点 「祇園遺跡出土 須恵器碗（房） 墨書き土器」 写真資料1点 「祇園遺跡出土 播磨系軒瓦」 写真資料1点 「祇園遺跡出土 山城系軒瓦」 写真資料1点 「祇園遺跡出土 土師器小皿と渥美窯甕」 写真資料1点 「二葉町遺跡出土 船材（中世 三材構造船）」 写真資料1点	6
25	一般社団法人 神戸港振興協会 （神戸海洋博物館）	企画展「市内に残る清盛の足跡」解説パネルで展示するため	「兵庫津遺跡出土 宋錢」（デジタルデータ）1点	1
26	神戸市危機管理室	『津波防災ビデオ』製作で使用	旧神戸外国人居留地遺跡 画像データ3点 （『旧神戸外国人居留地遺跡発掘調査報告書』写真7、9、10掲載分）	3
27	財団法人 姫路市文化国際交流財団	『パンカル』2012年冬号に掲載するため	祇園遺跡 画像データ2点（園池遺構、玳玳天目小碗） 楠・荒田町遺跡 画像データ1点（二重塙）	3
28	（株）ヴァン	『ワンダフル神戸2012』に掲載するため 神戸新聞総合出版センター	祇園遺跡 画像データ3点 （園池遺構、玳玳天目小碗、土師器小皿と渥美窯甕）	3
29	神戸市立中学校教育研究会社会科研究部	『私たちの神戸』（改訂版）に掲載するため	五色塚古墳 画像データ1点 （『史跡五色塚古墳 小壺古墳発掘調査・復元整備報告書』図版16-2掲載分）	1

表6 図面・写真貸出一覧（3）

No.	申請者（団体名・個人名）	利用目的・内容	資料名	資料点数
30	(株) p l a y c e	H. I. S 旅行情報サイト「smart booking」に掲載するため	五色塚古墳 画像データ3点 （『史跡五色塚古墳 小壺古墳発掘調査・復元整備報告書』写真図版1-2「五色塚古墳と浜坂国境の山並」、写真図版2-1「五色塚古墳と小壺古墳」、写真図版3-1「新旧の葺石で復元された墳丘」）	3
31	(有) 三猿舎	『歴史REAL vol. 5 革命児・平清盛とその実像に迫る』に掲載するため	祇園遺跡 園池遺構 画像データ1点	1
32	(株) NHKプラネット中国支社	NHK広島局 制作・著作 シリーズ平清盛 第三回 福原遷都の謎 番組使用のため	祇園遺跡 画像データ2点 （園池遺構 土師器小皿と渥美窯甕） 楠・荒田町遺跡第46次調査 画像データ7点 （調査区北半全景垂直写真、調査区北半遠景写真、調査区北半全景写真、調査区北半斜め遠景写真、調査区北半SD01・SD02土層断面写真、調査区北半SD01全景、調査区北半SD02全景）	10
33	(株) 小学館	『サライ』（2012年2月号）に掲載するため	祇園遺跡 画像データ2点 （玳玳天目小碗、土師器小皿と渥美窯甕）	2
34	(株) 帝国書院	「帝国書院デジタル教科書 社会科 中学生の歴史 日本の歩みと世界の動き」に使用	五色塚古墳空撮全景 写真データ1点	1
35	(株) デジタル・メディア・ラボ クリエイティブルーム関西	『平清盛ドラマ館』で上映する映像コンテンツ内で使用するため	祇園遺跡 画像データ4点 （玳玳天目小碗、祇園遺跡の庭園跡、SX07第II期検出面全景、土師器小皿と渥美窯甕） 楠・荒田町遺跡第46次調査 画像データ3点 （調査区北半遠景写真、調査区北半SD01・SD02土層断面写真、調査区北半全景（東から）） 祇園遺跡第14次調査 画像データ5点 （井戸を廃棄する際の祭祀に使用した土器、空から見た調査区、調査区南端の区画溝（西から）、発掘調査区の全景（北から）、現地説明会資料内写真）	12
36	産経新聞大阪本社	産経新聞夕刊企画「古墳物語り」に掲載するため	西求女塚古墳 画像データ3点 （『西求女塚古墳第5次・第7次発掘調査概報』4頁、21頁、『西求女塚古墳発掘調査報告書』図版15掲載分）	3
37	尼崎市教育委員会	平成23年度尼崎市立田能資料館企画展「高杯～食べ物を盛る器～」の展示パネルを作成するため	本山遺跡第22次調査第1住居跡下層の遺物出土状況写真 『本山遺跡（第22次調査）』図版5-中央 写真データ1点 本山遺跡第22次調査・第1住居跡出土遺物 『本山遺跡（第22次調査）』巻頭カラー図版 写真データ1点	2
38	(株) ベストセラーズ	『一個人』（2012年3月号）特集「平清盛を旅する」に掲載するため	祇園遺跡 園池遺構 画像データ1点	1
39	神戸市産業振興局 観光コンベンション推進室	神戸観光PRパネルで使用するため	五色塚古墳と明石海峡大橋 画像データ1点	1
40	神戸市産業振興局 観光コンベンション推進室	「KOBE de 清盛 誘客デジタルパンフレット2012年版」で使用するため	祇園遺跡 土師器小皿と渥美窯甕 画像データ1点 兵庫津遺跡 宋銭 画像データ1点	2
41	(有) ハユマ	『地図・年表・図解でみる日本の歴史』に掲載するため	五色塚古墳 画像データ2点 (夕日に映える埴輪列と葺石、復元された後円部の葺石と埴輪列)	2
42	個人	『清盛と神戸（仮称）』で使用するため	祇園遺跡 画像データ3点 （玳玳天目小碗、祇園遺跡の庭園跡、土師器小皿と渥美窯甕） 楠・荒田町遺跡第46次調査 画像データ1点 (調査区北半全景（東から）)	4
43	個人	一般財団法人 歴史教育者協議会が発行する社会科教員向け雑誌『歴史地理教育』2012年4月号掲載予定の「遺跡からみた『福原京』と大輪田泊」中に遺跡を紹介する写真図版として掲載するため	祇園遺跡 写真データ 3点	3
44	(株) イディー	「旅するさんでん（仮称）」に掲載するため	五色塚古墳 画像データ2点 （五色塚古墳と小壺古墳（北から明石海峡と淡路島を望む）、新旧の葺石で復元された墳丘）	2
45	(株) イディー	「旅するさんでん（仮称）」に掲載するため	大歳山遺跡 画像データ 1点	1
46	産経新聞大阪本社	産経新聞ニュースのインターネット版「古墳物語り」に掲載するため	西求女塚古墳 画像データ 3点 （『西求女塚古墳第5次・第7次発掘調査概報』4頁 写真9、21頁 写真39、64頁 写真126掲載分、『西求女塚古墳発掘調査報告書』図版15掲載分）	4

表7 図面・写真貸出一覧（4）

No.	申請者（団体名・個人名）	利用目的・内容	資料名	資料点数
47	井吹西ふれあいのまちづくり協議会	同協議会の広報紙「いぶきにし」に掲載するため	城ヶ谷遺跡 画像データ2点 （『城ヶ谷遺跡展』弥生時代後期の土器掲載分、『西神ニュータウン内の遺跡II』出土石器掲載分）	2
48	山川出版社	文部科学省検定教科書に掲載するため	五色塚古墳 画像データ1点 （『史跡五色塚古墳 小壺古墳発掘調査・復元整備報告書』図版2-1掲載分）	1
49	大阪大学文学研究科 考古学研究室	大阪大学 野中古墳ホームページに掲載するため	五色塚古墳 画像データ 1点 （『史跡五色塚古墳 小壺古墳発掘調査・復元整備報告書』図版2-1. 五色塚古墳と小壺古墳（北から明石海峡と淡路島を望む）』）	1
50	日本放送協会 解説委員室	NHK総合テレビ 2月22日（水）午後11時50分 時論公論「復興まちづくりと歴史遺産」で放送	本山遺跡第19次調査 画像データ1点 （『ひょうご復興の街から』4頁掲載分）	1
51	兵庫区まちづくり課	「KOB E de 清盛2012」 サテライトブース平野会場でパネル展示で使用するため	祇園遺跡第14次調査 画像データ 7点 （『現地説明会資料』掲載 祇園遺跡位置図、第14次調査地点位置図（1/5,000）、調査区平面図、写真5点）	7
52	広島県立歴史博物館	県内巡回展『平清盛の時代と瀬戸内海』でパネル使用するため	祇園遺跡出土 犬吠天目小碗 画像データ1点	1
53	個人	『ビオストーリー』（生き物文化誌学会）に掲載論文に使用するため	兵庫津遺跡第14次調査 画像データ2点 （『兵庫津遺跡発掘調査報告書 第14・20・21次調査』第1分冊381頁 写真9 海産動物遺存体写真、同第2分冊 図版88 海捞具と動物遺存体）	2
54	(株) 神戸新聞総合出版センター	『神戸～尼崎 海辺の歴史』に掲載するため	楠・荒田町遺跡 塚の遺構 画像データ1点	1
55	(株) フクト	『中学3年用 学習定着度診断シートNo. 1 確かめシート』に掲載するため	五色塚古墳 北東からの航空写真 画像データ1点	1
56	(株) 帝国書院	『社会科 中学校の歴史 日本の歩みと世界の動き』に使用するため	五色塚古墳空撮全景 写真データ1点	1
57	(株) 帝国書院	『地歴高等地図－現代世界とその歴史的背景－』に掲載するため	五色塚古墳 画像データ1点	1
58	品川区立品川歴史館	品川区立品川歴史館「温泉の魅力・再発見－湯どころの姿あれこれー」展でパネルで使用	湯山遺跡 画像データ2点 （『ゆの山御てん』26頁 写真44「蒸し風呂遺構二種」、35頁写真62「SX34」）	2

合計

182

表8 館外貸出一覧（1）

No.	申請者（団体名・個人名）	利用目的・内容	資料名	資料点数
1	出雲弥生の森博物館	特別展「弥生人の姿－倭人伝の人々－」で展示し、写真を広報チラシ、ポスター、パネル、図録等へ掲載するため	長田神社境内遺跡出土人形土製品1点 上記資料カラー写真（デジタルデータ）1点	2
2	兵庫県立考古博物館	平成23年度特別展「みほとけの考古学」展示するため	滝ノ奥経塚出土品18点	18
3	下関市立考古博物館	企画展「弥生時代の拠点集落－その構造と機能－」で展示し、写真を広報チラシ、ポスター、パネル、図録等へ掲載するため	大開遺跡出土石器2点 大開遺跡全景写真・出土石器 写真3点	5
4	但馬国府・国分寺館	企画展「戦い－古代の武器・武具－」において展示するため。写真は図録・展示パネルに使用するため	新方遺跡野手西方地区第1次調査出土 1号人骨 写真資料 カラー写真（デジタルデータ）2点 『新方遺跡 野手・西方地区発掘調査報告書1』 「巻頭写真図版1 西側微高地 溝状埋葬遺構」 「巻頭写真図版2 3号人骨（南から）」	2
5	徳島市教育委員会 徳島市立考古資料館	特別企画展「弥生の生産と流通」に展示し、写真を展示図録等への掲載及び展示パネルを作製して展示するため	西神ニュータウン内第65地点遺跡出土石製銅鐸鋳型（未成品） 展示資料1点 玉津田中遺跡出土L字状石杵 展示資料1点 西神ニュータウン内第65地点遺跡出土石製銅鐸鋳型（未成品） 写真資料1点 玉津田中遺跡出土L字状石杵 写真資料1点	5

表9 館外貸出一覧（2）

No.	申請者（団体名・個人名）	利用目的・内容	資料名	資料点数
6	尼崎市教育委員会	第41回尼崎市立田能資料館特別展「土器の一生－弥生時代の日常の道具－」に展示するため。写真資料については、展示ならびにパンフレットや広報資料等へ掲載するため	大開遺跡出土土器 6点 吉田南遺跡出土土器 6点 大開遺跡第3遭構面環濠内出土土器写真（4×5判カラーボジ）1点 吉田南遺跡SD209（東から） デジタルデータ1点	14
7	播磨町郷土資料館	平成23年度播磨町郷土資料館特別展出品のため	五色塚古墳 鰐付円筒埴輪1点 （『五色塚古墳・小壺古墳発掘調査・復元整備報告書』図5-36 No. 90） 五色塚古墳 鰐付朝顔形埴輪1点 （『五色塚古墳・小壺古墳発掘調査・復元整備報告書』図5-27 No. 74） 高津橋大塚遺跡 人物埴輪1点 高津橋大塚遺跡 石見型盾形埴輪1点	4
8	明石教育委員会	企画展『発掘された明石の歴史展』で展示するため	天王山5号墳出土 ガラス玉（北棺）6点 小型丸底壺（中央棺）1点 トンボ玉（中央棺）1点 ガラス玉（南棺）3点 組み合わせ式石棺1点 天王山4号墳出土 壺棺（4号墳D区）1点 堅田神社境内1号墳出土 管玉1点 白水瓢冢古墳出土 小型円筒埴輪1点 小型梢円筒埴輪1点 大型朝顔形埴輪1点 土師器壺（167）1点（図版59-1） 銅鏡1点 鉄槍1点 鉄素環頭刀1点 有袋鉄斧1点 車輪石4点 石劍9点 五色塚古墳 鰐付円筒埴輪2点 鰐付朝顔形埴輪1点	54
9	東京都江戸東京博物館 神戸市立博物館 広島県立美術館 京都府京都文化博物館 NHK視聴者事業局 株式会社NHKプロモーション	NHK大河ドラマ50年特別展「平清盛」で広く紹介し、平清盛が生きた時代について人々に理解を深めてもらう助けとするため	遺物 祇園遺跡出土 玳玳天目小碗出土1点 京都産瓦（巴文軒丸瓦・剣頭文軒平瓦）2点（各1点） 土器類（かわらけ）10点 二葉町遺跡出土 白磁四耳壺 1点 淹ノ奥経塚出土 和鏡（5号鏡・7号鏡）2点 青白磁合子（身・蓋）2点（各1点） 青白磁壺形合子（身・蓋）2点（各1点） 独鉢杵1点 鍍金鳳凰飾金具1点 写真 祇園遺跡出土 玳玳天目小碗 画像データ1点 祇園遺跡出土 京都産瓦 画像データ1点 祇園遺跡出土 土器類（かわらけ） 画像データ1点 祇園遺跡の庭園跡 画像データ1点 二葉町遺跡出土 白磁四耳壺 画像データ1点 淹ノ奥経塚出土 和鏡（5号鏡） 画像データ1点 淹ノ奥経塚出土 和鏡（7号鏡） 画像データ1点 淹ノ奥経塚出土 青白磁合子 画像データ1点 淹ノ奥経塚出土 青白磁壺形合子 画像データ1点 淹ノ奥経塚出土 独鉢杵 画像データ1点 淹ノ奥経塚出土 鍍金鳳凰飾金具 画像データ1点	22

表10 館外貸出一覧（3）

No.	申請者（団体名・個人名）	利用目的・内容	資料名	資料点数
10	明石市教育委員会	企画展『発掘された明石の歴史展』で展示するため	天王山5号墳出土 ガラス玉（北棺）6点 小型丸底壺（中央棺）1点 トンボ玉（中央棺）1点 ガラス玉（南棺）3点 組み合わせ式石棺1点 天王山4号墳出土 壺棺（4号墳D区）1点 堅田神社境内1号墳出土 管玉 1点 白石瓢塚古墳出土 小型円筒埴輪1点 小型楕円筒埴輪1点 小型朝顔形埴輪1点 大型朝顔形埴輪1点 土師器壺（167）1点 （図版59-1） 銅鏡1点 鉄槍3点 鉄素環頭刀1点 車輪石4点 石劍1点 翡翠勾玉5点 琥珀勾玉1点 石製管玉31点 玉類剥ぎ取り1点 五色塚古墳出土 鳍付円筒埴輪 2点 鳍付朝顔形埴輪 1点 舞子浜遺跡出土 盾形埴輪1点 サンバ形？埴輪1点 壺形・円筒埴輪1点 大型円筒埴輪1点 大型朝顔形埴輪2点 小型朝顔形埴輪1点 復元埴輪棺・人骨1点 土師器壺2点 土師器高杯1点 土師器甕2点	91
11	下関市立考古博物館	企画展「弥生時代の拠点集落－その構造と機能－」で展示し、写真を広報チラシ、ポスター、パネル、図録等へ掲載するため	大開遺跡 石剣1点 大開遺跡 石棒1点 大開遺跡 第3遺構面 全景カラー写真1点 大開遺跡 石剣 モノクロ写真1点 大開遺跡 石棒 カラー写真1点	5
12	文化庁文化財部美術学芸課	重要文化財指定調査のため	五色塚古墳出土 墓輪等 鳍付円筒埴輪1点 鳍付朝顔形埴輪1点 蓋形埴輪残2点 盾形埴輪残3点 鞠形埴輪残8点 壺 1点 小型高杯残6点 小型器台残2点 小型丸底壺残2点 籠状土製品残2点 皿状土製品残1点 不明土製品残1点	30
			合計	252

表11 特別利用一覧（1）

No.	申請者（団体名・個人名）	利用目的・内容	資料名	資料点数
1	(株)阪神コンサルタンツ	神戸の減災研究会における研究活動の一部として	旧神戸外国人居留地遺跡第1次調査出土 「津波痕跡」 土層	1
2	個人	平成23年12月に同志社大学文学部に提出予定の卒業論文に活用するため	大開遺跡第1次調査出土土器78点 『神戸市兵庫区大開遺跡発掘調査報告書』（1993）掲載分 雲井遺跡第1次調査出土土器7点 『雲井遺跡第1次発掘調査報告書』（1991）掲載分	85
3	関西縄文文化研究会	研究会での資料の見学	雲井遺跡・熊内遺跡・二宮東遺跡 出土縄文土器・石器等コレクション52箱	52

表12 特別利用一覧（2）

No.	申請者（団体名・個人名）	利用目的・内容	資料名	資料点数
4	個人	修士論文執筆のため	西求女塚古墳出土鉄鎌9点 『西求女塚古墳発掘調査報告書』（2004）掲載分	9
5	個人	平成23年12月に同志社大学文学部に提出予定の卒業論文に活用するため	大開遺跡第1次調査出土土器131点 『大開遺跡発掘調査報告書』（1993）掲載分	131
6	個人	平成23年12月に同志社大学文学部に提出予定の卒業論文に活用するため	大開遺跡第1次調査出土土器178点 『大開遺跡発掘調査報告書』（1993）掲載分	178
7	神戸市立六甲アイランド高等学校	地域学「神戸学」の授業の一環として、神戸の津波について学習し、今後の研究に生かすため	旧神戸外国人居留地遺跡第1次調査出土 「津波痕跡」 土層	1
8	個人	（財）古代学術研究費による「列島における初期農耕文化の荷担者」の研究のため	大開遺跡第1次調査出土石器9点 『大開遺跡発掘調査報告書』（1993）掲載分	9
9	個人	学位論文『仿製鏡に関する考古学的研究』のための資料収集	長田神社境内遺跡出土小型仿製鏡 1点 『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』（2000）掲載分	1
10	個人	卒業論文作成のため	篠原中町遺跡出土遺物217点 家根祥多「篠原式の提唱-神戸市篠原中町遺跡出土土器の検討」「縄文晚期前葉-中葉の広域編年」（1994）掲載分	217
11	個人	卒業論文作成のため	篠原中町遺跡出土遺物217点 家根祥多「篠原式の提唱-神戸市篠原中町遺跡出土土器の検討」「縄文晚期前葉-中葉の広域編年」（1994）掲載分	217
12	個人	考古学の研究のため	新方遺跡（ST401出土）鹿角製指輪6点 『新方遺跡 野手・西方地区発掘調査報告書1』（2003）掲載分	6
13	個人	個人論文作成のため	大開遺跡第1次調査出土土器8点 『大開遺跡発掘調査報告書』（1993）掲載分	8
14	個人	弥生時代マダコ壺の研究のため	楠・荒田町遺跡第11次調査出土土器（マダコ壺）1点	1
15	個人	平成23年12月に同志社大学文学部に提出予定の卒業論文に活用するため	本山遺跡第17次調査・流路1出土土器1点 『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』記載分	1
16	神戸研究学園都市大学 交流推進協議会	ニュータウンの開発と発掘文化財についての現地見学	新方遺跡3号人骨切り取り1点 『新方遺跡 野手・西方地区発掘調査報告書1』（2003）掲載分	1
17	個人	卒業論文作成のため	篠原遺跡出土縄文土器 約100点 家根祥多「篠原式の提唱-神戸市篠原中町遺跡出土土器の検討」「縄文晚期前葉-中葉の広域編年」（1994）掲載分	100
18	朝日新聞社大阪本社生活文化部	朝日新聞10月21日夕刊の「歴史ナビ・藤原純友」掲載のため	深江北町遺跡第9次調査出土「驛」墨書き土器1点 『深江北町遺跡第9次埋蔵文化財発掘調査報告書』（2002）掲載分	1
19	個人	論文作成のため	旧神戸外国人居留地遺跡第1次調査出土煉瓦6点 『旧神戸外国人居留地遺跡発掘調査報告書』（2011）掲載分	6
20	個人	研究報告執筆のため	西岡本遺跡出土縄文土器25点 『神戸市東灘区西岡本遺跡』（2001）掲載分 熊内遺跡第3次調査出土縄文土器21点 『熊内遺跡第3次調査発掘調査報告書』（2003）掲載分 雲井遺跡第28次調査出土縄文土器119点 『平成20年度雲井遺跡第28次発掘調査報告書』（2010）掲載分	165
21	個人	修士論文作成のため	西求女塚古墳出土土器112点 『西求女塚古墳発掘調査報告書』（2004）掲載分	112
22	個人	近畿地方の破鏡の研究のため	森北町遺跡出土銅鏡片1点 『昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報』（1988）掲載分 吉田南遺跡出土銅鏡片1点	2
23	(株) NHKプラネット中国支社	NHK広島局 制作・著作 シリーズ平清盛 第三回 福原遷都の謎 番組使用のため	祇園遺跡第3次調査出土瓦当目小碗1点、白磁・青磁片11点、同遺跡第2次調査出土土師器数点、第2・3次調査出土山城系軒丸瓦・軒平瓦数点、同遺跡第2・3次調査出土播磨系軒丸瓦・軒平瓦数点 『平成6年度神戸市埋蔵文化財年報』（1997）掲載分 二葉町遺跡出土第1次調査白磁四耳壺1点『神戸の地宝』（2011）掲載分、同遺跡第7次調査出土白磁碗3点、青磁皿2点、同遺跡出土船材1点『二葉町遺跡発掘調査報告書第3・5・7・8・9・12次調査』（2001）掲載 兵庫津遺跡出土 宋錢数点	約19
24	個人	研究報告執筆のため	熊内遺跡第3次調査出土縄文土器21点 『熊内遺跡第3次調査発掘調査報告書』（2003）掲載分 雲井遺跡第28次調査出土縄文土器119点 『平成20年度雲井遺跡第28次発掘調査報告書』（2010）掲載分	140

表13 特別利用一覧（3）

No.	申請者（団体名・個人名）	利用目的・内容	資料名	資料点数
25	個人	石製品研究のため	西求女塚古墳出土 碧玉製紡錘車形石製品1点 『西求女塚古墳発掘調査報告書』（2004）掲載分 塙田北山東古墳出土碧玉製紡錘車形石製品1点 『塙田北山東古墳発掘調査報告書』（2008）掲載分 白水瓢塚古墳出土 緑色凝灰岩製車輪石4点・緑色凝灰岩製石鉗9点 『白水瓢塚古墳発掘調査報告書』（2008）掲載分	15
26	個人	論文作成のため	森北町遺跡出土陶質土器・韓式系土器2点 『平成元年度神戸市埋蔵文化財年報』（1992）掲載分ほか 神楽遺跡出土陶質土器・韓式系土器17点 『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』（1987）掲載分 『平成15年度神戸市埋蔵文化財年報』（2006）掲載分ほか 郡家遺跡第83次調査出土陶質土器・韓式系土器18点 『郡家遺跡第83次発掘調査報告書』（2008）掲載分 出合遺跡出土 陶質土器・韓式系土器18点 『平成5年度神戸市埋蔵文化財年報』（1996）掲載分 住吉宮町遺跡第32次調査出土馬骨3点 『住吉宮町遺跡第24次・第32次発掘調査報告書』（2001）掲載分 舞子古墳群毘沙門1号墳出土 ガラス玉、銀製空玉、矢筒金具11点 『昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報』（1989）掲載分 舞子・西石ヶ谷4号墳（舞子坂4号墳）出土ガラス玉11点 西求女塚古墳出土鉄器20点 『西求女塚古墳発掘調査報告書』（2004）掲載分	100
27	個人（2名）	前期古墳の鉄製農工漁具についての論文作成のため・ 弥生時代から古墳時代の織物技術の文章作成のため	西求女塚古墳出土鐵製ヤス17点 『西求女塚古墳発掘調査報告書』（2004）掲載分 西求女塚古墳出土11号鏡（画文帶環状神獸鏡）及び付着の布3点 『西求女塚古墳発掘調査報告書』（2004）掲載分	20
28	国立歴史民族博物館	吉田南遺跡出土木簡の研究のため	吉田南遺跡出土木簡8点	8
29	個人	学術研究のため	大開遺跡第1次調査出土土器147点 『大開遺跡発掘調査報告書』（1993）掲載分	147

合計

1753

4. 普及啓発事業（埋蔵文化財センター）

企画展示・体験講座・学校連携・地域連携等を中心に、各種事業を展開した。平成23年度の埋蔵文化財センターへの入館者数は38,698名を数える。

企画展示の開催

平成23年度も別表（表14）のとおり、4回の企画展示を開催した。例年どおり、春季の企画展示では、初めて日本の歴史を学習する小学校6年生が、歴史の授業を理解しやすくなる展示を行っている。この時期の神戸市埋蔵文化財センターは非常に多くの小学校が校外学習の場として利用している。冬季の企画展示では小学3年生が学習する「ちょっとむかしの暮らし」をテーマに展覧会を開催し、小学生のみならず一般の観覧者にも好評を得ている。

各種講座の開催

体験考古学講座

勾玉づくり・土器づくり・鏡づくり・ガラス玉づくり等、古代の技術を学びながら、親子参加型の体験講座を行った。

「その道の達人に学ぶ体験講座：竪穴住居をつくろう」

「11月20日（日）に埋蔵文化財センターで実施した。毎年実施している講座で、子どもたちを中心に縄の編み方やくくり方を学び、実物大の竪穴住居を木材で組み上げ、わら屋根で覆つて完成させるというものである。

講座「神戸の歴史探検」の開催

7回シリーズの講演会で、本年度は縄文時代～近代までの各時代のテーマを学芸員がわかりやすく解説する講座。受講生は全講座で302名であった。

表14 平成23年度の企画展示

展覧会名	開催期間	日数	入館者数
神戸古代史体験－縄文から古墳時代へ－	4月14日(木)～6月5日(日)	50日	9,295名
神戸の地宝－センター20年の軌跡－	7月23日(土)～8月28日(日)	32日	2,937名
江戸時代の兵庫津	10月8日(土)～11月27日(日)	41日	4,571名
昭和のくらし・昔のくらし6	1月14日(土)～3月4日(日)	45日	9,568名

表15 講座「神戸の歴史探検」

月 日	講演名	参加者数
5月21日(土)	縄文時代の神戸	44名
7月23日(土)	神戸の遺跡－発掘40年の軌跡－	30名
9月17日(土)	新発見 縄文時代の遺跡	39名
10月22日(土)	江戸時代の兵庫津	64名
12月3日(土)	淡河川・山田川疎水－その開発と歴史－	44名
1月14日(土)	住居の変遷－古代から昭和へ－	44名
3月18日(土)	神戸市発掘調査報告会	37名

学校連携事業

大学との連携

連携協定を結んでいる大手前大学と神戸山手大学の協力を得て、講演会を8月20日(土)に開催した。テーマ『銅鏡のなぞに迫る』と題して、大手前大学教授 櫃本誠一氏、神戸山手大学教授 河上邦彦氏を講師に迎え、神戸市埋蔵文化財センターにおいて実施した。参加者は90名である。

神戸学院大学図書館において5月17日～6月18日において「神戸と江戸のくらし」のテーマのもと、展示を行った。また、10月22日～12月3日において、「古代の謎解明は遺物にあり！」のテーマで展示を行った。

啓明学院中学校・高等学校との連携

平成19年度より、啓明学院中学校・高等学校が実施する土曜講座のプログラムを神戸市埋蔵文化財センターが担当し、『神戸の文化遺産について学ぼう』というカリキュラムで前期・後期あわせて14回の講座を埋蔵文化財センターで行った。そのうち4回については西神ニュータウンの遺跡や端谷城等を訪れて現地で講座を実施した。

高等学校との連携

昨年度に続き、兵庫県立須磨友が丘高校・神戸市立六甲アイランド高校で、考古学の講義・遺跡の見学・拓本実習等の授業を行った。

神小研社会科部との連携

神戸市小学校教育研究会社会科部との連携については、毎年、コミスタこうべ(中央区)にて開催される『神戸市小学校社会科作品展』(9月10日～19日)において優秀作品を26点を選定し、「埋蔵文化財センター賞」を授与、表彰した。

小学校への出張講座・出張授業

小学校に出張して、勾玉づくり・土器作りの体験考古学講座を16校で行い、出張授業を6校で行った。出張講座・授業の利用者は1,916名である。

地域連携事業

地域行事への参加

北区道場町連合自治会より、神戸市農村環境改善センターで行われている道場町文化祭での展示依頼があり、平成23年11月2・3日に「『豪族の眠る丘』～塩田北山東古墳と八幡神社8号墳～」と題して、展示を行った。

「櫛谷川まつり」（9月10日）「押部谷明石川リバーウォーク」（11月23日）等、地域の活動に参加し、埋蔵文化財センターのパネル展示や遺跡の説明等を行い、文化財の普及啓発に務めた。

おおとし山まつりの開催

垂水区役所と連携して、11月6日に大歳山遺跡公園において開催した。恒例の竪穴住居の公開や古代衣装の試着、地域の協力得て実施した古代米のおにぎり試食、勾玉づくり等、古代体験を満喫する一日となった。参加者415名を数えた。

西区地域学の開催

西区役所と連携して行う事業で、『淡河川・山田川疎水－その開発と歴史－』と題して12月3日（土）に神戸市埋蔵文化財センターで講演会を開催し、翌日12月4日（日）には、「淡山疏水を巡る」バスツアーで山田池堰堤や練部屋分水所等を見学した。参加者は33名であった。



fig.12 企画展示「神戸古代史探検」



fig.13 出張講座「土器づくり体験」



fig.14 出張授業「大開ムラの再現」



fig.15 「その道の達人に学ぶ体験講座」竪穴住居をつくろう



fig.16 特別講演会「銅鏡のなぞに迫る」



fig.17 企画展示「昭和のくらし・昔のくらし6」

表16 平成23年度埋蔵文化財発掘調査一覧（1）

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	調査面積 延べ面積	調査期間	調査内容	調査原因
1 第12次調査	深江北町遺跡 東灘区深江北町1・2丁目地内	神戸市教育委員会	谷 正俊・阿部 功・佐藤麻子	1,620 m ² 3,420 m ²	23,05,09 ~ 24,02,17	浜堤上に位置する調査区では、古墳時代後期の堅穴建物や祭祀跡などを確認し、土馬などが出土した。堤間湿地上の調査区では奈良、平安時代の墨書き器、木簡などが出土した。	阪神電車立体交差	
2 第13次調査	深江北町遺跡 43	神戸市教育委員会	川上厚志	875 m ² 3,500 m ²	23,12,14 ~ 24,03,09	4面の遺構面を確認し、古墳時代前期の水田、古墳時代後期の水田、平安時代後半の掘立柱建物、水田、中世の耕作に伴う溝などの遺構を確認した。	老人ホーム建設〔国庫補助事業〕	
3 第7次調査	北青木遺跡 東灘区深江北町5丁目・北青木1・2丁目地内	神戸市教育委員会	内藤・川上・阿部・佐藤	2,600 m ² 5,138 m ²	23,04,01 ~ 23,12,09	浜堤上の調査区で良好な遺存状況の木棺を含む弥生時代中期の方形周溝墓、同後期の円形周溝墓、奈良時代～平安時代の掘立柱建物などを検出し、堤間湿地上で溝などを確認した。	阪神電車立体交差	
4 第38次調査	本山遺跡 東灘区本山中町4丁目90	神戸市教育委員会	石島三和	188 m ² 188 m ²	23,06,10 ~ 23,06,23	弥生時代中期～後期の遺物包含層及び土石流堆積層、平安時代の鋤溝を検出した。	共同住宅建設〔国庫補助事業〕	
5 第9次調査	西岡本遺跡 3・4	神戸市教育委員会	内藤俊哉	300 m ² 300 m ²	23,06,10 ~ 23,07,19	弥生時代末～古墳時代前期の土坑、流路、中世後半～近世の土坑、時期不明のピットなどの遺構を検出した。ピットの中には、掘立柱建物の柱穴が含まれる可能性も考えられる。	個人住宅建設〔国庫補助事業〕	
6 第86次調査	郡家遺跡 東灘区御影1丁目313-2	神戸市教育委員会	石島三和	212 m ² 636 m ²	23,04,01 ~ 23,05,26	3面の遺構面を確認し、弥生時代後期ないし古墳時代前期の性格不明遺構、古墳時代中期の堅穴建物、ピット、古墳時代後期の掘立柱建物、堅穴建物などの遺構を検出した。	共同住宅建設	
7 第87次調査	郡家遺跡 東灘区御影1町2丁目	神戸市教育委員会	中谷 正	50 m ² 100 m ²	23,09,13 ~ 23,10,12	2面の遺構面を確認し、古墳時代中期の堅穴建物、土坑、柱穴、溝、古墳時代後期の柱穴、土坑、落ち込み、溝を検出した。また第2遺構面精査中に滑石製勾玉が2点出土している。	個人住宅建設〔国庫補助事業〕	
8 第30次調査	篠原遺跡 灘区篠原中町2丁目11番ほか	神戸市教育委員会	石島三和	82 m ² 82 m ²	21,04,13 ~ 21,05,13	縄文時代晚期のピット、古墳時代以降の落ち込みを検出した。また、遺物包含層からは、良好な状態で縄文時代晚期の土器が出土している。	共同住宅建設	
9 第31次調査	篠原遺跡 灘区篠原北町2丁目26、27	神戸市教育委員会	内藤俊哉	650 m ² 650 m ²	24,03,17 ~ 24,03,31	表土掘削・土留め作業〔次年度継続〕	個人住宅建設〔国庫補助事業〕	
10 第4次調査	二宮東遺跡 中央区二宮町1丁目9-20	神戸市教育委員会	石島三和	196 m ² 392 m ²	23,11,28 ~ 23,12,28	縄文時代早期（大川式期～神並上層式期）の土器、打製石器、古墳時代後期の土坑、落ち込みを検出した。	共同住宅建設〔国庫補助事業〕	
11 第34次調査	雲井遺跡 中央区琴ノ緒町1丁目353-1ほか	神戸市教育委員会	西岡巧次	260 m ² 260 m ²	23,09,01 ~ 23,11,02	古墳時代後期（6世紀後半）の堅穴建物、平安時代の掘立柱建物、土坑、溝などの遺構を同一面で検出している。掘立柱建物は主軸方向から、3グループ程度に分類が可能である。	共同住宅建設	
12 第14次調査	祇園遺跡 兵庫区下祇園町5-1	神戸市教育委員会	内藤俊哉	1,000 m ² 1,000 m ²	23,08,04 ~ 24,03,31	弥生時代中期の堅穴建物、同後期の堅穴建物、平安時代後期の掘立柱建物などの遺構を検出した。掘立柱建物は平氏一門を支えた在地の有力者の邸宅の可能性が考えられる。	店舗建設	
13 第15次調査	祇園遺跡 兵庫区上三条町	神戸市教育委員会	阿部 功	210 m ² 323 m ²	23,09,14 ~ 24,02,21	2ないし3面の遺構面を確認し、弥生時代中期の遺物や、弥生時代後期～古墳時代初頭の堅穴建物、土坑、平安時代後半～鎌倉時代初頭の土坑、ピットなどの遺構を検出した。	電力管理設	
14 第51次調査	楠・荒田町遺跡 兵庫区馬場町17-1	神戸市教育委員会	西岡巧次	85 m ² 85 m ²	23,05,25 ~ 23,06,14	古墳時代初頭の溝やその上位から掘り込まれた掘立柱建物を同一面で検出した。	共同住宅建設〔国庫補助事業〕	
15 第54次調査	兵庫津遺跡 兵庫区門口町1-1ほか	神戸市教育委員会	富山直人	170 m ² 850 m ²	21,11,16 ~ 21,12,08	5面の遺構面を確認し、15世紀後半～19世紀にかけての町屋関連の遺構を検出した。	共同住宅建設〔国庫補助事業〕	
16 第55次調査	兵庫津遺跡 兵庫区西柳原町5番25号	神戸市教育委員会	石島三和	22 m ² 88 m ²	23,07,19 ~ 23,08,05	4面の遺構面を確認し、15～19世紀の各遺構面において、井戸、土坑、溝などの遺構を検出した。	鳥居建設	
17 第56次調査	兵庫津遺跡 兵庫区三川口町1丁目2番14	神戸市教育委員会	富山直人	60 m ² 300 m ²	23,11,17 ~ 23,12,14	5面の遺構面を確認し、16～19世紀の土坑、井戸、溝などの遺構を検出している。「元禄絵図」に記載される町割り方向に合致する溝などの遺構も含まれている。	個人住宅建設〔国庫補助事業〕	
18 第57次調査	兵庫津遺跡 兵庫区中之島2丁目	神戸市教育委員会	富山直人・川上厚志・佐藤麻子	720 m ² 720 m ²	24,02,13 ~ 24,03,30	盛土・攘乱掘削〔次年度継続〕	汚染土壤除去	
19 第5次調査	塙本遺跡 兵庫区塙本通5丁目1番31	神戸市教育委員会	須藤 宏	40 m ² 160 m ²	23,07,14 ~ 23,07,29	4面の遺構面を確認し、縄文時代晚期～神戸空襲以前の遺構を検出している。	個人住宅建設〔国庫補助事業〕	
20 第59次調査	上沢遺跡 兵庫区下沢通8丁目3番21	神戸市教育委員会	西岡巧次	40 m ² 40 m ²	24,02,07 ~ 24,02,27	古墳時代前期の溝、土坑などの遺構を検出している。	共同住宅建設	
21 試掘調査	小坂遺跡 北区八多町中字坂本山607	神戸市教育委員会	井尻 格	35 m ² 35 m ²	23,04,07 ~ 23,04,12	試掘調査 遺構・遺物なし。	〔国庫補助事業〕	
22 中遺跡	北区八多町中字ふけ893、894、895	神戸市教育委員会	井尻 格	130 m ² 130 m ²	24,02,22 ~ 24,02,29	古墳時代後期の土坑、中世の土坑、溝、時期不明のピットなどの遺構を検出している。	高齢者住宅建設〔国庫補助事業〕	
23 第7次調査	山田・中遺跡 北区山田町中字合ノ元24-1・25-1	神戸市教育委員会	西岡巧次	260 m ² 260 m ²	23,11,16 ~ 23,11,30	土坑、溝、落ち込み、柱穴、ピットなどの遺構を検出している。柱穴の中には大型の掘形をもつものが含まれており、掘立柱建物の柱穴の可能性が考えられる。	店舗建設〔国庫補助事業〕	
24 第69次調査	御蔵遺跡 長田区御蔵通5丁目201-5	神戸市教育委員会	富山直人	35 m ² 35 m ²	23,06,07 ~ 23,06,10	12世紀初頭の溝とそれ以前の柱穴を検出している。	個人住宅建設〔国庫補助事業〕	
25 第70次調査	御蔵遺跡 長田区御蔵通5丁目211-5、6	神戸市教育委員会	富山直人	72 m ² 144 m ²	23,06,13 ~ 23,06,23	弥生時代末～古墳時代前期初頭の溝などの遺構を検出している。	個人住宅建設〔国庫補助事業〕	
26 第6次調査	若松町東遺跡 長田区若松町3丁目	神戸市教育委員会	須藤 宏	370 m ² 740 m ²	23,05,10 ~ 23,07,05	2面の遺構面を確認し、掘立柱建物、縄文時代晚期の土坑、溝、中世の鋤溝を検出した。	市街地再開発	

表17 平成23年度埋蔵文化財発掘調査一覧（2）

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	調査面積 延調査面積	調査期間	調査内容	調査原因						
27	大橋町東遺跡 第3次調査	長田区大橋町3丁目	神戸市教育委員会	須藤 宏	370 m ²	24, 03, 08	表土掘削・遺物包含層上面検出 〔次年度継続〕	市街地再開発						
					370 m ²	～ 24, 03, 30								
28	二葉町遺跡 第23次調査	長田区二葉町7丁目	神戸市教育委員会	須藤 宏	710 m ²	22, 03, 09	2面の遺構面を確認し、古代後半～中世初頭の掘立柱建物、井戸、溝、大型の落ち込み、中世初頭及ぶそれ以降の鋤溝など遺構を検出している。	保育園建設						
					1, 420 m ²	～ 22, 03, 23								
29	戎町遺跡 第68次調査	須磨区大田町2丁目34	神戸市教育委員会	須藤 宏	370 m ²	23, 08, 30	2面の遺構面を確認し、弥生時代前期の土坑、同中期の堅穴建物、古墳時代の溝、ピットなどの遺構を検出している。また弥生時代前期の磨製石剣、管玉などの遺物が出土している。	共同住宅建設						
					740 m ²	～ 23, 11, 09								
30	千歳遺跡 第5次調査	須磨区千歳町3丁目 101-21	神戸市教育委員会	西岡巧次	100 m ²	23, 06, 14	縄文土器を含む溝や、中世の柱列、ピットを検出した。	個人住宅建設〔国庫補助事業〕						
					100 m ²	～ 23, 07, 14								
31	大田町遺跡 第17次調査	須磨区大田町6丁目1 ～7、40～42	神戸市教育委員会	口野博史	32 m ²	24, 03, 07	6面の遺構面を確認し、古墳時代の後期の流路、大畦畔、奈良時代の流路、平安時代(10世紀)の溝、ピット、中世の井戸、溝などを検出した。〔次年度継続〕	病院建設〔国庫補助事業〕						
					192 m ²	～ 24, 03, 26								
32	古川町遺跡 第1次調査	須磨区古川町3丁目4	神戸市教育委員会	阿部 功	62 m ²	23, 09, 12	奈良時代～平安時代頃の掘立柱建物、溝、土坑、ピット検出している。	個人住宅建設〔国庫補助事業〕						
					62 m ²	～ 23, 09, 16								
33	古川町遺跡 第2次調査	須磨区小寺町3丁目1 番	神戸市教育委員会	阿部 功	200 m ²	24, 03, 13	市営住宅解体・撤去工事に伴う試掘、立会調査を実施し遺物包含層の遺存状況を確認した。 〔次年度継続〕	市営住宅建替						
					200 m ²	～ 24, 03, 29								
34	南別府遺跡 第5次調査	西区南別府3丁目22-10	神戸市教育委員会	西岡巧次	48 m ²	23, 12, 26	3面の遺構面を検出し、縄文時代晚期の溝、弥生時代中期の溝、古墳時代初頭～前期の堅穴建物、古墳時代中期の溝、古墳時代後期の溝などを検出した。	個人住宅建設〔国庫補助事業〕						
					144 m ²	～ 24, 01, 26								
35	潤和遺跡 第5次調査	西区伊川谷町潤和字 有久1114-1	神戸市教育委員会	石島三和	205 m ²	24, 02, 13	中世の溝、旧河道を検出している。	共同住宅建設〔国庫補助事業〕						
					205 m ²	～ 24, 02, 24								
36	今池尻遺跡 第4次調査	西区玉津町高津橋字 今池尻43-1	神戸市教育委員会	石島三和	525 m ²	23, 09, 06	古墳時代後期の遺構面を確認し、ピット、溝などの遺構を検出した。ガラス玉や袋状鉄斧、耳環などが出土している。そのほか時期不明の河道も検出している。	共同住宅建設〔国庫補助事業〕						
					525 m ²	～ 23, 10, 31								
37	馬掛原遺跡 第2次調査	西区玉津町高津橋	神戸市教育委員会	口野博史	100 m ²	23, 04, 18	中世の溝、弥生土器を含むピットなどを検出した。	区画整理事業						
					100 m ²	～ 23, 04, 26								
37	潤和横尾遺跡 第1次調査	西区伊川谷町潤和	神戸市教育委員会	口野博史	8, 243 m ²	23, 06, 13～ 23, 08, 31	新発見の弥生時代高地性集落であり、弥生時代後期の堅穴建物10棟以上(大型、焼失建物含む)、土坑、溝などの遺構と鉄鏃などの遺物を検出している。	区画整理事業						
					8, 243 m ²	～ 23, 10, 11～ 23, 12, 28								
38	出合遺跡 第46次調査	西区平野町中津字門田、厚張	神戸市教育委員会	池田 翼・ 阿部 功	1, 800 m ²	23, 06, 06	4面の遺構面を確認し、弥生時代前期の流路、同後期～古墳時代前期の堅穴建物、古墳時代中期～後期の土坑、平安時代末～鎌倉時代前期の掘立柱建物、木棺墓などを検出している。	宅地開発						
					5, 700 m ²	～ 24, 03, 30								
39	平田遺跡	北区道場町平田	兵庫県立考古博物館	西口圭介・ 長濱誠司	1, 465 m ²	23, 11, 01	古墳時代初頭の堅穴建物2棟、中世の掘立柱建物1棟、溝を検出した。	高速道路建設						
					1, 465 m ²	～ 23, 12, 22								
40	小阪遺跡	北区有野町二郎	兵庫県立考古博物館	西口圭介・ 長濱誠司	482 m ²	23, 11, 01	土坑、溝を検出した。	高速道路建設						
					482 m ²	～ 23, 12, 22								
調査面積合計					24, 994 m ²									
延調査面積合計					39, 524 m ²									

表18 平成23年度埋蔵文化財出土遺物整理一覧

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	調査面積 延調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
A	兵庫津遺跡 第53次調査		神戸市教育委員会	内藤俊哉・ 浅谷誠吾	0 m ²	23, 04, 01	出土遺物整理・報告書作成	民間開発
					0 m ²	～ 24, 03, 31		
B	北青木銅鐸		神戸市教育委員会	中村大介	0 m ²	23, 04, 01	出土遺物整理・報告書作成	下水管布設
					0 m ²	～ 24, 03, 31		
C	端谷城跡 保存処理		神戸市教育委員会	中村大介	0 m ²	23, 04, 01	端谷城跡第5次調査出土の鉄製甲(胴丸)保存処理	〔国庫補助事業〕
					0 m ²	～ 24, 03, 31		
D	復興調査整理		神戸市教育委員会	西岡誠司・ 阿部敬生	0 m ²	23, 04, 01	国庫補助事業調査の遺物整理、上沢遺跡(H14)	〔国庫補助事業〕
					0 m ²	～ 24, 03, 31		

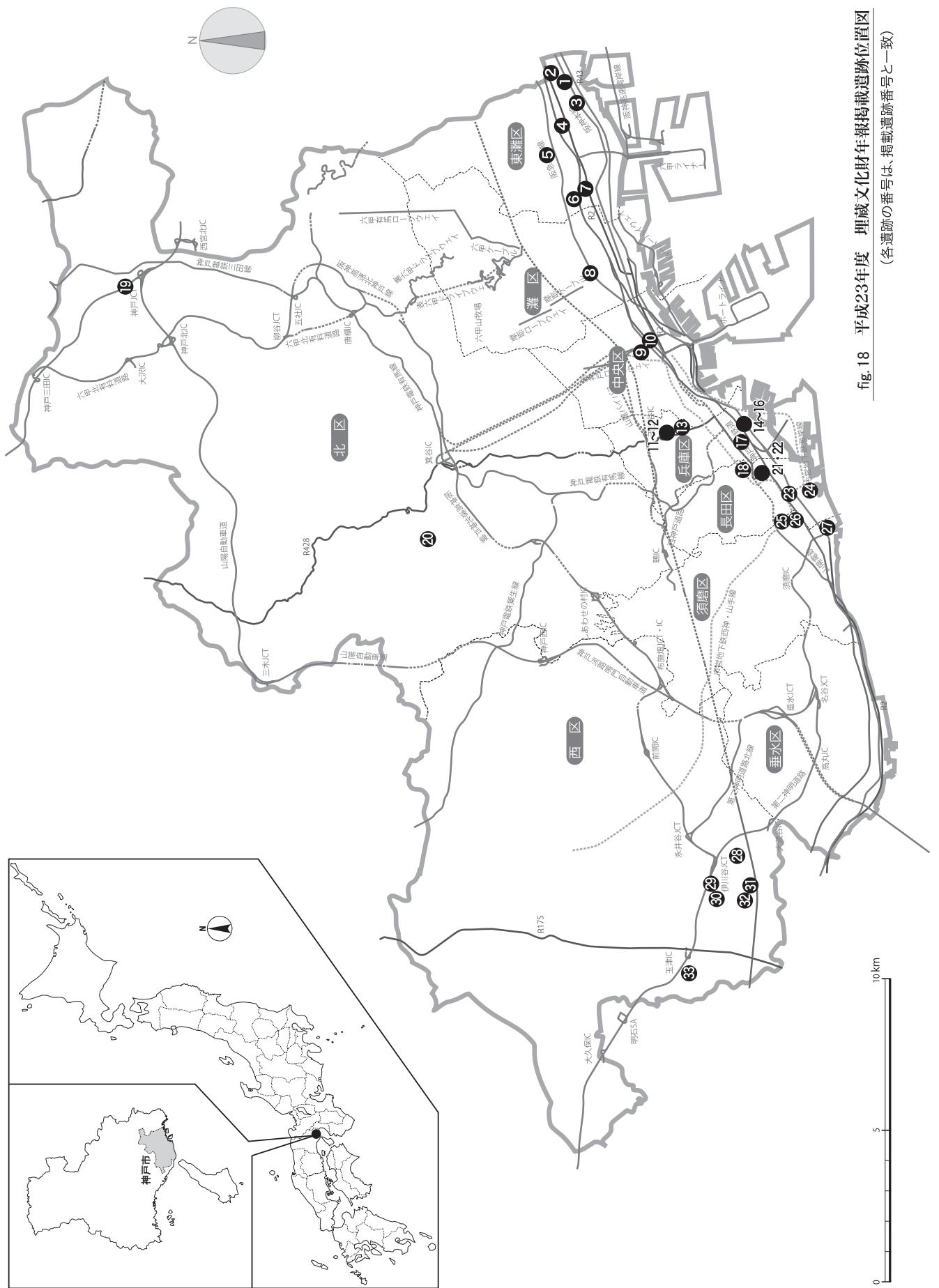




fig.19 調査地点位置図（1） 1/50,000



fig.20 調査地点位置図（2） 1/50,000



fig.21 調査地点位置図（3） 1/50,000



fig.22 調査地点位置図（4） 1/50,000



fig.23 調査地点位置図（5）1/50,000



fig.24 調査地点位置図（6）1/50,000

II. 平成23年度の発掘調査

1. 深江北町遺跡 第12次調査

1. はじめに

深江北町遺跡は、神戸市域の東端に位置し、芦屋市と市境を跨いで遺跡が存在する。芦屋市側は津知遺跡と称されているが、本来同一の遺跡と考えられる。この遺跡は大阪湾を巡る沿岸流によって形成された浜堤（砂堆）上に立地し、現在の海岸線からは、約500m離れている。

また、この付近を古代山陽道が通過していたことは間違いない、これまでの調査結果から、この街道を公務で往来する役人のために設けられた休憩・宿泊・乗馬の乗り換え場である「芦屋驛家」が、すぐ近くに奈良時代～平安時代前半頃まで存在していたことが窺える。

これまでの調査では、古墳時代初頭の円形周溝墓群や飛鳥時代～平安時代初めまでの掘立柱建物等が確認されている。発見された出土品としては承和の年号が入った米の支給伝票木簡や「九九八十一・八九七十二」と書かれた木簡の出土や、「驛・大垣・北・大西・東・百・年」等と墨書きされた土器が発見されていることが特筆され、前記の「芦屋驛家」が近くに存在していたことを示唆する資料を提示している。また、各種土錘・蛸壺等の漁具が多く出土し、海との関わりが深い人々の集落でもあることも指摘される。

なお、今回の調査成果については、平成25年度に『深江北町遺跡第12・14次埋蔵文化財発掘調査報告書』を刊行しており、調査の詳細については報告書を参照されたい。

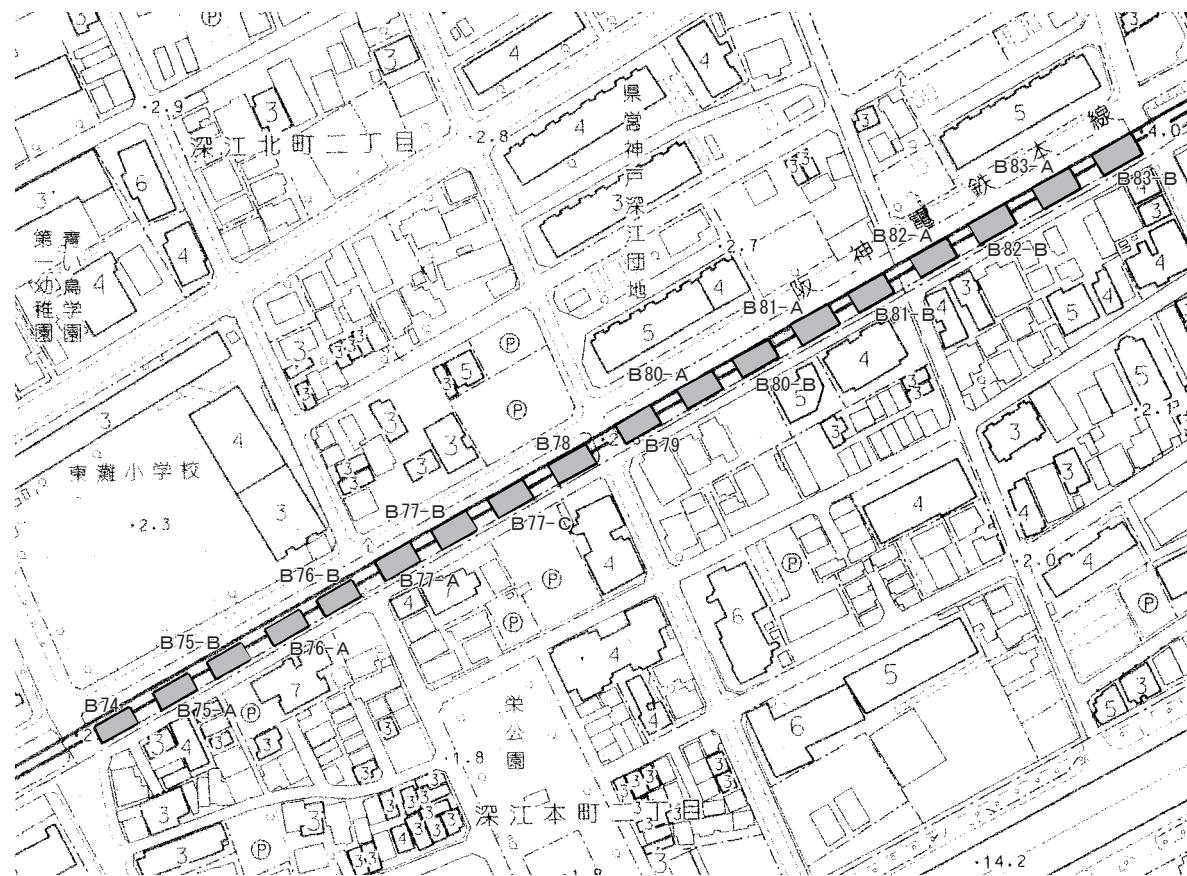


fig.25 調査地位置図 1 : 2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、阪神電鉄の高架化工事に伴って実施したもので、工事によって影響を受ける部分（高架橋脚部分18ヶ所）を調査対象とし、発掘調査を実施した。調査は、深江北町遺跡の範囲を東西に横断する形で実施したことになる。

なお、調査区の呼称は、工事にあたって、各橋台に付されている番号を使用している。

B74区

浜堤上に位置する。江戸時代後期～末期の溝を確認した。

近世溝

検出長12.5m、幅3.8m、深さ70cmを測る、東西方向に流れる溝である。溝の南岸肩部に角礫を敷き詰めている。江戸時代の深江村居住域の北辺を区切る溝の可能性が高い。

18～19世紀の陶磁器・瓦・鉄製品・漆椀・石臼（上臼）・木製品（「御用・ 深江村 庄屋口」と書かれた木札）等が出土した。

B75-A区

浜堤上に位置する。近世耕土の下で中世～近世の鋤溝、用途不明の土坑を確認した。

B75-B区

浜堤から湿地への変換点に位置し、弥生時代後期～末頃に浜堤が成長していく状態が窺える。

鋤溝・焼土面・溝・井戸

調査区の東半分で中世～近世の鋤溝、西半分で焼土面、浅い溝を確認している。焼土面からは土師器の細片が出土した。また中央で近世末頃の井戸を確認した。

表19 深江北町遺跡第12次調査調査内容一覧

調査区名	遺構面数	検出遺構	地質
B74	1	江戸時代後期～末期 溝（深江村居住域北辺境界）	浜堤
B75-A	1	中世～近世 鋤溝	浜堤
B75-B	2	中世～近世 鋤溝・溝、焼土面、近世末 井戸、弥生時代後期 杭列（水田畦畔）	浜堤・湿地
B76-A	2	中世 鋤溝、古墳時代 流路	浜堤・湿地・土石流
B76-B	2	近世 鋤溝、中世 鋤溝、古墳時代初頭 流路	浜堤・湿地
B77-A	2	中世 鋤溝、古墳時代初頭 流路	浜堤・湿地・土石流
B77-B	2	中世 鋤溝、古墳時代初頭 流路	浜堤・湿地
B77-C	2	中世 鋤溝、古墳時代初頭 流路	浜堤
B78	1	古墳時代 木製品（槌の子等）、弥生時代 石包丁	湿地
B79	2	中世 鋤溝、奈良時代 掘立柱建物・柱穴・土坑	浜堤
B80-A	1	奈良～平安時代 杭・柱穴・ピット、袴帶金具（巡方）、飛鳥～奈良時代 円面硯	浜堤・湿地・溝筋
B80-B	1	柱穴・ピット・杭列／奈良時代中頃 木簡、斎串、馬形、舟形、木錘、木皿・杓文字、曲物、櫛、下駄、墨書き土器	浜堤・湿地・溝筋
B81-A	2	古墳時代後期 壇穴建物（カマド・煙道・周壁溝）・土坑・ピット・溝	浜堤
B81-B	3	中世 鋤溝、奈良時代 柱穴・ピット、古墳時代後期 祭祀場、古墳時代前期初頭 溝	浜堤・溝筋
B82-A	3	中世 鋤溝、奈良～平安時代 土坑・ピット・袴帶金具（巡方）・土馬、古墳時代後期 祭祀場	浜堤・土石流
B82-B	2	近世 石組み溝、中世 鋤溝、奈良時代 掘立柱建物、古墳時代後期 祭祀場	浜堤・土石流
B83-A	1	奈良～平安時代 木製品 弥生～古墳時代 木製品	浜堤・湿地
B83-B	2	中世～近世 鋤溝、奈良時代 木製品（斎串、馬形、ものさし、檜扇、木皿、下駄、建築部材）	湿地・土石流

湿地

中世耕土を除去した段階で、北西から南東方向に調査区を斜行する状態で湿地（ラグーン）を確認した。湿地の最上層は奈良時代・平安時代の土器を含み、下層は古墳時代の土器を含む。浜堤と湿地の接する部分で、古墳時代初頭の土器（甕）が1個体まとまって出土している。

杭列

浜堤が発達する途中過程において、湿地内で杭列を確認した。杭列は検出長7m、幅60～70cmで、2列に45本打ち込まれている。水田の畦畔と考えられる。畦直近の湿地内からは弥生時代後期のものと考えられる吉備系土器が完形で出土しており、当該時期の遺構と考えられる。

B76-A区

浜堤が湿地を埋めてゆく過程を示しており、未発達の浜堤を確認している。

B76-B区

前述調査区と同様に未発達の浜堤を確認している。

B77-A区

浜堤が湿地を埋めてゆく過程がみられるが、浜堤は未発達であることを確認している。中世耕土の下には奈良時代・平安時代の土器を含む灰褐色砂質シルトを確認している。

B77-B区

未発達の浜堤とそれ以前の湿地（ラグーン）を確認している。

B77-C区

未発達の浜堤を確認しているが、湿地の堆積土は認められなかった。

B78区

当該区では浜堤の堆積は認められず、湿地（ラグーン）の堆積土のみであり、その下は砂礫が堆積している。中世耕土下で、奈良時代・平安時代の土器を多量に含む暗灰色細砂を確認しているが、これは東側の浜堤方向（B79区付近）より流れてきたものと思われる。

湿地

暗灰色細砂を除去した段階で、黒灰色シルトを確認している。同層は80～100cmの厚さで堆積するが、上層には古墳時代の須恵器が含まれ、下層では弥生時代～古墳時代前期の土器が出土した。また、底面では弥生時代の石器である石庖丁が1点出土している。

下層からは、棒状の木製品や槌の子の未成品などが古墳時代前期の土器とともに出土した。

B79区

浜堤が湿地に下がりかける部分に位置する。西端部は現代水路により深く搅乱を受けている。

柱穴・土坑

中世耕土を除去した段階で、調査区北半分では、黄灰色中砂上面で柱穴、ピット、土坑を多数検出した。大型の掘形を持つ掘立柱建物も存在する。概ね奈良時代のものと考えられる。

南半分は南西方向に下がる地形であり、この部分では奈良時代の土器が多く出土している。

B80-A区

当該区は浜堤と湿地の変換点に位置する。その境には黒灰色砂質シルト（炭混）が堆積し、奈良時代・平安時代の土器とともに、炭化した穀粒や、袴帶金具（巡方）が1点出土している。

杭・ピット

浜堤と湿地の境目付近には、護岸用と思われる杭が打たれている。また、北西端の浜堤上の平坦面にはピット、柱穴が集中しており、掘立柱建物を構成するものも含まれるとと思われる。

湿地

湿地部分には黒色砂質シルト、灰色中砂、黒色シルトが堆積している。これらには飛鳥時代、奈良時代の土器が多く含まれている。この中から小型の円面硯が出土している。

B80-B区

大半が湿地で、北東側のごく一部が浜堤にあたる。

杭・柱穴

浜堤上では柱穴、ピットを検出し、湿地との境には杭が打ち込まれている。柱穴、ピットは後述のB81-A区の遺構群に連続するのであろう。

湿地

浜堤が湿地に落ち込む斜面では木片を大量に含む堆積土を確認した。大量の木屑（木端材）・木の枝などに混じって木製品・木簡が出土した。共伴土器は、奈良時代中頃のものと思われる。木簡のうち判読できたものについては、表面に「呪願師□朝臣□成 亀 智識」、裏面に「天平十□（九カ）年八月一日」と記すものや、表面に「□□（屋カ）駅長等□□□」、裏面に「即走上□（奉カ）」と記すもの、「賀美里戸主葦屋賀津羅□」、「遠方來 不亦樂乎人不知 而不愠 不亦君子乎」がある。

木簡以外の木製品として、斎串、馬形、舟形木製品、木錘、木皿、杓文字、曲物、櫛、下駄、墨壺や建築部材等が出土している。

また、大量に出土した木屑（木端材・研り材）によって、近辺で建築あるいは造舟等の作業が行われたことを示唆している。

湿地内からは大量の土器が出土しており、土層の観察状況から、湿地上層は平安時代前期の土器を含み、中層は奈良時代の土器、下層の底には飛鳥時代の土器を含むことが判明している。

大量の土器の中には、墨書土器が含まれており、文字は「大垣」「驛」「飯」「三宅」「新夫」「大垣官」などと書かれたものを確認している。

西側に隣接の調査区（B81-A区）では古墳時代末～平安時代前期の遺構群を確認しており、ごく近隣で生じた大量の廃棄物を当該地に投棄したものと考えられる。

谷状の地形

湿地堆積土を除去すると、砂礫・粗砂層が南北方向の浅い谷状地形を呈していることを確認した。同志社大学増田富士雄教授の教示によれば、前地区同様にラグーンインデット（澪筋）にあたるということであった。

B81-A区

浜堤上に位置する。近代耕土、床土直下で古墳時代後期～奈良時代の遺構面を検出し、竪穴建物のほか、柱穴・ピットを多数検出した。

竪穴建物

調査区東端で確認した。全体の半分以上が調査区外に延びているが、カマド・煙道・周壁溝を有する。古墳時代後期末頃の土器がわずかではあるが出土している。

溝、土坑、ピット

当該遺構面を若干掘り下げた段階で、北東から南西へ流れる細い溝や、土坑、ピットを確認した。出土遺物は少ないが、古墳時代後期頃の遺構であると判断される。

B81-B区

浜堤上に位置する。安定した浜堤が続き、古墳時代～奈良時代の遺構を最も密に検出した。

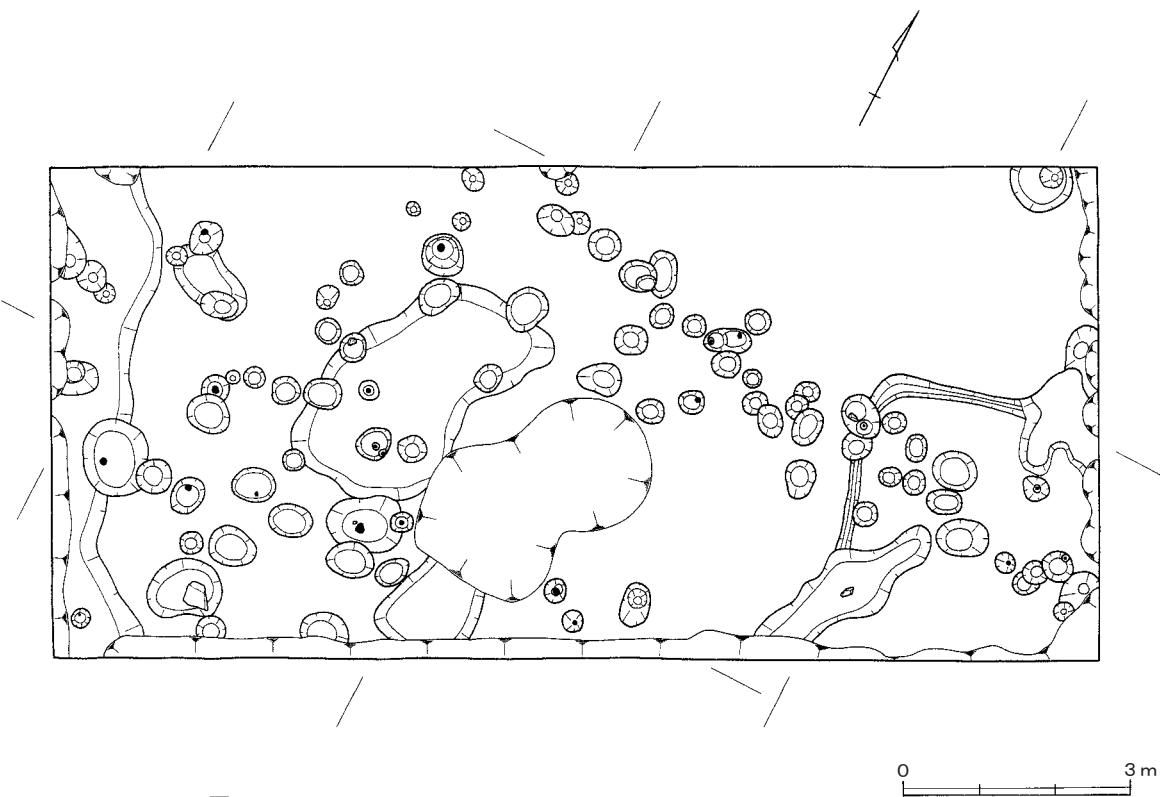


fig.26 B81-A区平面図

柱穴・ピット

中世耕土を除去し、黄灰色中砂上面で柱穴、ピット多数を検出した。柱穴の中には、大型の掘形のものが存在し、それらを繋ぐと3間以上の柱列をもつ側柱建物の可能性がある。概ね奈良時代の中に納まるのではないかと考えている。

祭祀場

奈良時代の遺構面である黄灰色中砂を5~10cm程度掘り下げた段階で、南東部分で土師器甕・手捏ね土器が各1点出土した。周辺からは土製勾玉・小玉、棒状の鉄製品が散乱した状態で出土している。土師器甕・手捏ね土器付近を中心にして祭祀が行われた際に、土製勾玉・小玉等を撒き散らしたような状況が窺える。古墳時代後期のものと判断される。

溝状遺構

黄灰色中砂下には黒灰色細砂（クロスナ）が堆積する。同層は調査区北東端で落ち込む。この落ち込みは、後に溝状遺構の一部であることが判明した。溝内からは小型丸底壺、壺などがまとまって出土した。時期は古墳時代初頭のものと判断される。

B82-A区

浜堤上に位置する。奈良時代～平安時代頃には安定した土地となっているが、古墳時代では東半分が浜堤の低地部分にあたり、この部分を土石流が通過するという不安定な状況を呈する。

袴帶金具・土馬

中世耕土の下層の奈良時代、平安時代の遺物包含層から、袴帶金具や土馬が各1点出土した。

土坑・ピット

上記土層を除去すると、調査区西半分は、浜堤の細砂、東半分は土石流の砂礫層が堆積する。この上面で土坑、柱穴、ピットを確認した。奈良時代～平安時代の中に納まると判断される。

祭祀場

当調査区東半分を土石流が北東から南西方向に走る。浜堤間のくぼみであったと考えられる。土石流の堆積を除去する過程で、西側の浜堤の斜面から、多数の手捏ね土器、土製勾玉、同小玉、鏡形土製品、動物（馬？）形土製品が出土した。古墳時代後期の祭祀場と考えられる。

B82-B区

浜堤上に位置するが、西側約1/3は浜堤の低地部分にあたり、土石流によって削られている。

掘立柱建物

中世耕土を除去すると、調査区東側は黄灰色中砂、西側は砂礫（土石流）となり、ピットや柱穴などを確認した。その中には大型の掘形を持つ柱穴があり、それらを繋げると3間×2間以上の掘立柱建物（側柱建物）となり、調査区外に延びる。奈良時代の建物と考えられる。

祭祀場

ピットや柱穴を確認した黄灰色中砂を若干掘り下げると、古墳時代の手捏ね土器、土製勾玉・同管玉、土師器甕・壺が南東部付近で出土した。また、猪を象った土製品が1点出土した。

土器群・ピット

さらに下層の黒灰色細砂から古墳時代後期の土師器甕、甌等が出土した。また、黒灰色細砂を除去した面（黄灰色粗砂）で浅いピットの中に炭化材が入ったものを確認した。

B83-A区

浜堤と湿地との境目にあたる。東半分は湿地、西半分は傾斜を持ちながら浜堤が緩やかに上がりゆく斜面地形である。湿地はシルトと砂の互層となり、シルト層は概ね6層に分層でき、湿地上層では奈良時代～平安時代、下層では弥生時代～古墳時代の土器、木製品等が出土した。

B83-B区

全体が東方向に深く落ち込む堤間湿地の堆積土にあたっている。

土石流

現地表下約2.5m下で検出した平安時代の土器を含む暗灰色シルトの直下に粗砂・細砂が厚く堆積しており、増田教授より六甲山系から供給された土石流の堆積というご指摘をいただいた。

湿地

土石流の下は再びシルト～粘質土の堆積となり、木製品（斎串・馬形、ものさし、檜扇、木皿、下駄や建築部材）、自然木が出土している。共伴土器は概ね奈良時代のものである。

遺物の出土状況からみて、ごく直近から投棄されたのではなく、発見地の東側を流れていた小河川の上流側（おそらく芦屋驛家とその関連施設）から流れ着いたものと判断される。

3.まとめ

今回の調査は、深江北町遺跡の範囲を東西に横断するかたちで実施し、遺跡が立地する地形の詳細な形成過程が明らかになった。特に浜堤と堤間湿地（ラグーン）が当初の想定よりも複雑に入り組んでいることが判明し、居住域がそれによって限定されていることが明らかになつた。また、浜堤の成長により湿地が埋められてゆく過程（当遺跡が立地する浜堤の成長は弥生時代後期～古墳時代初頭頃にピークを迎える）がそれぞれの堆積層から出土した土器により、大まかではあるが、判明したことは大きな成果である。

また、奈良時代～平安時代のピット、柱穴、土坑を多数検出し、大型の柱掘形をもつ建物を検出したことや、湿地から発見された大量の土器や木製品が神戸市内ではあまり例をみないものであること、その中でも木簡・墨書き器が数多く出土したことは特筆に値する。

2. 深江北町遺跡 第13次調査

1. はじめに

深江北町遺跡は、神戸市東灘区深江北町1～3丁目、深江本町1～2丁目一帯の南北300m、東西700mの範囲に広がる遺跡である。当遺跡は、六甲山南麓の芦屋川西岸、標高T.P. 2.0～5.0mに立地している。

当遺跡の調査は、昭和59年に実施された第1次調査以来12次に及ぶ発掘調査が行われている。これまでの調査の結果、弥生時代後期の掘立柱建物、弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器棺墓や円形周溝墓、古墳時代後期の竪穴建物、奈良時代～平安時代の掘立柱建物、平安時代末の水田、中世の大溝、水田などが検出されている。特に第9次調査においては、「驛」等の墨書き器や木簡、瓦、緑釉陶器など、葦屋驛家に関連すると考えられる奈良時代前半～平安時代前期の遺構、遺物が出土しており注目されている。

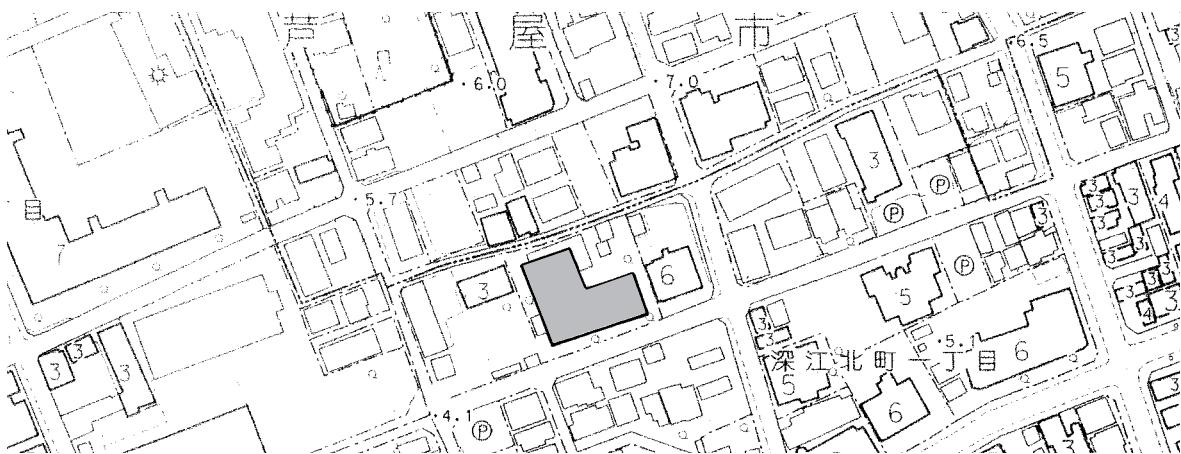


fig.27 調査地位置図 1 : 2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、老人ホーム建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。調査対象地のうち、東半部分を1区、西半部分と2区と呼称する。

基本層序

上層より、層厚20～50cmを測る盛土及び搅乱土の下層で旧耕土が数層存在する。その下層の層厚10cmを測る平安時代の遺物包含層である暗灰色粘質土の上面で、第1遺構面を検出した。その下層には第2遺構面の基盤層となる灰褐色粘性砂質土が堆積している。2区では第2遺構面の上に洪水砂である層厚6cmを測る褐色中砂が堆積している。1区では、第2遺構面の下層に層厚20～30cmに複数の耕土が存在するが、畦畔等は検出していない。その下層に洪水砂である層厚10cmの明褐色中砂が堆積しており、この洪水砂を除去した段階で第3遺構面を検出した。1区と2区の境には流路が存在し、2区では第3遺構面である古墳時代後期の畦畔は検出していない。2区の第3遺構面相当層の下に層厚50～80cmの洪水砂が堆積しており、その下層で第4遺構面である古墳時代前期の水田と畦畔を検出した。

各遺構面の標高は、1区では南壁東端で、第1遺構面T.P. 4.7m、第2遺構面T.P. 4.5m、第3遺構面T.P. 4.0mである。2区では西壁北端で、第2遺構面T.P. 4.6m、第3遺構面相当層T.P. 4.3m、第4遺構面T.P. 3.6mである。

第1遺構面

1区で溝6条を検出したほか、1区南西から2区南にかけて耕作地の段差を検出した。溝は、幅30cm、深さ10cm前後を測るもので、うち5条はN-17°-Wの方向を指向し、規則性が認められる。東端の溝1条は他の溝を切り込んでおり、N-24°-Wの方向を指向し、現在の町割とほぼ同じであることからも、一番新しい時期の溝と考えられる。出土遺物の大半は平安時代のものであるが、瓦器が含まれることから中世の耕作に伴う溝と考えられる。2区では、攪乱と連綿と続く耕作により顕著な耕作溝を検出していない。

第2遺構面

平安時代後半の掘立柱建物と水田を検出した。1区北東隅で1×2間に並ぶ柱穴を確認したが、調査区外に延びるため本来の掘立柱建物の規模は不明である。柱穴は直径30~60cmを測り、平面形は円形を呈する。深さは約15cmを測る。柱間は、東西方向が1.8m、南北方向が2.0mを測る。この違いは建物の梁行きと桁行きの違いであると考えられる。

2区では、粗砂礫により埋没した平安時代後半の畦畔と水田を検出した。畦畔の遺存状態が良好であったのは2区北西部と同南西部である。中央西側では畦畔は検出していないが平らに削られた水田の単位を確認した。水田1面の全体を検出することはできていないが、調査区外に畦畔が伸びていることから1面はかなり広い面積を占めるものと推測される。水田面には多数の動物の足跡が見られるが、歩行方向は見出せない。水田内に堆積した土層は、上層は粗砂礫で、下層にはシルトと粘質土がマーブル状に混ざったような堆積土であった。2区北西部で検出した水田面には、放射状に筋状の細かな溝が多数残されていた。この溝の集まる先には、畦畔の切れ目（水口？）があり、この部分には拳大の石が畦畔に突き刺さるような状態であった。また、畦畔の切れ目から下がった水田には直径1m程度を測る窪みが存在する。畦畔にはスコップ状の工具で削り取ったような凹凸が側面と畦畔に沿って水田面の底に残されていた。

以上の現象については、同志社大学増田富士雄教授から以下の通りご教示を頂いた。圃場内に堆積しているものは土石流末端によりもたらされた堆積土と考えられる。当初、非常に早い流水と細かな砂が流れ込んできており、マーブル状に見えるシルト層は、耕土の粘質土と混ざり合ったものが先に堆積したアンチデューン（水面下の砂に現れる長く低い横波で形成されたリップル）である。その後に土石流の末端となる粗砂礫が堆積したと考えられる。放射状に見られる溝は、土石流の末端の先頭に流された拳大の石が水田面を削り取りながら流された痕跡であり、畦畔により行き場を失った水流が畦畔の低い部分、もしくは水口を押し広げて決壊して流れが集中したことによりできた放射状の溝である。また、その流れが畦畔を突き破った折にできた小さな滝壺状のものが押堀

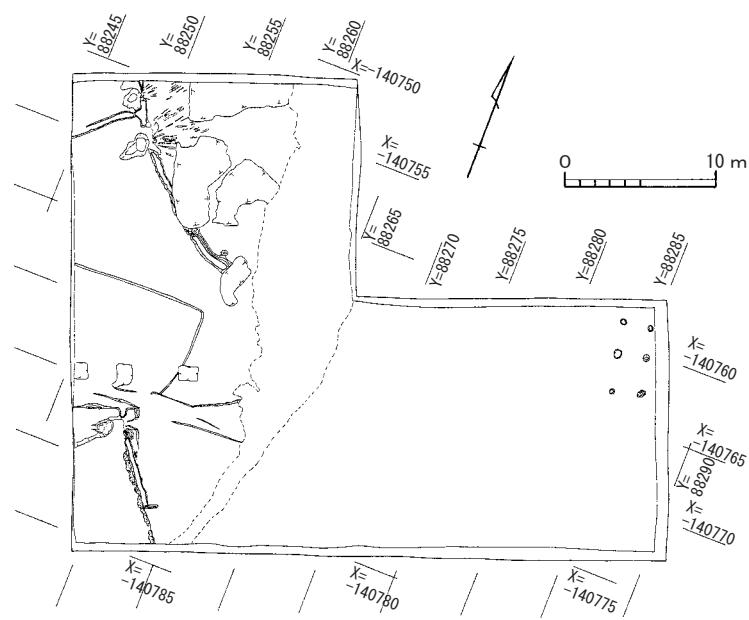


fig.28 第2遺構面平面図

(おっぽり) と呼ばれる壅みである。畦畔の側面や内側の底に残された凹凸は、畦畔からあふれ出して水が流れ込んだ際に、縦巻きの渦が起こることにより削られた凹凸である。

第3遺構面

1区全面で洪水砂と考えられる砂に覆われた古墳時代後期の水田を検出した。1区と2区の境には流路が存在し、この流路の西側の2区では1区でみられる耕土が薄く存在するものの、畦畔や水田の単位が判明するようなものは検出していない。1区の水田は、この流路に沿って扇状に配置されている西半と、浅い壅地のような水田列を隔てて長方形の水田面が並ぶ東半に分けられる。西半の水田は、本来は人工の水路と考えられる流路の流れる方向に合わせて扇状に造られたものと考えられるが、北西から南東への傾斜地を利用しているため、水田1面の面積は6～15m²を測り、比較的小規模である。東半の水田は、現在の町割りとほぼ同じ方向性をもつ。東西方向に長い長方形であり、東端が調査区外に続いているために水田1面の面積を確定することはできないが、検出した面積だけでも15以上～24m²以上の大きな水田である。西と東の水田の間には一段低い水田列があり、東西両水田に比べると区画が明確ではないが、畦畔により区画をしている。水田には幅の広い水口が設けられ、それぞれの水田から、一段低い中央の水田列に向けて東西の水田から水が集中排水する構造となっているようである。また、今回の水田面全体には動物（偶蹄目）や人の足跡が多数残されていた。検出した足跡は全て、水田を覆う洪水砂と同じ砂で埋没していた。動物、人共に歩行方向を見出すことはできなかった。2区南西隅において、地震による液状化現象の痕跡である噴砂の筋を検出した。検出面である水田面が噴砂の筋を頂点として盛り上がっていた。この盛り上がりは水田を覆う洪水砂も同様に盛り上がっていたが、噴出した砂は洪水砂と同質のため区別することはできない。

第4遺構面

古墳時代前期の水田を検出した。2区のほぼ全面で検出したが、南東部は大畦畔を境に水田の区画を確認していない。1区に関しても断面調査を実施したが、水田の存在を証明するようなものは検出していない。2区で検出した水田は、厚さ50～80cmを測る厚い洪水砂で覆われていることから畦畔の残存状況も良好であった。畦畔は底幅30～50cmで、水田面からの高さは4～10cmを測る。水田の形状は方形を基本としているものと、水を引き込む水口の取り付け位置の関係から五角形を呈するものがある。2区では、27区画の水田を確認しているが、そのうち16区画は水田全体が判明しており、約6～16m²の面積を測る。2区の南西隅は調査区の中で最も低くなってしまい、排水路のようにも考えられるが、排水路を遮断するように畦畔状のものが存在する。検出した水田には、幅の狭い水口が設けられており、高い水田からそれぞれの水口を

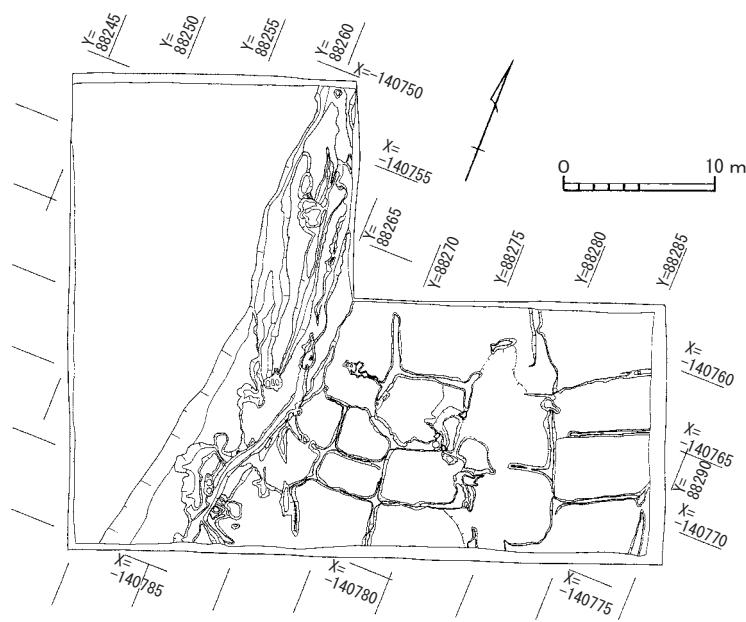


fig.29 第3遺構面平面図

通過しての配水をみると全てがこの南西部の低地に集約される構造となっている。また、2区の南東部には底幅70~140cm、水田面からの高さ10~23cmを測る大畦畔がS字状に設けられており、2区南西隅の低地部へ水が向くように工夫がなされているようである。また、人の歩行方向が判明する足跡を検出した。この状況は、第3遺構面の水田でみられた足跡の状況とは異なり、一人の人が歩行した足跡を検出したのみである。この足跡の埋土は、この水田を覆う洪水砂とは明確に異なり、灰色極細砂である。

3.まとめ

今回の調査成果を概観すると、古墳時代の初めごろ当調査地の西半部で水田経営が行われており、人の管理が行き届いている時期（季節）大水害が発生して水田が埋っている。その後、再び水田経営がなされ調査区のほぼ中央を南北に流れる水路より東側に、低い水田域が広がっていたようである。古墳時代後期では、水田に動物が入り込んでも人が気にしない時期に大水害が発生し、水路が流路化し、あふれ出した洪水砂が東側一体に堆積した。時を経て再び耕作地として利用されたが、古墳時代の洪水により東側が高く西側が低くなっており、そこに経営された水田が平安時代後半に発生した土石流により押し流された。東側は安定していたので、現代に至るまで耕地が連綿と続いているようである。

今回の調査では、当初東側隣接地で実施した第7次調査成果と同様に、平安時代後半の集落域を示す遺構が検出されることが予想されたが、各遺構面の中心となる遺構は水田であった。第2~4遺構面については土石流や洪水により良好に畦畔が遺存しており、土石流や洪水災害が頻繁に発生していた災害史と、水田構造がわかる良好な資料が得られた。当該地区の土地利用と自然災害史の解明を進めるうえで貴重な資料が得られたものと考えられる。



fig.30 2区第4遺構面全景

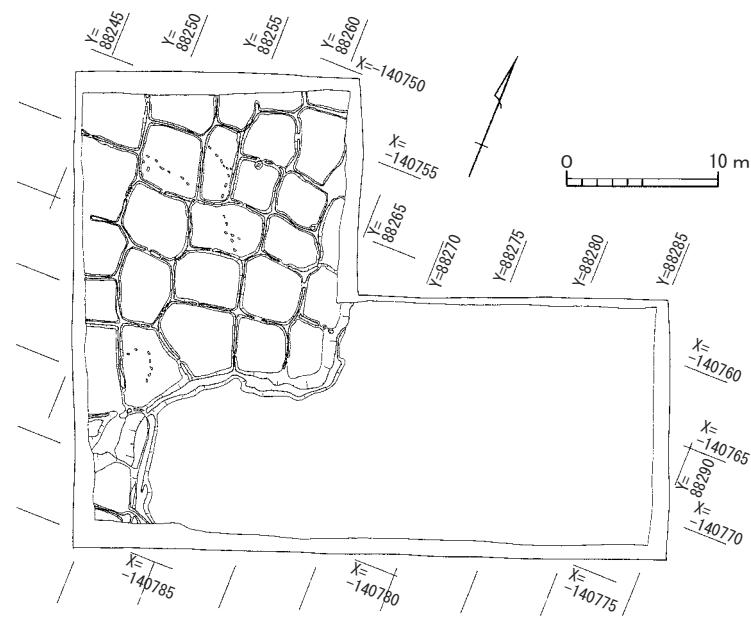


fig.31 第4遺構面平面図

3. 北青木遺跡 第7次調査

1. はじめに

北青木遺跡は、神戸市東灘区北青木に位置する。当遺跡の範囲は、阪神電車青木駅～深江駅間の東西最大幅約550m、南北最大幅約250mの範囲（約10万m²）に想定されている。当遺跡は、昭和59・60年度に県営住宅の改修工事に伴い発見され、その後、6次にわたる発掘調査が行われており、縄文時代後期～中世にわたる複合遺跡であること、浜堤（砂丘）と堤間湿地とが形成される地形上に立地することが確認されている。

これまでの調査成果のうち特に顕著なのは、弥生時代の遺構、遺物である。第1、2、4次調査では、弥生時代前期の溝が検出されている。第5次調査では、弥生時代中期後半の扁平紐式四区袈裟襟文銅鐸（北青木銅鐸）と、弥生時代中期の土器、弥生時代後期後半の壺棺墓2基が出土している。北青木銅鐸は、複数回の埋納および掘削過程を検証でき、銅鐸祭祀のあり方を考える際の良好な資料である。弥生時代中期の土器は、周溝墓の供獻土器である可能性が考えられる。第6次調査では、弥生時代前期の赤彩を施した広口壺が出土している。

なお今回の調査成果については、平成25年度に『平成23年度 北青木遺跡第7次発掘調査報告書』を刊行しており、調査の詳細については報告書を参照されたい。



fig.32 調査地位置図 1 : 5,000

2. 調査の概要

今回の調査は、阪神電気鉄道本線の連続立体交差工事に伴うもので、工事によって影響を受ける部分（橋脚部分31ヶ所）を調査対象とし、発掘調査を実施した。調査対象地は、元の路線敷に沿って東西に広がる。なお調査地点の呼称は、工事にあたって橋脚に付けられている番号を使用した。

基本層序

現地表面は、T.P. 約2.2mである。現地表面から約30～100cmは、阪神電鉄敷設時の盛土を含む造成土及び搅乱土である。その下層には近世～近代の耕土が数層堆積する。耕土上面の標高は、B47区からB57-A区までの西側で、T.P. 1.3～1.9m、B57-B区からB62区までの東側でT.P. 1.0m付近である。東側ほど旧地形は低くなっている。B59-B区東半部からB62区までは、下層で湿地堆積を確認している。湿地堆積層は黒灰色や黒褐色の粘質土で、植物遺体や生物の痕跡が確認できる。耕土層より下層の遺構面は、これら湿地堆積のある調査地点より西側で検出した。遺構検出面の標高は、B47区からB57-A区までの西側でT.P. 1.3～1.8m、B57-B区からB59-B区までの東側でT.P. 0.5～0.9mである。B50-B区からB59-B区までは、安定した浜堤（砂丘）が続いている。黄褐色細砂や黄灰色細砂の風性堆積で形成されており、厚いところで1.4m程度にもなる。B51区からB54-B区付近が最も高く、B57-B区からB59-B区にかけて低くなっている。西側のB47区からB50-A区では、浜堤と湿地堆積が入り組んでおり、海の作用を受けた濁の跡も確認できる。

各調査区の概要は表20のとおりである。以下主な検出遺構については、時代ごとに記述する。

表20 北青木遺跡第7次調査調査内容一覧

調査区名	遺構面数	検出遺構	地質
B47	2	耕作溝／中世溝・弥生時代中期方形周溝墓（主体部・周溝）	土石流・干渴
B47西	2	耕作溝／中世溝・弥生時代中期方形周溝墓（周溝）	土石流
B48-A	1	耕作溝	湿地・濁
B48-B	3	耕作溝／溝・ビット／弥生時代中期方形周溝墓（周溝）	浜堤
B49-A	3	耕作溝／溝／濁（弥生後期・木製品多数）	浜堤・湿地・濁
B49-B	2	耕作溝／溝（古墳時代・土鍤・土師器）	浜堤・湿地・濁
B50-A	1	溝（中世・木製品）	浜堤・濁
B50-B	2	耕作溝／溝・弥生時代中期土坑	浜堤
B50-C	1	耕作溝	浜堤
B51	4 (3)	耕作溝／弥生時代後期円形周溝墓（周溝）・弥生時代中期土坑／ビット／ビット	浜堤
B52	2	奈良・平安時代溝／弥生時代中期土坑（周溝か）・ビット	浜堤
B53-A	3	耕作溝／奈良・平安時代溝／奈良時代溝（貝・骨出土）・弥生時代後期溝	浜堤・土石流
B53-B	3	耕作溝／ビット・集石遺構・奈良・平安時代溝・弥生時代後期方形周溝墓（周溝）／ビット	浜堤
B54-A	2	耕作溝／ビット・集石遺構・弥生時代後期土坑（壺棺墓か）	浜堤
B54-B	2	ビット・溝・弥生時代前期土坑・弥生時代中期土坑／ビット	浜堤
B54-C	2	耕作溝／奈良・平安時代掘立柱建物・ビット・弥生時代中期方形周溝墓（周溝）・弥生時代後期壺棺墓か	浜堤
B55-A	2	耕作溝／ビット・奈良・平安時代掘立柱建物	浜堤
B55-B	1	ビット・奈良・平安時代土坑・奈良・平安時代溝・弥生時代土坑	浜堤
B56-A	1	ビット・奈良・平安時代土坑・弥生時代土坑	浜堤
B56-B	2	性格不明遺構／ビット・弥生時代中期土坑・古墳時代溝状遺構（土師器・ガラス玉・管玉）	浜堤
B57-A	2	性格不明遺構／ビット・奈良・平安時代土坑	浜堤
B57-B	2	平安時代溝／弥生時代中期土坑	浜堤
B58-A	1	近世川跡	浜堤
B58-B	4	耕作溝／耕作溝／ビット／弥生時代中期土坑	浜堤
B59-A	4(3)	奈良・平安時代溝／奈良・平安時代溝／弥生時代溝／弥生時代中期方形周溝墓（周溝）	浜堤
B59-B	2	耕作溝／弥生時代中期方形周溝墓（主体部・周溝）	浜堤・湿地・濁
B60-0	3	耕作溝／耕作溝／近世水田畦畔・足跡	土石流・湿地
B60-1	1	耕作溝	湿地
B61-A	1	耕作溝	湿地
B61-B	1	耕作溝	湿地
B61-C	1	近代橋台	湿地
B62	1	耕作溝	土石流・湿地

主な検出遺構

中世以降

バラスを除去すると多くの地点で阪神電鉄敷設時の盛土を検出した。また、B61-C区では小規模な水路をまたぐ橋台も検出した。

阪神電鉄敷設時の盛土の下層には、それ以前の耕土が堆積しており、多くの調査区で耕作溝を検出している。阪神電鉄敷設以前は、畑や水田などの耕作地であったと考えられる。

中世の遺構、遺物は希薄である。B47区では、後述する弥生時代の方形周溝墓の周溝と同じ位置で、南北方向の溝を検出した。おそらく後世に窪地のようになっていたところを利用したものと考えられる。B50-A区では、濬の堆積土中から瓦器の破片とともに箸などの木製品が出土している。

奈良時代・平安時代

B53-A区では、第2遺構面で東西方向の溝、第3遺構面で南北方向の溝を検出した。第3遺構面の南北方向の溝からは、奈良時代の須恵器とともに土錐、拳大程度の礫、馬の骨、ハマグリなどの貝が出土した。下層を確認した結果、この溝は土石流堆積の上層でやや窪んだ溝状のところにこれらの遺物が破棄されていることが判明した。

B53-B区で東西方向の溝を検出した。土師器甕や高台付の須恵器壺などが出土している。また、この溝を切る集石遺構を3基検出した。石の中には火を受けて赤化した痕跡のあるものも含まれる。このような集石遺構は、B54-A区でも3基検出している。用途は不明である。

B54-C区で掘立柱建物を1棟検出した。方形の掘形で、東西1間、南北2間を確認した。B55-A区でも掘立柱建物を1棟検出した。円形の掘形で、東西2間、南北1間を確認した。

古墳時代

B49-B区では、濬の堆積土中から、多くの土錐と甕などの土師器が出土した。

今回の調査地における古墳時代の遺構、遺物は、希薄である。削平によるものと考えられる。

B56-B区で、溝状の遺構から5世紀後半頃の小型丸底壺が出土した。周囲からは、ガラス玉や管玉も出土している。

弥生時代

B47区では、弥生時代中期の方形周溝墓を1基検出した。周溝墓の規模を確定するために、調査区の西に幅1m、長さ7m程度の調査区を新たに設定した。これにより、東・西の周溝を確認することができ、墳丘の東西規模は約9mであることが判明した。東側の周溝は幅1.5~3.0m、深さ30~80cmを測る。南側ほど、浅く、狭くなっている。

主体部は、木棺墓3基、土坑墓1基を検出した。

木棺墓S T201は棺材が遺存しており、木棺の内寸は長さ170cm、幅48cmを測る。木棺墓S T202は、底板のみが残存していた。長さ110cm以上、幅50cmである。木棺墓S T203は、木棺材は残存していなかったが、土層観察から、木棺が使用されていたものと判断した。推定される木棺の内寸は、長さ100cm、幅65cmである。

B48-B区では、調査区北側で方形周溝墓を1基検出した。調査範囲内では、周溝の南側約1/3を検出したものと考えられる。時期は、周溝内から破片が少量出土したのみであるが、弥生時代中期とみられる。

B49-A区では、濬の堆積土中から弥生時代後期の土器とともに、杭や板材などの木製品が多く出土した。

B51区では、調査区の南側で、弥生時代後期の円形周溝墓を検出した。調査範囲内では周溝の北側約1/3を検出したと考えられる。周溝内からの出土遺物は破片が多い。また、調査区北西端で土坑を1基検出し、弥生時代中期の土器が出土している。

B52区では、調査区北西端の土坑から弥生時代中期の壺が2個体出土した。どちらも穿孔があり、墓などへの供献土器とみられる。この土坑は、西は搅乱により削平され、北は調査区外となるため、形状の把握が困難である。上面が削平され溝の底部だけが土坑状にみえていると考えると、穿孔された土器の出土状況も含めこの土坑が周溝の一部である可能性も考えられる。

B53-A区では、調査区西側で南北方向の溝を検出した。溝内から弥生時代後期の甕が出土している。

B53-B区では、調査区南側で方形にめぐる溝を検出した。弥生時代後期の土器が出土している。方形周溝墓の北側約1/3を検出したものと考えられる。

B54-A区では、土坑から弥生時代後期の大型の壺が出土している。

B54-B区では、3基の土坑からそれぞれ弥生時代前期の壺、鉢、弥生時代中期の壺が出土した。弥生時代前期および中期の壺はいずれも穿孔されており、供献土器である可能性がある。

B54-C区では、調査区の南西で周溝墓の周溝とみられる溝を検出した。穿孔した壺などの弥生時代中期の土器が多数出土している。周溝の埋土上層からは、弥生時代後期の大型の壺が出土しており、壺棺墓の可能性も考えられる。

B56-B区では、土坑から弥生時代中期の長頸壺がほぼ完形で出土している。

B58-B区では、第4遺構面の土坑から弥生時代中期の脚台付の壺が出土した。流水文を施している。

B59-A区では、弥生時代中期の方形周溝墓を2基検出した。主体部は残存しておらず、周溝のみを検出した。一辺の周溝を共有しており、2基の周溝が交わる地点で、弥生時代中期の壺が出土している。



fig.33 B47 区方形周溝墓全景



fig.34 同左周溝土層断面

B59—B区では、弥生時代中期の方形周溝墓を1基検出した。調査区の南側で、幅約1.3m、深さ約35cmを測る周溝を検出し、壺や高坏などが出土している。墳丘は調査区外に広がるため規模を確定することはできない。西側の調査区であるB59—A区には墳丘は続いていないことを確認しているため、墳丘規模は一边約8～10mを測るものと考えられる。主体部は、木棺墓4基、土坑墓1基、土器棺墓1基を確認した。

木棺の内寸は、長さ64～110cm、幅32～43cmを測る。木棺墓はいずれも小形で、小児用のものを含むと考えられる。

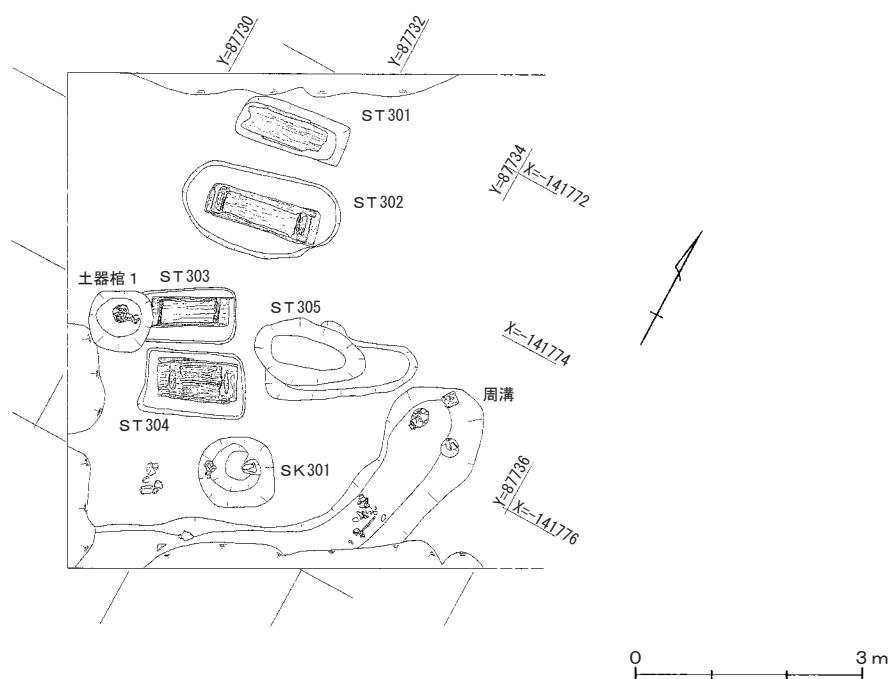


fig.35 B59—B区遺構平面図



fig.36 B59—B区方形周溝墓全景



fig.37 同左周溝内遺物出土状況

以上のように、弥生時代前期～後期の遺構や遺物を多数確認した。

弥生時代前期では、土坑から、供獻土器と考えられる穿孔された壺が1点（B54-B区）出土している。その他にも、土坑から鉢が出土している（B54-B区）。

弥生時代中期の方形周溝墓は、主体部を検出したものが2基（B47区・B59-B区）、周溝のみ検出したものが4基（B48-B区・B54-C区・B59-A区）である。また、土坑として検出したものであるが、その形状や、穿孔された土器が出土することなどから、削平を受けた周溝の一部である可能性のあるものが1基（B52区）存在する。その他、土坑やピットから完形に近い中期の土器が多く出土しており、供獻土器と考えられる穿孔された土器も出土している。

弥生時代後期では、方形周溝墓の周溝のみ検出したものが1基（B53-B区）、円形周溝墓の周溝のみ検出したものが1基（B51区）である。その他、壺棺墓の可能性が考えられる大型の壺が2個体（B54-A区・B54-C区）出土している。また、南北方向の溝も検出している（B53-A区）。

3.まとめ

今回の調査では、弥生時代前期から近代にわたる、幅広い時代の遺構、遺物を確認した。

近世以降、明治時代後半に阪神電鉄が敷設されるまでは、継続して耕作地であったことを確認した。中世の遺構、遺物は希薄であるが、溝などを検出し、遺物も少量出土した。奈良時代・平安時代では、掘立柱建物や溝を検出した。古墳時代の遺構、遺物は希薄であった。しかし、ガラス玉や管玉が出土し、また濠の中から多くの土器が出土していることからも、当該期において生活の場が近隣に存在しているものと考えられる。

今回の調査地でも、既往の調査成果と同様に、弥生時代の遺構、遺物が顕著であった。弥生時代中期及び後期の方形周溝墓や円形周溝墓を8基検出した。その他にも土坑として検出しているものの中には、前述のように、周溝の一部である可能性のあるものがみられる。また、供獻土器の可能性がある穿孔された前期及び中期の壺が出土している。このように、周溝墓の検出や供獻土器と考えられる土器の出土は、弥生時代前期～後期まで継続しており、当地が弥生時代を通じて、墓域や祭祀空間として意識されていた可能性が高い。この調査成果は、第5・6次調査の調査成果と合致し、阪神電車の現況路線敷きの北側まで、墓域や祭祀空間が広がることを示している。また、主体部として木棺墓や土坑墓、土器棺墓が確認できたことも大きな成果である。特に、B59-B区では小児用を含む複数の木棺をまとめて検出しており、このことは弥生時代の墓制や社会構造を考察する際の有意義な資料となる。

また、今回の調査では、増田富士雄氏（同志社大学）に地質学からの指導をいただき、当遺跡の土地形成過程についても調査を行った。浜堤の形成過程や、湿地との位置関係、海の作用範囲など、遺跡に与えた環境変化について分析を行っている。地質・環境調査の成果と発掘調査による検出遺構とを考え合わせることにより、当地での土地利用や環境復元が可能となり、当遺跡の様相がより具体化できるものと考える。

4. 本山遺跡 第38次調査

1. はじめに

本山遺跡は、東灘区本山中町、本山南町、田中町一帯に広がる縄文時代～古墳時代、平安時代及び中世の集落遺跡として知られている。特に弥生時代中期においては六甲山南麓の拠点的な集落として栄えており、第12次調査では銅鐸が出土している。また弥生前期初頭の土器や木製品が出土しており、近畿地方における稻作の伝播過程を考えるうえでも重要な位置を占める、市内でも有数の遺跡である。

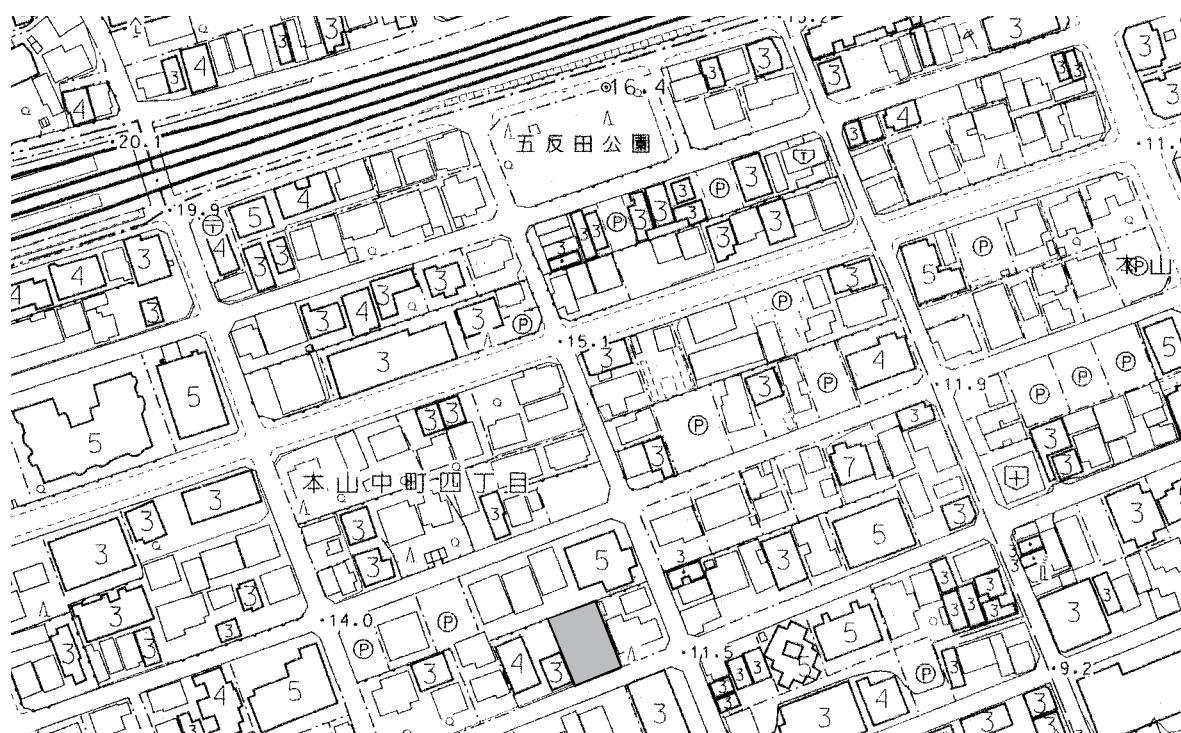


fig.38 調査地位置図 1 : 2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、共同住宅建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。

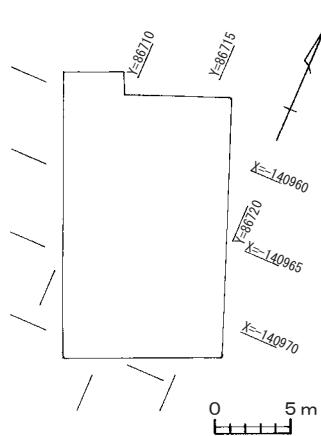


fig.39 調査区平面図

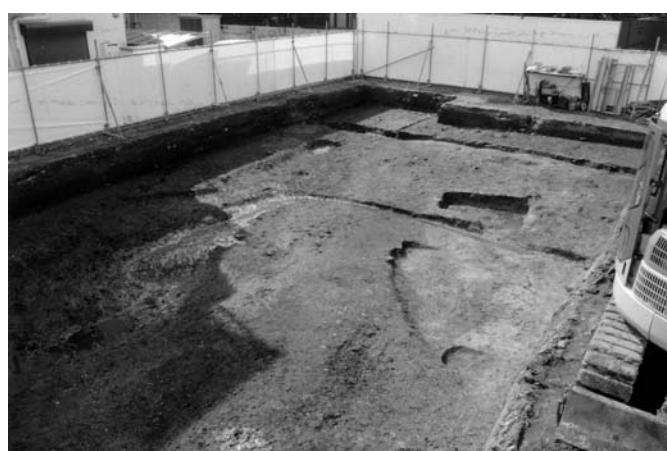


fig.40 湿地全景

基本層序

盛土、旧耕土の下層に弥生時代中期ないし後期の土器を含む遺物包含層が存在する。遺物包含層上面では鋤溝が認められ、埋土中から平安時代の土器が出土している。また、遺物包含層の下層には、調査区全域を覆うかたちで粗砂質の洪水砂と土石流堆積層の互層がみられる。土石流堆積層からは、弥生時代中期ないし後期の土器の大型の破片がまとまって出土している。さらに下層には無遺物の黒色粘土が堆積しており、植物が自生していた痕跡が認められた。

黒色粘土の下層において、北側から南側へ、あるいは東側から西側へ下がる谷状の旧地形を確認した。

弥生時代中期以前においては、当調査地は谷状地形あるいは湿地状の地形が広がっていたことが明らかになった。その後、弥生時代中期～後期において土石流災害を被っているが、この土石流には先述したように当該時期の土器がまとまって含まれることやその上層の遺物包含層も良好な遺存状態を示していることから、土石流災害から比較的早い段階で復旧が行われた状況が読み取れる。古墳時代以降においてはしばらく集落の痕跡が認められず、平安時代ないし中世に至って、耕作地としての土地利用が行われるようになったものと考えられる。

3. まとめ

今回の調査では、顕著な遺構は認められなかったものの、弥生時代及び中世の土地利用の一端が明らかとなった。また弥生時代中期ないし後期の大型の土器片がまとまって出土していることから、当調査区の北側近接地に当該時期の集落が広がっている可能性を強く示唆するものであり、大きな調査成果といえよう。

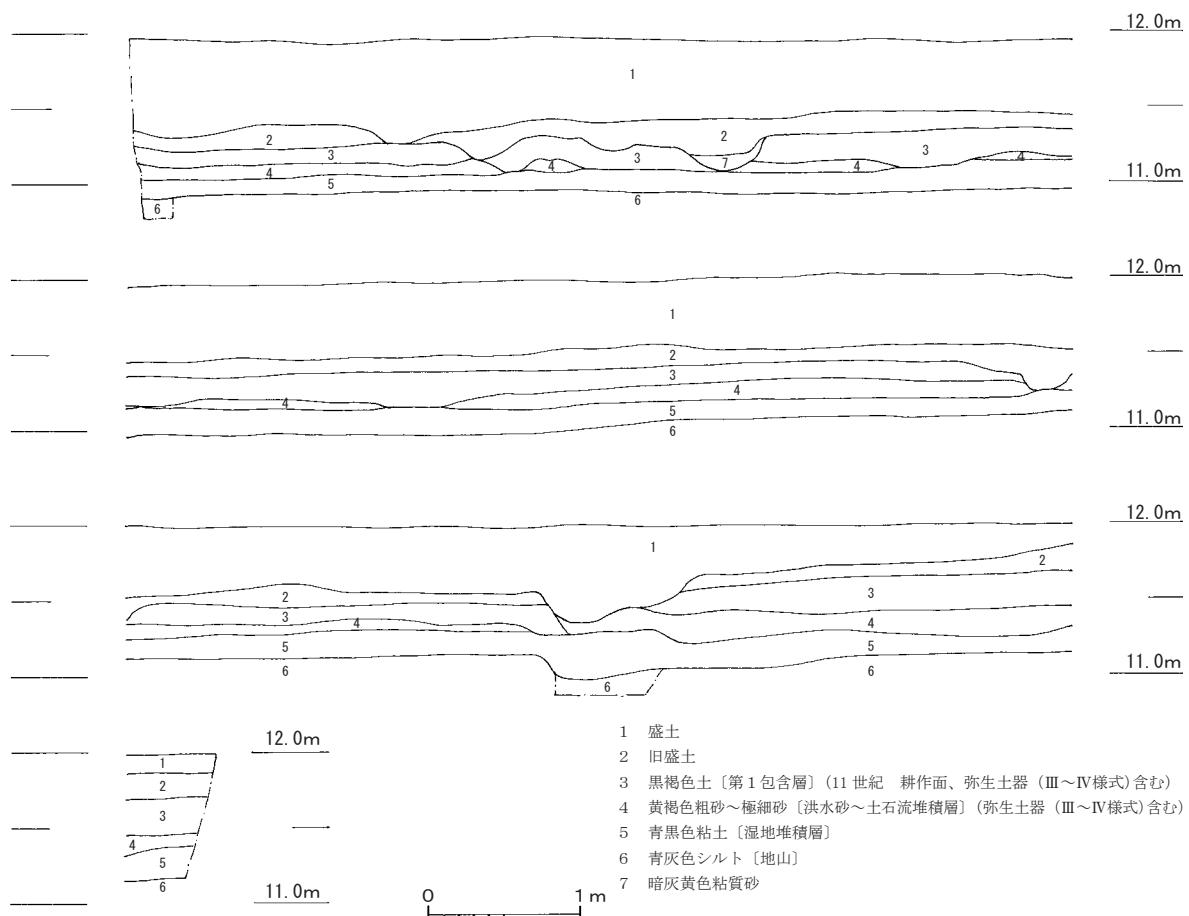


fig.41 調査区西壁土層断面図

5. 西岡本遺跡 第9次調査

1. はじめに

西岡本遺跡は、六甲山より流れ出す住吉川によって形成された扇状地の左岸の高位段丘上に位置しており、北西から南東方向への傾斜地形をなしている。

当遺跡は、昭和30年代まで横穴式石室をもつ古墳時代後期の群集墳が存在していたことが知られているが、急速に宅地化されたためその実態は不明であった。しかし昭和63年に実施された第1次調査によって横穴式石室墳10基をはじめとして、旧石器時代～中世にかけての遺構、遺物が確認されたことにより、地中にはその姿を遺していることが明らかとなった。

その後8次にわたる発掘調査によって古墳時代を中心とする遺構、遺物が検出されているが、第4～6次調査では平安時代中期～中世初頭の掘立柱建物や土坑とともに多量の遺物が出土し、第8次調査においては奈良時代後期まで遡る掘立柱建物なども確認されている。



fig.42 調査地位置図 1 : 2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、個人住宅建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。なお調査は、残土置場を確保するため東西2分割して行った。先行して実施した西側の調査区をI区、残る東半分をII区と呼称する。

基本層序

調査地は、北西から南西にかけての傾斜地に位置している。基本層序は、まず調査区全体に近現代の整地の盛土がみられる。敷地の北側ではこの直下において基盤層である明褐茶色粘質土になる。さらに南へ下がるに従い厚さ20～40cmを測る盛土が堆積しており、近世の耕作に伴うと考えられる耕土・床土が数層堆積した下で遺構面に達する。

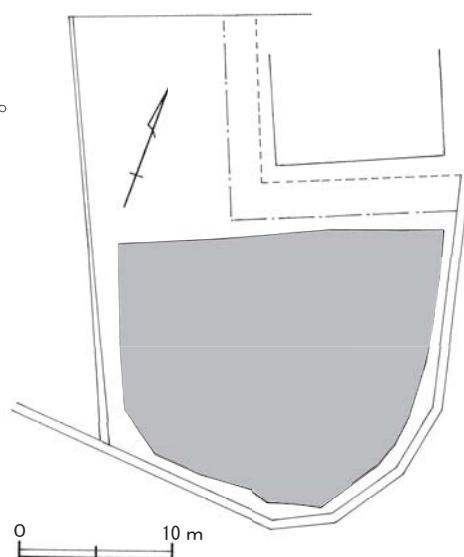


fig.43 調査範囲位置図

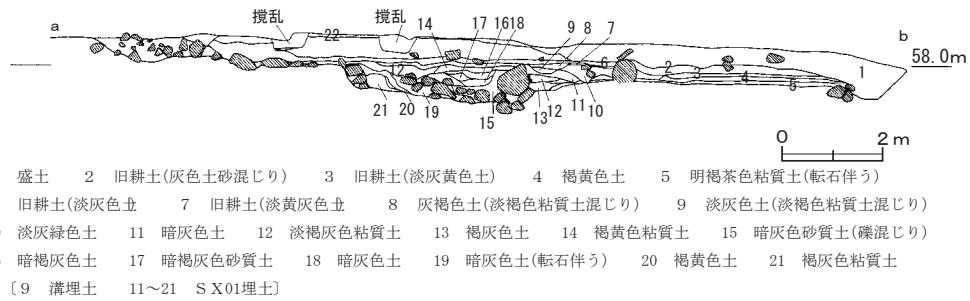


fig.44 調査区中央土層断面図

遺構面においては、まず近世の耕作による北西側より南東側にかけて3段の平坦面が認められ、一部に整地や盛土を施し転石を利用した石垣や排水用の溝などが造られている。これらを除去すると弥生時代～近世の遺構面となり土坑をはじめピット、流路状の遺構などを確認した。

ピット群

調査区の東側II区において直径20～40cm、深さ10～40cmのピットを約30基検出した。中には柱痕が認められ、さらに版築状の構造で固定した痕跡のみられるものもある。特定できなかつたものの掘立柱建物の一部が含まれるものと思われる。

SK01

調査区の北寄りで検出した土坑で、近世の圃場面の造作や搅乱によって東側及び南側を削平されているため本来の形状や規模は不明である。検出した規模は、東西1.0m以上、南北0.6m以上、深さ30cmを測る。

SK21

調査区の南端に位置する直径1.8m、深さ55cmを測り、平面形が円形を呈する土坑である。中世後半～近世の遺物が出土しており、切り合い関係などからも比較的新しい時期の遺構と考えられる。

SK22

調査区の中央部で検出した土坑で、長径1.6m、短径1.1m、深さ50cmを測り、平面形は楕円形を呈する。SX01を切って掘り込まれている。古墳時代前期の土器が比較的良好な状態で多く出土した。

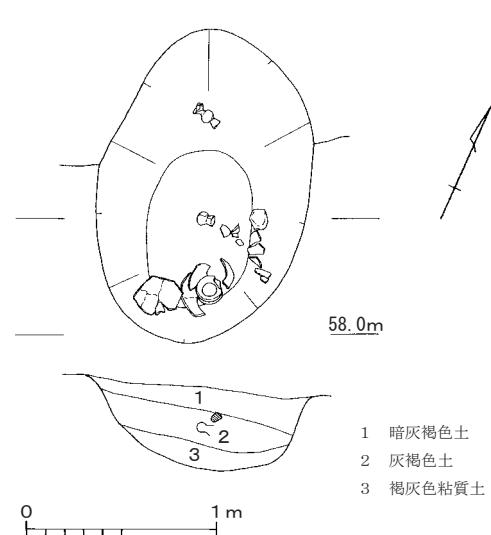


fig.45 SK22 平・断面図



fig.46 SK22 遺物出土状況

SX01

調査区の中央部から緩やかに蛇行して東へ延びる、幅3.0~4.5m、深さ60~80cmを測る、流路（土石流）状の遺構である。西端から4m程度の範囲で上層に奈良時代～平安時代前期の遺物を含む粘質土が流れ込んでいる。肩部にはラミナ状の堆積も認められ、中～下層には人頭大の転石が入る。弥生時代後期～古墳時代初頭の遺物を多く含む。

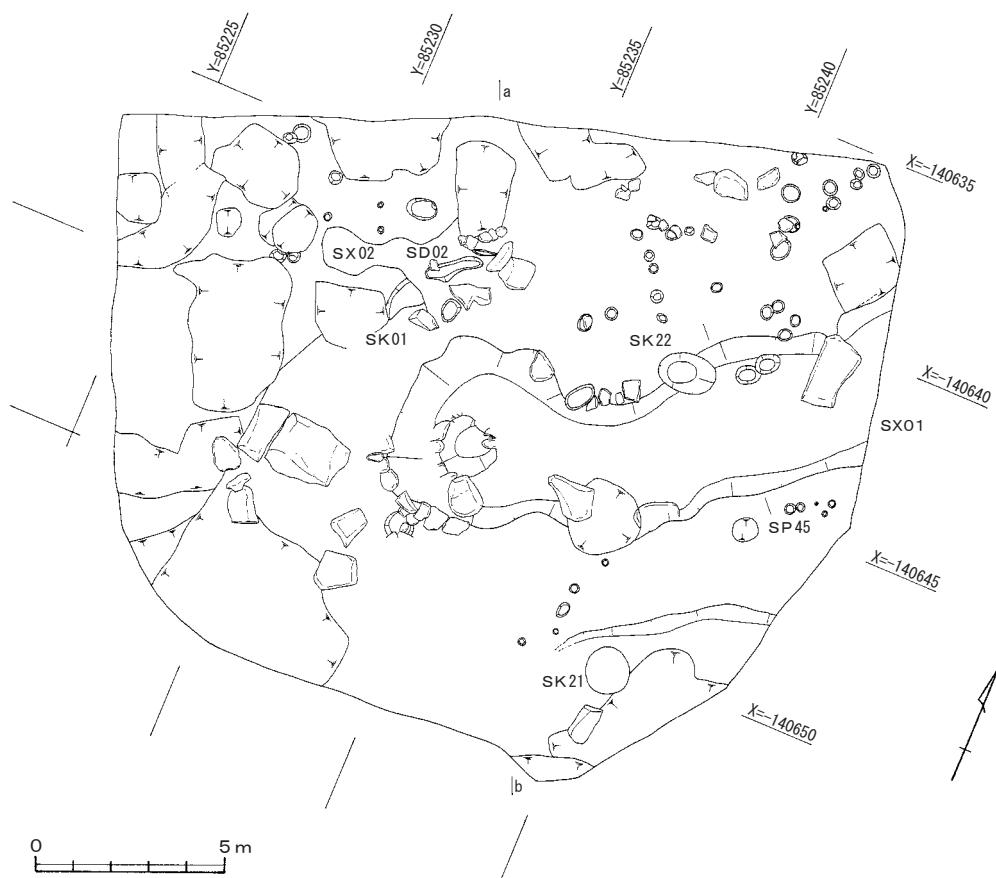


fig.47 調査区平面図



fig.48 I 区全景



fig.49 II 区全景

3. まとめ

今回の調査においては、弥生時代後期～古墳時代前期にかけての遺構 S K22、S X01を確認し、出土遺物も多く当該時期の良好な資料を得ることができた。

また、II区において検出した掘立柱建物の一部と思われるピットからは時期を特定する遺物は出土しなかった。周辺の調査においては奈良時代～平安時代前期の建物が確認されており、今後近隣の調査成果を待って時期や性格などについてさらに検討を加えたい。

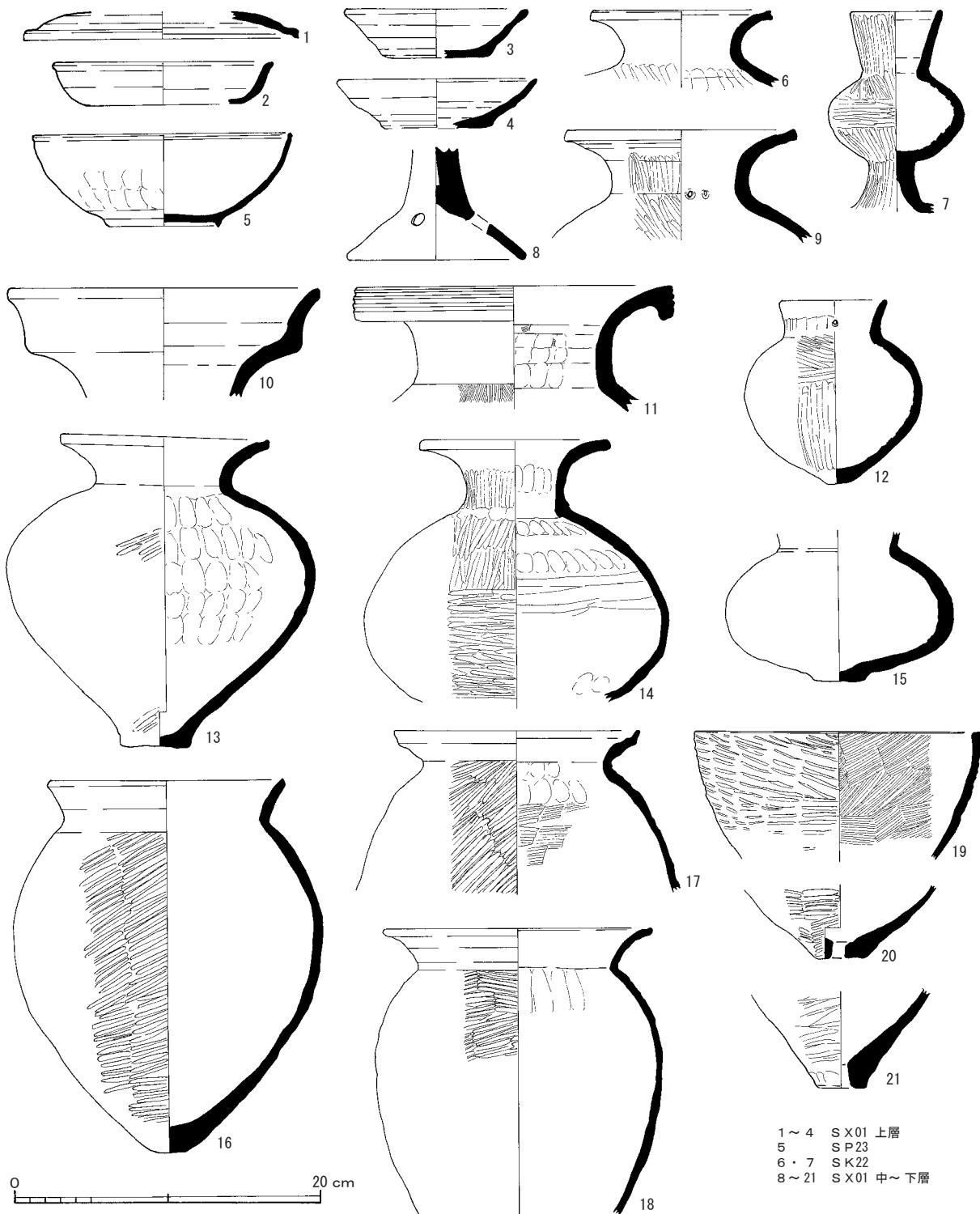


fig. 50 出土遺物実測図

6. 郡家遺跡 第86次調査

1. はじめに

郡家遺跡は、石屋川や住吉川などの中小河川によって形成された扇状地上に立地する遺跡であり、南北900m、東西500mの範囲に広がっているものと考えられている。

昭和53年度に第1次調査が実施されて以来90回近い発掘調査が実施されており、弥生時代～中世の集落遺跡として知られている。古墳時代においては煙道をもつ竪穴建物や韓式系土器が検出されるなど渡来人との関係が考えられ、また奈良時代においては、大型の柱掘形をもつ掘立柱建物の存在から「菟原郡衙」の推定地としても考えられている。



fig.51 調査地位置図 1 : 2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、共同住宅建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。調査は便宜上、A-1、A-2、B区の3地区に分割して実施した。調査の結果、3面の遺構面を確認した。

基本層序

標高約29.0m付近で第1包含層上面を検出した。第1包含層の直下の第2包含層上面が第1遺構面である。第2包含層の直下の第3包含層上面が第2遺構面である。第3包含層の直下には黄色系の砂が堆積しており、わずかに弥生土器を含む。この層の上面で第3遺構面を検出した。さらにその下層で地山面である黄色粘土上面を検出した。

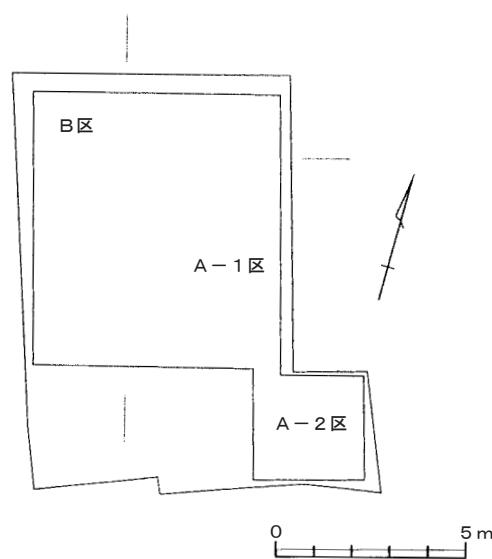


fig.52 調査区地区割図

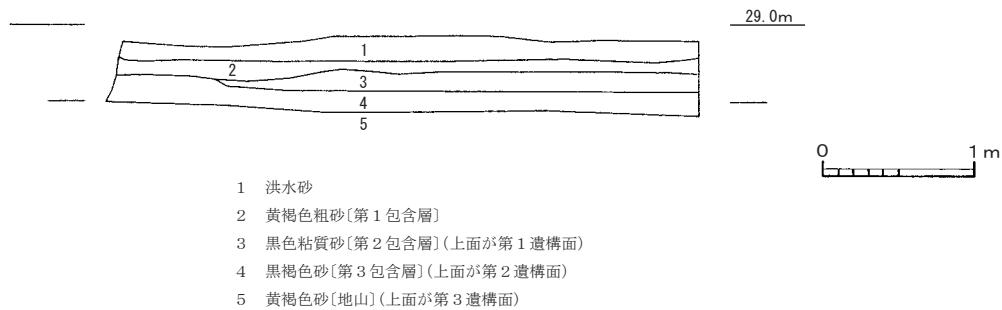


fig.53 A-2区北壁土層断面図



fig.54

第1遺構面
平面図

第1遺構面

古墳時代後期の遺構面と考えられる。竪穴建物1棟、掘立柱建物1棟、ピットを検出した。

SB101

調査区北東部でSB101を検出した。東側が調査区外に延びているため本来の規模や形状については不明な点もあるが、平面形は方形を呈するものと考えられる。壁際が床面よりも一段高い構造となっている。

SH101

SB101のすぐ西側で大型の掘立柱建物SH101を検出した。調査区外に延びているため正確な規模は不明であるが、4間×5間以上の南北棟の総柱の掘立柱建物である。柱穴の規模は総じて大きく、直径100cm前後、深さは80cm前後を測る。主軸方向はN-34°—Eを指向する。柱穴内の出土遺物から判断して、6世紀代の建物と考えられる。



fig.55 A-1区SB101 全景



fig.56 B区SB101 全景

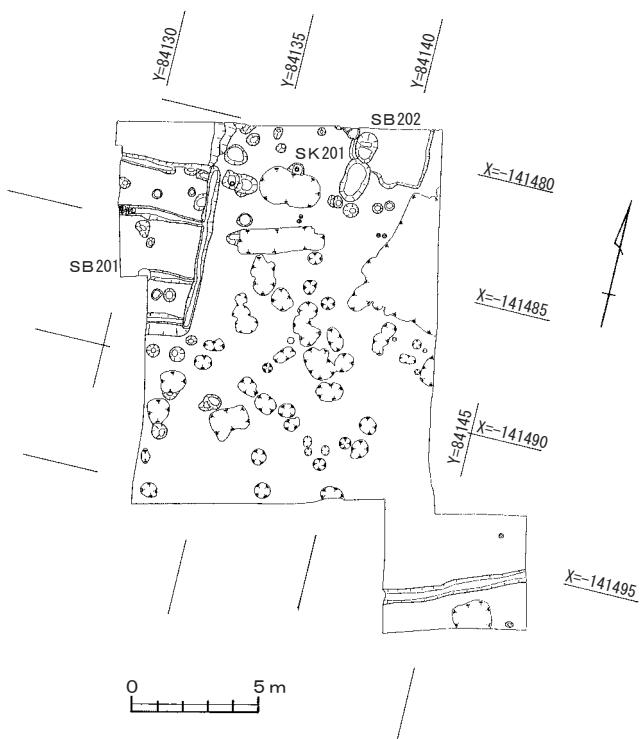


fig.57

第2遺構面
平面図

第2遺構面

古墳時代中期の遺構面と考えられる。竪穴建物2棟、溝、ピットなどを検出している。

S B201

S B201は、6.75m×3.3m以上を測る竪穴建物であるが、調査区外に延びるため本来の形状や規模は不明である。周囲に壁板を固定した可能性も考えられる痕跡を、井桁状の溝状に確認したほか、床面を3分割するように東西方向の溝が床面に掘られていた。

以上の検出状況から推測される建物の構造については、以下のように考えられる。

まず、床面を3分割する溝については、石野博信氏の指摘によれば、「転ばし根太」と呼ばれる根太の痕跡の可能性が考えられる。このように考えた場合、床板をもつ構造を考えることができる。

また別の可能性として、床面の溝が排水施設である可能性も考えられる。

さらに床面の溝の別の用途として、カマドに直結する、オンドル様の施設の煙道としての可能性も考えられるが、今回確認した範囲内ではカマドは検出していないため、現段階では確定できない。

以上のそれぞれの可能性については、現段階では断定できないが、以上のような推論がなりたつ場合、通常の堅穴建物とは異なる構造や工法をもつ建物となり、朝鮮半島からの技術の伝播も考慮にいれた考察が必要となってこよう。

この場合、韓式系土器が当遺跡における既往の調査や、また今回の調査においても遺物包含層から出土しているため、両者の関連が予想されよう。

出土遺物から判断して、5世紀代の建物と考えられる。

S B202

S B202は、調査区北東隅で検出した。平面形が方形状を呈し、北側は調査区外に延びている。堅穴建物の可能性が考えられるが、柱穴、周壁溝とともに検出していない。

第3遺構面

弥生時代後期ないし古墳時代前期と考えられる遺構面である。調査区南端部で落ち込みを検出したが、調査区内で確認できた範囲はごくわずかであり、出土遺物も遺構の時期を示すものはない。上位に位置する第3包含層出土遺物は弥生時代後期ないし古墳時代前期のものと考えられることから、当遺構面の時期も同様の時期と考えられる。

3.まとめ

今回の調査では、3面の遺構面を確認し、特に第1遺構面で検出した古墳時代後期の大型掘立柱建物や、第2遺構面で検出した堅穴建物が重要と考えられる。

大型掘立柱建物については、当遺跡においてはこれまでにも確認されており、今回検出したS H201はこれまでに確認されていたものと同様の主軸方向を指向しており、今回の調査地一帯に主軸方向を同じくする大型建物が建ち並んでいた可能性が考えられるようになった。このように想定した場合、これらの建物の性格について、居館、倉庫などさまざまな想定も可能となるが、6世紀段階の当遺跡の状況を考える際の貴重な資料といえよう。

第2遺構面で検出した堅穴建物S B201については、通常の堅穴建物と異なる特殊性が認められ、遺物包含層から韓式系土器が出土していることなどを考え合わせれば、渡来系の要素を含んだ遺構と考えることもできよう。

以上のように、今回の調査においては、古墳時代の郡家遺跡を考えるうえでの貴重な成果を得たものといえよう。



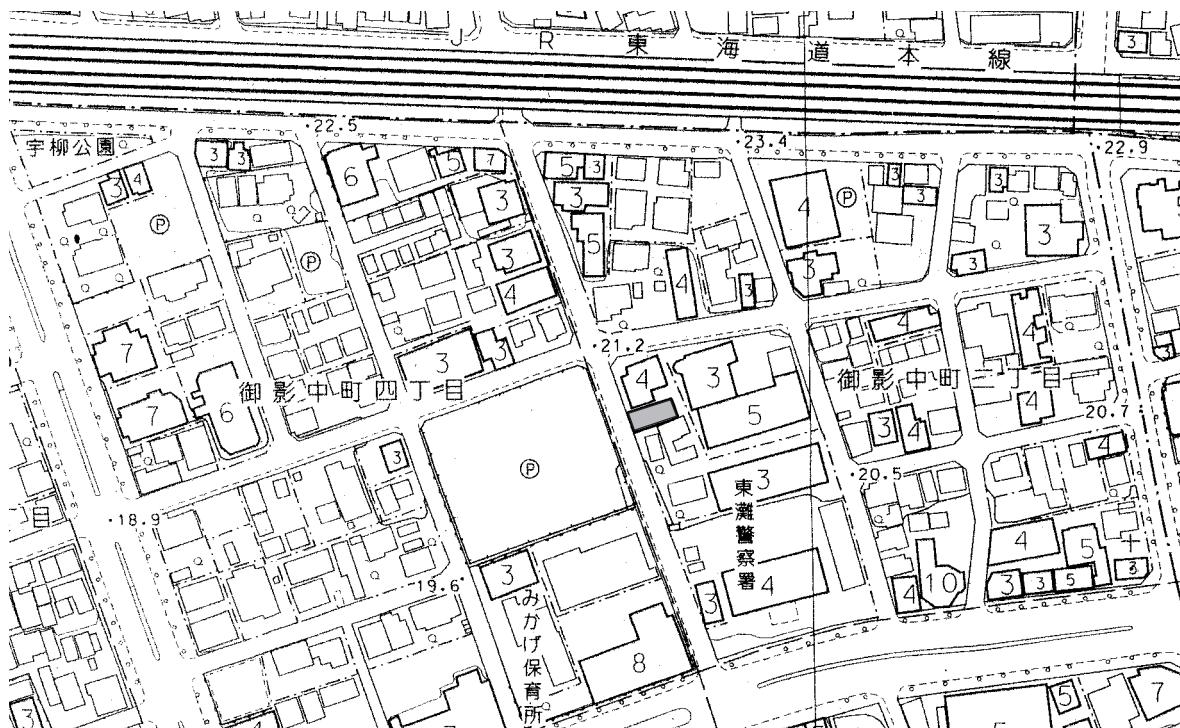
fig.58 B区SB201 全景

7. 郡家遺跡 第87次調査

1. はじめに

郡家遺跡は、石屋川や住吉川などの中小河川によって形成された扇状地上に立地する遺跡であり、南北900m、東西500mの範囲に広がっているものと考えられている。

昭和53年度に第1次調査が実施されて以来90回近い発掘調査が実施されており、今回の調査地周辺における既往の調査でも、古墳時代の竪穴建物、掘立柱建物や、勾玉や臼玉などの石製模造品による祭祀遺構などが確認されている。



2. 調査の概要

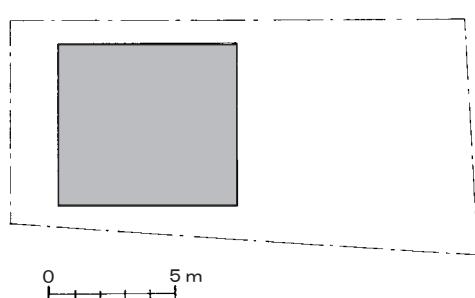
今回の調査は、個人住宅建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。調査の結果、2面の遺構面を確認し、各遺構面において遺構を検出した。

基本層序

現地表下約60cmまで盛土、同約80cmまで旧耕土が堆積している。同約90cmにおいて洪水砂と考えられる茶灰色粗砂（層厚約40cm）を検出し、その上面で第1遺構面を確認した。洪水砂の下層、現地表下約130cmで、古墳時代後期の遺物包含層である灰黒色シルト質細砂上面を検出した。さらにその下層の茶灰黒色細砂上面で第2遺構面を確認した。

第1遺構面

古墳時代後期の遺構面と考えられる。柱穴30基、土坑3基、落ち込み2基、溝1条を検出した。



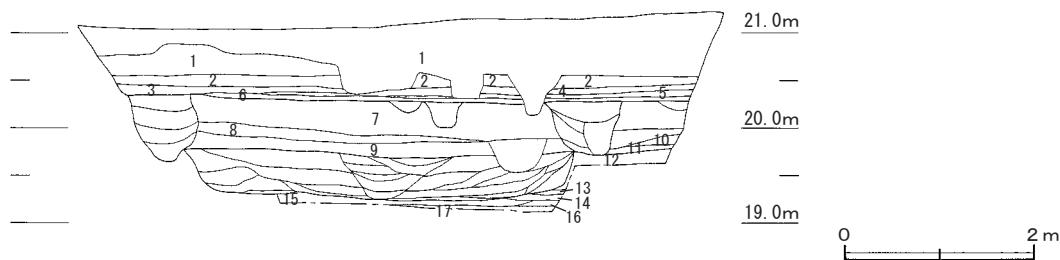


fig.61 調査区東壁土層断面図

柱穴

掘形の直径20~40cm、深さ20~40cmを測るもので、柱の直径は土層断面の観察からは約20cm程度と考えられるが、多くのものは柱が抜き取られており柱痕は確認されなかった。埋土は、灰色及び茶灰色のシルト質細砂のものが多い。柱穴からはわずかではあるが須恵器、土師器の碎片が出土している。

土坑

直径80~90cm、深さ40cmを測る。いずれも上層には灰褐色シルト質細砂、下層には暗灰色シルト質細砂が堆積している。須恵器、土師器が出土している。

落ち込み

調査区西部で落ち込みを2基検出しているが、いずれも調査区外に延びているため、本来の規模や形状は不明である。このうちSX101は、その形状から竪穴建物の可能性が考えられる。

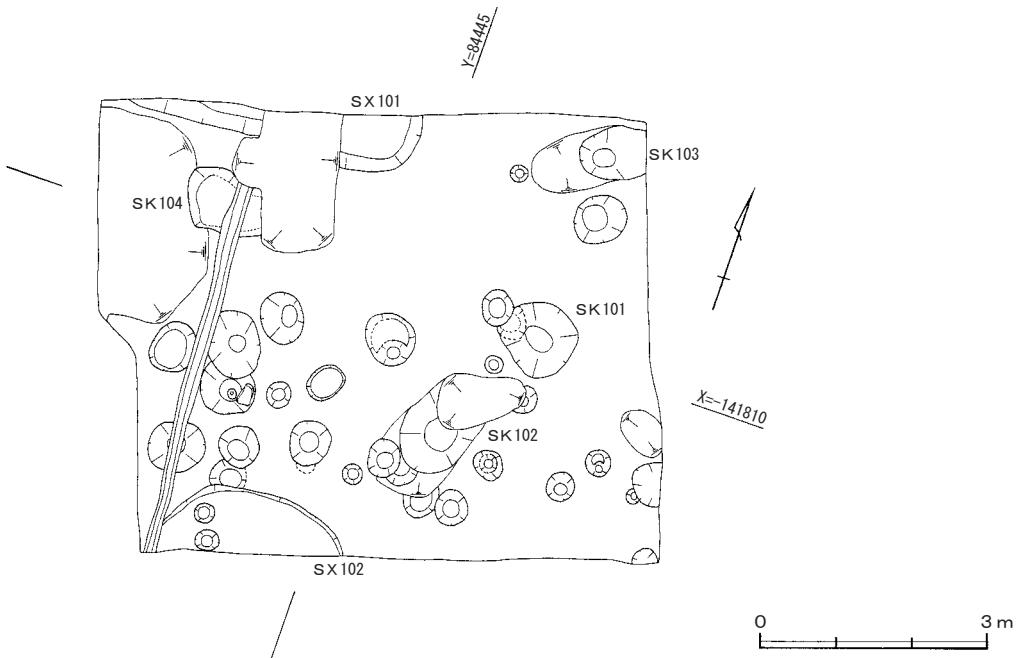


fig.62 第1遺構面平面図

第2遺構面

古墳時代中期の遺構面と考えられる。竪穴建物1棟、柱穴11基、土坑10基、溝1条を検出している。

竪穴建物

S B201は、竪穴建物の約半分を検出したものであり、検出した規模は、南北約4.2m、東西3.6m、深さ60cmを測る。北側にカマドを造り付け、土師器高壺を倒置して支脚としている。内部でピットを1基検出したが、深さが10cm弱しか遺存しておらず、主柱穴と断定できない。周壁溝は検出していない。埋土の上層からは須恵器、土師器が、また下層からは土師器が出土している。

土坑

10基検出している。調査区外に延びるものもあるが、概ね橢円形の平面形を呈する。直径（長径）0.8～1.2mを測る。浅いものもあるが、SK201は深さ40cm、SK202は深さ70cmを測る。SK202から須恵器壺片が出土している。また、第2遺構面精査中に滑石製勾玉2点が出土しており、祭祀遺構が存在した可能性が考えられる。

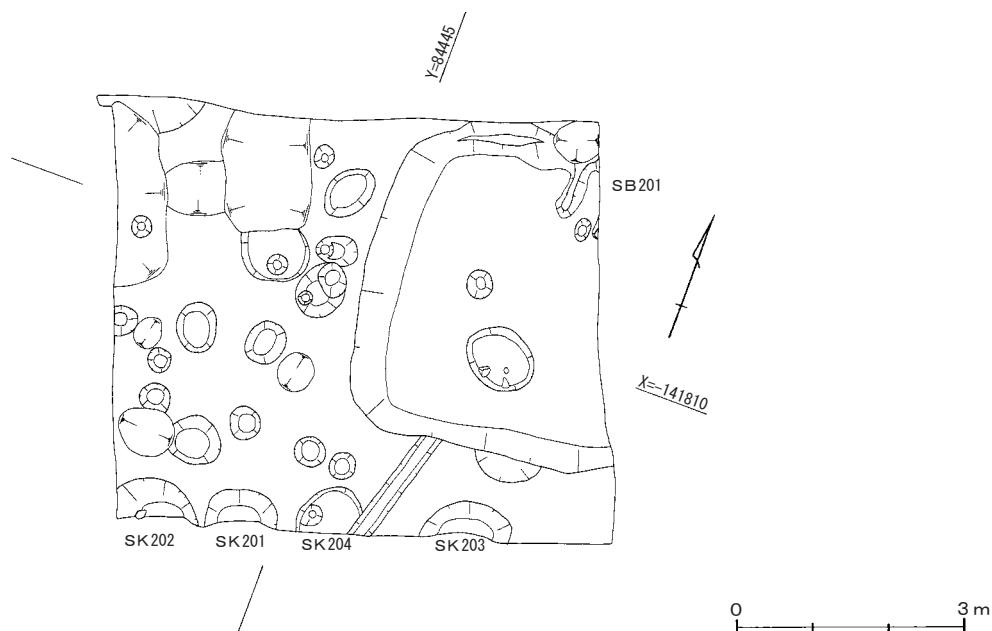


fig.63 第2遺構面平面図



fig.64 SB201 全景

fig.65 SB201 カマド遺物出土状況

3. まとめ

今回の調査では、周辺の既往の調査成果と同様に、古墳時代の集落域を考えるうえでの貴重な成果を得ることができた。

特に竪穴建物については、周壁溝を伴わないもので、今回の調査地周辺における既往の調査において確認されているものと同様の状況を示している。今回の調査地の南西側約200mの地点で実施された第83次調査では周壁溝を伴う竪穴建物が多く確認されていることから判断すれば、周壁溝を伴わないタイプの竪穴建物は、今回の調査地及び近隣地域における竪穴建物の特徴として捉えることができるようである。

また第1遺構面で確認された柱穴については、今回の調査区内では掘立柱建物としてのまとまりを復元するには至らなかったが、今後周辺地での調査成果と合わせて検討を加える必要があるものと考えられる。



fig.66 第2遺構面全景

8. 篠原遺跡 第30次調査

1. はじめに

篠原遺跡は、灘区篠原本町、篠原中町、篠原北町一帯に広がる遺跡で、縄文時代～古墳時代、中世の集落遺跡として知られている。

これまでの調査では、縄文時代中期～晚期の住居跡や土器棺などの遺構や、ややまとまった量の土器が出土している。また弥生時代においては、後期の竪穴建物や小形彷製鏡などが検出されている。

なお今回の調査地については、同一敷地内のうち今回の調査対象部分の西側の部分については昭和58年及び平成2年に発掘調査が実施されており、縄文時代晚期中葉の土坑墓、土器棺、集石遺構、大洞式土器の注口土器、遮光器土偶が検出されており、遮光器土偶の分布の西限を示すものと考えられている。また弥生時代後半の竪穴建物、集石遺構などの遺構も検出されている。



fig.67 調査地位置図 1 : 2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、共同住宅建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。

基本層序

今回の調査地は南側に下がる傾斜地に位置している。上層より、盛土、縄文時代晚期～古墳時代の遺物を含む遺物包含層（第1包含層）、縄文時代晚期の遺物のみを含む遺物包含層（第2、3包含層）が堆積しており、その下層の、標高T.P. 55.5～56.0m付近で縄文時代晚期の遺構面を検出した。遺構面基盤層の下層は地山面となっている。

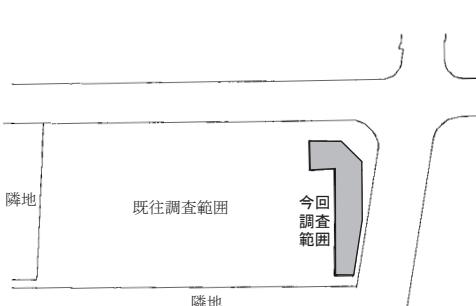


fig.68 調査範囲位置図

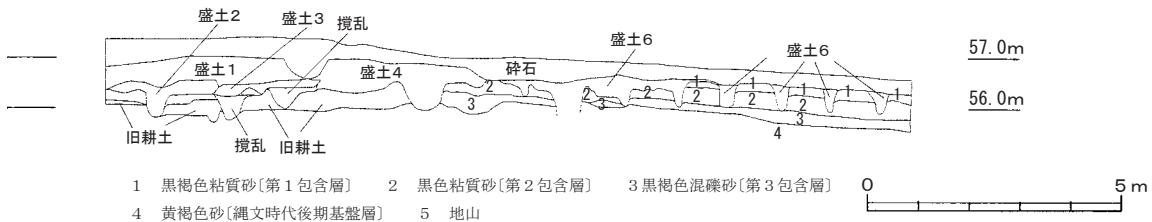


fig.69 調査区東壁土層断面図

ただし、遺構面及び遺物包含層が遺存していたのは調査区南側の約12m²に止まっており、その他の部分は搅乱によって地山層しか確認できなかつたかあるいは搅乱によって全く遺跡が失われていた。調査の結果、ピット13基、落ち込み1ヶ所を確認した。

ピット

遺構面が遺存する部分で6基、遺構面基盤層まで削平されて地山面で検出したのが7基である。削平の影響もあり、調査区内で建物としてのまとまりは見出せない。直径20~60cm、深さ5~20cmを測る。

S X01

調査区北端で確認した落ち込みで、搅乱によって南部が失われており本来の形状や規模は不明である。確認できた規模は、長径2.0m、短径0.8m、深さ50cmを測る。上位の遺物包含層から古墳時代の土器が出土しており、遺構の時期も当該時期のものである可能性も考えられるが、詳細は不明である。

3. まとめ

今回の調査においてはピットや落ち込みを検出したが、搅乱の影響を強く受けていることなどから建物としてのまとまりや、遺構の性格について不明な点が多い。ただし、遺物包含層及び遺構面基盤層が遺存する部分では、良好な状態で遺物が出土している。遺物包含層は前述のように3層に分層が可能であり、各層ごとに縄文時代晚期の土器の型式差を把握できる可能性を有している。今後出土遺物の整理作業のなかで検討を加えたい。

以上のように、今回の調査は限定された範囲において実施したものであるが、篠原遺跡を考える上で貴重な資料を追加できたものといえよう。

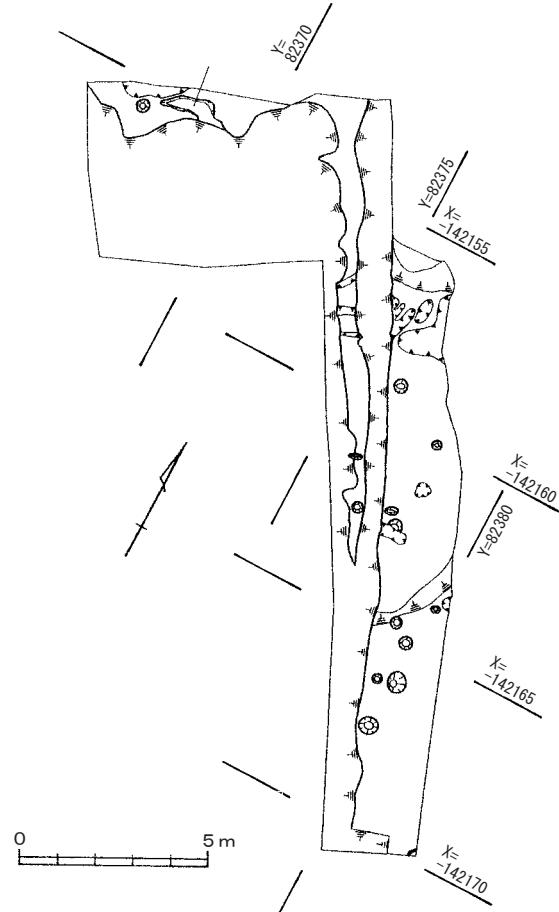


fig.70
調査区平面図

9. 二宮東遺跡 第4次調査

1. はじめに

二宮東遺跡は、中央区二宮町1丁目に所在し、旧生田川によって形成された河岸段丘上に立地する縄文時代～古墳時代の集落遺跡である。これまでに発掘調査が実施されたのは3回であり、未だ遺跡の全容を明らかにするまでには至っていないが、第3次調査においては縄文時代早期の土器がまとまって出土しており、当該時期の良好な資料を提供している。

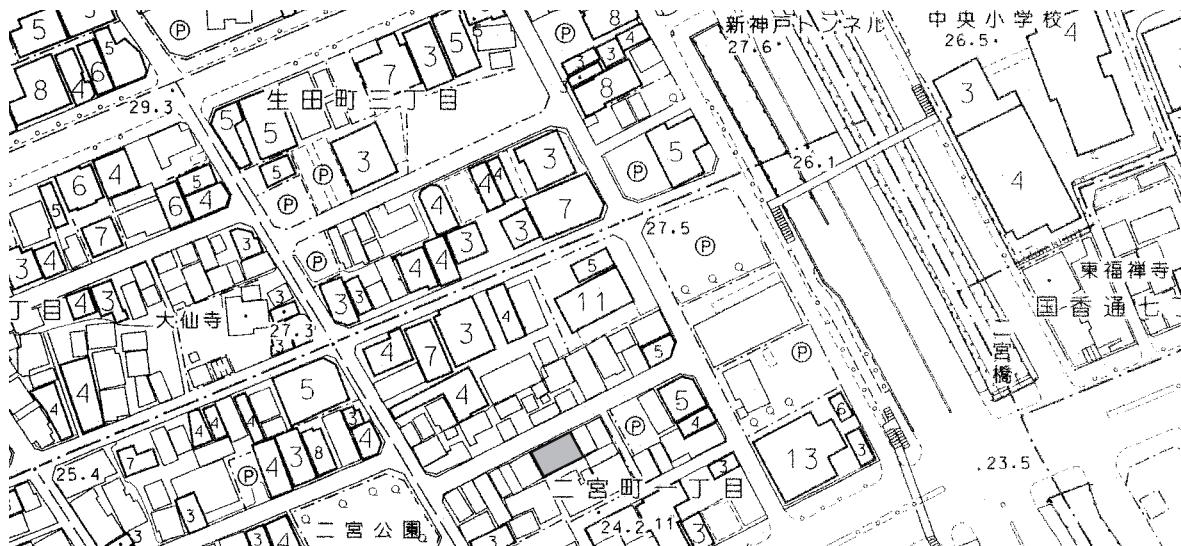


fig. 71 調査地位置図 1 : 2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、共同住宅建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。

基本層序

近世、近代の盛土の下層、標高T.P. 23.9m付近で、黄褐色細砂上面において古墳時代の遺構面を検出した。その下層には粗砂質の堆積層が存在し、摩滅した縄文土器が出土している（縄文第1層）。さらに下層、標高T.P. 21.5～22.1m付近で、縄文時代早期の遺物包含層を4層確認した（縄文第2～5層）。以下は、無遺物層が堆積していた。

縄文時代早期の各遺物包含層の上面ではそれぞれ遺構検出に努めたが、遺構は検出していない。

古墳時代後期

平面形が円形あるいは不整形を呈する落ち込みを3基検出した。

S X101

直径約1m、深さ約10cmを測る。平面形が不整円形を呈する土坑状の落ち込みである。

S X102

長径約3m、短径1.5m、深さ約5cmを測る。平面形が不整橢円形を呈する落ち込みである。

S X103

長径約4.5m、短径1.5m、深さ約20cmを測る。平面形が不整長方形を呈する落ち込みである。極少量ではあるが、6世紀代の須恵器、土師器が出土しており、当該時期の遺構と考えられる。

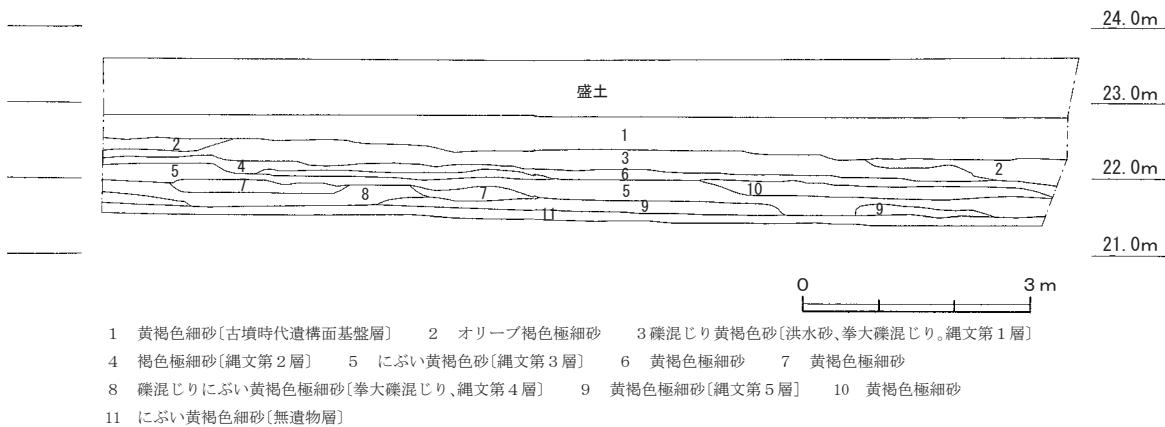


fig.72 調査区中央土層断面図

縄文時代早期

縄文第2～5層については、西半区、東半区を各6分割し、土器の集中状況を確認しながら掘削を実施した。西半区、東半区ともに南端の調査区ほど土器が多く出土する傾向がみられたが、その要因については現段階では断定できていない。

縄文第2～5層からは、大川式～神並上層式の土器、サヌカイト製打製石器が出土している。

3. まとめ

縄文時代早期の土器を含む縄文第2～5層については、今回は面的な遺構の把握には至らなかったものの、各遺物包含層に含まれる遺物量から考えると各層の上面がそれぞれ遺構面となる可能性が高いものと考えられる。各層とも南側の調査区でより多くの土器の出土がみられ、何らかの生活痕跡と捉えることも可能かもしれないが、断定には至っていない。

大川式～神並上層式という、
神戸市域において資料数が限
られる縄文時代早期の土器が
今回の調査で一定量出土し、
大変貴重な資料を得ることが
できたといえる。また、近隣
に位置する熊内遺跡、雲井遺
跡においても同時期の遺物が
出土しており、この3遺跡が
所在する地域において当該時
期の遺物が集中して出土する
ことの意味について、今後さ
らに総合的に考えていく必要
があろう。

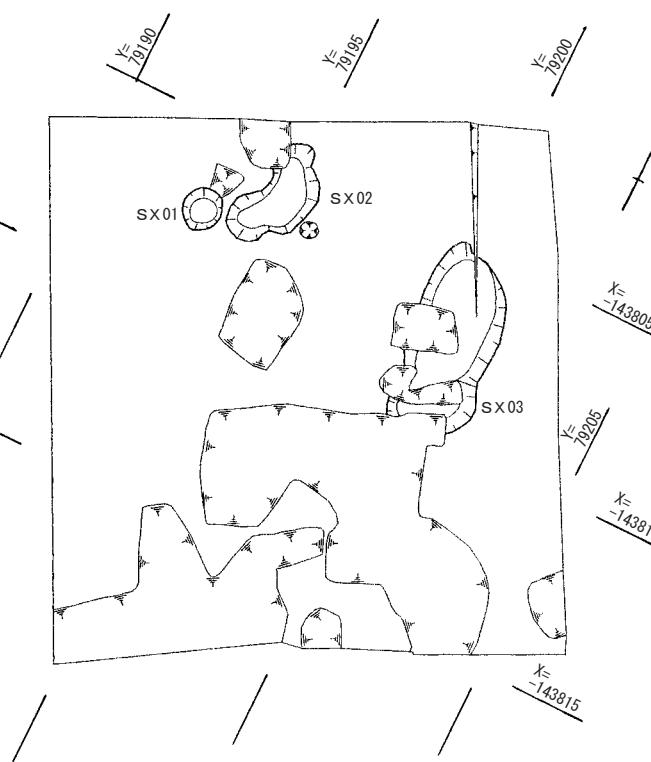


fig.73
古墳時代遺構平面図

10. 雲井遺跡 第34次調査

1. はじめに

雲井遺跡は、中央区琴ノ緒町、旭通、雲井通一帯に広がる、縄文時代～古墳時代の集落遺跡である。遺跡は、旧生田川の左岸、扇状地の扇端部に立地している。

これまでに30回以上の発掘調査が実施されており、縄文時代早期の土器や、弥生時代前期～中期の方形周溝墓、古墳時代後期の堅穴建物などが検出されている。



2. 調査の概要

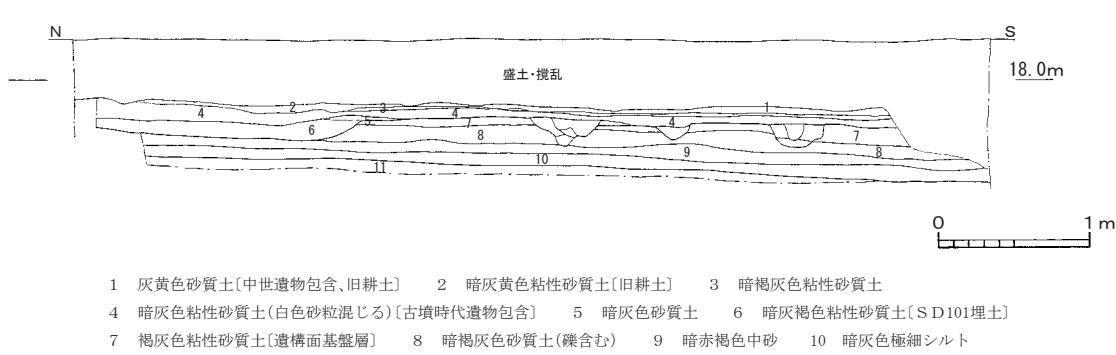
今回の調査は、共同住宅建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。

調査は、調査区内で残土置場を確保するため、東・西に2分割し、西側より調査を開始した。

基本層序

現地表下80～100cmまでは盛土・搅乱が存在し、その下層に旧耕土が堆積している。さらに下層に、層厚15～30cmを測る、古墳時代の遺物包含層である暗灰色粘性砂質土が存在し、その下面が遺構面である。

調査の結果、堅穴建物2棟、掘立柱建物6棟、土坑2基、溝2条、不明遺構1ヶ所を同一面で検出した。しかし切り合い関係などから判断して、検出した遺構間には時期差が認められるため、fig. 76・78に第1遺構面と第2遺構面に分離して図示した。



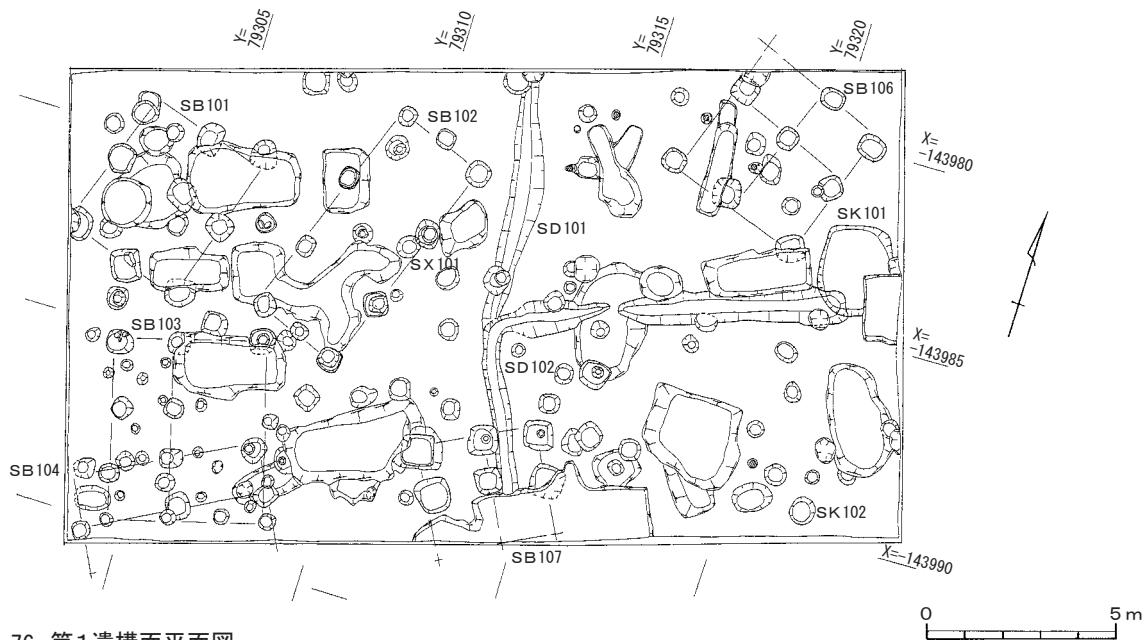


fig.76 第1遺構面平面図

第1遺構面

S B101

調査区北西部で検出した、東西3.0m、南北3.6m、東西2間以上×南北2間の総柱の掘立柱建物である。棟方向は明らかではないが、南北柱方向でN-18°-Eを指向する。柱穴間の距離は、東西方向は1.5mで等間隔、南北方向は1.8mで等間隔である。柱穴の掘形は、一辺70~90cmの平面形が方形を呈し、深さ35cm前後を測る。

S B102

S B101の東側で検出した、東西2.6m、南北6.4m、東西2間×南北4間の南北棟の掘立柱建物である。建物の主軸方向はN-18°-Eを指向する。柱穴間の距離は、東西方向は1.3mで等間隔、南北方向は2.1mで等間隔である。柱穴の掘形は、一辺65cmの平面形が方形を呈し、深さは梁柱で30cm、桁柱で60cm前後を測る。

S B103

調査区南西部で検出した東西4.1m以上、南北4.7m以上、東西3間以上、南北3間以上の掘立柱建物である。棟方向は明らかではないが、南北柱方向でN-14°-Wを指向する。柱穴間の距離は、東西方向は、西から1.5m、1.3m、1.3m、南北方向は、北から1.7m、1.7m、1.3mで、西側に庇を設ける片庇の建物である可能性も考えられる。柱穴の掘形は、一辺40~50cmの平面形が円形を呈し、深さは30cm前後を測る。柱穴の切り合い関係から、S B104より後出の建物と考えられる。柱穴掘形から綠釉陶器が出土している。

S B104

調査区南西端で検出した東西5.0m以上、南北1.5m以上、東西2間以上、南北1間以上の掘立柱建物である。棟方向は明らかではないが、南北柱方向でN-29°-Wを指向する。柱穴間の距離は、東西方向は、西から2.5mで等間隔、南北方向は、北から1.5mで等間隔、北側に庇を設ける建物である可能性も考えられる。柱穴の掘形は、一辺60cmの平面形が方形を呈し、深さは40cm前後を測る。柱穴の切り合い関係から、S B103より前出の建物と考えられる。

S B106

調査区北東部で検出した東西3.8m以上、南北3.8m以上、東西2間以上、南北2間以上の総柱の掘立柱建物である。棟方向は明らかではないが、南北柱方向でN-18°-Eを指向する。柱穴間の距離は、東西方向は、西から1.5m、2.3m、南北方向は、北から1.5m、2.3mである。柱穴の掘形は、一辺60~70cmの平面形が方形を呈し、深さは南側柱で50cm前後、北側柱で30cm前後を測る。

S B107

調査区中央部南端で検出した東西3.0m以上、南北1.2m以上、東西2間以上、南北1間以上の総柱の掘立柱建物である。棟方向は明らかではないが、南北柱方向でN-29°-Wを指向する。柱穴間の距離は、東西方向は、西から1.8m、1.5m、南北方向は、北から1.2mである。柱穴の掘形は、一辺80~90cmの平面形が方形を呈し、深さは南側柱で30~50cm前後を測る。

S K101

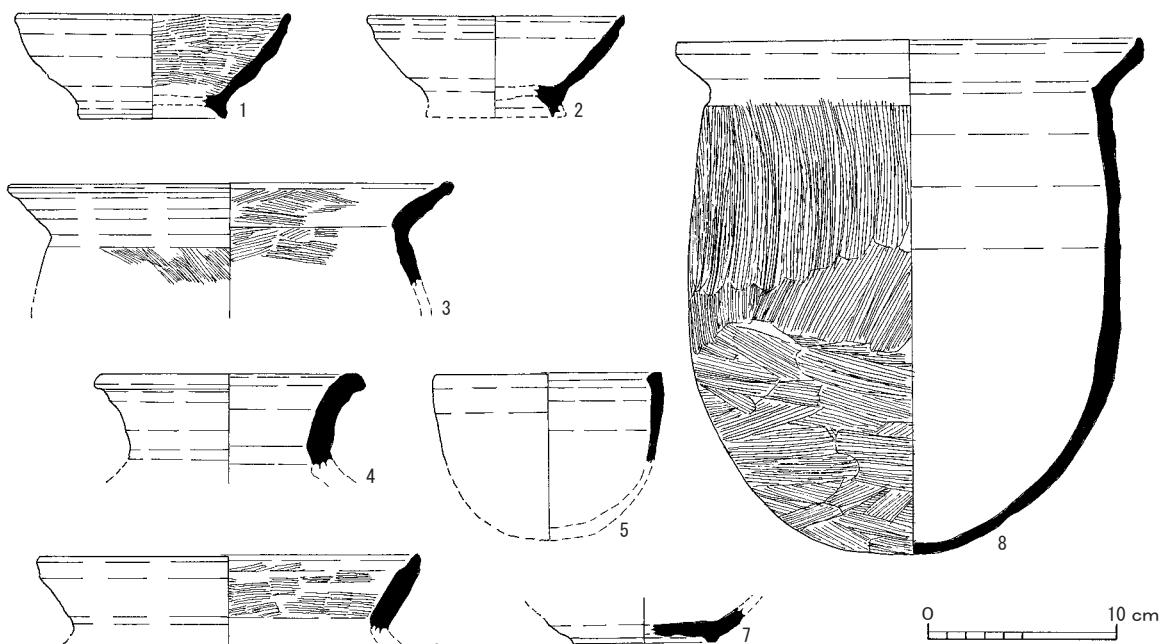
調査区東端中央部で検出した平面形が隅丸方形を呈する土坑である。長径2.5m、短径2.0m、深さ20cm前後を測る。断面形は皿状を呈している。土師器が出土している。

S K102

調査区東部中央南辺沿いで検出した平面形が橢円形を呈する土坑である。長径1.05m、短径0.75m、深さ40cm前後を測る。断面形は逆台形を呈している。埋土上層から弥生土器、土師器が出土している。土坑底部直上で河原石が出土している。

S D101

調査区中央部を南北方向に走る溝で、幅40~90cm、深さ24cm前後を測る。断面形はU字状で、南端部はS D102によって削平あるいは掘り込まれ、不明である。土師器が出土している。



1・2 土師器碗[SB103] 3 土師器壺[SB101] 4 須恵器壺[SB107]
5 土師器碗[SD102] 6 土師器壺[SD101] 7 須恵器碗[pit]
8 土師器壺[SX101]

fig.77 第1遺構面出土遺物実測図

S D102

調査区南東部においてほぼ直角に曲がる溝で、幅80cm前後、深さ30cm前後を測る。断面形はU字状で、南端部は搅乱によって失われている。また東端はS K101によって削平されている。須恵器、土師器が出土している。

S X101

第2遺構面精査中に、調査区中央、第2遺構面SB102西側に接して土師器甕を埋納した、平面形が橢円形を呈する土坑を検出した。長径80cm、短径60cm、深さ18cmを測る。土坑の西よりに、口縁部を北向きにして、やや傾斜させて土師器甕が埋置されていた。甕の底部は土坑の底部に接し、口縁部を閉塞する蓋状のものは検出していない。甕の内部に充填した土砂から、皇朝十二銭の饒益神宝（初鑄859年）6枚が出土している。

第2遺構面

SB201

調査区西部北辺沿いで検出した、平面形が方形を呈する堅穴建物である。北側は調査区外に延びているため本来の規模は不明であるが、調査区内での規模は、5.0×4.4m以上、深さ18cmを測る。床面は基盤層である暗灰色砂礫土上に厚さ22cm前後の暗灰褐色粘性砂質土の敷土を施している。この床面上で南辺沿いに3基、西辺沿いに1基の柱穴を検出したが、東辺沿いでは検出していない。いずれの柱穴も一辺50cm前後の平面形が方形を呈する掘形をもち、深さ40～50cmを測るが、南東隅、南西隅で検出した柱穴は比較的深い。いずれも柱痕は明瞭に残る。幅16～30cm、深さ16cmを測る周壁溝を検出しており、土師器が出土している。

建物から西辺の壁に接して須恵器坏身が出土したほか、調査区北辺沿いに焼土とともに土師器甕、甕が破碎された状態で北側から流れ込んでいた。以上の出土状況から、北辺にカマドが造り付けられていた可能性が考えられる。

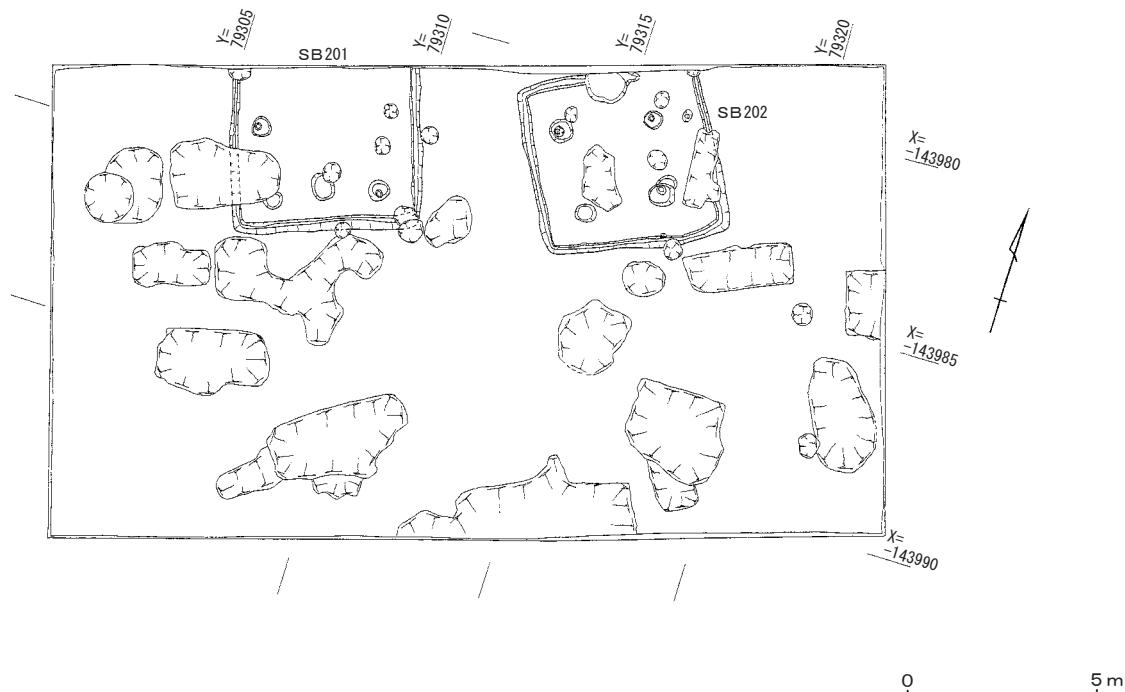


fig. 78 第2遺構面平面図

S B202

調査区東部北辺沿いで検出した、平面形が方形を呈する堅穴建物である。北側は調査区外に延びているため本来の規模は不明であるが、調査区内での規模は、 $5.0 \times 4.7\text{m}$ 、深さ18cmを測る。床面は、基盤層である暗灰色砂礫土上に厚さ8cm前後の暗灰褐色粘性砂質土の敷土を施している。床面上で南辺沿いに4基の柱穴を検出した。いずれの柱穴も一辺50cm前後の平面形が方形を呈する掘形をもち、深さ40~50cmを測る。柱穴間の距離は、2.2mを測る。幅16~30cm、深さ16cmを測る周壁溝を検出しており、土師器が出土している。北辺沿いに焼土と焼粘土が互層になって堆積しており、その直下で径 $1.1 \times 0.7\text{m}$ 、深さ20cm前後の土坑を検出した。土坑内には焼土と灰層が堆積しており、カマドの灰たまりと考えられる。また土坑の東北沿いには灰白色の精良な粘土がみられ、カマド裾部の基部が残存している状況を示しているものと考えられる。

建物から、西辺の壁に接して須恵器坏身が出土した。カマドの灰たまりの南側床面直上で、鉄鏃1点、須恵器坏身、土師器が出土している。

3. まとめ

今回の調査地は、雲井遺跡の範囲の中でも東辺部にあたる地点であり、今回の調査地の南約100mの地点で実施された第10次調査成果と同様に、堅穴建物2棟と掘立柱建物6棟を検出した。

掘立柱建物は、建物の主軸方向から概ね3つのグループに分別できる。N-18°-Eを指向するS B 101、102、106、N-29°-Wを指向するS B 104、107、そしてN-14°-Wを指向するS B 103である。以上のうち、S B 103は柱穴の掘形の平面形が小形の円形を呈し、綠釉陶器が出土していることから平安時代前半まで降る時期のものと判断できる。また切り合い関係からS B 103とS B 104の間に新旧の関係が認められ、S B 104、107のグループがS B 103に先行する時期であることは明らかであるが、出土遺物の整理作業が未了のため掘立柱建物の詳細な時期決定や前後関係の把握は今後の課題である。

S X101については、出土した土師器甕の形態的特徴から9世紀後半以降のものと考えられ、錢貨の初鋳年が859年と近接した年代が想定されるが、今後整理作業の中でより厳密な土器の検討と時期比定が必要で、埋甕の歴史的性格を含めて今後検討する必要があろう。

堅穴建物は出土遺物から判断して6世紀後半に時期比定が可能であるが、第10次調査で6世紀中葉を前後する時期の建物が検出されており、雲井遺跡全般をみた場合に、古墳時代の集落は6世紀を通じて展開していたものと考えられる。

今回の調査地の位置する雲井遺跡の中でも東よりの地区は、より西側に位置する当遺跡の中心部（主要部）に比して新しい時期の遺跡が展開する傾向が認められる。今後地形分析を含めて建物群としても検討を行っていく必要があるものと考えられる。

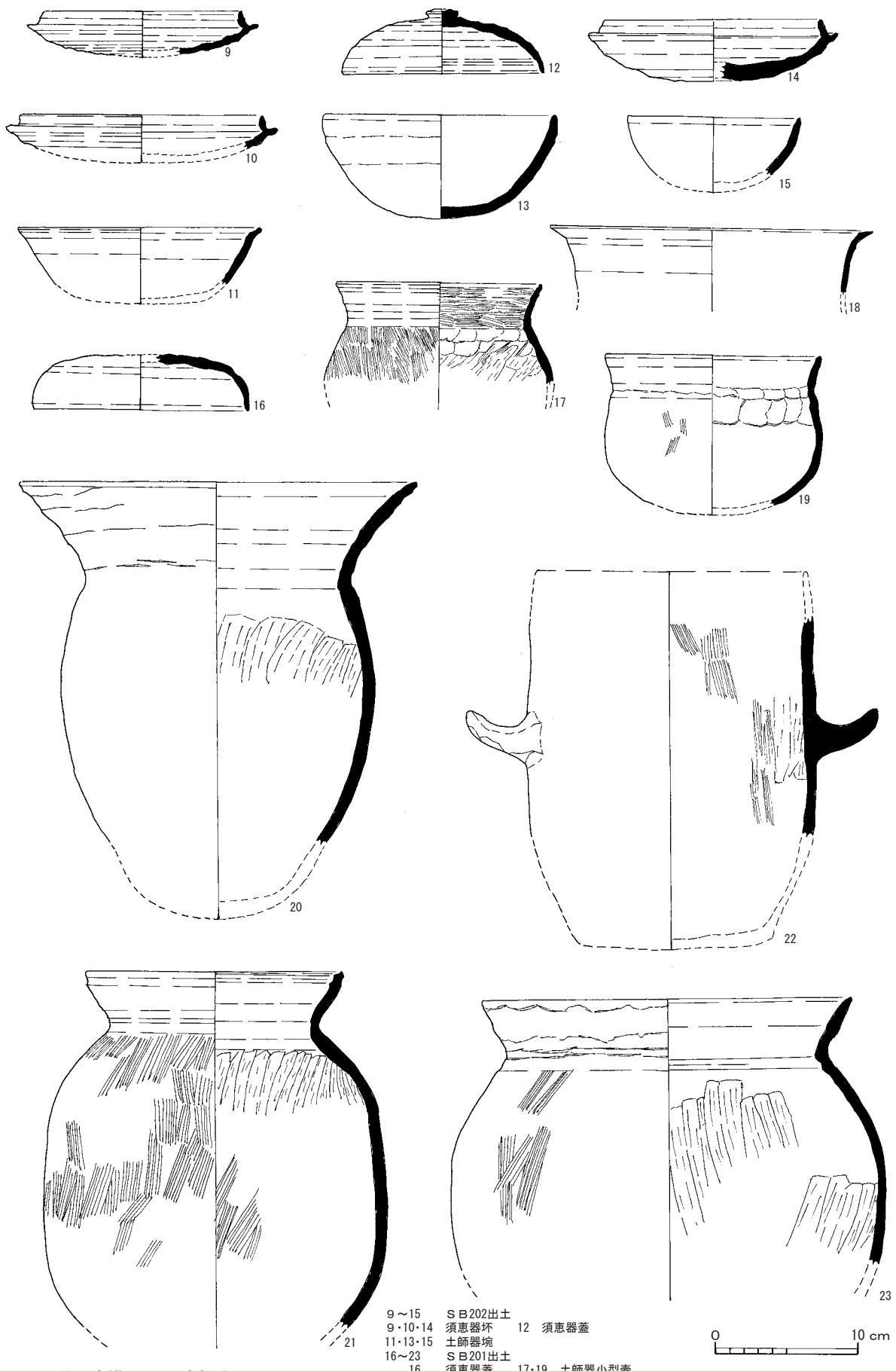


fig. 79 第2遺構面出土遺物実測図

11. 祇園遺跡 第14次調査

1. はじめに

祇園遺跡は、六甲山系から注ぎ込む天王谷川により形成された扇状地の頂部に立地している。遺跡が所在する一帯は、『山槐記』に登場する「平野」にあたる。平安時代後期においては平清盛が京都より移り住み、やがて福原遷都の中心地となる場所と考えられる。考古学的にも、第2次調査と第5次調査において12世紀後半～末頃の貴族の邸宅に伴うと考えられる庭園遺構が検出されている。出土した多量の土器や瓦の中には京都周辺で生産されたものも含まれており、中央政権との深い関係を物語っている。さらに第3次調査においては、中国（宋）との貿易を物語る吉州窯系玳玳天目小碗なども出土している。また、第8次調査や第12次調査では弥生時代後期の堅穴建物などの遺構も確認されている。

なお、今回の調査成果については平成24年度に『祇園遺跡第14次発掘調査報告書』を刊行しており、調査の詳細については、報告書を参照されたい。



fig.80 調査地位置図 1 : 2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、店舗建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。

調査の結果、弥生時代～古墳時代及び平安時代後期～中世の遺構を同一面で検出した。

弥生時代～古墳時代

弥生時代中期の堅穴建物4棟、堅穴建物状の落ち込み1基、弥生時代後期の堅穴建物1棟及び弥生時代後期と古墳時代の流路を検出した。

平安時代後期～中世の遺構

主な遺構としては、調査区の北半部において検出した南北方向の溝群と南東の落ち込み、中央部において検出した掘立柱建物3棟と柵列1条、及びこれらに先行する井戸2基、また調査区の南端において敷地内を区画すると考えられる溝1条などがある。

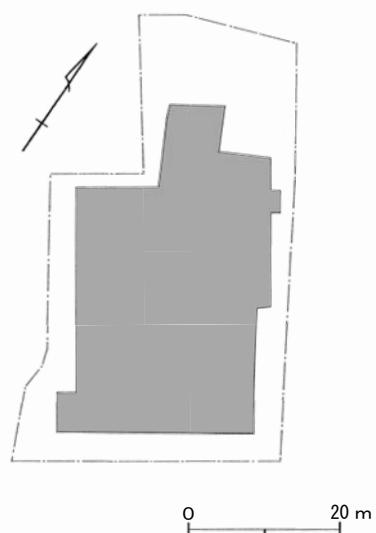


fig.81 調査範囲位置図

3. まとめ

今回の調査では、大別して弥生時代中期～古墳時代、平安時代後期を中心とする時期の2時期の遺構を確認した。

弥生時代中期後半(IV様式期)の竪穴建物は当遺跡における当該時期の確実な竪穴建物としては初めての検出例であり、またSB03では「1〇土坑」と呼ばれる中央土坑を西摂地域では初めて確認しており、播磨地域からの影響が窺える資料として重要である。

また、平安時代後期の遺構群については、12世紀後半～末の比較的短い期間に存在したものと考えられる。掘立柱建物の柱穴からは時期を特定できる遺物は出土していないが、建物に先行する井戸からは多くの遺物が出土した。特にSE02では井戸の廃棄の祭祀に伴う土器が多量に出土し、また建物に伴う区画溝(SD01)でも焼土などとともに建物の廃絶を窺わせる出土状況で遺物を確認しているため、ある程度時期決定が可能となった。この掘立柱建物群と区画溝の間は遺構の希薄な空間が存在している。

南端で確認したSD01については、規模や途中で途切れる形状などから邸宅地を区切るものではなく、鎌倉や伊豆の北条氏邸宅でみつかっている邸宅内の施設などを区切る区画溝と考えられる。

区画溝や井戸からの出土遺物については、中国製の青磁や白磁をはじめ京都の影響を受けた土師器などもみられる一方、播磨や吉備、瀬戸内地方の影響を受けた回転台を用いた土師器や高台付き椀などもみられる。

以上のことから、今回の調査で確認した邸宅の主は、平家一門を支えた在地の有力者で西国に経済基盤などの結びつきをもった人物と考えられる。

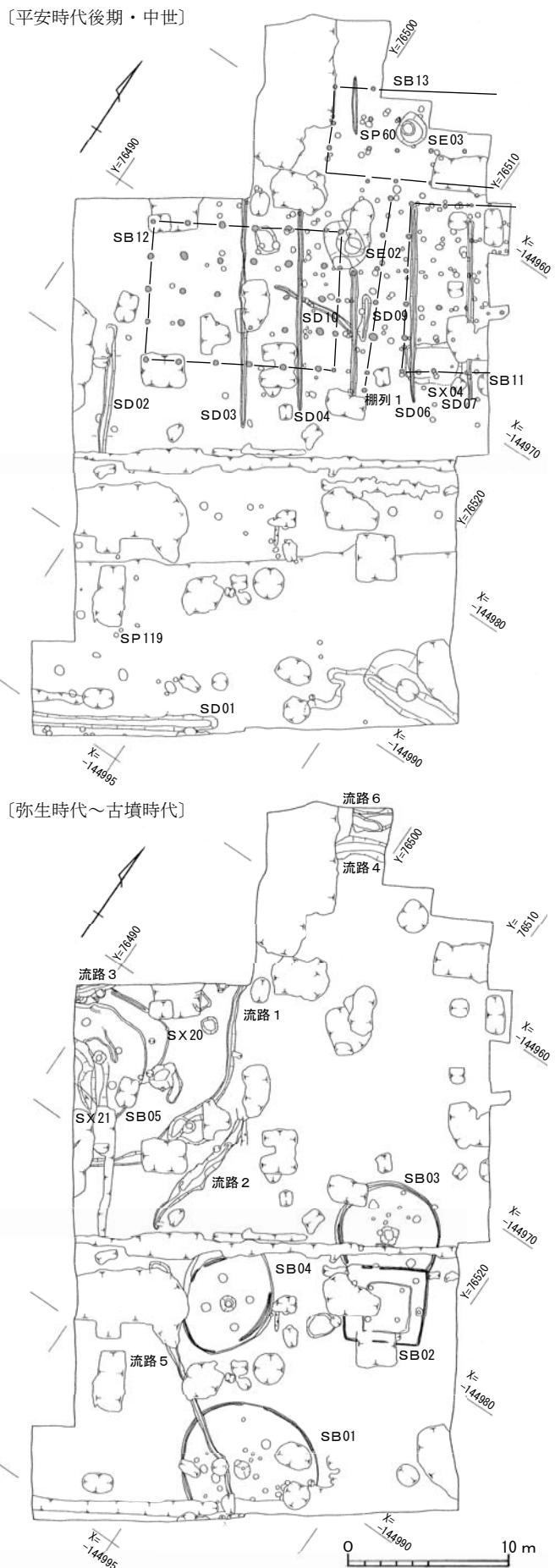


fig.82 調査区平面図

12. 祇園遺跡 第15次調査

1. はじめに

祇園遺跡は、六甲山系から流出する天王谷川によって形成された扇状地の扇頂部から扇央部付近にかけて立地する遺跡である。

兵庫区の福原から和田にかけての一帯は、福原荘・輪田荘と呼称される平氏の領する荘園で、日宋貿易により大輪田が繁栄する平安時代後期の1160年代から、平家一門の別業（別邸）が建造されたと伝えられる。治承4（1180）年の京から摂津国福原への「福原遷都」に際して、安徳天皇内裏となった平清盛の別業があったとされる「平野」の地名と合致することや、現在の湊山小学校付近の「雪御所」の地名などから、祇園遺跡の立地する一帯は、平家一門の別邸及び平清盛の造営による福原京との関連が指摘されてきた。

当遺跡では、これまでに14次に及ぶ発掘調査が実施され、縄文時代～中世の遺構、遺物が確認されている。

なお、今回の調査成果については平成24年度に『祇園遺跡第15次調査発掘調査報告書』を刊行しており、調査の詳細については、報告書を参照されたい。

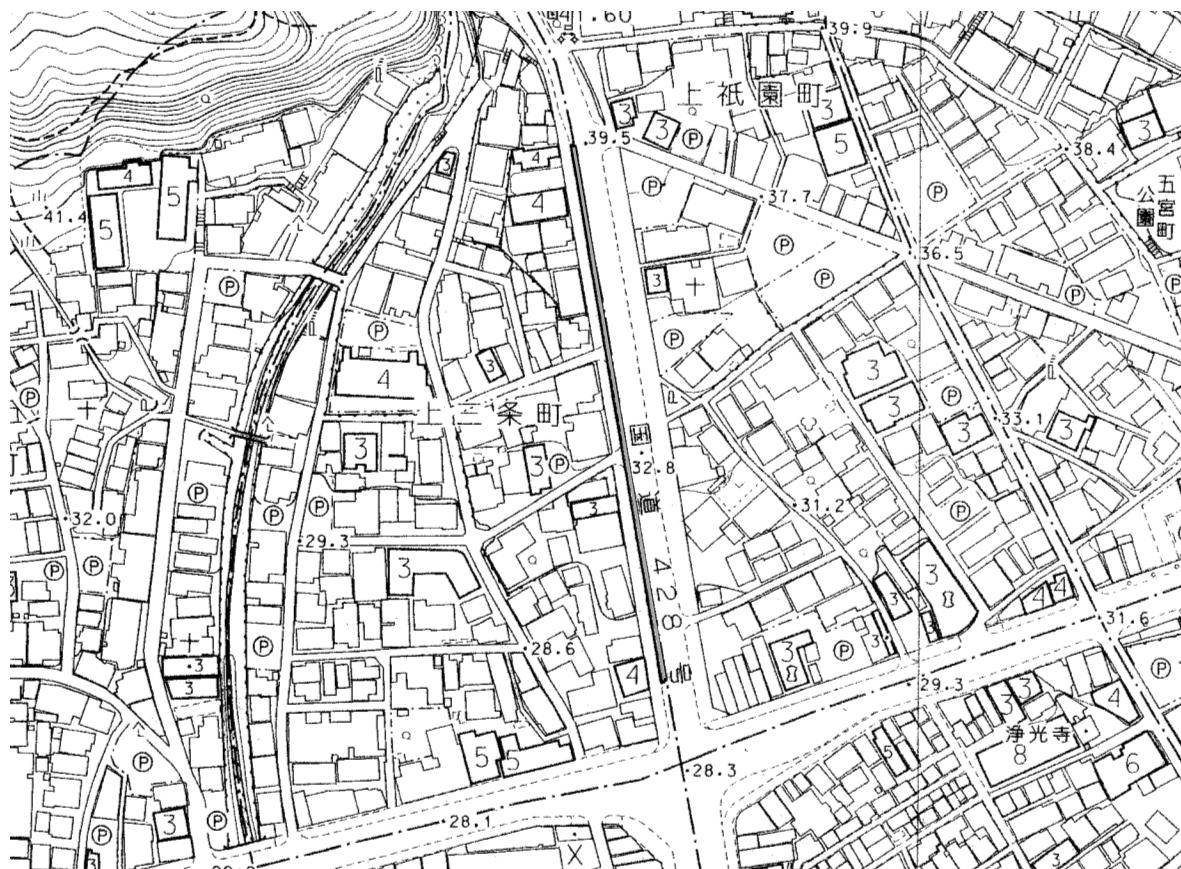


fig.83 調査地位置図 1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は地中送電線の電力管理設に伴うもので、工事による掘削が及ぶ範囲について、発掘調査を実施した。今回の調査地は、国道428号線拡幅に伴う調査地と、車道を隔てて西側に位置する。

調査地は、国道428号線の路線内に位置する。交差する道路、沿道の施設への進入路の確保及び車線変更等に伴う渋滞緩和の関係上、調査地を南から1～3区に大きく3分割し、さらに1区は8分割、2区を2分割、3区を4分割にして調査区を設定した。

基本層序

調査地は基本的に北から南へと下がる斜面地で、西側の天王谷川が形成した谷へも傾斜する。基本層序は、国道舗装面、砕石、整地土、盛土下に複数の旧耕土・床土が存在する。調査地北端部では旧耕土・床土直下の暗褐色細砂上面で第1遺構面（中世）を検出した。この暗褐色細砂は弥生時代の遺物包含層であり、この層の下層の暗黄灰色細砂上面で第2遺構面を検出した。なお、3-1A区南半から南側は、後世の耕作や国道の造成に伴う削平により大きく改変されており、旧耕土・床土直下に暗黄灰色細砂及び淡茶灰色極細砂などで形成された地山面上で遺構を検出し、一部では国道造成土直下で地山を検出した箇所も存在した。2区以南では、基本的に旧耕土・床土下の暗褐色砂質シルト及び暗褐色細砂上面で第1遺構面（中世）、その下層の暗灰褐色砂質シルト上面で第2遺構面を検出し、弥生時代後期～古墳時代初頭、平安時代中頃の遺構、遺物を確認した。また、この下層の地山面上で第3遺構面を検出した。1区南半では谷状地形を検出し、その南側の1-6区では再び旧耕土・床土下で地山である暗黄褐色シルトを検出した。この上面で弥生時代後期～古墳時代初頭及び中世の遺構を同一面で検出している。

第1遺構面

1区では、土坑1基、ピット11基、落ち込み1ヶ所を検出した。ピットのうち1基（S P122）から11世紀末～12世紀初頭頃の土師器皿が出土している。落ち込み（S X109）からは8世紀後半の須恵器などが出土している。

2区では、平安時代後期～末頃の土坑2基、ピット7基、池状落ち込み1ヶ所、落ち込み3ヶ所を検出した。2区で検出した遺構の中で特筆されるものとして、池状落ち込み遺構（S X107）、S X107の上面から切り込む大型土坑（S K106）、大型礎石を伴うS P120があげられる。

S X107は掘削から埋没、及び埋没後の状況から大きく3段階に分けられ、12世紀末～13世紀初頭頃の土師器皿や須恵器碗、瓦器盤、軒丸瓦、丸瓦などが出土地している。

3区では、溝1条、土坑2基、ピット11基、落ち込み3ヶ所、ピット13基を検出した。落ち込みのうち1ヶ所（S X101）からは13世紀頃の土師器鍋、羽釜、瓦器碗などが出土地している。

第2遺構面

1区では、弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴建物1棟、ピット4基、落ち込み3ヶ所、土石流1ヶ所を検出した。

2区では、弥生時代後期～古墳時代初頭の土坑3基、ピット4基を検出した。

3区では、弥生時代後期の溝1条、ピット1基を検出した。

第3遺構面

1区で弥生時代後期の土坑及びピット、谷状遺構を検出した。

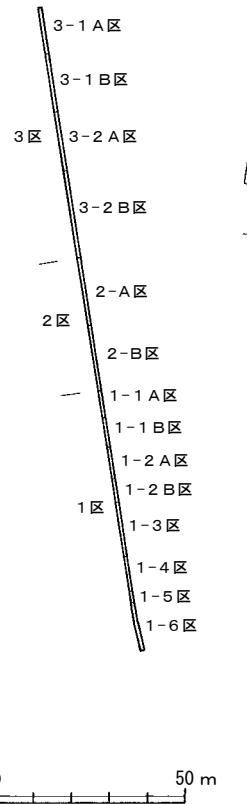


fig.84 調査区割図

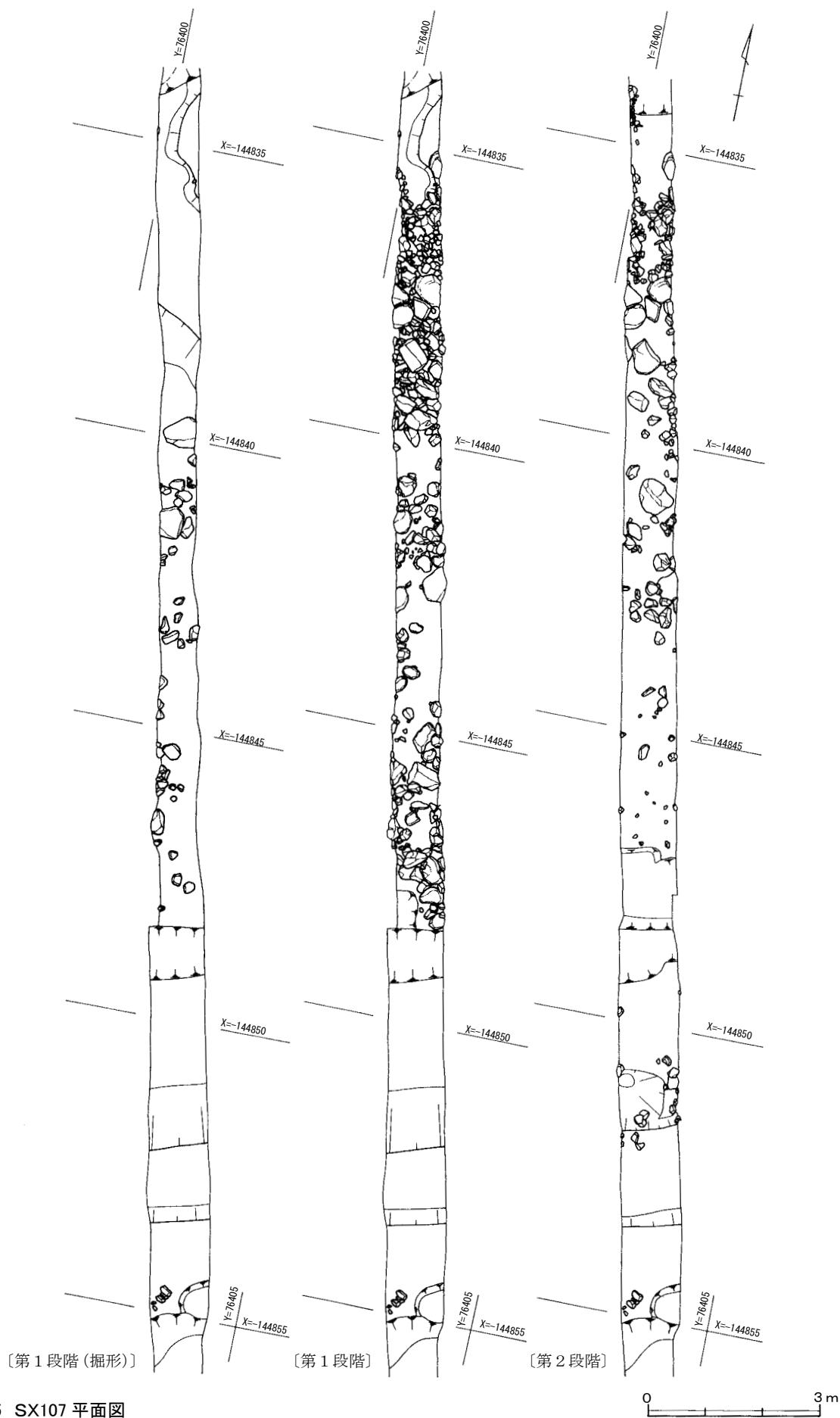


fig.85 SX107 平面図

3. まとめ

今回の調査では3面の遺構面を検出した。また、多くの遺物が出土した。

第1遺構面

1区では、1-6区S P122から土師器大皿2点、小皿3点を掘形内に並べた、祭祀に伴うものと考えられる遺構を検出した。また、2区では平成6・7年度の第2・5次調査で検出された園池遺構（SX07）に続くと考えられる、多量の石を伴う池状の落ち込み状遺構（SX107）を検出した。

S X107は南側に堤を付随しており、園池遺構と考えられる。上下2層の湿地状堆積の間に砂層が存在することから、改修の可能性が考えられる。SX107の上層から切り込むSK106からは、多くの遺物が出土した。口縁周縁部を内側に折り込む、いわゆる「コースター皿」の土師器皿や、楠葉型瓦器椀、山城産の唐草文軒平瓦などの瓦が出土している。出土遺物から12世紀後半の時期が考えられる。SK106などのSX107上層から切り込む遺構は、SX107とほぼ同時期であると考えられることから、SX107埋没後、短期間にこれらの遺構が掘削されたことが推定される。

SK106の出土遺物には山城系の遺物が含まれている。祇園遺跡における山城系遺物の存在は、これまでの調査成果からも平氏一門との関係が指摘されてきたが、今回確認された遺構、遺物は園池遺構を含めて、園池遺構とその周辺部の状況、池の埋没後の土地利用などを考える上で貴重な資料と言える。また、軒丸瓦、軒平瓦を含む瓦の出土、SP120の大型礎石の存在から近接地に建物の存在が推定されるが、瓦の出土量はそれほど多くはなく、建物の実態については、現状では不明であると言わざるを得ない。

今回の調査により国道428号線の西側へも、園池遺構を始めとする、平安時代後半～鎌倉時代初頭の遺構、遺物の分布の拡がりが確認されたことは、貴重なデータとなった。

第2遺構面

1-6区で弥生時代後期後半～庄内式併行期の時期が考えられる堅穴建物1棟を検出した。平成10年度に実施された第7次調査では、弥生時代後期後半～古墳時代前期頃の堅穴建物3棟が確認されていることから、調査地の南半から東側一帯には、当該期の集落が拡がるものと考えられる。

第3遺構面

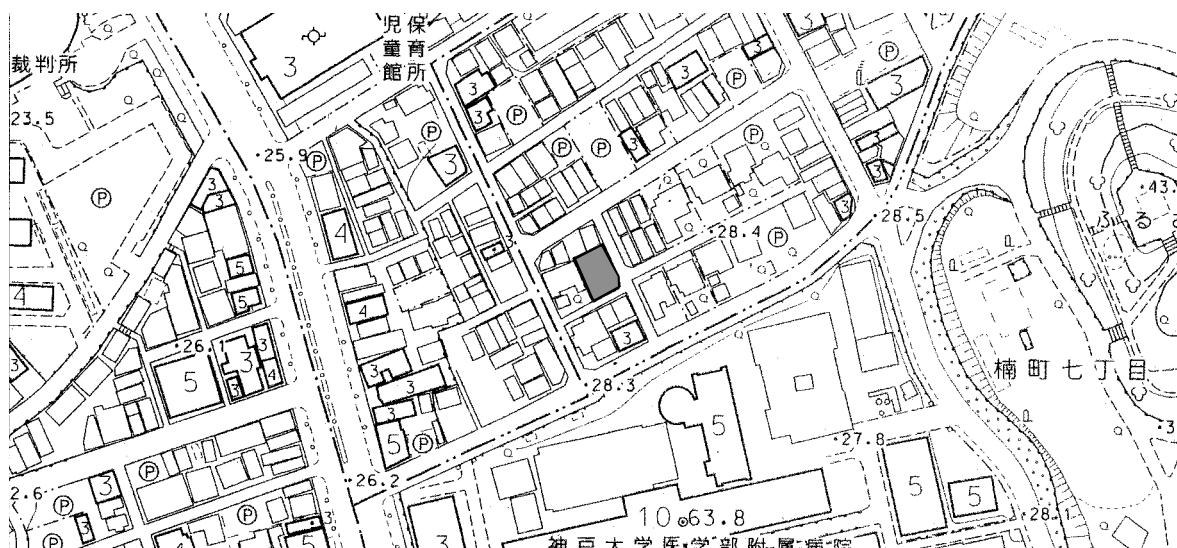
第3遺構面は、1-1B区以南で検出した。1-3区・1-4区で検出した谷状の落ち込み内から弥生時代中期末～後期のものと考えられる、多量の遺物が出土した。1区の東側で平成11年度に実施された第8次調査で北側へと落ちる落ち込みが検出され、弥生時代後期～古墳時代初頭頃の遺物が多量に出土していることから、今回確認した落ち込みはこれと同一の谷状落ち込みである可能性も考えられる。

13. 楠・荒田町遺跡 第51次調査

1. はじめに

楠・荒田町遺跡は、昭和53年の市営地下鉄建設工事に伴って第1次調査が実施されて以来、これまでに50回にわたる発掘調査が実施されてきている。第1次調査では、弥生時代前期～中期の方形周溝、貯蔵穴、竪穴建物、古墳時代後期の竪穴建物、平安時代中期～末期の柱穴群が検出された。また、第1次調査地の北側、神戸大学医学部附属病院内の施設建替に伴う神戸大学による第2次調査でも平安時代末期の大型の柱列が発見され、楠・荒田町遺跡は広範囲にわたって平安時代末期の建物群を中心とする遺跡として注目されてきた。

第H15-1次調査において東西方向に走る薬研塙状と箱塙状の溝2条が検出され、第46次調査ではこの2条の溝がさらに西に延びることが確認された。



2. 調査の概要

今回の調査は、共同住宅建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。

調査は、残土置場を確保するため、地盤改良実施部分の西側半分について、先行して調査を実施した。西側調査完了後、中央・東側部分について調査を実施した。

基本層序

上層より、北～南に層厚40～100cmを測る盛土、その下層に層厚20cmを測る旧耕土がみられる。この旧耕土の下層には、暗茶褐色粘性砂質土の遺物包含層が堆積している。この暗茶褐色粘性砂質土の下層、西側では暗黄灰色粘性砂質土上面、東側では黒灰色粘性砂質土ないしは黄灰色粗砂上面で遺構面を検出した。

調査区西側では暗黄灰色粘性砂質土、東側では黒灰色粘性砂質土の上面で掘立柱建物柱穴群と南北方向に流れる溝1条を検出した。さらに東南部において黄灰色粗砂面において土坑2基を検出した。しかし、掘立柱建物の柱穴は、溝埋没後の堆積土上面から掘りこまれていることから、検出した遺構には時期差が認められ、掘立柱建物柱穴群を第2期の遺構面とし、溝と土坑を第1期の遺構面とした。

第2期遺構面

SB01

調査区中央東寄りで検出した東西4.4m、南北4.3m以上、2間×3間以上の南北棟の掘立柱建物である。建物の方向は真北を指向する。柱間隔は東側桁行で南から1.8m、2.4m、西側桁行で南から2.0m、南側梁行で西から2.0m、1.5mを計測する。南西隅柱を除いて大部分の柱穴掘形は平面形が方形を呈し、一辺80cm前後、深さ40cm前後を測る。そのうち梁柱の残存深度は50cmで、比較的深く遺存している。一部の柱穴においては、柱痕跡に接して角礫を配して据付を補助している。柱穴掘形内から遺物は出土していない。

その他の柱穴群

SB01を構成する柱穴以外に27基のピット及び柱穴を検出した。大部分のピットは平面形が方形を呈する掘形をもち、一边40～80cm前後を測る。一部のピット及び柱穴から土師器片が出土している。

fig.88
北東部
第2期遺構面全景

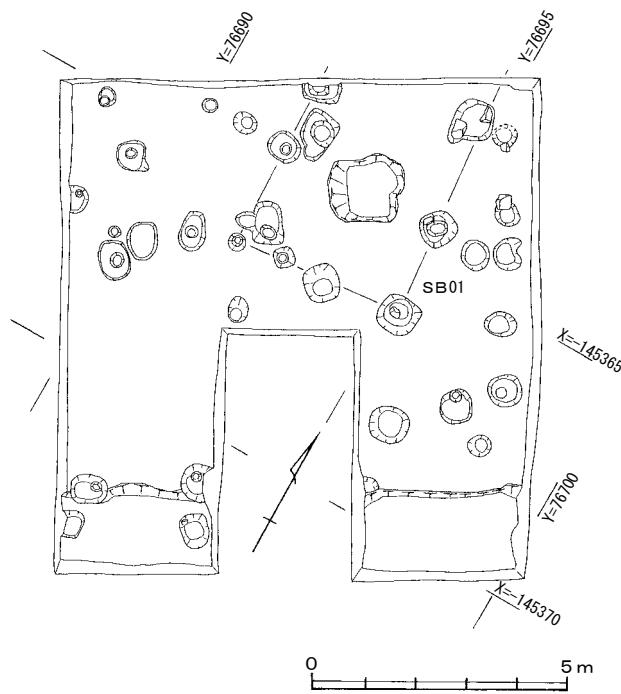


fig.89 第2期遺構面平面図

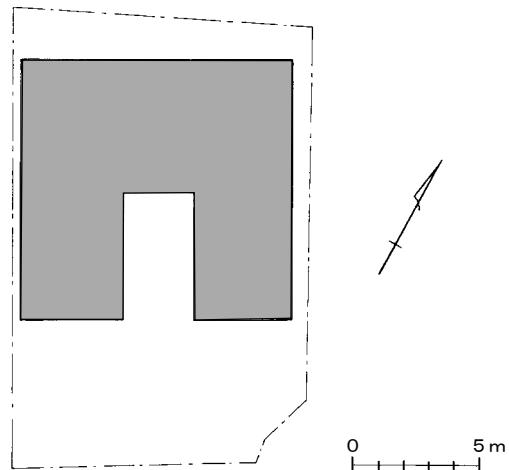


fig.87 調査範囲位置図

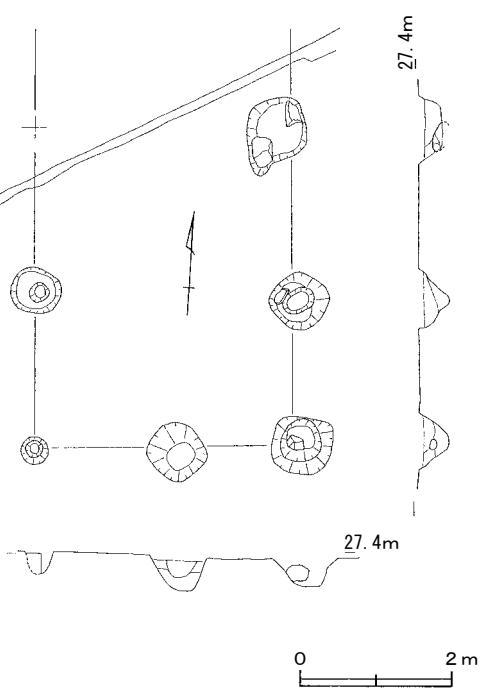


fig.90 SB01 平・断面図

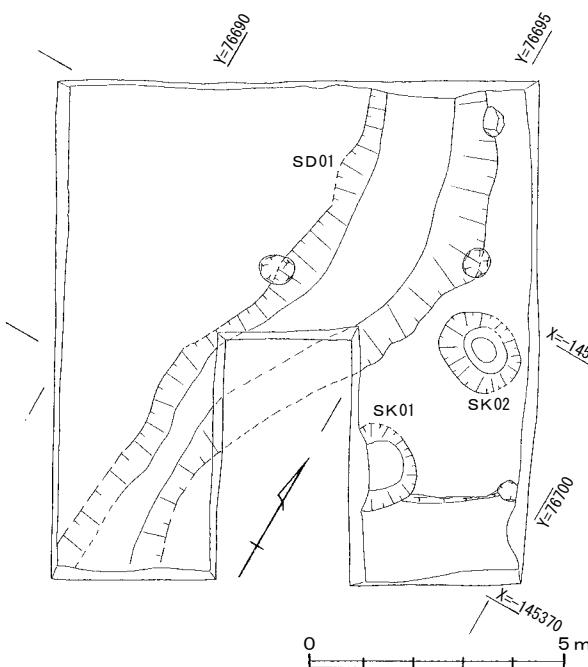


fig.91 第1期遺構面平面図



[右上] fig.92 西部第1期遺構面全景



[右下] fig.93 東部第1期遺構面全景

第1期遺構面

SD01

調査区中央を北から南に流れる溝である。断面の形状は塊状で、幅2.4m、深さは東側で80cm、西側で110cmを測る。土師器細片が出土している。

SK01

調査区南東部で検出した土坑である。東西1.7m、南北1.0mを測り、平面形は橢円形を呈する。断面の形状は皿状で、深さ30cmを測る。出土遺物はない。

SK02

調査区東部南よりで検出した土坑である。東西1.8m、南北1.5mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。断面の形状は浅鉢状で、深さ30cmを測る。出土遺物はない。

出土遺物

出土遺物は、大部分が暗灰褐色砂質土（暗黄灰色土ブロック）の遺物包含層から出土し、遺構内からの出土遺物は、Pit20から古墳時代初頭と考えられる土師器片、SD01から縄文土器と考えられる土器細片と古墳時代初頭と考えられる土師器片が出土している。遺構面である黒灰色粘性砂質土からは古墳時代初頭と考えられる土師器片と縄文土器細片が出土している。また、遺物包含層上面と旧耕土との間から、大型の土錐（fig. 94-11）が出土している。出土遺物の総量は280コンテナ1個分である。このうち図化可能な遺物は土器・土製品11個体、石器1個体である。

fig.94-1～4は須恵器蓋坏、5は須恵器竈の胴部、6は小型短脚の透孔をもつ須恵器無蓋高坏の脚部片と考えられる。7、10は土師器坏、9は内面に放射状暗文を施す土師器皿、8は土師器甕の口縁部片と考えられる。12は暗赤色を呈するチャート製の剥片である。

3. まとめ

今回の調査地は、神戸大学医学部附属病院内の北西部で検出された薬研壕・箱壕に画された区画の内側にあたる地点である。上記の箱壕は座標北からN-70°-Eの方向で検出され、壕の内側にある施設、もしくは内郭と関連する施設は通常これらの濠と同様な方位で建物等が建設されている可能性がある。しかしながら、今回の調査で検出したSD01は、ほぼ真南北の方向を指向し、また、この溝埋没後に建設されたSB01もほぼ真北に棟方向を指向する。こういったほぼ真北を採る建物は第46次調査において1棟確認されている。この調査では建物の一部を確認したにすぎないが、10世紀末葉の井戸によって一部の柱穴が失われており、10世紀後半までに建築されたと考えられている。今回確認したSB01やSD01がこの掘立柱建物と関連する遺構とすれば、福原京（和田京）関連の大規模区画形成前に建てられた建物群である可能性が高い。その時期は遺物包含層内出土遺物（fig. 94-7～10）の示す時期である奈良時代の可能性も考えられる。今後の出土遺物の検討を含め、周辺の調査状況をふまえた検討が必要である。

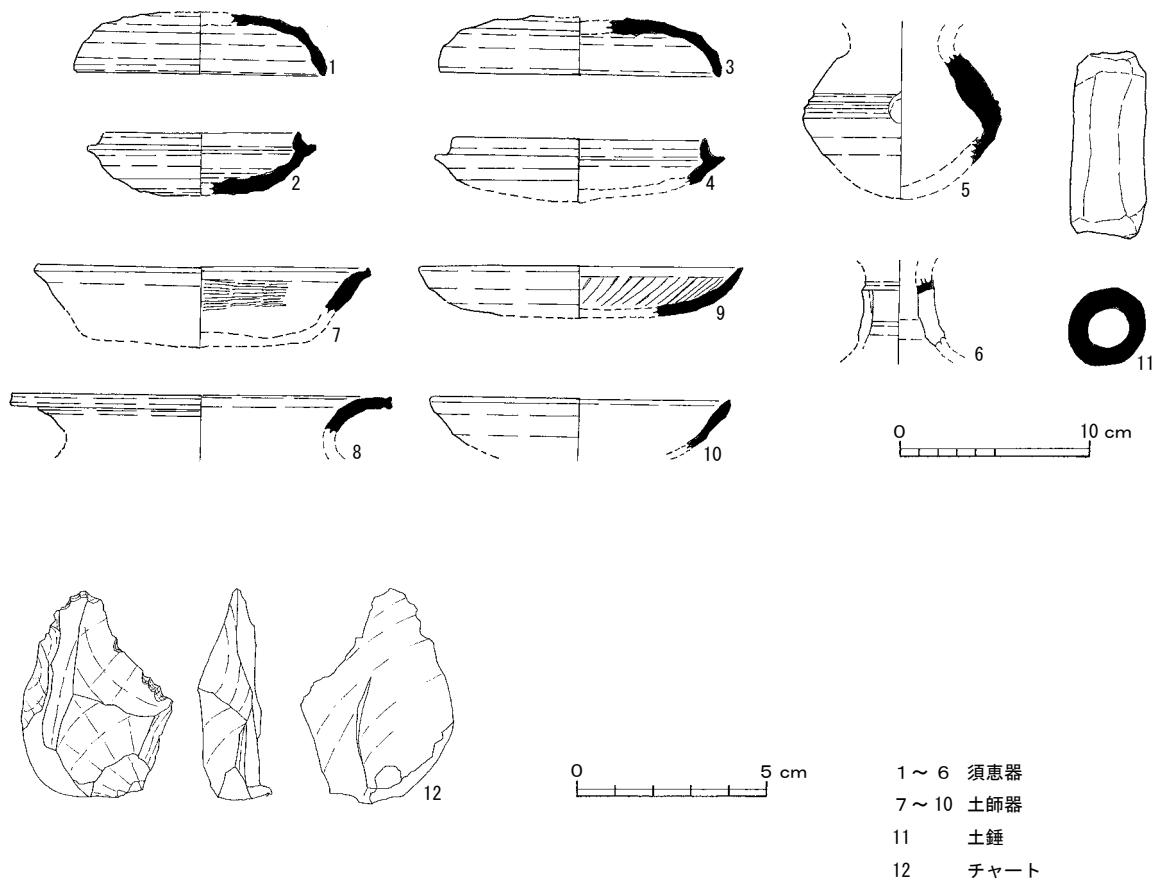


fig.94 遺物包含層出土遺物実測図

14. 兵庫津遺跡 第54次調査

1. はじめに

兵庫津遺跡は、神戸市兵庫区の南部、JR兵庫駅の南東側一帯の広範囲に広がる遺跡である。瀬戸内海に突き出た和田岬によって、波風を避ける天然の良港として古代より栄えた港湾都市遺跡である。近年の調査の進展により、奈良時代の遺構、遺物も確認されているが、質、量とともに遺構、遺物が多く確認されているのは近世以降の港町兵庫津関連のものである。

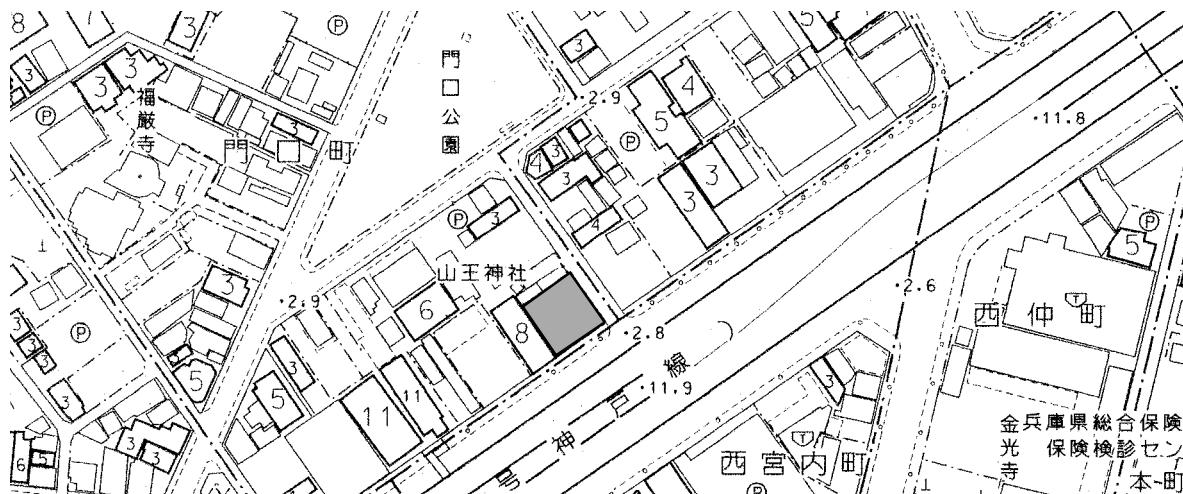


fig. 95 調査地位置図 1 : 2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、共同住宅建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。残土置場を確保するため、調査区を2分割して調査を実施した。調査の結果、中世～近世の遺構面を5面確認した。

基本層序

一部に搅乱を受けているものの、遺構面は比較的良好に遺存しており、現地表下60cm前後で明茶灰色細砂（fig. 96-6層）上面で第1遺構面を確認した。さらに下層の、黄灰色シルトブロック（炭・焼土）混じり赤橙色極細砂（同、9層）上面で第2遺構面、暗灰色細砂（同、14層）上面で第3遺構面、灰色細砂（同、16層）上面で第4遺構面、黄茶色中～粗砂（同、17層）上面で第5遺構面を検出した。

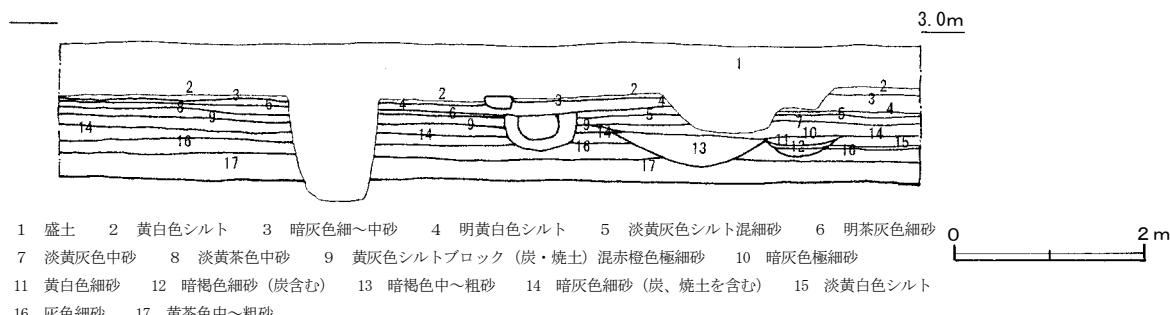


fig. 96 調査区中央土層断面図

第1遺構面

幕末～明治時代（19世紀代）の遺構面と考えられる。

道路・側溝

調査区南側で幅2.8mの道路、及びその両側に幅1.2mを測る側溝を検出した。この道路側溝は、本来石組みであったものが、後世に石が抜き取られたものと考えられる。

この道路の南側には本来建物が存在していたことが想定できるが、今回の調査では明確にできなかった。

SB101

調査区北東側で検出した石敷きの土台を基礎とする建物で、南北4.0m以上、東西8.8mを測る。

SB102

SB101の南側で検出した、石敷きの土台を基礎とする建物で、南北3.7m、東西7.9mを測る。

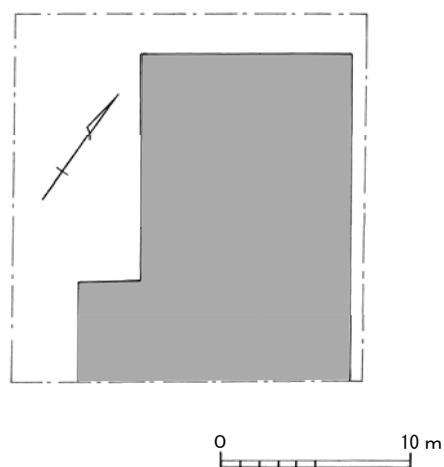


fig.97 調査範囲位置図

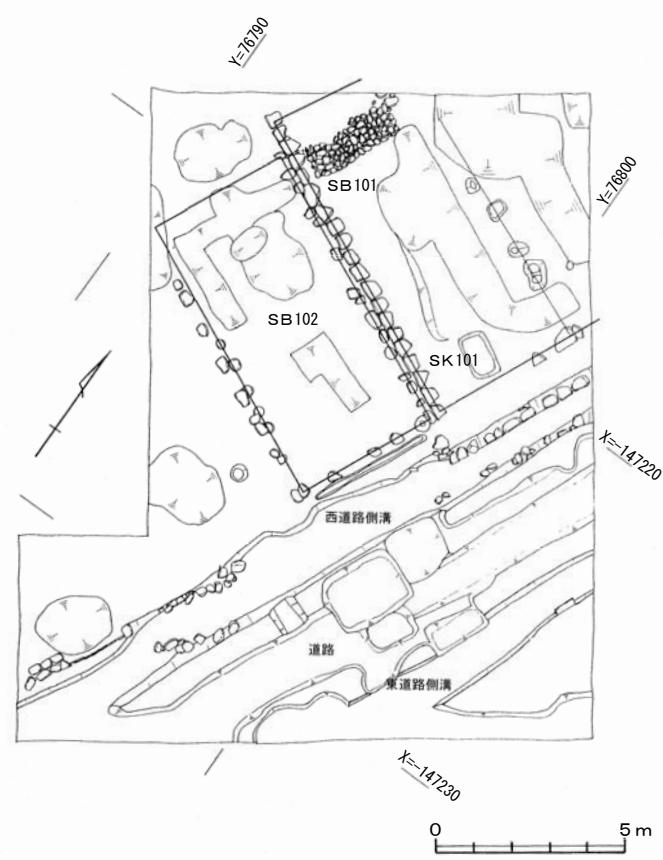


fig.98 第1遺構面平面図



fig.99 北地区第1遺構面全景



fig.100 SB101 全景

第2遺構面

18世紀後半以降の遺構面と考えられる。

道路・側溝

第2遺構面においても道路及び道路側溝を検出している。この遺構面で確認したものは、第1遺構面で確認しているものより若干東に振る方向を指向している。また、西側側溝は本来幅20cm程度で、板を角杭で留めたものであったが、埋没後に石敷きの溝へ改変されている。

S B201

調査区北東側で検出した石敷きの土台を基礎とする建物で、南北4.0m、東西8.8mを測る。

S B202

S B201の南側で検出した、石敷きの土台を基礎とする建物で、南北3.2m、東西8.0mを測る。建物の壁面は土壁が用いられていたと考えられる。

S B203

S B202の南側で検出した土壁建物で、南北4.3m、東西7.5m以上を測る。本来石敷きの土台による基礎が存在していたものと考えられるが、その痕跡は確認できていない。なおこの建物の北半は、床面が20cm程度低くなっている、何らかの貯蔵施設であった可能性が考えられる。

S B204

S B203の南側で検出した土壁建物で、南北3.2m以上、東西3.0m以上を測る。本来石敷きの土台による基礎が存在していたものと考えられるが、その痕跡は確認できていない。

S D201

道路の東側で検出した、幅65cm、深さ12cmを測り、平面形がL字形に曲がる溝である。建物の雨落ち溝の可能性が考えられる。

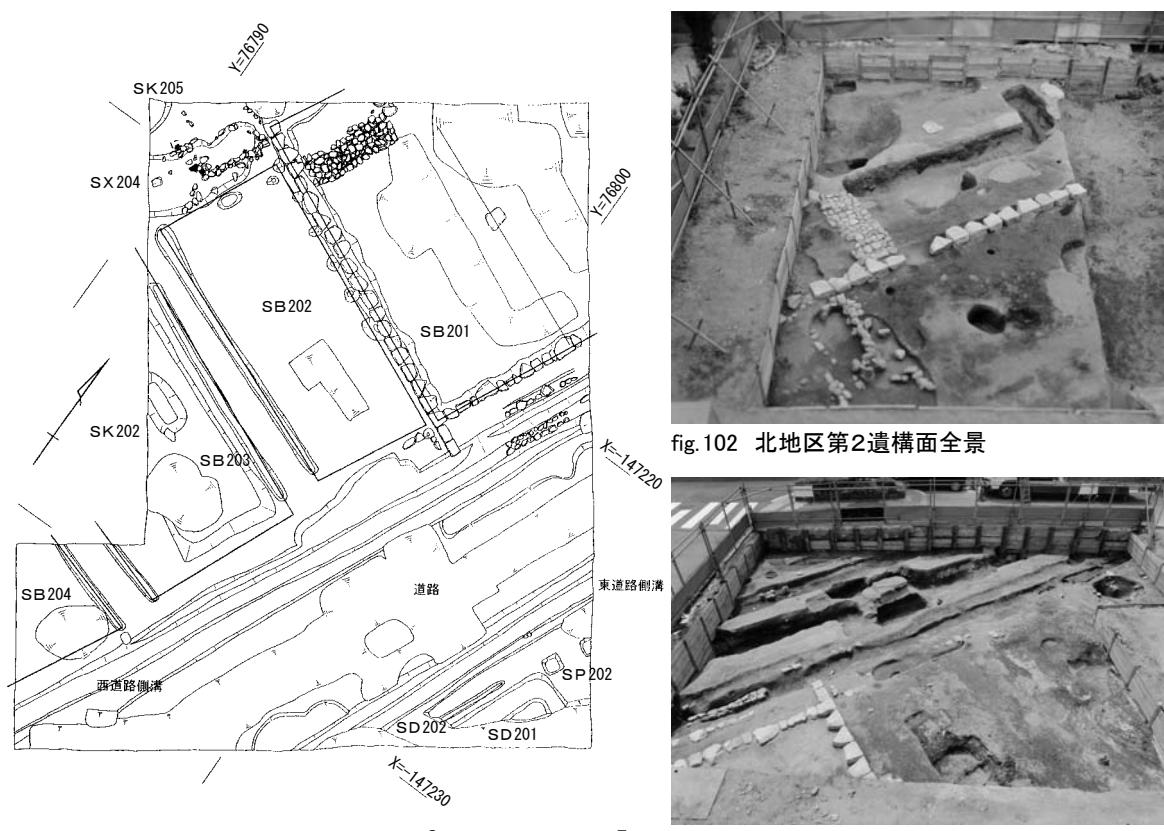


fig.101 第2遺構面平面図



fig.102 北地区第2遺構面全景



fig.103 南地区第2遺構面全景

第3遺構面

18世紀前半を中心とする時期の遺構面と考えられる。

道路・側溝

調査区南側で、南北方向に走る道路と、道路側溝を検出している。道路幅は2.4mを測り、道路側溝は、幅0.7m、深さ20cmを測る。

S B301

調査区北東側で検出した、石敷きの土台を基礎とする建物で、南北4.2m、東西7.8mを測る。

S B302

S B301の南側で検出した、石敷きの土台を基礎とする建物で、南北4.9m、東西8.2m以上を測る。建物の壁面は土壁が用いられていたものと考えられる。

S E301

素掘りの井戸で、上部のみ石で井戸の縁を覆っている。掘形の直径1.6m、深さ90cmを測るが、搅乱のため中心部分が失われており、正確な規模を把握するまでには至らなかった。

S E302

直径1.3m、深さ70cmを測る素掘りの井戸である。西側道路側溝によって切られており、第4遺構面の溝埋没後に築かれ、短期間使用されたものであった可能性が考えられる。漆椀やキセルなどが出土している。

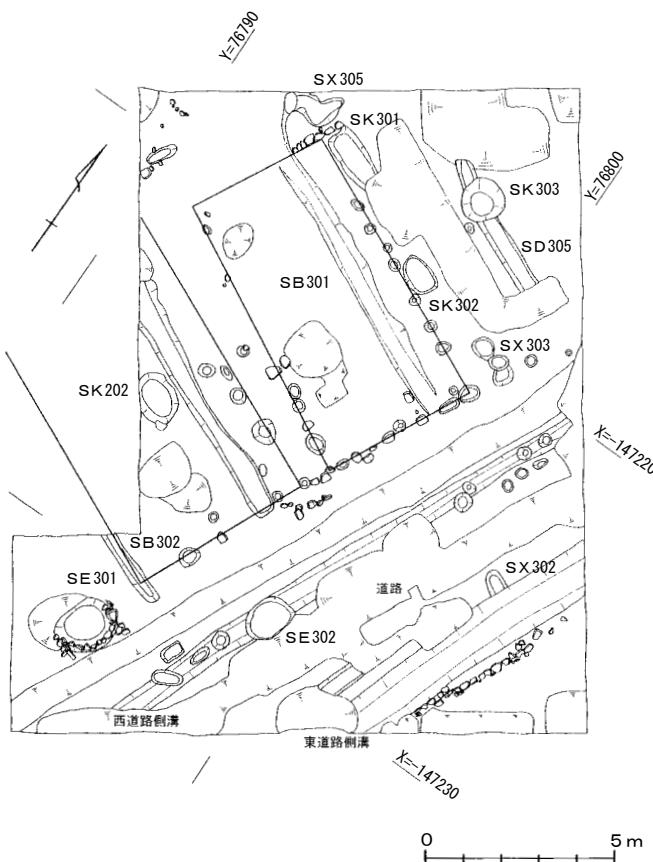


fig.104 第3遺構面平面図



fig.105 北地区第3遺構面全景

第4遺構面

17世紀代を中心とする時期の遺構面と考えられる。

道路

明確に道路を確認できてはいないが、南側に石列が存在することから、この部分に建物の存在が想定でき、この建物から離れた場所に塀にあたると考えられる柱列（S A401）が存在している。おそらくこの塀と建物の間に道路が存在したものと考えられる。

S A401の西側で、幅2.2m、深さ40cmを測る溝（S D401）を検出している。さらに S D401の西側で建物を検出している。

S B401

石敷きの土台を基礎とする建物で、南北4.2m、東西8.0mを測る。建物の壁面は土壁が用いられていたものと考えられる。

S B402

S B401の南側で検出した、石敷きの土台を基礎とする建物で、南北4.5m、東西7.5m以上を測る。

S K415

素掘りの井戸である可能性が考えられる遺構で、直径1.3m以上、深さ80cmを測る。

S X411

南北2.0m、東西2.2m以上を測る、石で囲まれた浅い落ち込みである。

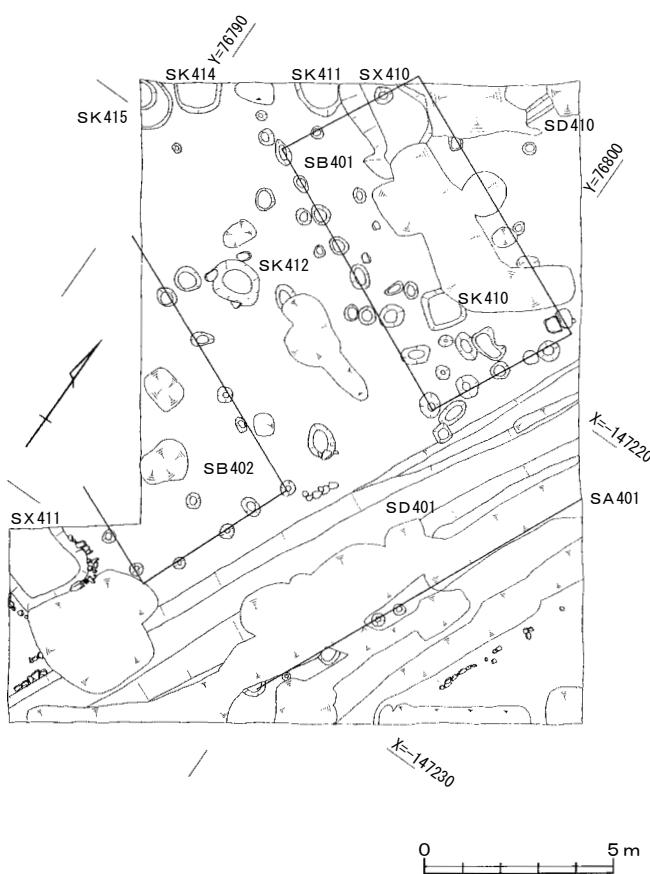


fig.106 第4遺構面平面図



fig.107 北地区第4遺構面全景



fig.108 SK415 全景

第5遺構面

15世紀後半～17世紀前半の遺構を、切り合い関係をもった状況で、同一面で確認している。

SK501

幅1.1m、長さ2.3m、深さ30cmを測る土坑である。焼土や土壁材が出土している。16世紀代の遺構と考えられる。

SK502

幅1.3m、長さ1.6m、深さ50cmを測る土坑である。焼土や礫などが出土しているが、礫の中には被熱痕の認められるものが多い。15世紀後半代の遺構と考えられる。

SK503

直径1.6m、深さ30cmを測る平面形が円形を呈する土坑である。16世紀代の遺構と考えられる。

SK504

直径1.8m、深さ30cmを測る平面形が円形を呈する土坑である。16世紀代の遺構と考えられる。

SK505

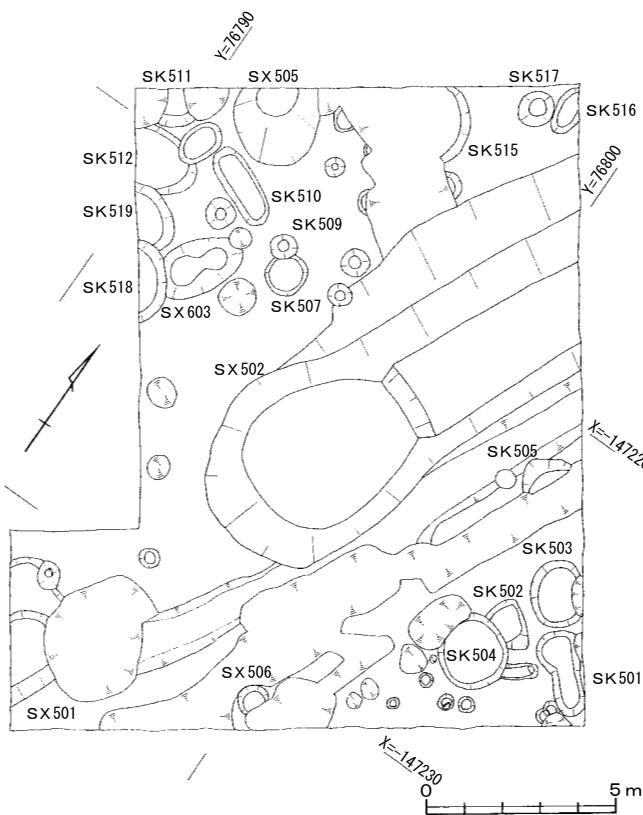
東側を搅乱によって失われているが、残存する規模が幅1.4m、長さ1.4m、深さ40cmを測る土坑である。炭や礫などが出土している。16世紀前半の遺構と考えられる。

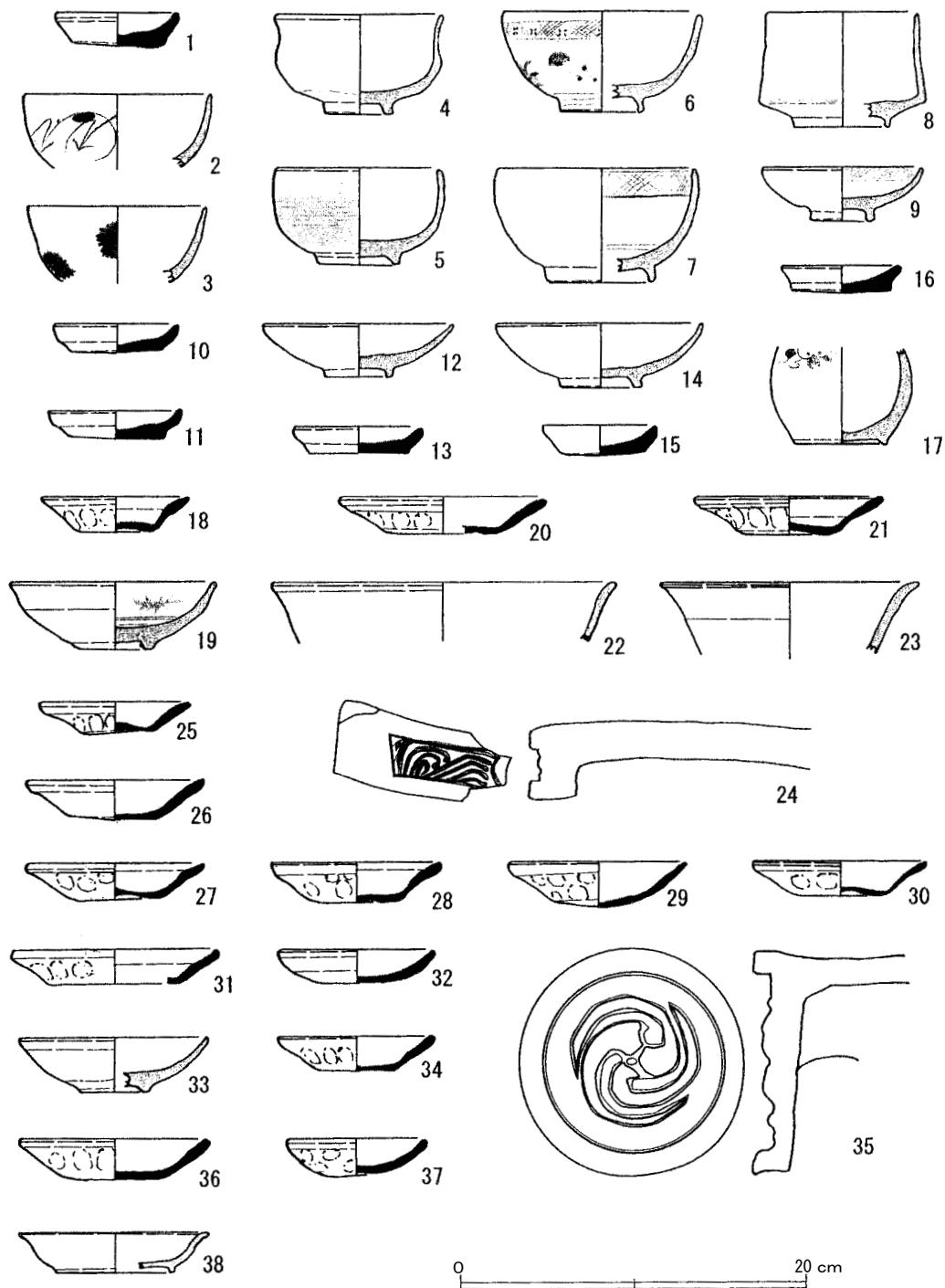
SK507

直径1.1m、深さ70cmを測る素掘りの井戸である。出土遺物はほとんどなく、時期については不明である。

SK510

長さ2.2m、幅80cmを測る土坑である。内部に礫が敷き詰められた状態を確認している。土器や瓦が出土しており、15世紀後半～16世紀前半の遺構と考えられる。





1 ~ 3 SK202	4 ~ 9 SE302	10 ~ 11 SK411
12 ~ 15 SK412	16 ~ 17 SK414	18 ~ 19 SX410
20 ~ 24 SK502	25 SP520	26 ~ 30 SP524
31 ~ 35 SX502	36 ~ 38 SX505	

fig.112 出土遺物実測図（1）

S K512

調査区北西隅付近で検出した幅1.6m、深さ30cmを測る土坑である。炭、焼土とともに土師器皿が出土している。15世紀後半の遺構と考えられる。

S X501

調査区西端で検出した落ち込みで、幅4.0m、深さ40cmを測る。小形の瓦器碗が出土しており、14世紀代の遺構と考えられる。

S X502

調査区中央で検出した、周囲の砂層を掘り下げる直径5mの水ため状の施設である。東側に幅約4mの導水路状の施設を伴っている。

S X505

調査区北西付近で検出した土坑で、幅2.3m、深さ60cmを測る。出土遺物から、16世紀前半の遺構と考えられる。

3. まとめ

今回の調査では、5面の遺構面を確認し、15世紀後半～19世紀の町屋の変遷について確認することができた。

特に16世紀以前の当地域の周辺の状況は、土地利用は認められるものの、明確な遺構は確認できていなかった。しかしながら今回第5遺構面で検出したS X502の示す方向から、後の時代まで使用される町割りについて、15世紀代にまで遡りうることを確認できた。また今回の調査地に道路が整備され、火災による周辺地の焼失（第3遺構面、18世紀前半）とともに道路が拡張され、それとともに建物も配置を変化させていることも判明した。

今回の調査成果からは、以上のように、第4遺構面の町屋形成期（17世紀代）と道路拡張による整備期（18世紀後半）の二つの画期が認められることが明らかとなった。

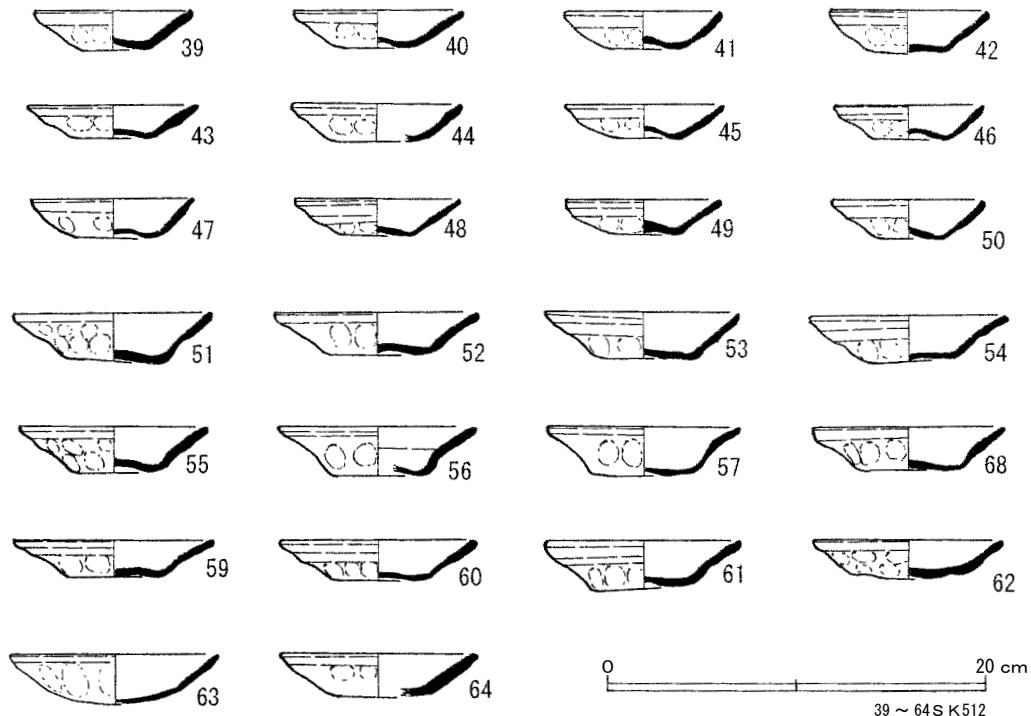


fig.113 出土遺物実測図（2）

15. 兵庫津遺跡 第55次調査

1. はじめに

兵庫津遺跡は、神戸市兵庫区の南部、JR兵庫駅の南東側一帯の広範囲に広がる遺跡である。近年調査例の増加とともに膨大な資料が蓄積されつつあり、古代大輪田泊に初源をもち、以後中世、近世、近代まで港湾都市として繁栄した様相が次第に明らかになりつつある。

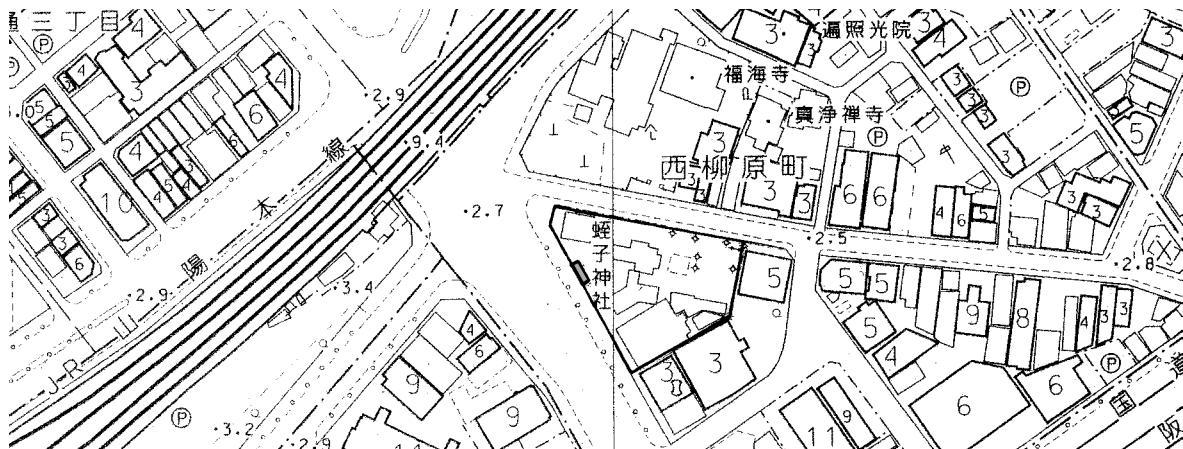


fig.114 調査地位置図 1 : 2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、鳥居建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。今回の調査対象地である蛭子神社敷地内においては、これまでに2度の発掘調査が実施されている。第29次調査では、西国街道の兵庫津への西側出入口にあたる柳原惣門跡と考えられる柱穴などが確認されている。第52次調査では、近世～近代にいたる3面の遺構面が確認されている。

今回の調査では、工事影響深度であるT.P. 1.0mまでにおいて4面の遺構面を確認した。

基本層序

上層より、盛土がT.P. 2.0m付近まで堆積しており、その下面で幕末～明治時代前半の石組み・レンガ敷き水路の層を検出した。この水路は、第29次調査で確認されていたものの延長部分である。この水路の地面を形成しているのは、幕末頃の整地層上であるが、調査区内で明確な遺構は検出していない。

水路と直交して漆喰の建物基礎を検出していることから、水路が側溝であり、当調査地が明治時代においては街路に面する家地であったことが判明した。このことは、現在の神社の敷地が終戦後に西方向に拡張されたという社の沿革とも一致する。『元禄絵図』に記載されている戎社が現在の蛭子神社の敷地よりも南東側に位置したものと考えられる。

幕末の整地層の下層で18～19世紀の整地層が存在し、この層の上面で第1遺構面を確認した。18～19世紀の整地層の下層の整地層上面で、17～18世紀頃と考えられる第2遺構面を確認した。

第2遺構面の基盤層である整地層の下層で検出した15世紀代の遺物を含む遺物包含層の上面で、中世～近世の第3遺構面を確認した。この中世の遺物包含層の下層で白色系砂上面を検出した。この層の上面が第4遺構面であるが、工事影響深度との関係から、全面的に遺構を確認するには至らなかった。この白色系砂が地山層であるかどうかについても、確認できていない。

第1遺構面

18～19世紀の遺構面と考えられる。土坑4基、溝1条、ピット1基を検出した。

土坑

いずれも調査区外に延びるため、本来の形状や規模は不明である。調査区内で検出した規模は、SK01は径1.3m程度、深さ10cm程度、SK02は、径1.0m程度、深さ40cm程度、SK103は径1.5m程度、深さ40cm程度を測る。

SD101

調査区北部で検出した溝で、幅1.2m、深さ10cmを測る。上層で確認した明治時代の水路と直交しており、東西方向に流れる。

第2遺構面

17～18世紀の遺構面と考えられる。井戸1基、ピット4基を検出した。

SE201

直径1.8mを測り、平面形が円形を呈する掘形をもつもので、内部で腐食した曲物の一部を検出している。曲物は外径で直径約84cm、深さ約10cmを測る。底部付近が残存しているのみで、上部は大きく削平されているものと考えられる。近世陶磁器を多く含む。

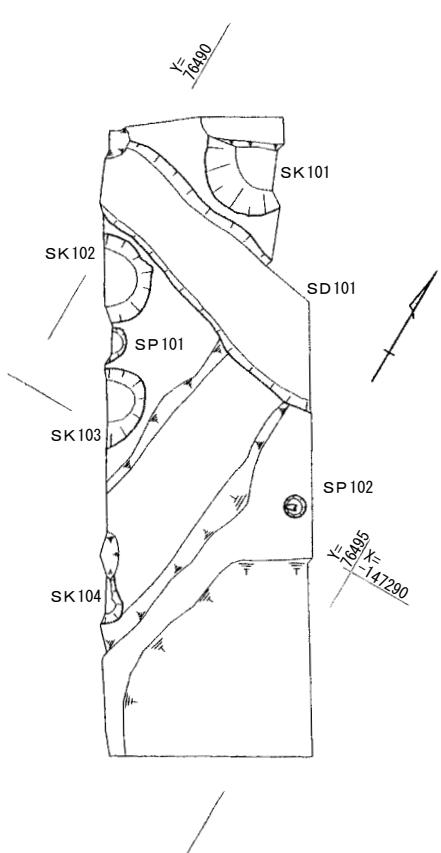


fig.116 第1遺構面全景

fig.115 第1遺構面平面図



fig.117 第2遺構面全景

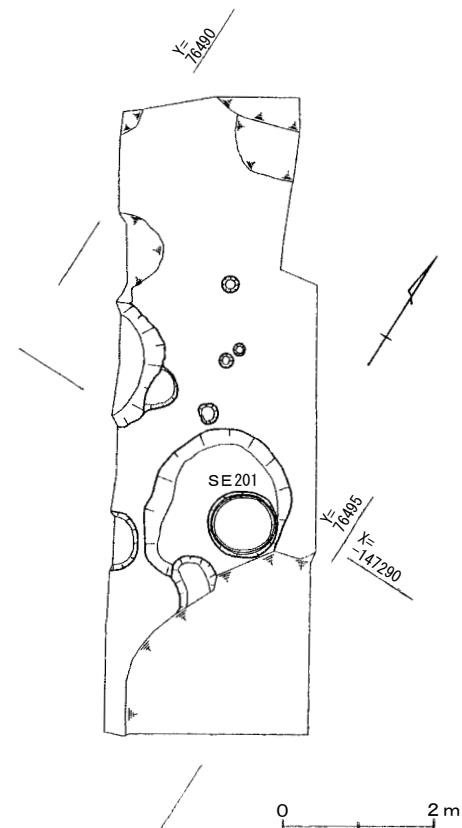


fig.118 第2遺構面平面図



fig.119 第3遺構面全景

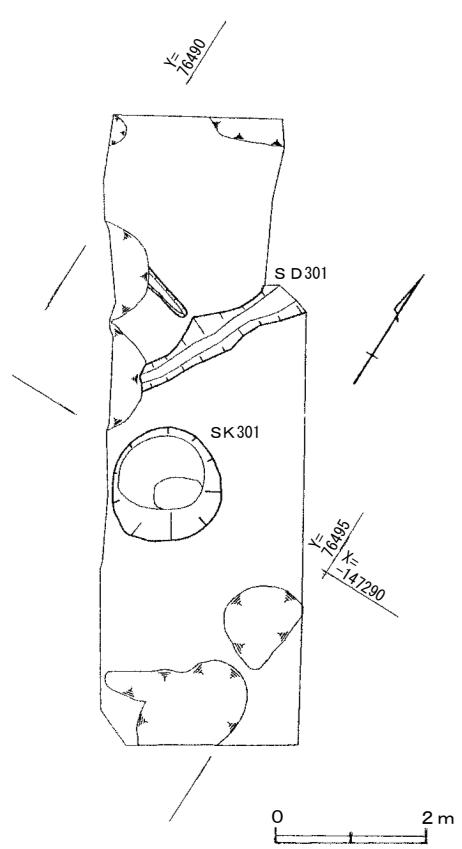


fig.120 第3遺構面平面図

第3遺構面

15～16世紀の遺構面と考えられる。土坑1基、溝2条を検出している。

S K301

直径1.5m程度、深さ30cm程度を測る遺構であるが、近世陶磁器が出土していることから第2遺構面に伴う遺構である可能性も考えられる。

S D301

幅40cm、深さ15cm程度を測り、調査区内を北東－南西方向に流れる。東、西側とも調査区外に延びている。中世の土器、陶磁器が出土している。

第4遺構面

15世紀ないしそれ以前の時期の遺構面と考えられるが、前述のように工事影響深度との関係から遺構検出には至らず、詳細は不明である。上位の遺物包含層から瓦が集中して出土していることから、瓦葺の建物が存在する可能性が高いと考えられる。

3. まとめ

今回の調査では、少なくとも4面の遺構面が存在することが明らかとなった。

検出した遺構のうち、近世に属する時期のものについては、第29次調査において都賀堤のすぐ内側に位置する遺構を確認しており、今回確認した遺構もその延長と捉えてよいものと考えられる。

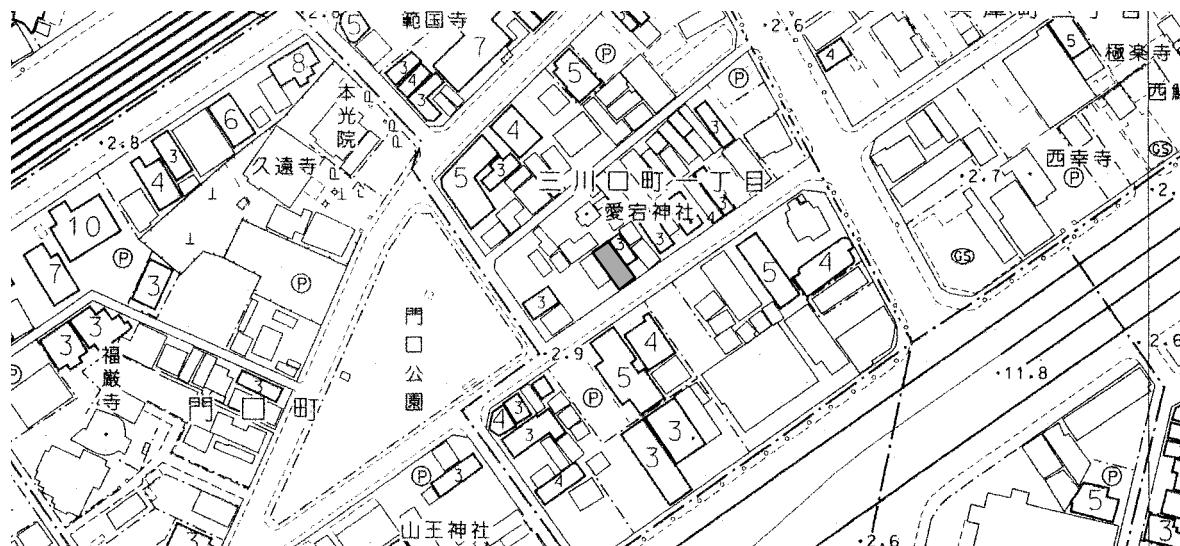
また下層で確認した中世の遺物包含層やその下面の遺構面についても、第29次調査成果との関連が窺える貴重な成果となった。

明治時代の町割り、西国街道との位置関係、『元禄絵図』にも「戎社」として記載されている蛭子神社の社地の比定などについて考えていくうえで、今回の調査成果は貴重な資料となるものといえよう。

16. 兵庫津遺跡 第56次調査

1. はじめに

兵庫津遺跡は、神戸市兵庫区の南部、JR兵庫駅の南東側一帯の広範囲に広がる遺跡である。瀬戸内海に突き出た和田岬によって、波風を避ける天然の良港として古代より栄えた港湾都市遺跡である。近年の調査の進展により、奈良時代の遺構、遺物も確認されているが、質、量とともに遺構、遺物が多く確認されているのは近世以降の港町兵庫津関連のものである。

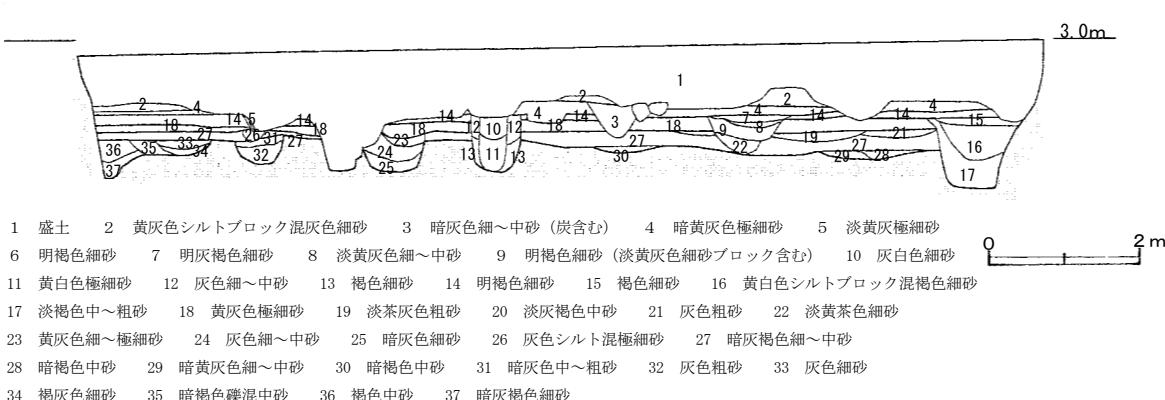


2. 調査の概要

今回の調査は、個人住宅建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。残土置場を確保するため、調査区を2分割して調査を実施した。調査の結果、中世～近世の遺構面を5面確認した。

基本層序

一部に搅乱を受けているものの遺構面は比較的良好に遺存している。現地表下60cm前後で検出した黄灰色極細砂 (fig. 122-4層) 上面で第1遺構面を確認した。さらに下層の暗褐色細砂 (同、14層) 上面で第2遺構面、黄灰色極細砂 (同、18層) 上面で第3遺構面を確認した。また、暗灰褐色細～中砂 (同、28層) 上面で第4遺構面を、その下面で第5遺構面を確認した。



第1遺構面

幕末～明治時代（19世紀代）の遺構面と考えられる。

SE101

調査区中央で検出した、直径1.2mを測り、平面形は円形を呈する。壁面がほぼ垂直に立ち上がり、平面形が円形であることから井戸である可能性が考えられるが、調査中に湧水は認められなかった。最下層にて集石状の礫塊を確認している。

第2遺構面

18世紀後半以降の遺構面と考えられる。

SD201

調査区中央やや南よりで検出した、幅30cm、深さ20cmを測る溝で、北東～南西方向に流れる。本来石組みの溝であったものと考えられる。上層において確認していた昭和20年代まで存在していた石組み溝と近接し、かつ同様の方向を指向するものであり、また『元禄絵図』に描かれた周囲の町割りの方向ともほぼ一致する。SD201の存在から、調査区中央付近が町屋の境界付近にあたり、かつこの地域の町割りが、元禄期以降昭和20年代までほぼ踏襲されていたものと考えられる。

SD201に直交する石列も一部確認している。

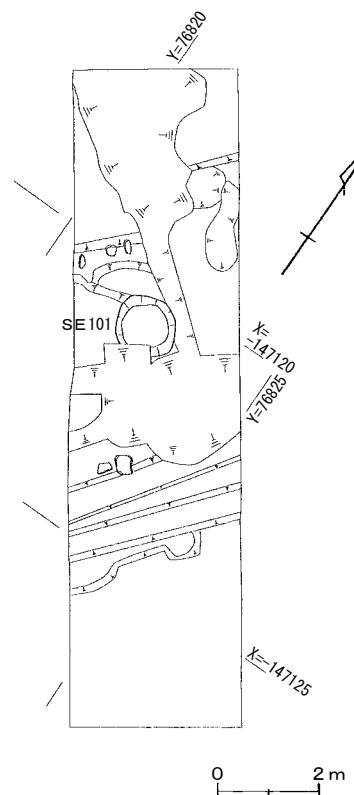


fig. 123 第1遺構面平面図

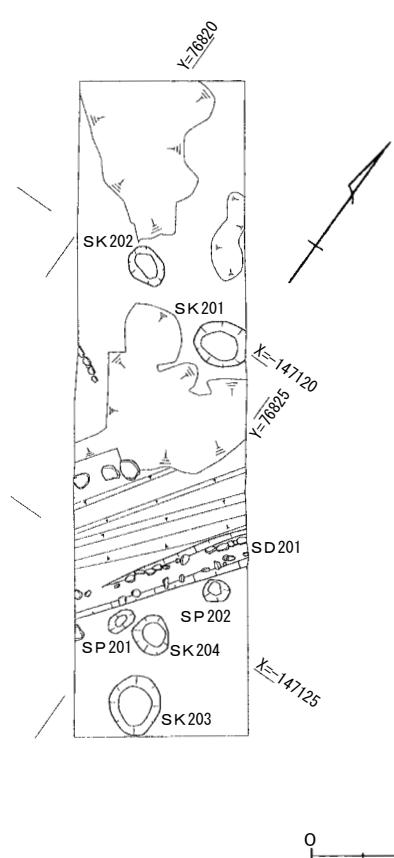


fig. 124 第2遺構面平面図



fig. 125 南半部第2遺構面全景



fig. 126 SD201 全景

SK201

一部調査区外に延びるが、長径1.0m、短径0.9m、深さ10cmを測り、平面形が橢円形を呈すると考えられる土坑である。炭や礫が出土している。18世紀後半の遺構と考えられる。

SK202

長径0.8m、短径0.6m、深さ20cmを測る土坑である。平面形は橢円形を呈する。18世紀後半の遺構と考えられる。

SK203

長径1.2m、短径0.9m、深さ5cmを測る土坑である。平面形は橢円形を呈する。18世紀末の遺構と考えられる。

SK204

長径0.8m、短径0.7m、深さ20cmを測る土坑である。炭や礫が出土している。18世紀後半の遺構と考えられる。

SK405

東側は搅乱によって失われ、西側は調査区外に延びているため本来の形状や規模は不明である。第4遺構面検出時に確認した遺構である。調査区の土層の断面観察からは第2遺構面に伴うものと判断できる。残存する規模は、長径0.9m、短径0.6m、深さ5cmを測る土坑である。18世紀末の遺構と考えられる。

SP201、202

SD201の南側でピット2基を検出した。溝に沿うかたちで並んでおり、溝に接するように建物が存在していた可能性が想定できる。

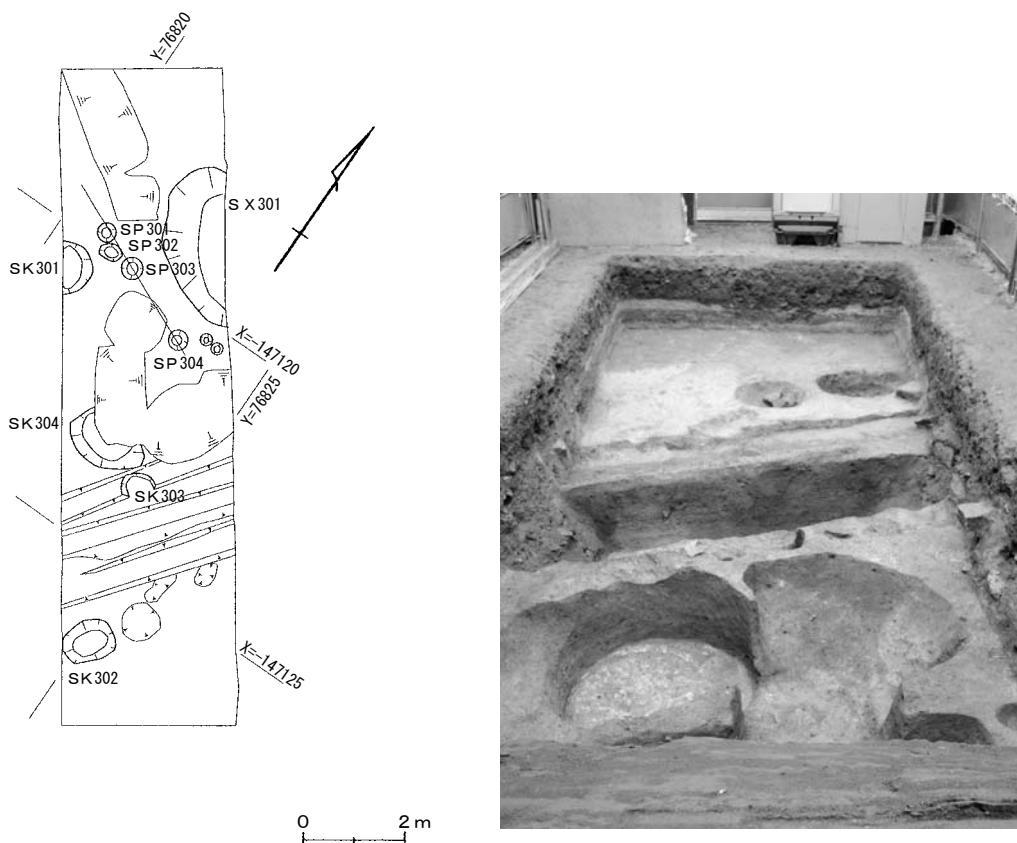


fig.127 第3遺構面平面図

fig.128 南南部第3遺構面全景

第3遺構面

18世紀前半を中心とする時期の遺構面と考えられる。土坑、ピットを確認している。

S K301

西側が調査区外に延びるため本来の形状や規模は不明である。調査区内での規模は、径1.1m、深さ15cmを測る。18世紀前半の遺構と考えられる。

S K302

長径1.0m、短径0.8m、深さ15cmを測り、平面形が不整橢円形を呈する土坑である。炭や礫などが出土している。18世紀前半の遺構と考えられる。

S K303

南側が搅乱によって失われており、本来の形状や規模は不明である。残存する規模は、径0.6m、深さ30cmを測る。18世紀前半の遺構と考えられる。

S K304

北東側が搅乱によって失われており、本来の形状や規模は不明である。調査区内での規模は、径1.6m、深さ60cmを測る。18世紀後半の遺構と考えられる。調査区の土層の断面観察からは第2遺構面に伴うものと判断できる。

S X301

東側が調査区外に延びるため本来の形状や規模は不明である。調査区内での規模は、長径2.7m、深さ20cmを測る土坑である。18世紀前半の遺構と考えられる。

S X402

調査区北西隅で検出した土坑で、調査区外に延びるため本来の形状や規模は不明である。調査区内での規模は、径1.0m、深さ60cmを測る。埋土は砂層であり、井戸である可能性が考えられる。第4遺構面検出時に確認した遺構である。調査区の土層の断面観察からは第3遺構面に伴うものと判断できる。出土遺物も18世紀前半の時期のものである。

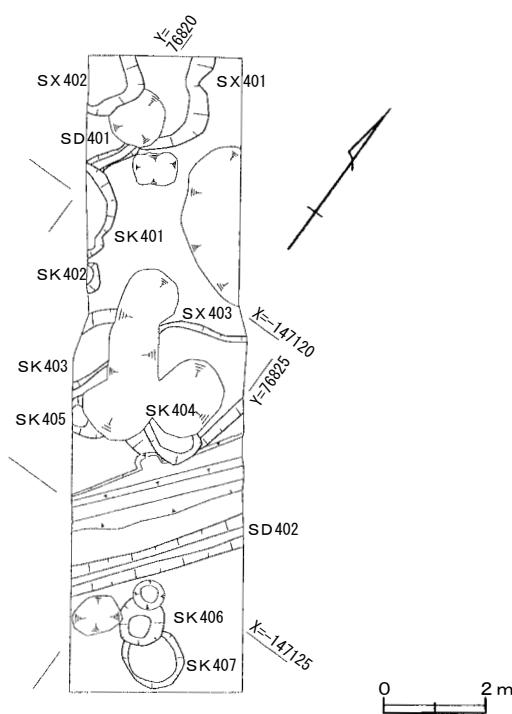


fig. 129 第4遺構面平面図



fig. 130 北半部第4遺構面全景

第4遺構面

17世紀を中心とする時期の遺構面と考えられる。土坑や溝などを検出したが、いずれの遺構も調査区外に延びたり、あるいは攪乱の影響を受けており、本来の形状や規模がわかるものはない。

S D402

第2遺構面S D201とほぼ同位置で検出した溝である、幅50cm、深さ10cmを測る。

S K401

調査区内での規模は、長径2.0m、深さ10cmを測る土坑である。

S K402

調査区内での規模は、長径0.6m、深さ10cmを測る土坑である。

S K403

調査区内での規模は、長径0.7m、深さ20cmを測る土坑である。

S K404

調査区内での規模は、長径0.8m、深さ40cmを測る土坑である。

S K406

調査区内での規模は、長径0.9m、深さ10cmを測る土坑である。炭や礫などが出土している。

S K407

調査区内での規模は、径1.1m、深さ10cmを測る土坑である。炭や礫などが出土している。

S X401

調査区内での規模は、長径1.8m、深さ10cmを測る土坑である。第3遺構面S X302によって切られており、17世紀代の遺構と考えられる。

S X403

調査区中央で検出した。調査区内での規模は、長径2.4m、深さ20cmを測る。

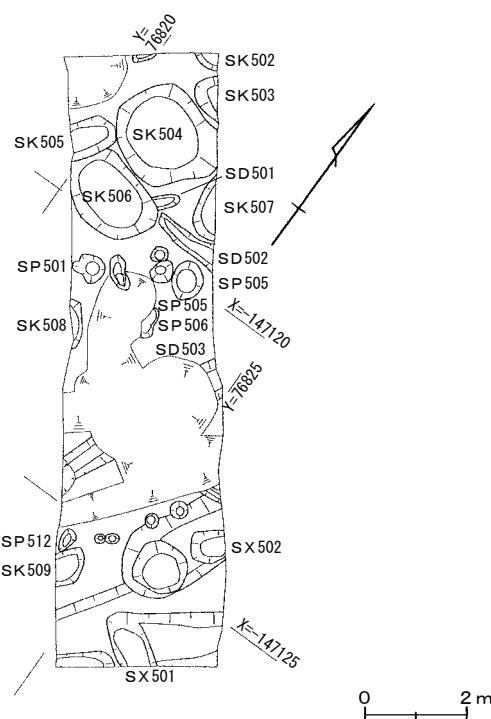


fig.131 第5遺構面平面図



fig.132 南南部第5遺構面全景

第5遺構面

16～17世紀前半の遺構を同一面で確認している。土坑や溝などを検出している。

S K501

北側は調査区外に延びる。調査区内での規模は、径0.4m、深さ20cmを測る土坑である。

S K502

北、東側は調査区外に延びる。調査区内での規模は、径0.4m、深さ10cmを測る土坑である。

S K503

東側は調査区外に延びる。調査区内での規模は、径0.4m、深さ10cmを測る土坑である。

S K504

東側は調査区外に延びる。調査区内での規模は、長径1.8m、短径1.7m、深さ30cmを測る土坑である。

S K505

長径0.7m、深さ10cmを測る土坑である。17世紀前半の遺構と考えられる。

S K506

長径1.9m、短径1.3m、深さ30cmを測る土坑である。16世紀後半の遺構と考えられる。

S K507

長径1.2m、深さ10cmを測る土坑である。16世紀後半の遺構と考えられる。

S K508

長径0.9m、深さ10cmを測る土坑である。16世紀半ば頃の遺構と考えられる。

S K509

長径0.7m、深さ20cmを測る土坑である。16世紀半ば頃の遺構と考えられる。

S D501

幅0.3m、深さ10cmを測る溝である。

S D502

幅0.5m、深さ20cmを測る溝である。16世紀半ば頃の遺構と考えられる。

S X501

長径1.6m、深さ50cmを測る。いくつかの土坑が切りあっているものと考えられるが、調査段階で切り合い関係は認められず、ひとつの遺構として取り扱った。焼土を多く含んでいる。16世紀前半の遺構と考えられる。

S X502

調査区南部で検出した。幅1.4m、深さ40cmを測る土坑である。S X501を切っている。大量の焼土を含む。16世紀代の遺構と考えられる。

3. まとめ

今回の調査では、5面の遺構面を確認し、16～19世紀の遺構を検出した。

第54次調査で確認されていた側溝を伴う道路とは若干異なり、道路の路肩を石列で補強し、周囲より1段高くなる道路を確認したことにより、兵庫津全体を見渡した場合は、いくつかの道路についてはパターンがあるものと考えられる。

また、今回の調査地を『元禄絵図』と照合する作業を行ったところ、北東～南西方向の道路と一部北西～南東方向の道路に接する部分に一致し、調査成果の合致とともに、絵図の精度の高さを追認することができたといえよう。

17. 塚本遺跡 第5次調査

1. はじめに

塚本遺跡は、旧湊川右岸の沖積地に立地する、主に弥生時代及び中世の集落遺跡として知られている遺跡である。1992年に第1次調査が実施されて以来、これまでに4次にわたる発掘調査が実施されているが、未だ調査例が少なく、遺跡の全体の様相については明らかではない。

これまでの調査の結果、縄文時代晚期の溝や、弥生時代前期の土坑、弥生時代中期の溝、落ち込み、中世の土坑、ピットなどの遺構が検出されている。



fig.133 調査地位置図 1 : 2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、個人住宅建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。残土置場を確保するため、調査対象部分を3分割し、順次調査を実施した。

基本層序

上層より、表土、整地土、1945年の空襲時の焼土層、焼土に覆われる空襲時以前の表土が堆積し、さらに下層（3a層下面）で第1遺構面を確認した。さらに同3b層下面（3c層上面）で第2遺構面を確認した。氾濫土である3c層下の4a層上面で第3遺構面（上）を確認し、水田畦畔や溝を検出した。水田耕土である4a層を除去した段階で第3遺構面（下）を確認した。4b層には少量の縄文土器が含まれる。4c層は河川内堆積層である。

第1遺構面

当地の条里方向に対応する溝2条を検出した。近世ないし近代の遺構と考えられる。

第2遺構面

西北西一東南東に流れる幅0.7~1.2m、深さ20cm程度を測る溝1条（SD04）を検出した。

第3遺構面（上）

水田畦畔、溝（SD05）などを検出した。

SD05は、幅2.8～3.0m、深さ約50cmを測る。西北西—東南東に流れる。第2遺構面SD04と重なる位置で検出している。南肩部で弥生時代末ないし古墳時代初頭の土器が出土している。SD05の両側には併行して畦が伸びており、南側にはこれに直交する畦も認められる。

第3遺構面（下）

柱穴2基を検出している。

第3遺構面（下）より下層

4b層には縄文時代晚期の土器が包含されるが、これに対応する遺構面は確認できなかった。4c層は斜交層理を呈し、この層が河川内で堆積した土層であることを確認した。

3.まとめ

今回の調査では、縄文時代晚期から神戸空襲に至るまで、さまざまな時代の人びとの痕跡を確認することができた。防空壕内に蒸し焼きとなった状態で検出された遺物から、当時の生活の一端を窺いしることができるほか、検出状況からは、空襲のすさまじさ、悲惨さを如実に感じ取ることができる。

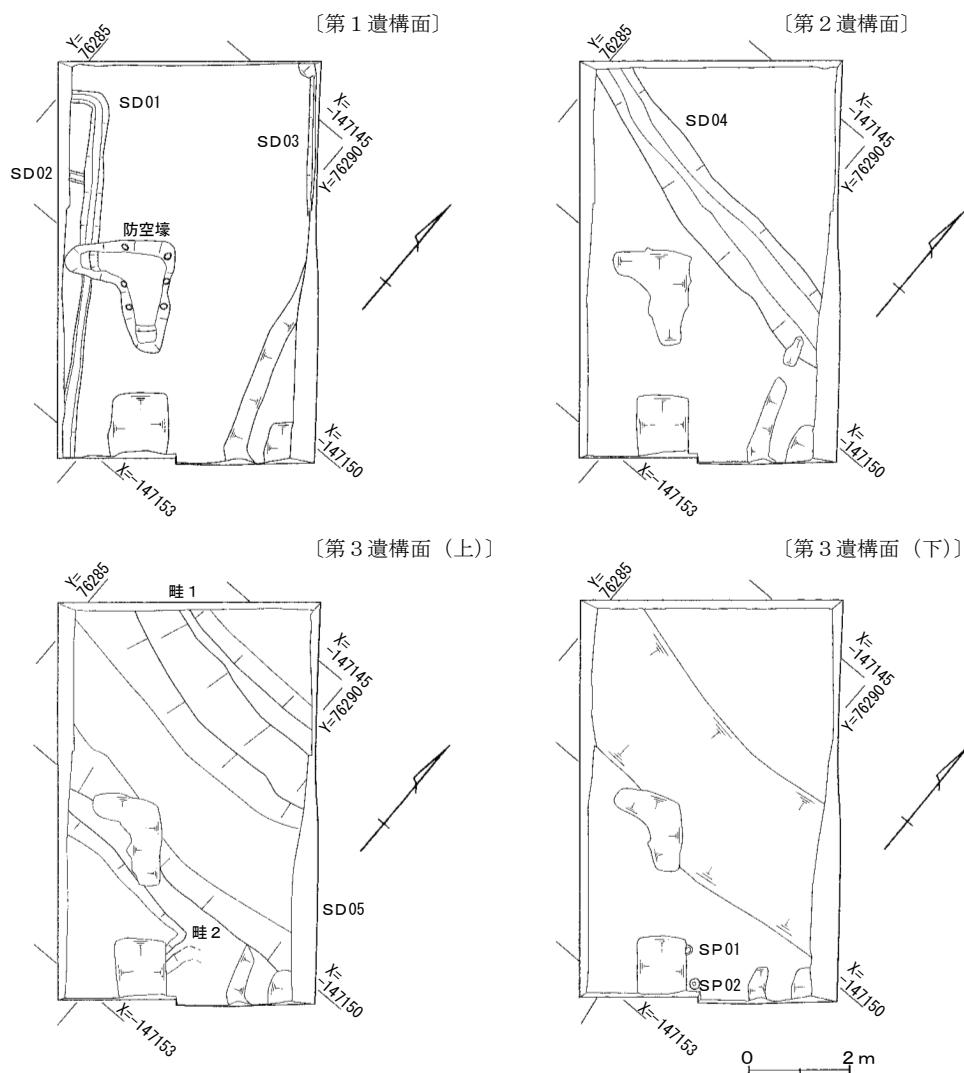


fig.134 第1～3遺構面平面図

18. 上沢遺跡 第59次調査

1. はじめに

上沢遺跡は、昭和63年度に都市計画道路房王寺線街路築造工事に先立って実施した試掘調査で発見された遺跡である。以後、60回近い発掘調査が実施されてきた。

これまでの調査の結果、上沢遺跡における集落形成は、遺跡東部に、弥生時代前期～中期において、住居跡などは確認されていないものの、遺構・遺物が集中する地区があり、周辺に当該時期の集落域が存在することが想定されている。また、弥生時代終末期～古墳時代初頭、そして古墳時代前期～後期には、遺跡中央部の東西450m、南北200mの丘陵緩斜面に堅穴建物が集中して建てられている。さらに、飛鳥時代～平安時代には、遺跡の北西側に存在する白鳳時代の瓦が出土した室内遺跡(房王寺廃寺)が知られ、それに関連すると考えられる掘立柱建物群、井戸などが検出されている。当該時期における注目される調査成果としては、第33次調査において奈良時代の井籠組みの井戸から出土した銅鏡があげられる。



fig.135 調査地位置図 1 : 2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、共同住宅建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。今回の調査地点は、第54次調査地点の西側、第55次調査地点の山手幹線道南側にあたり、当遺跡の古墳時代集落域の南西界を画すると考えられる地域に位置している。

残土置場を確保するため調査区を4分割して調査を行った。北西部の調査区を第1トレンチ、北東部分を第2トレンチ、南東部分を第3トレンチ、南西部を第4トレンチと呼称する。

基本層序

本来北西から南東に傾斜する地盤に厚さ60～150cm前後の盛土を行っている。この造成の際に現代の耕土は削平され数cmを残す程度であり、耕土以下約80～100cmまでは中世～近世の耕土が堆積している。その下層で、暗灰青色粘性土〔須恵器包含〕、暗灰色粘性砂質土〔古式土師器包含〕、黒灰色粘性砂質土〔古式土師器包含〕の各遺物包含層を検出した。上層遺物包含層である暗灰青色粘性土、暗灰色粘性砂質土上面では遺構は検出していないが、黒灰色粘性砂質土上面において遺構を検出した。これら遺物包含層下(現地表下2.1m)には堅緻な緑灰色細砂の地山がみられる。なおその下層30cmに黒灰色極細シルトが堆積しているが遺物等の検出はなかった。さらに下層には緑灰色砂礫バイラン土が観察できる。

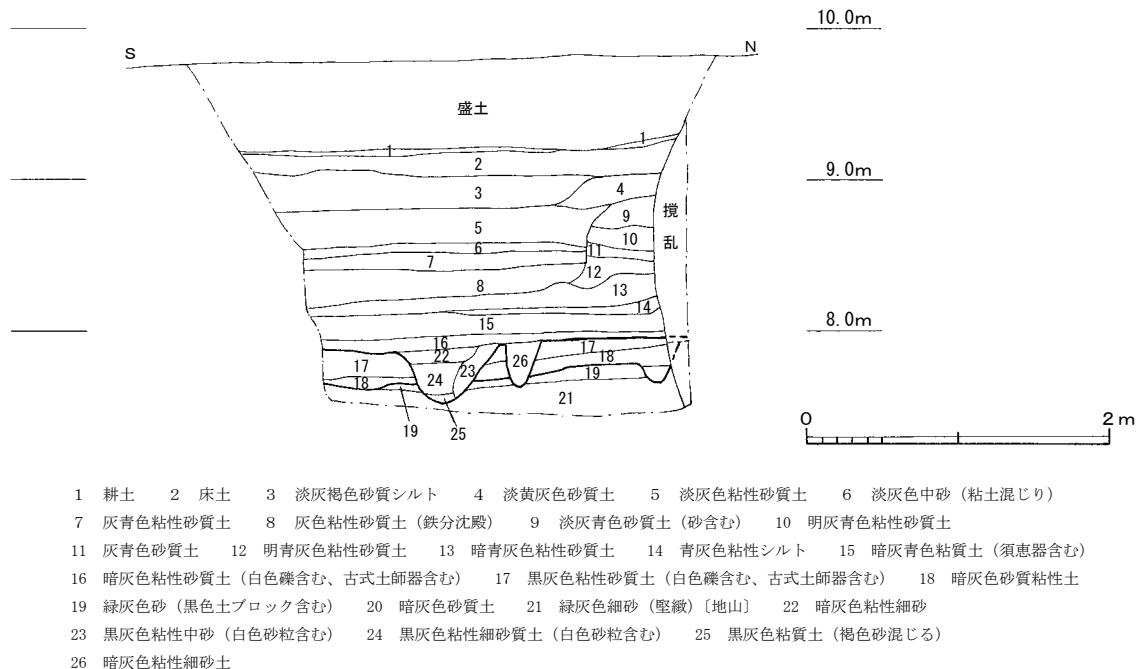


fig.136 第1トレーニング西壁土層断面図

第1トレーニング

遺物包含層下層の緑灰色細砂上面で溝2条、ピット1基を検出したが、他の層位では遺構は確認していない。

S D101

第1トレーニング中央部南よりで検出した幅45cm、深さ40cmの東西方向に流れる溝である。断面形はU字形を呈する。埋土は黒灰色粘性砂を主体とし、土師器壺1個体の破片が出土している。なお、SD101は黒灰色粘性砂質土上面から掘り込まれており、SD102埋没後掘削されている。

S D102

第1トレーニング中央で検出した断面U字状の溝である。トレーニング西北隅部で鉤形に西に屈折する。幅15cm、深さ10~15cmを測る。溝の東側は緑灰色細砂上面から掘り込まれているが西側は緑灰色砂（黒色土ブロック）から掘り込まれ、緑灰色砂（黒色土ブロック）が床土とすれば方形堅穴建物の周壁溝の可能性も考慮できる。土師器片が出土している。

S P101

第1トレーニング北東隅部で検出した東西35cm以上、南北65cm以上、深さ5cm前後を測る平面形が橢円形を呈する落ち込みである。断面形は皿形をしている。埋土は暗灰色砂質土で、須恵器片が出土している。

第2トレーニング

南に傾斜する緑灰色細砂上面で溝状の落ち込み1条、ピット3基を検出した。

S D201

第2トレーニング南辺沿いで検出した南側に緩やかに落ち込み、東側で鉤形に北に屈折する溝である。幅50cm以上、深さ20cm以上を測る。平面的には緑灰色細砂上面で検出したが、トレーニング西壁土層断面の観察結果から、緑灰色細砂の上に被覆する黒褐色粘性土上面から掘り込まれている。古式土師器が多量に出土した。

S P201

第2トレンチ中央西よりで緑灰色細砂上面において検出した、直径35cmを測り平面形が円形を呈するピットである。深さは10cm前後を測る。土師器片が出土している。

S P202

第2トレンチ北西隅で検出した、平面形がやや不定形を呈するピットである。規模は、東西40cm、深さ12cm前後を測るが、遺構の北半は調査区外となる。遺物は出土していない。

S P203

第2トレンチ南辺際で検出した、平面形が円形を呈するピットである。S D201埋没後の上面から掘り込まれている。直径30cm、深さ16cmを測る。土師器片が出土している。

第3トレンチ

現地表下1.5mまでを重機によって掘り下げ、やや南に流下する暗灰色粘性砂質土（古墳時代須恵器・土師器含む）、黒灰色粘性砂質土（古式土師器含む）各遺物包含層上面を精査した結果、方形の掘形をもつ柱穴1基を検出した。さらに南に傾斜する緑灰色細砂（黒色土ブロック）上面で土坑状の落ち込み1ヶ所、ピット1基を検出した。

S K301

調査区南東隅で検出した、平面形が橢円形を呈する土坑である。土坑の南東側は調査区外へ延びている。土坑は、長径80cm以上、短径30cm以上、深さ30cmを測り、断面形は函形を呈する。古墳時代初頭の土師器片が出土している。

S P301

調査区南西部で検出した、平面形が方形を呈する掘形をもつ柱穴である。掘形は一辺50cm、深さ20cmを測り、ほぼ中央に径18cm前後の柱痕跡を残している。掘形内から土師器細片が出土している。

S P302

調査区中央北よりで検出した、長径18cm、短径10cmを測る、平面形が橢円形を呈するピットである。深さは3cm前後を測る。



fig.137 第1トレンチ全景



fig.138 第4トレンチ全景

第4 トレンチ

緑灰色細砂(黒色土ブロック)上面まで堀下げた結果、溝1条、ピット列1条を検出した。

S D401

調査区西部を南北に流れる溝である。断面で観察できる溝上端幅160cm、底幅30cm、深さ100cm前後の断面V字形の溝である。溝内の埋土は灰褐黄色砂礫で、土師器片が少量出土している。

S D402

調査区中央部で検出した南東側調査区際で南側に屈折する直線的な溝である。幅28cm、深さ4~7cmを測る。土師器片が出土している。

ピット列

調査区中央で検出した柱穴状ピット4基で構成される柱列である。掘立柱建物とすれば南北2間以上、東西1間以上が推定される。柱間隔は南北で2.4m等間、東西で2.1mを測る。掘形は一辺40cm、深さ25cm前後を測る。一番北側の柱穴掘形から多量に土師器片が出土している。出土遺物の中に須恵器は認められない。

3. まとめ

今回の調査では、調査の範囲が狭小であり、各調査区が分離しているため検出した各遺構の関連、性格、層序関係を明確することができなかった。第1トレンチにおいては古墳時代前期の甕が出土した溝を検出した。また、竪穴建物の周壁溝の可能性が考えられる溝(S D102、402)、掘立柱建物の一部と考えられる柱列を第4トレンチで検出した。さらには出土遺物は、弥生土器、古式土師器、須恵器、瓦が280入りコンテナ13箱分出土した。以上のような遺構・遺物の検出状況は、調査区北側に近接する第55次調査における遺構・遺物の様相に近く、上沢遺跡は都市計画道路山手幹線の南側においても北側と同様な遺跡の広がりをみせることができた。

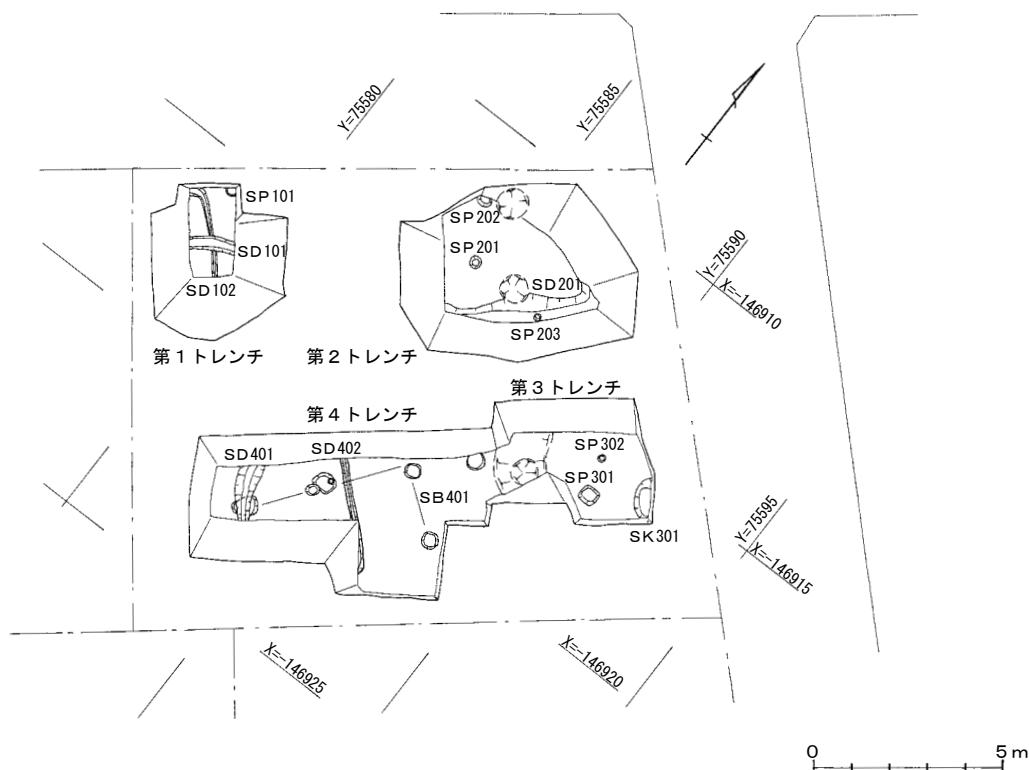


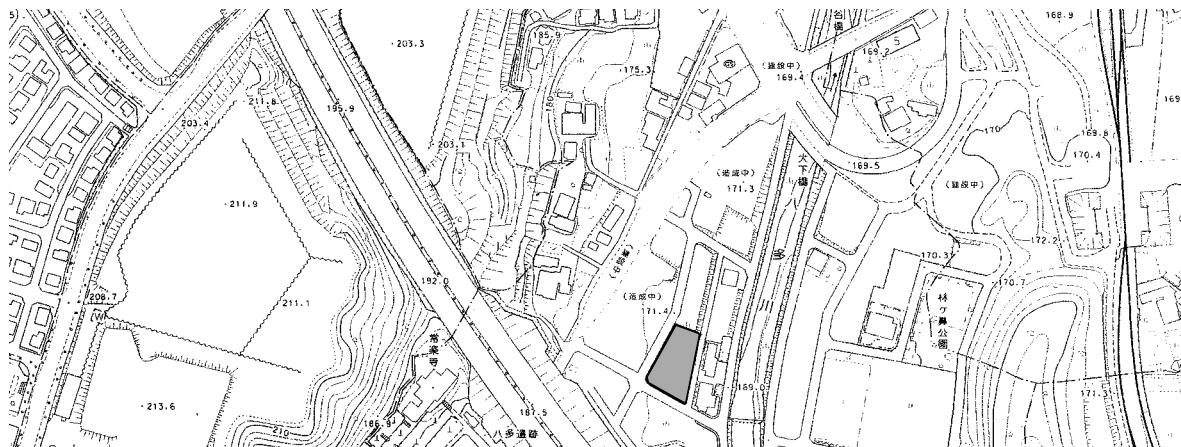
fig.139 調査区平面図

19. 中遺跡 第30次調査

1. はじめに

中遺跡は、八多川によって形成された沖積地や河岸段丘上に立地し、古墳時代及び平安時代～中世の集落遺跡として知られている。

当遺跡は、昭和46年に中国縦貫自動車道建設工事に伴って第1次調査が実施されており、以来、区画整理事業や個人住宅建設に伴って30回近い調査が実施されてきている。



Grid9

東端部で溝1条（S D02）を検出した。調査区外に延びるため、本来の規模は不明である。深さ50cm以上を測る。中世の土師器が出土している。

Grid10

ピット2基（S P06、07）、落ち込み1ヶ所（S X03）を検出した。

S P06は、直径20cm、深さ22cmを測る。S P07は直径40cm、深さ23cmを測る。ピットからは遺物は出土していない。

S X03は、調査区外に延びるため、本来の規模は不明である。中世の須恵器が少量出土している。

Grid12

南端部で、直径40cm、深さ40cmを測る柱穴1基（S P08）を検出した。底部で、根石を確認している。

Grid13

搅乱により調査区東半部は遺構面まで失われているが、西半部において遺構を検出した。

直径15～40cm、深さ20～40cmを測るピット（S P09～14）、深さ20cm以上を測る土坑（S X03）を検出している。いずれの遺構からも土器の碎片しか出土していないが、中世頃の遺構と考えられる。

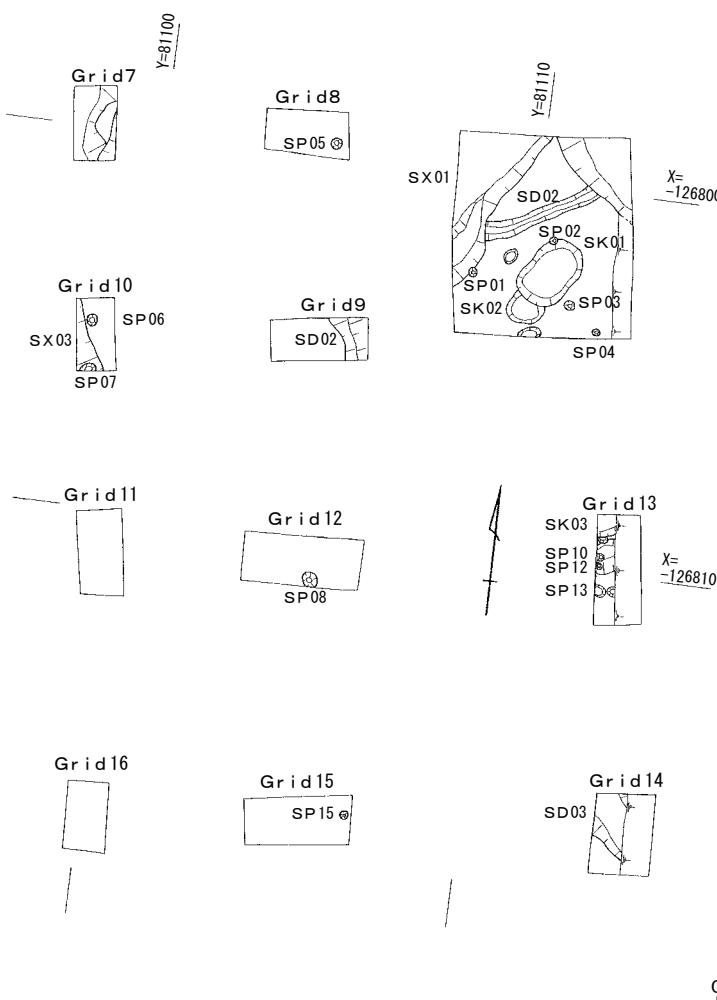


fig.142 遺構平面図

Grid14

搅乱により調査区東半部は遺構面まで失われているが、西半部において遺構を検出した。北西—南東方向に流れる溝1条（S D03）を検出した。調査区外に延びており、東肩部も確認できていない。幅1.4m以上、深さ53cmを測る。古墳時代後期頃の須恵器が出土している。

Grid15

直径20cm、深さ20cmを測るピット1基（S P15）を検出した。

調査区1

現地表面下約140cmで遺構面を確認し、土坑2基、溝1条、落ち込み2ヶ所、ピット4基などを検出した。また、遺物包含層からは中世の遺物が多く出土している。

調査区中央で土坑1基（S K01）を検出した。長径1.9m、短径1.28m、深さ5cmを測り、平面形は小判形を呈する。古墳時代後期の須恵器坏身が出土した。

北西部で北西側に落ちる落ち込み（S X01）を、北東部で北東側に落ちる落ち込み（S X02）を検出した。ともに深さ30cm以上を測り、中世の土器が多く出土している。

S X01、02に切られるかたちで溝1条（S D01）を検出した。幅40cm、深さ18cmを測り、東へ流れる。

そのほか、直径20～30cm、深さ10～25cmを測るピット4基（S P01～04）を検出したが、建物としてのまとまりは認められない。遺物も碎片が出土しているのみであり、時期の特定は困難である。



fig.143 Grid10 全景



fig.144 Grid13 全景

3. まとめ

今回の調査は限定された範囲において実施したものであったが、Grid 8・12では根石を施した柱穴を確認しており、掘立柱建物の柱穴と考えられる。今回の調査範囲の中のみでは建物の規模を示すことはできないが、今回の調査地が中世の集落域の中に確実に含まれることが明らかとなったことは大きな成果といえよう。また調査区1についても多くの出土遺物と遺構を検出しているため周辺にも同様の遺構の広がりが想定できる。

今回の調査区の周辺の街路部分については、兵庫県教育委員会による発掘調査が実施されており、今回の調査地の南西側の地区において中世の掘立柱建物2棟などの遺構が確認されている。また今回の調査地の東側の地区における調査では、古墳時代後期の竪穴建物などの遺構が検出されている。今回の調査においても当該時期の遺構を検出していることから、古墳時代の集落域の広がりについても今後さらに検討する必要があるであろう。

一方、今回の調査区の北半部の地区では遺構・遺物のひろがりが散漫な状況が窺え、北側には遺跡が広がる可能性は低くなった。

各時期における当遺跡の状況について、今後も周辺地区の調査成果も踏まえながらさらに検討を加えていく必要があろう。

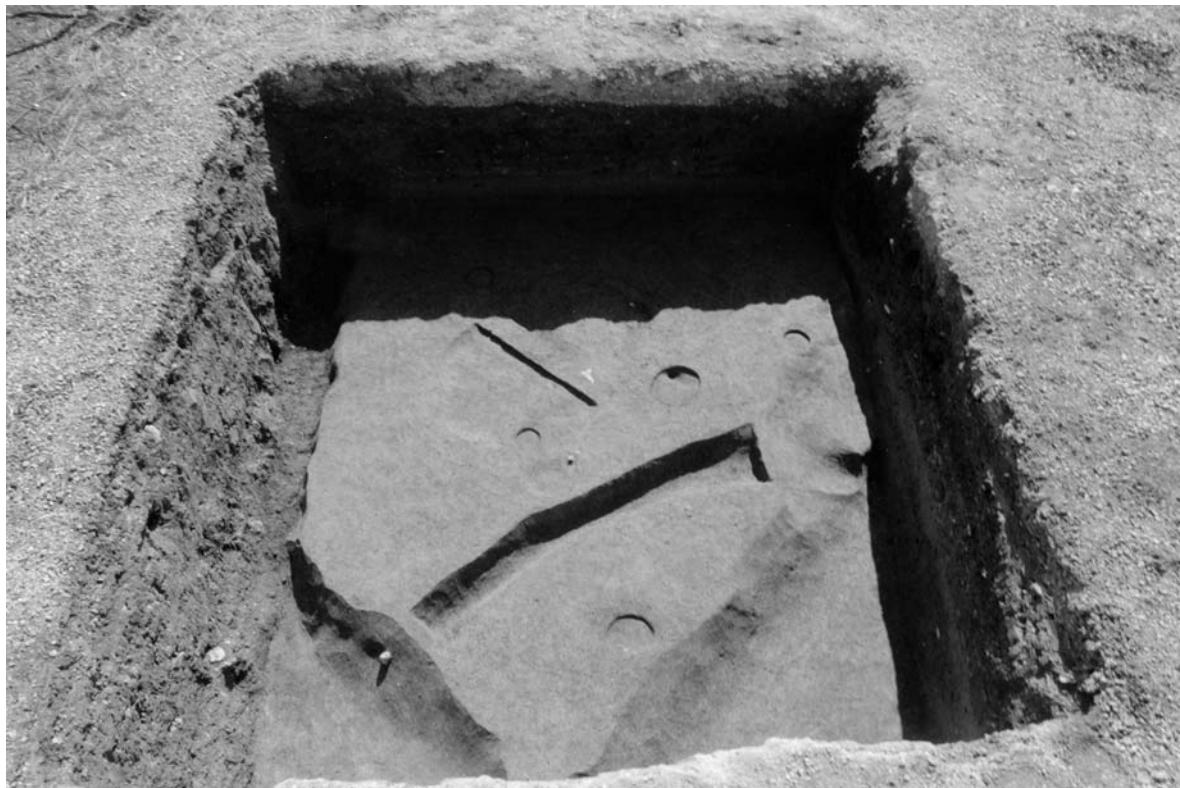


fig.145 調査区1全景

20. 山田・中遺跡 第7次調査

1. はじめに

山田・中遺跡は、1984年の山田小学校建替え工事に伴って実施された2次にわたる調査で発見された遺跡である。第1次調査では、奈良時代～鎌倉時代と考えられる掘立柱建物2棟や、掘立柱建物に近接して不定形の焼土坑が検出されている。この不定形焼土坑から鉄滓が出土したほか、周辺から白磁碗・鉄製紡錘車・砥石などが検出されている。第1次調査地の南東側で実施した第2次調査では、7世紀中頃の竪穴建物1棟、平安時代末期～鎌倉時代の掘立柱建物7棟、土坑墓など墓跡と考えられる遺構4基が検出されている。

また、主要地方道箕谷・三木線築造工事に伴う発掘調査では古墳時代初頭の焼失竪穴建物1棟、古墳時代後期の竪穴建物2棟、平安時代～鎌倉時代の掘立柱建物7棟が検出されている。

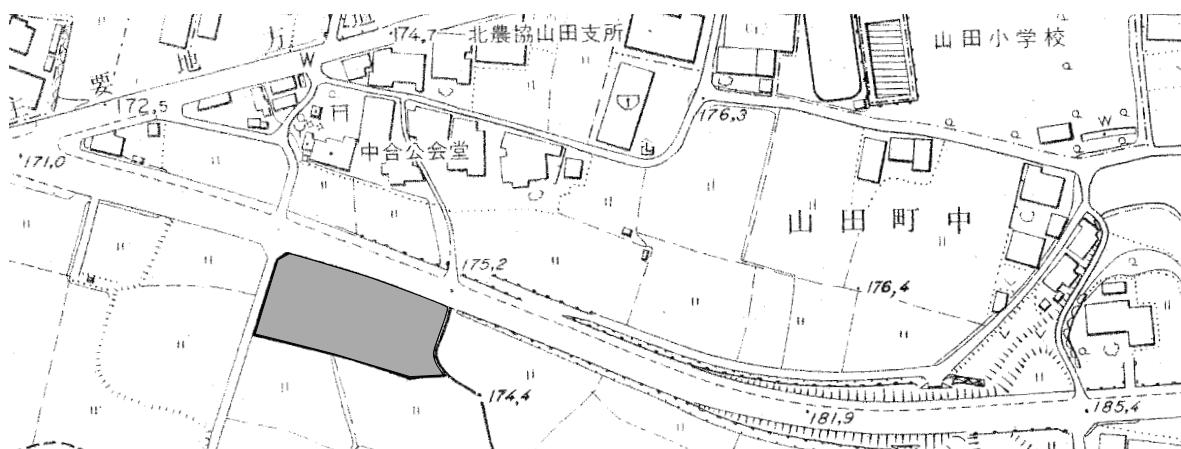


fig. 146 調査地位置図 1 : 2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、店舗建設に伴って実施したもので、工事によって影響を受ける擁壁築造部分について発掘調査を実施した。今回の調査地は、北東から南西に傾斜する自然堤防帶の西端にあたり、東から西に段となって傾斜する2枚の水田である。調査は、西側水田の西辺から開始し、西辺部を第Iトレンチ、西側水田南辺を第IIトレンチ、高位の東側水田南辺を第IIIトレンチ、東辺部を第IVトレンチと呼称して調査を実施した。

基本層序

調査地の層序は、厚さ約20cm前後の現耕土下に灰色粘性砂質土・淡灰色粘性砂質土の旧耕土が厚さ20cm前後で各水田に水平堆積している。ただ、西側水田の第Iトレンチ北西隅では、地山である暗黄褐色粘質土が緩やかに北側に傾斜し、トレンチ北端から7mまでの間に暗茶褐色粘性砂質土が堆積している。この暗茶褐色粘性砂質土の下面からは、溝状遺構2条、落ち込み1ヶ所を検出したが、土師器細片が出土するものの、時期等遺構の性格を明確に示す遺物は出土していない。その他の各トレンチでは、旧耕土直下の地山面で、第IIトレンチでは、溝1条、溝状遺構1条、柱穴掘形6基を、第IIIトレンチでは、不明土坑2基、柱穴掘形3基、ピット1基を検出した。これらの遺構上面に堆積する旧耕土内からは、古墳時代初めの土師器及び古墳時代後期～平安時代の須恵器が出土している。第IVトレンチでは現耕土直下が地山となり、現在の水田の排水用暗渠を検出した。

SD01

第Ⅰトレンチ中央部北よりで検出した幅1.0m、深さ15cmの東西流する溝である。断面形は皿形をしている。埋土は暗茶褐色粘性砂質土（灰褐色砂ブロック）で、土師器片が出土している。

SD03

第Ⅰトレンチ北部で検出した幅30～60cm、深さ10cmを測る、東西方向に流れる溝である。埋土は淡褐灰色砂質土（黄灰色土ブロック）で、土師器片が出土している。

SD05

第Ⅱトレンチ東部、調査区北壁沿いで検出した、溝もしくは不定形の土坑と考えられる落ち込みである。幅55cm前後、深さ20～40cmを測る。埋土は灰茶褐色粘性砂質土で、奈良時代の須恵器が出土している。

柱穴

第Ⅱトレンチの中央から東で8基検出した。このうち西側の柱穴2基は60×70cm、深さ50cmを測り、平面形が方形を呈する掘形をもつもので、柱痕が明瞭に残る。特にP4では柱の抜き取り痕跡が確認できる。その他の柱穴は直径30cm前後、深さ40cm前後の平面形が円形を呈する掘形をもつ。いずれの柱穴も建物としてのまとまりは認められない。

SX01

第Ⅲトレンチ中央西よりで検出した、平面形が橢円形を呈する土坑である。長径85cm、短径65cm、深さ20cmを測る。埋土上層は灰色砂質土、下層は淡茶褐色砂質土である。

SX02

第Ⅲトレンチ西側で検出した、平面形が不定形を呈する落ち込みである。長径2.7m、短径0.7m、深さ30cm前後を測り、断面形は船底状を呈する。埋土は暗茶褐色砂質土である。

3.まとめ

今回の調査地の北側隣接地では、昭和60、61年に発掘調査が実施されているが、調査成果からは、遺構が希薄な地区として捉えられていた。しかし、今回の調査では比較的大型の掘形をもつ柱穴も確認しており、昭和61年調査で出土している奈良時代の須恵器が大型の建物に伴うものである可能性が考えられるようになった。今後も周辺地域における調査成果も含めて奈良時代の大型建物を含む集落の様相についての検討が必要である。

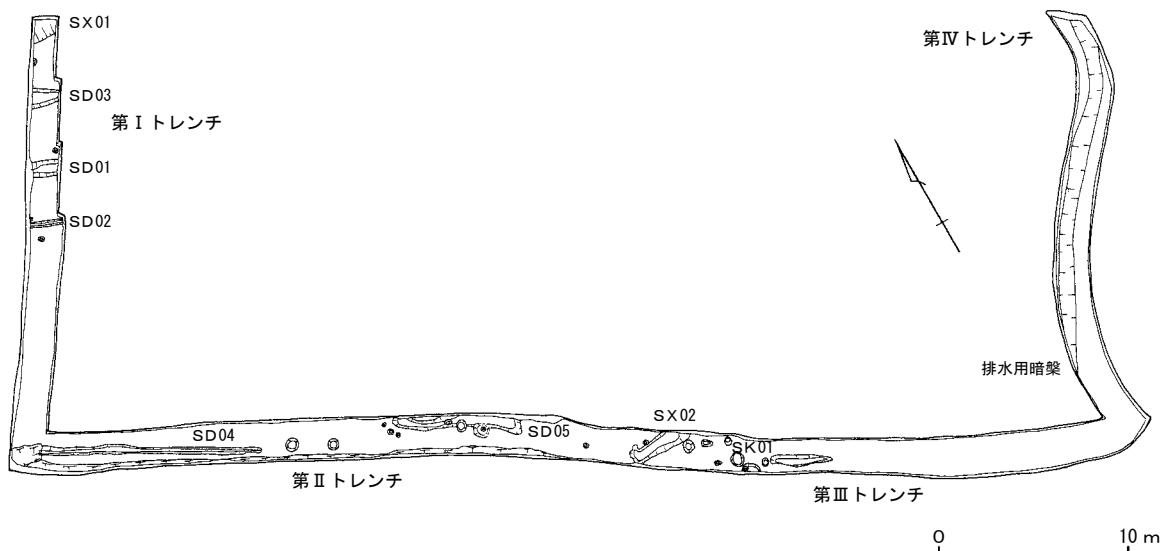


fig.147 調査区平面図

21. 御藏遺跡 第69次調査

1. はじめに

御藏遺跡は、神戸市長田区御藏通3～5丁目に所在する、縄文時代～中世に至る複合遺跡である。当遺跡は、茹藻川によって形成された自然堤防の微高地上及び後背湿地に立地している。

これまでに70回近い調査が実施されており、弥生時代末～古墳時代初頭の土器溜まりや水田畦畔、奈良時代の掘立柱建物、井戸などの遺構が確認されている。



fig.148 調査地位置図 1 : 2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、個人住宅建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。

調査は、残土置場を確保するため東西に2分割して、順次実施した。

基本層序

盛土直下の黄灰色シルト上面で遺構面を検出した。遺構面までの深さは、周辺地での調査成果と同様に約30cmを測る。

調査の結果、平安時代の柱穴、溝を検出した。

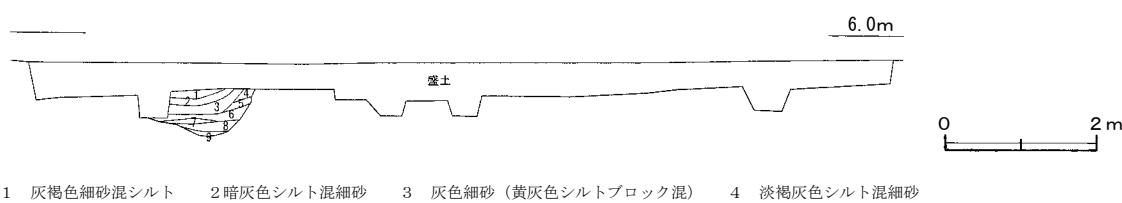


fig.149 調査区南壁土層断面図

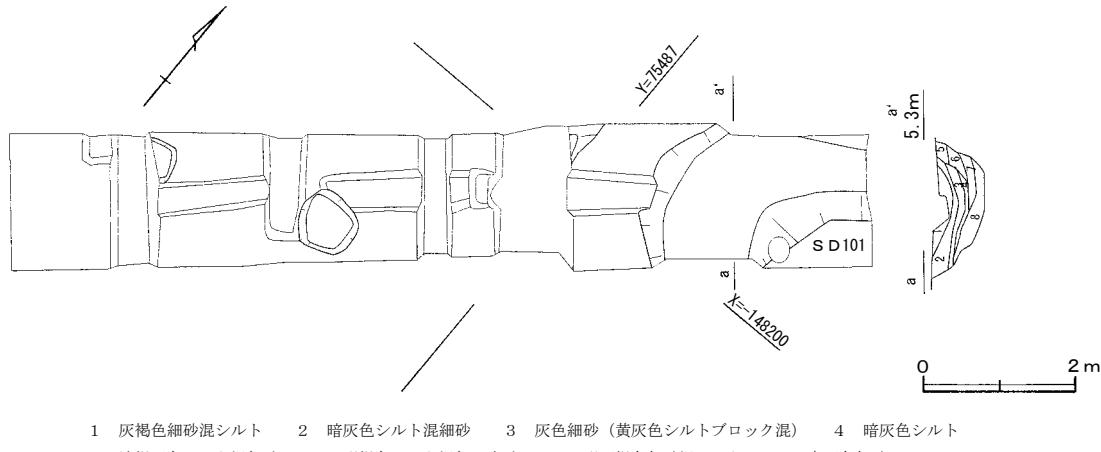


fig. 150 調査区平面図・SD101 土層断面図

柱穴

調査区西半部で2基の柱穴を検出した。いずれも一辺50cm程度を測り、平面形は方形を呈する掘形をもつ。深さは20cm程度を測る。柱痕は検出していない。柱掘形の辺の方向が直線的に並ぶため、同一の掘立柱建物を構成する柱穴である可能性が高いと考えられる。その場合の建物の指向する方位は、現在の町割りより東へ約20°振っている。当遺跡周辺では、11世紀以前の建物などは、その方位が現状の町割りの方向と合致しない場合が多いことから、今回検出した柱穴も、土器が出土していないため確定はできないが、およそ11世紀以前の時期のものと考えられる。

SD101

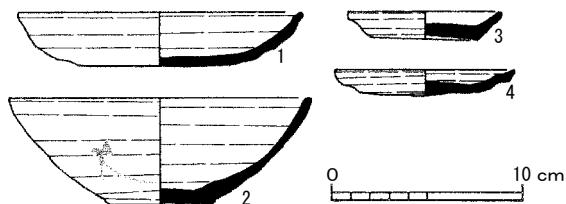
調査区東部で検出した溝で、幅2.0m、深さ70cmを測る。調査区東端部で屈曲し、南側に流れ。埋没過程について詳細な断面観察を実施したところ、当初断面V字形に近いかたちをしていたが、断面U字形に掘り直されたものと考えられる。

溝の方向は、ほぼ現在の町割りの方向と合致する。須恵器、土師器、白磁が出土しており、12世紀初頭の時期の遺構と考えられる。

3. まとめ

今回の調査では、12世紀初頭の溝とそれ以前のものと考えられる柱穴を検出した。

溝については、周辺の調査成果を考え合わせれば、当調査地周辺が微高地にあたっていることから、立地条件のよい場所に方形に区画された施設があったことを想定させる資料と考えられる。



1・3・4 土師器
2 須恵器
(3は糸切り底)

fig. 151
SD101 出土遺物実測図

22. 御藏遺跡 第70次調査

1. はじめに

御藏遺跡は、苅藻川によって形成された自然堤防の微高地上及び後背湿地に立地する、縄文時代～中世に至る複合遺跡である。これまでに70回近い調査が実施されており、弥生時代末～古墳時代初頭の土器溜まりや水田畦畔、奈良時代の掘立柱建物、井戸などの遺構が確認されている。

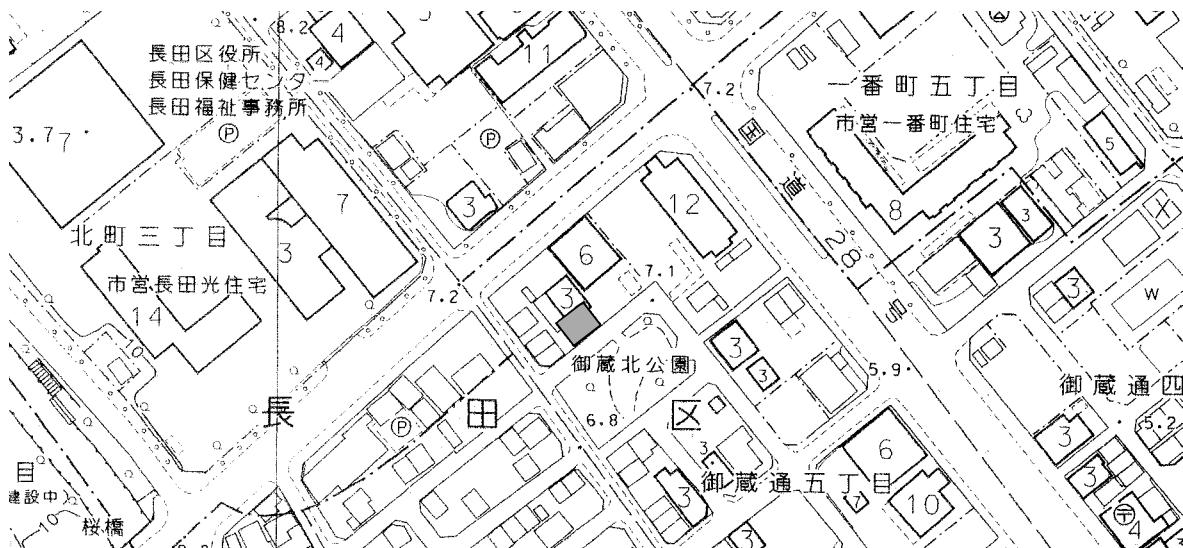


fig.152 調査地位置図 1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、個人住宅建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。

調査は、残土置場を確保するため東西に3分割して、順次実施した。

基本層序

上層より、盛土、旧耕土が堆積し、下層の明黄褐色シルトの上面で第1遺構面を、さらに下層の灰色細砂混じりシルトの下面で第2遺構面を確認した。第1遺構面までの深さは、周辺地の調査成果と同様に約1mを測る。

第1遺構面

東側に下がる落ち込みを検出した。古墳時代初頭のものと考えられる。

第2遺構面

S D01

調査地の西部で検出した溝で、調査区内を北西～南東方向に流れ、南側は調査区外に延びている。調査区内での規模は、幅40cm、深さ30cmを測る。

S D02

調査区中央で検出した溝で、調査区中央部で屈曲する。北・南側は調査区外に延びている。調査区内での規模は、幅1.1m、深さ20cmを測る。溝に沿って東側にわずかな高まりがあり、畦畔に伴う溝である可能性が考えられる。弥生時代末～古墳時代初頭のものと考えられる土器が出土している。

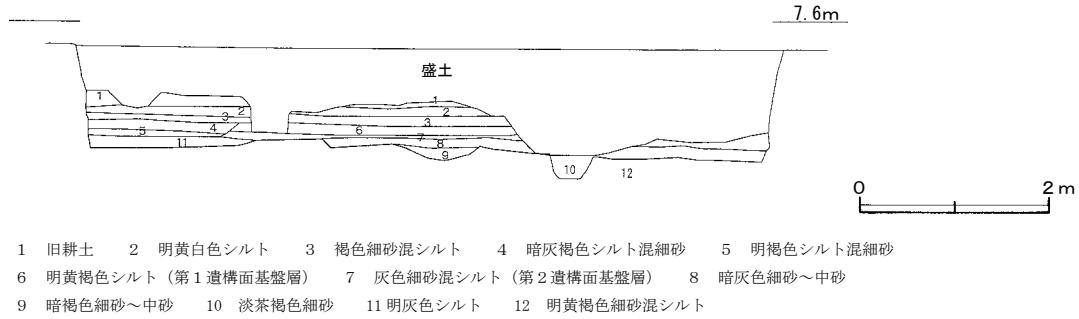


fig.153 調査区南壁土層断面図

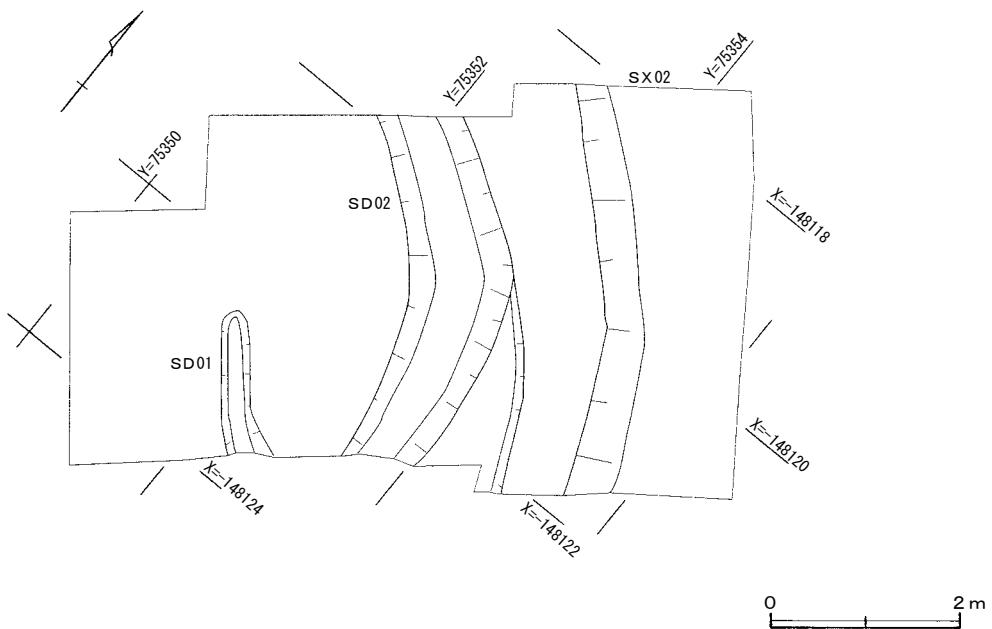


fig.154 第2遺構面平面図

3. まとめ

今回の調査では、2面の遺構面を確認し、弥生時代末ないしは古墳時代初頭の溝などを検出した。

溝については、周辺の調査成果を考え合わせれば、当遺跡の中で一般的にみられる、弥生時代末ないしは古墳時代初頭頃の水田に伴う遺構と判断される。

23. 若松町東遺跡 第6次調査

1. はじめに

若松町東遺跡は、東の苅藻川、西の妙法寺川に挟まれる複合扇状地上に立地する遺跡で、平成19年の試掘調査ではじめて確認された遺跡である。

これまでに5次にわたる調査が実施されており、縄文時代晚期～弥生時代前期、弥生時代中期、平安時代～中世の遺構、遺物が確認されている。

今回の調査を含め、若松町東遺跡の調査成果については、平成24年度に『若松町東遺跡第1・2・3・4・5・6次発掘調査報告書』を刊行しており、調査の詳細については報告書を参照されたい。



fig.155 調査地位置図 1 : 2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、市街地再開発事業に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。調査の結果、2面の遺構面を確認し、縄文時代晚期～中世の遺構などを検出した。

基本層序

上層より、表土、盛土、旧耕土が堆積し、その下面（4a層上面）で第1遺構面を確認した。この4a層は縄文時代晚期～中世の遺物を含み、その下面が第2遺構面である。

4a層は、陸化し人が生活を営んだ表土層であるが、本来形成されたのは海岸の干潟としてであり、4層以下は海成の堆積土である。

第1遺構面

中世のものと考えられる鋤溝を調査区全域で検出している。鋤溝の指向する方向は、北西～南東方向であり、現在の町割りと合致する。

第2遺構面

掘立柱建物、土坑、溝等の遺構を検出した。

S P01

調査区西端中央よりで柱穴1基（S P01）を検出した。この柱穴は、第5次調査で検出されたS B01の続きと考えられるもので、今回の調査成果を合わせると、東西1間×南北2間の建物規模が復元できる。今回検出したS P01からは時期を示す遺物は出土していない。

S K02

平面形が円形を呈し、直径50cm、深さ約10cmを測る土坑である。縄文時代晚期の突帯文土器が出土している。埋土は、黒褐色粘土の単一層である。

S D01

調査区中央部で検出した、平面形が円弧状を呈する溝で、幅2.2～2.5m、深さ1.0～1.1mを測る。当地が干潟であった時期に形成された溝と考えられる。西から東へ流れ込んだ土石流によって埋没している。土器の小片が数点出土しているが、混入品の可能性が高い。

3. まとめ

4a層は、当地が干潟であった時期に形成された土層であるが、後に陸地化が進み、遅くとも縄文時代晚期には人が居住できる状態になっていることが第4次調査で竪穴建物が確認されていることや、今回の調査で土坑を検出したことにより確認できたといえる。

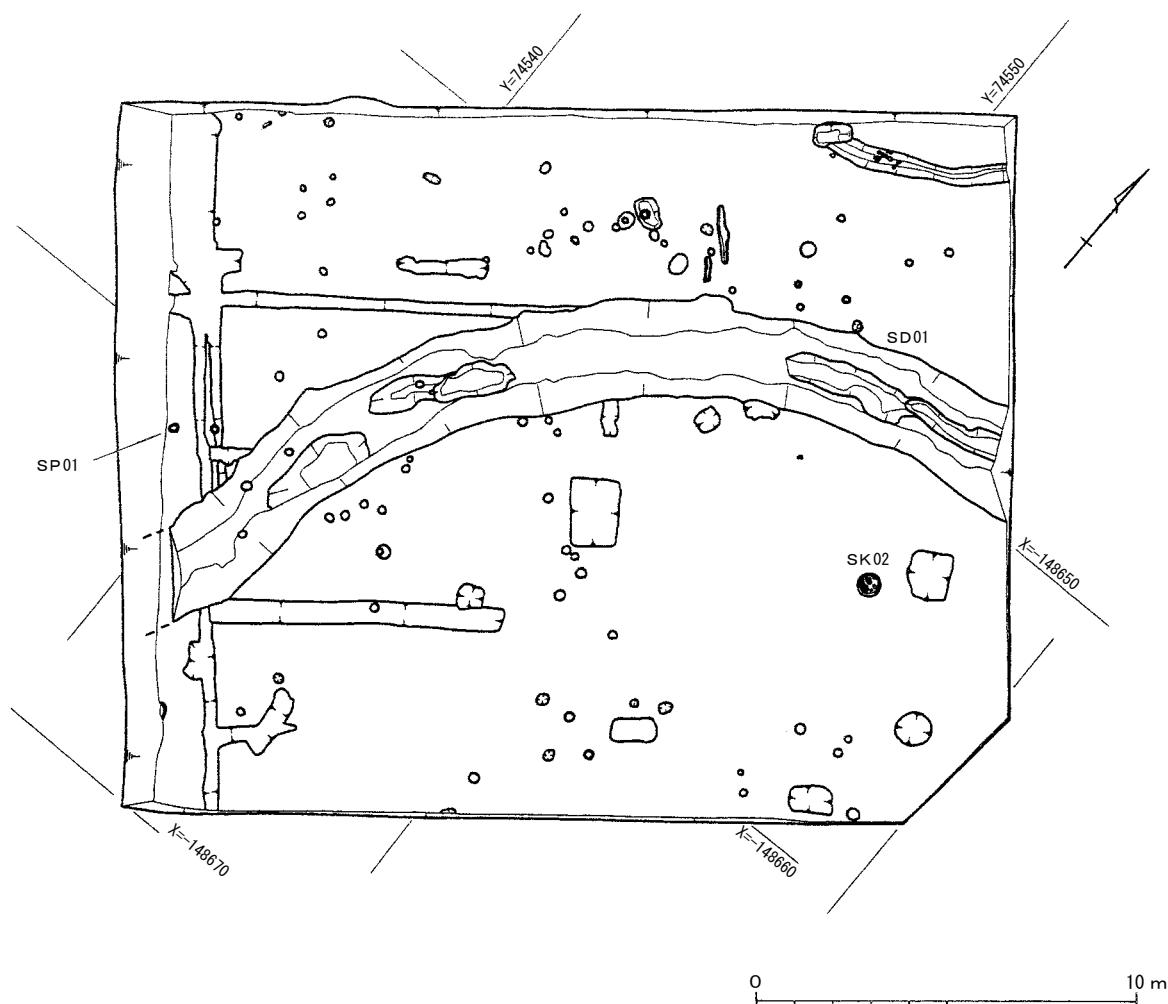


fig.156 第2遺構面平面図

24. 二葉町遺跡 第23次調査

1. はじめに

二葉町遺跡は、苅藻川や妙法寺川によって供給された土砂と、瀬戸内海からの海流によって形成された自然堤防上に立地している遺跡である。

これまでに20回以上の発掘調査が実施され、縄文時代晚期～弥生時代前期、同中期、平安時代、中世の遺構、遺物が確認されている。

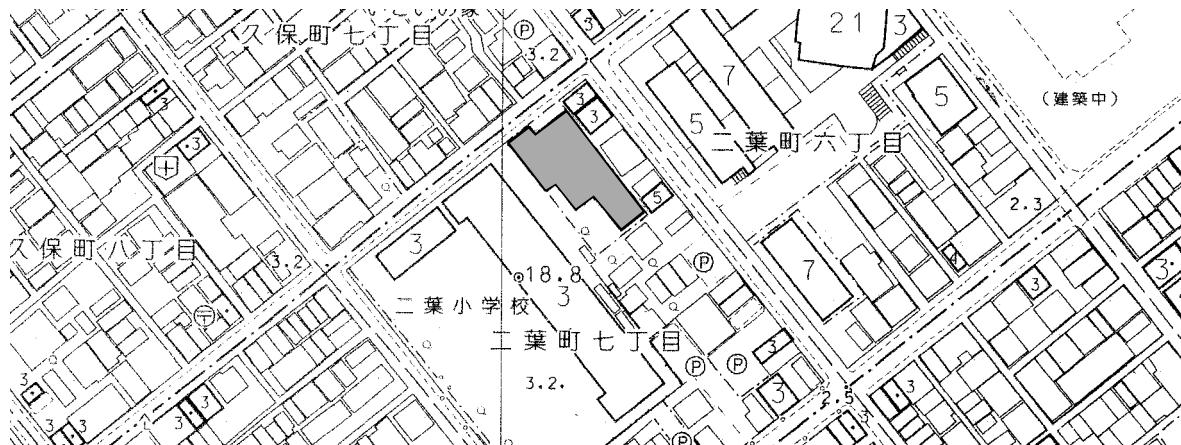


fig.157 調査地位置図 1 : 2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、市立幼稚園建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。

基本層序

上層より、表土、阪神大震災後の公園造成時の盛土、さらにそれ以前に住宅として利用されていた際の表土が堆積しており、下層の4a層下面（=4b層上面）で第1遺構面（上）を確認した。4b層下面（=5a層上面）で第1遺構面（下）を、5a層下面で第2遺構面を確認した。

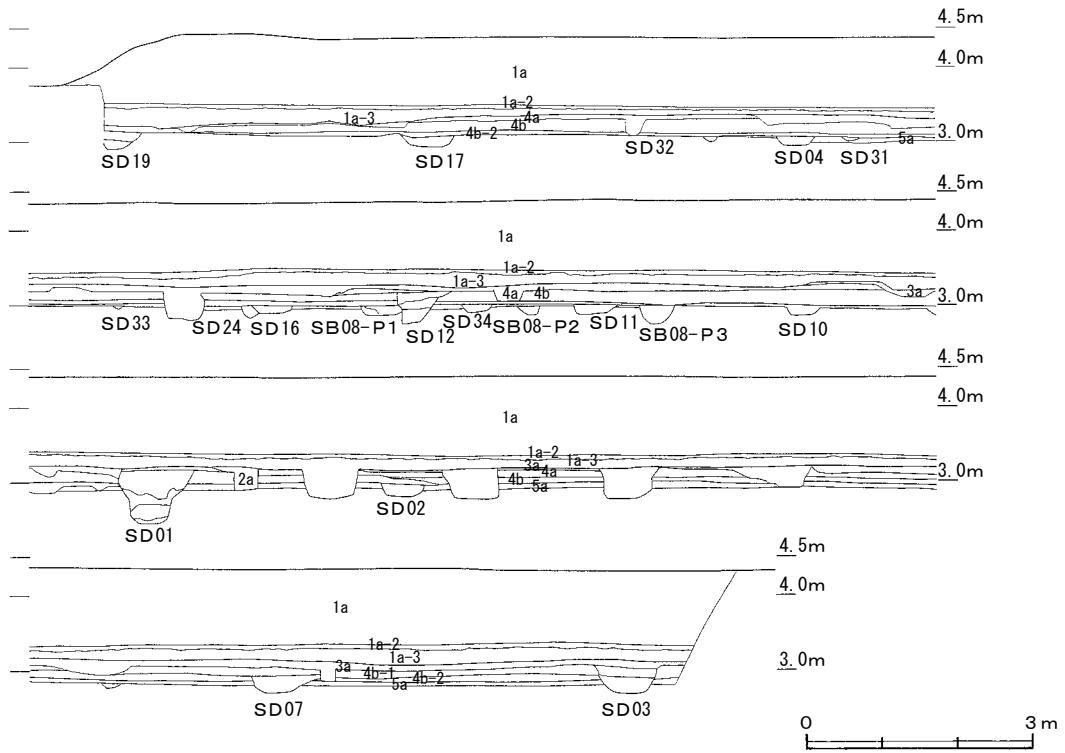
以下の土層には遺跡は存在しない。6a層は陸上で形成された土層で、それ以下の土層は海成の土層となる。

第1遺構面（上）

中世のものと考えられる鋤溝を調査区全域で検出した。その指向する方向は、現在の町割りの方向と合致する南西一北東方向である。土層断面の観察から、明らかに4b層上面から掘りこまれるものとそうでないものの2種類が存在することが確認できる。出土遺物は中世のものが大半を占める。

第1遺構面（下）

鋤溝や、SB01、SX01、SX02などの遺構を検出したが、出土遺物が示す時期は、第2遺構面の遺構の時期とほとんど時期差が認められない。SX01のように明らかに埋土が陥没していることを確認できたものがあり、5a層自体が薄いことも考え合わせれば、遺構埋土の沈み込みにより、第2遺構面の遺構のうち、第1遺構面（下）において確認できるものが含まれる可能性が考えられる。



1 a 現表土 1 a-2 摂壁基礎コンクリート 1 a-3 整地バラス 2 a 旧耕土 3 a 近世?~近代表土
4 a 中世~近世表土〔耕土〕(褐色シルト質砂) 4 b・4 b-2 中世~近世表土〔耕土〕(黄褐色シルト混じり砂)
5 a 黒褐色粘土質砂〔古代後期~中世初頭表土〕

fig.158 調査区東壁土層断面図

第2遺構面

掘立柱建物、井戸、土坑、溝などの遺構を検出した。古代後期～中世前半の遺構を多く検出している。

S B01～03、05～08

7棟の掘立柱建物を検出した。S B08は、調査区東端中央で一直線上に並ぶ3基の柱穴を検出した。他の建物の柱穴に比して大型の掘形をもつ。建物の大半は調査区の東側に延びているものと推定される。

S E01、02、S X01

S E01、02は、底部に曲物の井戸枠を据えるタイプの井戸である。井戸枠内の土壤を水洗選別して遺物の確保に努めたが、遺物はほとんど含まれなかった。上層の埋土からは12世紀後半の土器類が出土している。

S X01は底に井戸枠が存在しないタイプの井戸と考えられる。上位から12世紀後半の土器類が出土する状況は、S E01、02と同様である。



fig.159 SE02 土層断面

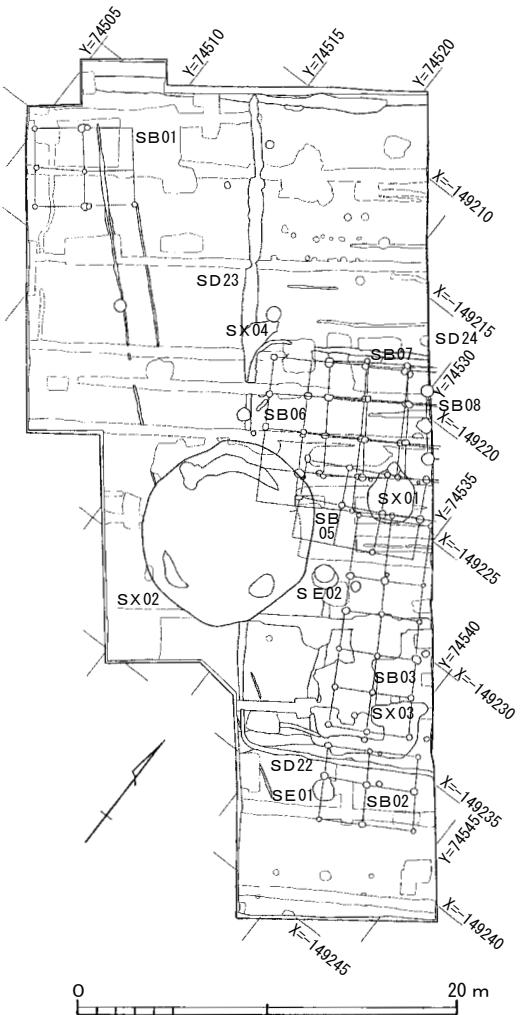


fig.160 第2遺構面平面図



fig.161 第2遺構面全景



fig.162 SB02・SE01 全景

S D22、24

S X02によって一部が失われているが、本来同一の遺構であったものと考えられる。調査地南部の掘立柱建物が集中する部分を矩形（南北約21m）に囲うかたちで存在する。屋敷地あるいは屋敷地内を区画する溝である可能性が考えられる。12世紀後半の遺物が出土している。

S X02

調査区中央で検出した大型の遺構で、平面形は不整円形で、直径は10mを越えるものであり、掘立柱建物群、S D22、24よりも新しい時期のものである。断面形は摺鉢状を呈し、深さは約2.5mを測る。直径3.5m程度を測る底面には、曲物の井戸枠4基、幅60cm程度の丸木船あるいは割りものを再利用し井戸枠上に組み合わせた井戸枠1基が設置されている。また底面の周囲にはコの字状に杭が多数打ち込まれ、しがらみ状に葦が組み込まれている。もう1辺は板材で土留めが行われている。板材辺の背後斜面には上り下りに利用したかにみえる段が存在する。曲物の設置される深さは周辺の井戸の枠材とほぼ同じ深度であり、水利用のための施設であることは間違いないであろう。下位の埋土も滯水していた状況を示している。埋土の中位以上は人為的な埋め戻し土である。12世紀後半の土器類のほか、下位の埋土から漆塗り椀、曲物などが出土している。

3. まとめ

12世紀後半を中心とする時期の遺構を多く確認した。確認した建物は、大型ではあるものの柱穴は柱の細いものが多く、簡易な建物が多いものと推測される。

井戸は、今回の調査地でも比較的多く確認したが、その所属する時期は近接するものが多い。そして井戸内、特に下位に遺物がほとんど含まれないことが特徴として指摘できる。どのような理由によるものかは判然としないが、以上の状況からは、かなり短期間のうちに井戸が造り替えられていたことを示しているものと考えられる。井戸の埋土に注目すると、その上位に礫層が多いことが注意される。当地域において礫を多く含む土壤は、かなり深いところまで掘削しないと求めることができないことからすれば、新しく井戸を掘削した際に生じた礫を含む土壤を、横にある使用しなくなった古い井戸の埋め戻しに利用した結果、このような状況が生じたものと考えられる。

当地域は、中世の小馬林の港の直近の位置にあたる。今回第2遺構面で検出した遺構は、単なる農村あるいは漁村の建物とは考えにくい。時期的にも中世初頭に集中しており、中世小馬林港とのかかわりの中で考えていく必要があるであろう。



fig. 163 SX02 全景



fig. 164 SX02 土層断面



fig. 165 SX02 底南東辺廻い細部



fig. 166 SX02 底曲物検出状況

25. 戸町遺跡 第68次調査

1. はじめに

戸町遺跡は、妙法寺川左岸の複合扇状地上に立地する遺跡であり、昭和61年に第1次調査が実施されて以来、これまでに70回近い発掘調査が実施されている。

これまでの調査では、縄文時代晚期、弥生時代前期～後期、古墳時代、平安時代、鎌倉時代の遺構、遺物が確認されている。



fig.167 調査地位置図 1 : 2,500

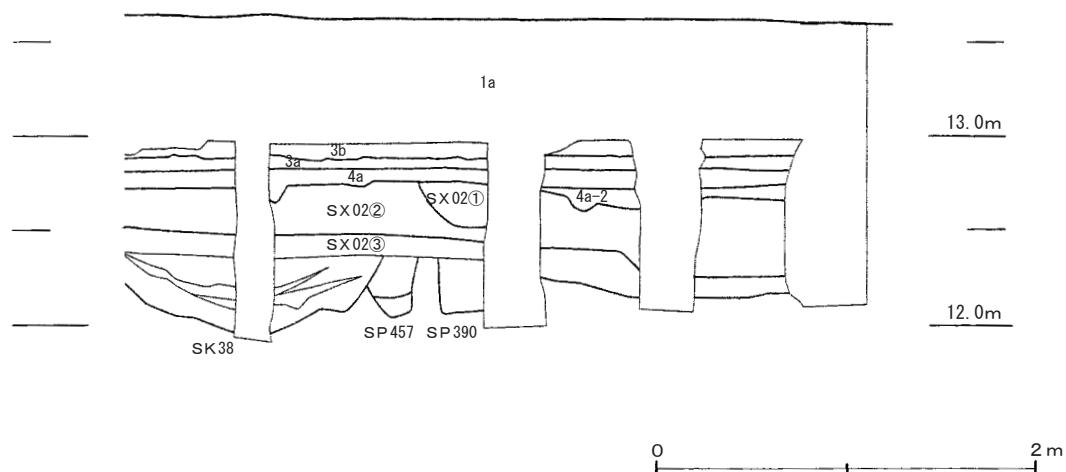


fig.168 調査区北部東壁土層断面図

2. 調査の概要

今回の調査は、共同住宅建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。

基本層序

上層より、盛土、旧耕土が堆積しており、その下層の弥生時代の遺物包含層である4a層の上面で第1遺構面を、下面で第2遺構面を検出した。

調査の結果、2面の遺構面を確認し、弥生時代前期～後期、古墳時代の遺構を検出した。

第1遺構面

溝1条、柱穴、小溝などを検出した。

SD01

縄文時代～古墳時代の土器が出土している。

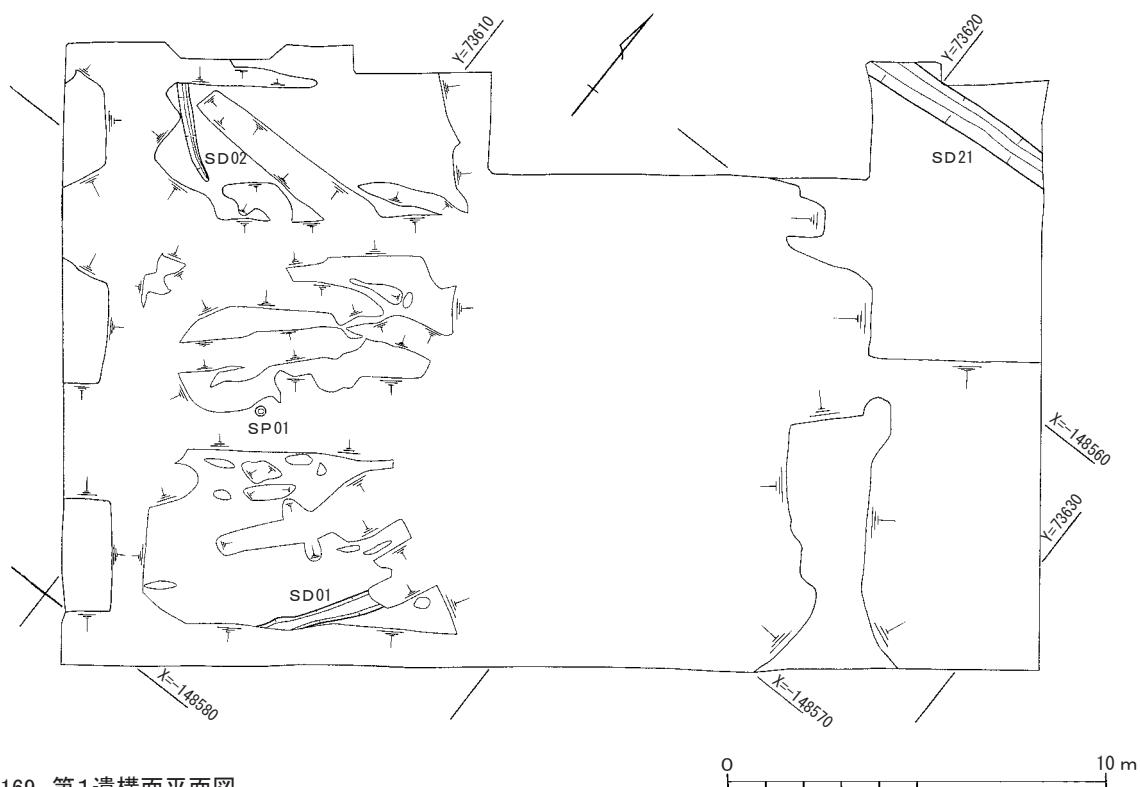


fig.169 第1遺構面平面図

第2遺構面

竪穴建物、井戸、柱穴、土坑、溝などを検出した。弥生時代前期～後期の遺構面と考えられる。

SB01

調査区中央部で検出した、平面形が円形を呈すると考えられる竪穴建物で、復元直径は約11mを測る。床面で検出した柱穴が多数であること、また一部に遺存する周壁溝も同心円状に2条検出していることから、建替えが行われたものと考えられる。

SB02

調査区北西部で検出した竪穴建物で、西側は調査区外に延びている。直径5.4～5.5mを測る、平面形が円形を呈する建物である。主柱穴は4本で、中央土坑を有する。



fig.170 西半部第2遺構面全景



fig.171 東半部第2遺構面全景



fig.172 第2遺構面平面図

S K09・10

ともに断面形が矩形を呈する土坑である。

S K30

断面形が三角フラスコ形を呈する土坑である。SK29なども同形と考えられる。

S K35

長径2.3m、短径1.4m、深さ55cmを測る、平面形が隅丸方形を呈する土坑である。土層断面の観察からは、幅60cm程度を測る箱状のものが納められ、後にそれが腐朽し上部の土砂が陥没したような状況が確認できる。この遺構の上層からは多量の弥生時代前期の土器とともに磨製石剣が出土している。また、SK35検出時に細身で古いタイプに位置づけられるタイプの管玉も出土している。

S E01

調査区中央部で検出した、平面形が不整長楕円形を呈する井戸である。上部が搅乱によって削平されており、本来の規模や形状は留めていないが、残存する規模は、長径 2.5m、短径 1.5 m を測り、深さは周囲の遺構面の高さを基準にすれば、約 90cm を測る。中央部はさらに約 25cm 程度深くなる。底面付近で、石包丁や巻かれた樺などが土器、木とともに出土している。

3.まとめ

今回の調査では、大量の遺構、遺物を確認した。現段階では詳細な検討は未了であるものの、今回の調査地が弥生時代において、戎町遺跡の集落域の中心の一角を占めていることは確実といえよう。今後遺物の整理作業の進展とともに、個々の遺構の所属する時期の確定を行ったうえで、最終的に当調査地点の総体的な位置づけを行う予定である。



fig.173 SB02 全景



fig.174 SE01 全景



fig.175 SK30 土層断面



fig.176 SK35 全景

26. 千歳遺跡 第5次調査

1. はじめに

千歳遺跡は、1997年の震災復興に伴う市営住宅建設工事に先立って実施された発掘調査によって知られるようになった遺跡である。第1次調査では、弥生時代中期の土器棺が検出され、第1次調査地の東側で実施した第2次調査では弥生時代の水田跡が検出された。以上の調査成果から、当遺跡の主要部は第1次調査地より西側の地区に中心部を置くものとみられてきた。第1次調査地の西側の地区で実施された第3次調査では、弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴建物が2棟検出されている。一方第2次調査地の南東部で行った第4次調査では、弥生時代中期以前の水田に伴うと考えられる畦畔が検出されている。

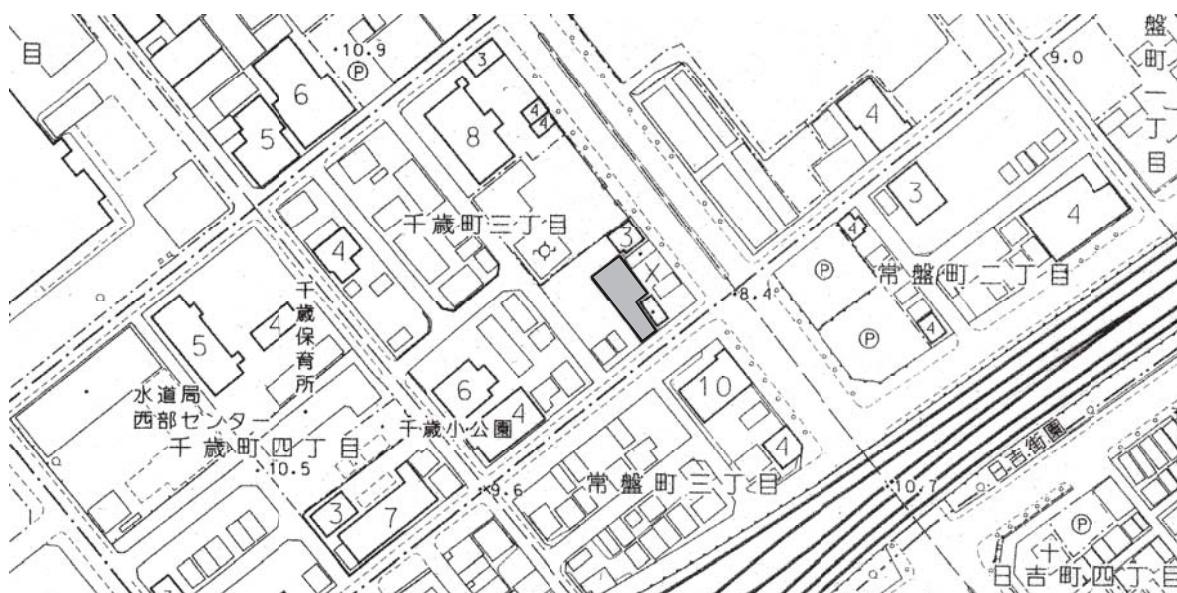


fig.177 調査地位置図 1 : 2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、個人住宅建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。今回の調査地点は、第4次調査地の南西側にあたり、弥生時代の水田が継続するものと予想された。

調査は、残土置場を確保するため調査対象部分を分割して、発掘調査を実施した。まず北側半分について先行して調査を実施し、北側調査完了後、中央・東側について調査を実施した。

基本層序

上層より、厚さ約40～60cmの盛土、厚さ20cmの旧耕土が堆積する。この旧耕土の下には、暗灰色粘質土（黄灰色シルトブロック）、灰褐色粘質土、黒灰色粘質土の遺物包含層が堆積する。

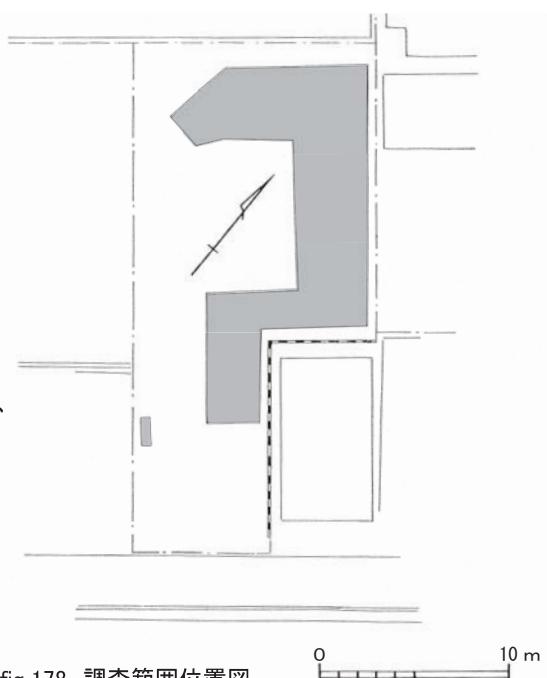


fig.178 調査範囲位置図

調査の結果、黒灰色粘質土下の灰褐黄色砂質土、灰青色極細シルト上面で土坑1基、溝1条、柱列1条と柱穴7基を検出した。以上の遺構は同一面で検出しているが、調査区壁面における土層観察の結果、柱穴及びピットが灰褐色粘質土上面から掘りこまれていることが確認できたことから、柱列1条と柱穴7基は他の遺構に比べて新しい時期のものと判断される。以上のように2時期以上の遺構が当調査区内に遺存していることが明らかになった。

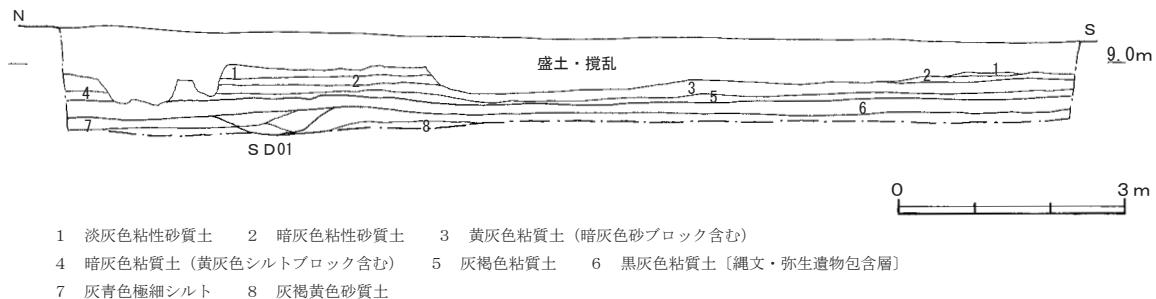


fig.179 第3トレーニング 北 東壁土層断面図

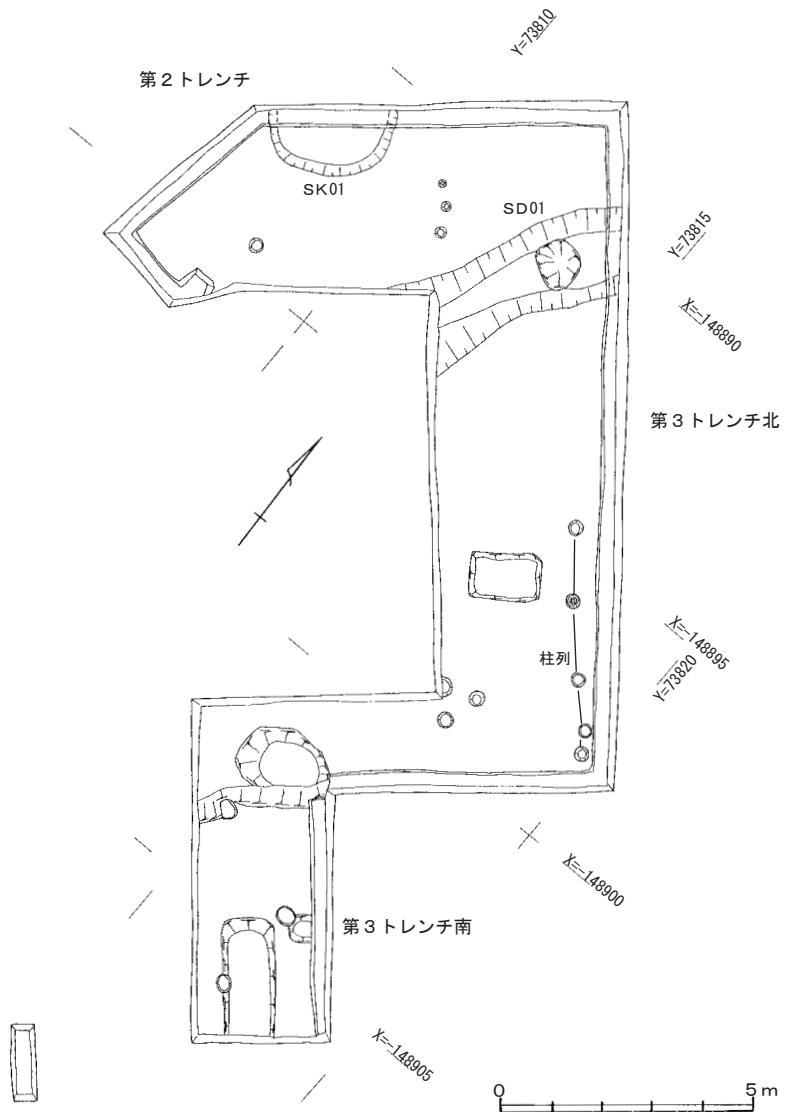


fig.180 調査区平面図



fig.181 第2トレンチ東半全景



fig.182 SD01 全景

S D01

第2トレンチ南東部及び第3トレンチ北端で検出した幅1.8m、深さ38cmを測る溝で、東西方向に流れる。断面形は逆台形を呈している。埋土は極細シルト及び粗砂が交互に堆積し、縄文土器片が2点出土している。

S K01

第2トレンチ北辺沿いで検出した断面形が皿状を呈する土坑である。東西2.5m、南北1.2m以上を測り、平面形は橢円形を呈する。深さ24cm前後を測る。埋土は灰色砂と明灰黄色砂がレンズ状に堆積しており、遺物は出土していない。

柱列

第3トレンチ北の東辺沿い南よりで検出した、柱穴状ピット4基で構成される柱列である。柱穴の間隔は1.5m等間隔である。柱穴掘形は、直径30cm前後を測り、平面形が円形を呈し、一部に柱痕が遺存する。柱穴掘形の深さは現状で15cm前後を測るが、灰褐色粘質土上面から掘りこまれているとすれば本来の深さは50cm以上あったものと推定される。柱列の方向は、N-42°-Wを指向する。

現状では、北方向と西方向には同列の柱穴状ピットは検出できず、この柱列が構成する構造物は今回の調査区の東側に展開するものと想定するに止まる。

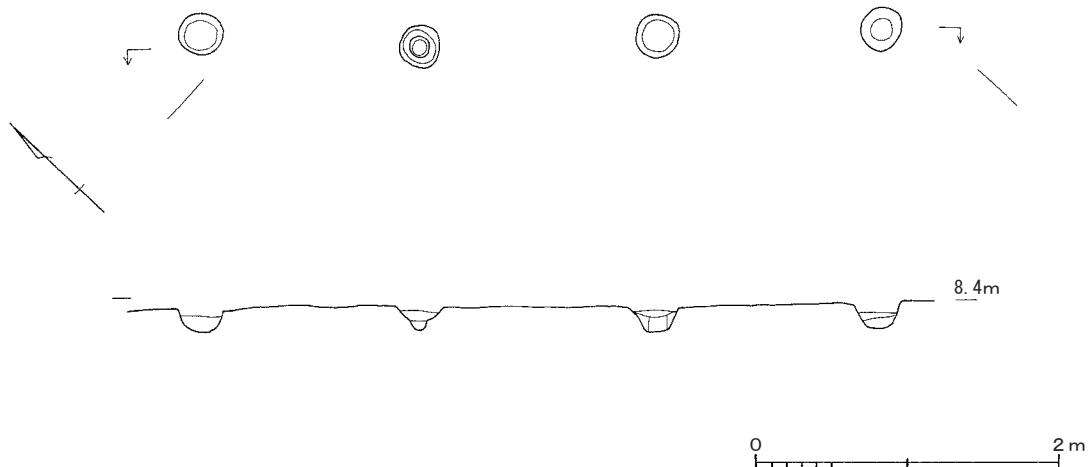


fig.183 柱列平・断面図

その他の柱穴状ピット

第3トレンチ南で3基、第3トレンチ南の東壁沿いで4基を検出した。第3トレンチ南の東壁沿いで検出したピットは遺構面上では検出できなかつたが、旧耕土直下灰褐色粘質土上面から掘りこまれている。断面で計測できる柱の規模は直径40cm前後、深さ50cm前後と推定される。遺構面で検出した柱穴状ピット3基は、深さは現状で30cm前後を測るが、灰褐色粘質土上面から掘りこまれていると推定すれば本来の深さは50cm前後を測るものと考えられる。灰褐色粘質土上面からは須恵器が出土している。

3.まとめ

今回の調査地は、水田畦畔が確認された第4次調査地の南西部にあたる。今回の調査では畦畔等の水田遺構は検出していないが、平坦な沼沢地と考えられる土壤の堆積を確認し、土壤内から縄文時代晩期の土器片を少量ではあるが確認している。この土器については今後検討が必要であるが、千歳地区周辺に戎町遺跡等の弥生時代前期の遺跡に関連する水田耕作地が広がる可能性も考えられる。

また、今回の調査では柱穴状ピットと柱列を検出したことから、中世の段階には居住域となっていたことが明らかになった。



fig.184 第3トレンチ北全景



fig.185 第3トレンチ南全景

27. 古川町遺跡 第1次調査

1. はじめに

古川町遺跡は、六甲山系から流出する妙法寺川によって形成された沖積地上に立地する遺跡である。平成17年度に実施した試掘調査によって確認された遺跡であり、今回の調査が初めての発掘調査である。

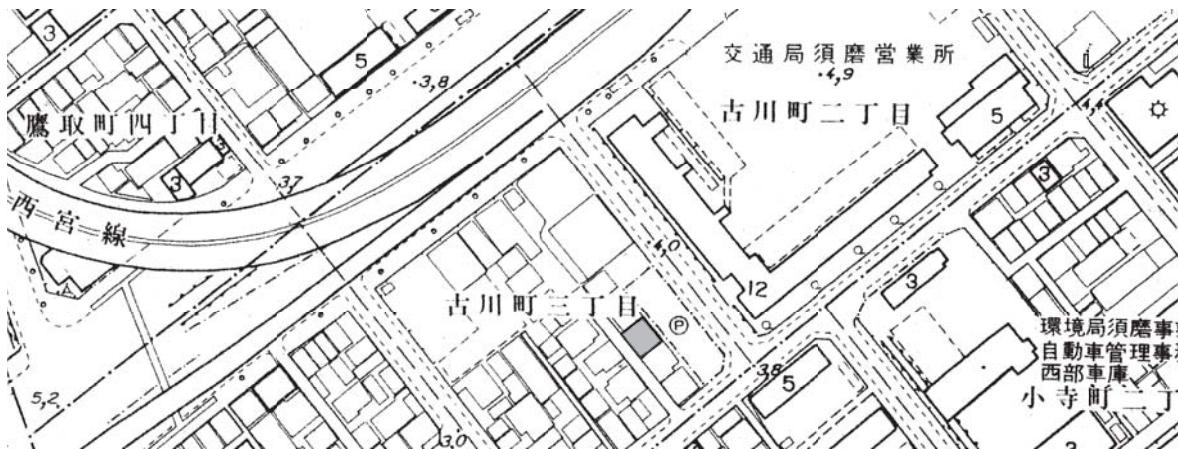


fig.186 調査地位置図 1 : 2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、個人住宅建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。なお残土置場を確保するため、調査対象部分を2分割し、反転調査を実施した。東側の調査区を1区、西側の調査区を2区と呼称する。

基本層序

調査地は、基本的に北から南へと下がる緩斜面地である。整地土、盛土下に旧耕土・床土が存在する。この直下の黄灰色シルト上面で遺構面を検出した。

1区

掘立柱建物1棟、溝2条、ピット13基を検出した。

S B01

1区北西隅で直線的に並ぶ3基の柱穴を検出した。掘立柱建物を構成する柱穴と考えられ、西側へ延びるものと考えられる。柱穴間の距離は約1.35mを測り、主軸はN-22°-Eを指向する。柱穴は長径75~80cm、短径約60cmを測る、掘形の平面形は橍円形を呈し、深さ55cm前後を測る。P1から微細な土師器片が出土している。

S D02

1区南西隅で検出した、幅20cm前後、深さ5cm前後を測り、北西-南東方向(N-72°-W)に流れる溝である。中央部をS D01によって切られている。遺物は出土していない。

ピット

1区で検出したピットは直径15~50cm前後、深さ8~58cm前後を測り、断面観察により直径10~20cmを測る柱痕が確認できるものがある。土師器、須恵器が出土している。

2区

溝1条、土坑1基、ピット5基を検出した。

SD03

2区南西隅で検出した幅35cm前後、深さ15cm前後を測り、北西—南東方向（N-70°-W）に流れる溝である。土師器片が出土した。

SK01

2区北端で検出した土坑で、西側は搅乱によって失われており、本来の形状や規模は不明である。検出した規模は長径1.0m、短径0.55m以上を測る。深さ18cmで、土師器片が出土した。

ピット

直径15~20cm前後、深さ10~15cm前後を測るピットを検出している。遺物は出土していない。

3.まとめ

今回の調査では、調査区の東半部で多くの遺構を検出した。しかし、遺構からの出土遺物が微細であり、詳細な時期については特定できない。遺構面上層の旧床土から奈良時代～平安時代頃のものと考えられる須恵器壺などが出土していることから、今回検出した遺構が奈良時代～平安時代頃のものである可能性も考えられる。

検出した遺構のSB01とSD02、SD03の主軸は、それぞれ真北に対して約20° 東へ振っており、両者はほぼ90°で直交する位置関係にある。埋土に共通性がみられることから、同時期の遺構と考えられ、地割の規則性が窺える。

調査地付近は、遺構の検出状況から調査地の北方及び東方に遺構の濃密な分布が推定される。近接地では、今回の調査地の約200m北側の地点において、鷹取町遺跡第1次調査が実施されている。当該調査においては、古墳時代前期の土器棺墓、ピット、古墳時代後期の竪穴建物、中世の掘立柱建物等が検出された。しかし、奈良時代～平安時代については、遺構の存在は確認されていない。また、今回の調査では古墳時代の遺構、遺物は確認していない。

調査地周辺の状況については、鷹取町遺跡第1次調査以外はわずかに試掘調査が行われているのみで、不明な点が多い。古川町遺跡の発掘調査も今回の調査が第1次調査であり、今後の周辺地での調査の進展に伴い、遺跡の全容が次第に明らかになるものと考えられよう。

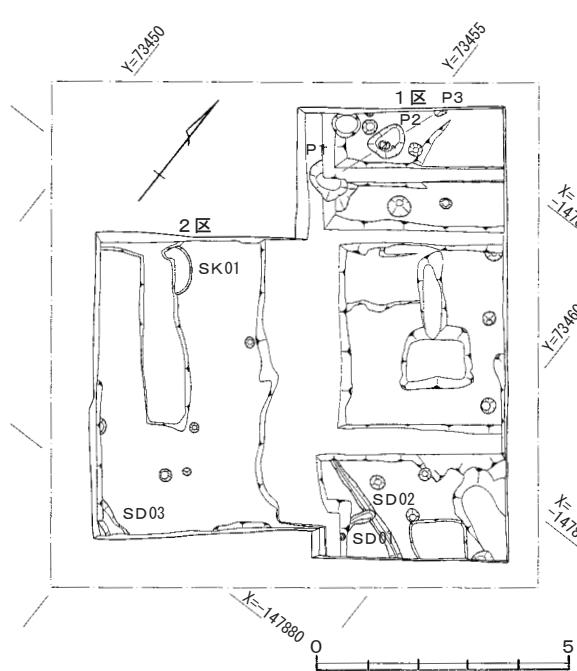


fig.187 調査区平面図



fig.188 1区全景

28. 南別府遺跡 第5次調査

1. はじめに

南別府遺跡は、1970年代に実施された区画整理に伴う確認調査で発見された遺跡である。当遺跡は明石川の支流伊川の中流域左岸の河岸段丘ないしは自然堤防上に立地している。これまでに4次にわたる発掘調査が実施されており、調査の結果、縄文時代～中世までの遺物が出土し、古墳時代前期の堅穴建物などが確認されているが、その広がりや立地分析などは、未だ明確でない。

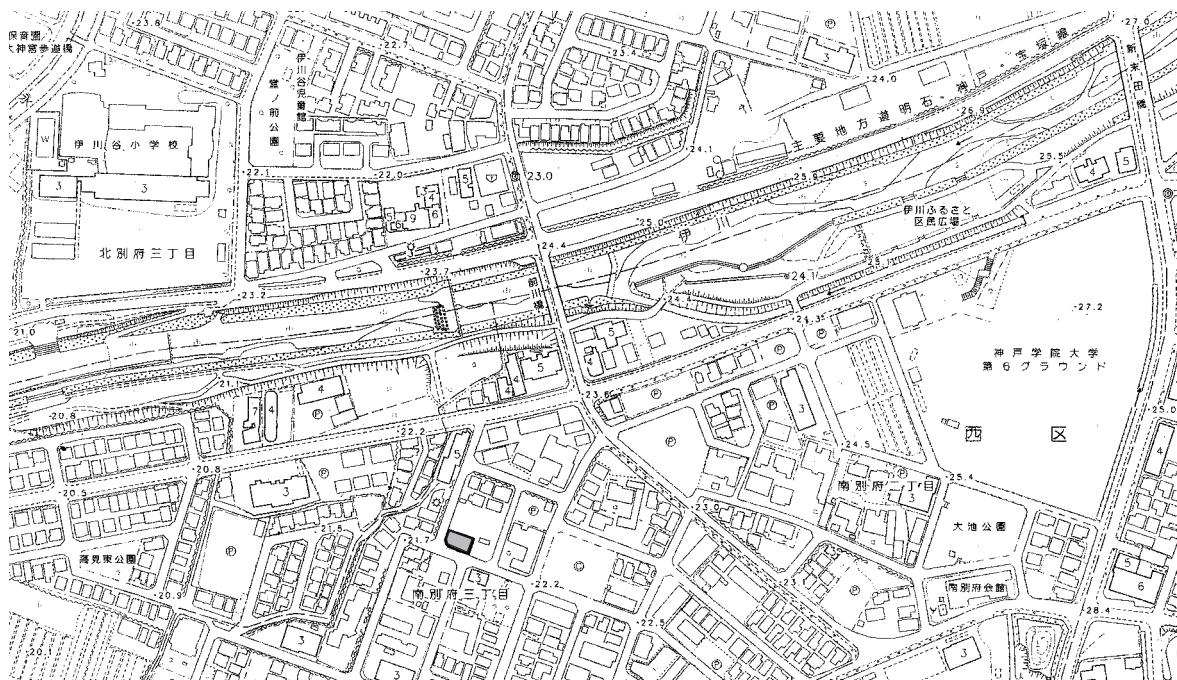


fig. 189 調査地位置図 1 : 5,000

2. 調査の概要

今回の調査は、個人住宅建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。東西11m、幅1mの調査区を4列設定して調査を実施した。北側から第1～第4トレーナーと呼称する。調査は、残土置場を確保しながら、分割して順次実施した。今回の調査地は第4次調査地の北西40mと近接し、古墳時代初めから前期の堅穴建物群のひろがりを確認できるものと想定されていた。

基本層序

調査地の旧地形は、北東から南西に緩やかに傾斜しており、厚さ10～30cm前後の盛土を行つて現在の地盤が形作られている。この盛土の下層には現代耕土が厚さ5～20cm程度遺存しており、この耕土下に、淡灰色粘性砂質土（須恵器包含層）、暗茶褐色粘性砂質土（古墳時代初頭土師器包含層）、淡褐色中砂、茶褐色極細シルト（弥生土器包含層）が堆積している。弥生土器包含層の下面で堅緻な淡灰黄色極細シルトの地山面を検出した。

遺構面は、古墳時代中期～後期の遺構面と考えられる暗茶褐色粘性砂質土〔古墳時代初頭土師器包含層〕上面（現地表下50cm前後）、古墳時代初頭～前期の遺構面を形成する淡褐色中砂（同60～90cm）と古墳時代前期以前の遺構面と考えられる地山面（同130cm前後）の3面を検出した。

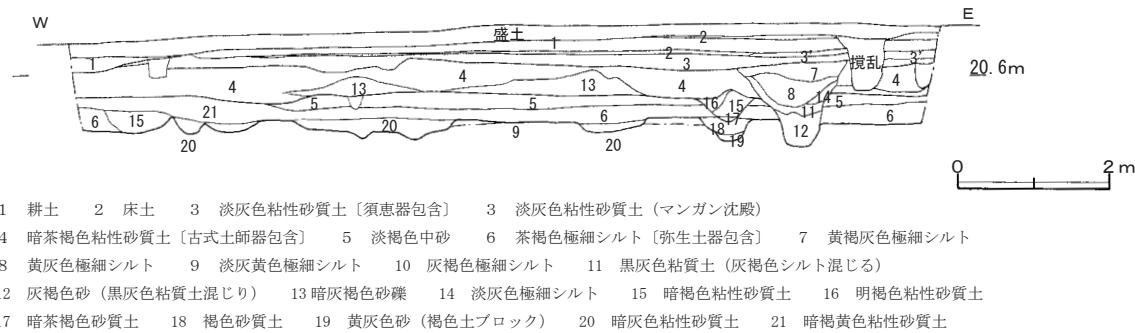


fig.190 第2トレーニング北壁土層断面図

第1遺構面

古墳時代初頭遺物包含層である暗茶褐色粘性砂質土上面で溝4条、ピット10基を検出した。

SD101

第1～第4トレーニングの東部をほぼ南北に南流する上端幅1.35～1.90m、底幅30～50cm、深さ110cm前後を測る、断面形がV字形を呈する河道状の溝である。第3トレーニングにおいてSD101埋没後の上面で古墳時代中期後半の須恵器が多量に出土しているほかは、第4トレーニングで土師器片が出土しているのみである。遺構内にはシルト質の粘土と砂礫が堆積しており、急激な洪水等の水の流れにより埋没した可能性が考えられる。

SD102

第2～第4トレーニングの西端で検出した、断面形がU字状を呈する、溝と考えられる落ち込みである。断面形は皿状を呈し、深さは10cm前後を測る。第4トレーニングにおいて須恵器、土師器が出土している。

SD103

第4トレーニング中央部で検出した、幅40cm前後、深さ10cm前後を測り、断面形がU字形を呈する溝である。古墳時代後期の須恵器、土師器が出土している。なお、溝の方向はほぼ真南北であり第1トレーニングの東部で検出した同一規模の直線的に走る溝状落ち込みと、同一の遺構である可能性も考えられる。

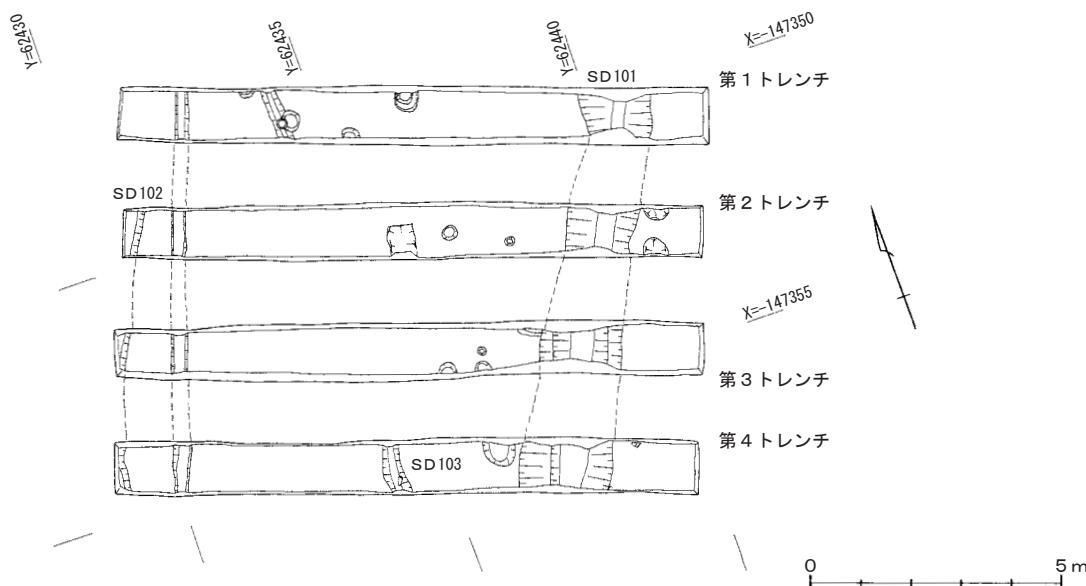


fig.191 第1遺構面平面図



fig.192 第1トレンチ第1遺構面全景



fig.193 第1トレンチSD101 土層断面

第2遺構面

土師器を含む暗茶褐色粘性砂質土を除去した結果、ほぼ調査区全域に水平に堆積している淡褐色中砂上面において堅穴建物の周壁溝と考えられる落ち込み4ヶ所、溝6条を検出した。いずれの遺構もトレンチ調査による部分的な検出であり、各遺構の関連については推測するにとどまる。

S B201

第3トレンチ西端と第4トレンチ北西隅で、溝を伴う落ち込みを検出した。検出状況から、平面形が方形を呈する堅穴建物の南東隅部分にあたるものと考えられる。溝の規模は、第3トレンチでは、幅20cm、深さは、堅穴建物の内側にあたる西側部分で3cm、外側で8cmを測り、堅穴建物の壁体の立ち上がりは約5cmを測る。溝内から土師器が出土している。

S B202

第4トレンチ西端南壁沿いで、溝を伴う落ち込みを検出した。上記のS B201と同様に、平面形が方形を呈する堅穴建物の北東隅部にあたるものと考えられる。堅穴建物の東辺と考えられる溝は、幅20cm、堅穴建物の内側にあたる西側で深さ3cm、外側で12cmを測り、堅穴建物の壁体の立ち上がり約9cmを測る。北辺と考えられる溝は、幅20cm、堅穴建物の内側にあたる西側で深さ6cm、外側で18cmを計測し、堅穴建物の壁体の立ち上がりは約12cmを測る。堅穴建物の隅部床面直上では土師器甕1個体分が横倒しの状態で出土した。

S B203

第1トレンチ中央北壁沿いで検出した、鉤形にめぐる平面形が方形を呈する堅穴建物の南東隅部と考えられる溝を伴う落ち込みである。堅穴建物の南辺と考えられる溝は、幅24cmで、調査区北壁の精査の結果、周壁は30cm前後を測る。遺物は出土していない。

S B204

第2トレンチ西部で溝を2条検出した。調査区南側で直交する形状から、平面形が方形を呈する堅穴建物の一部と推定される。溝は幅30~50cm、深さ4~8cmを測るが、削平により堅穴状の落ち込みは検出していない。堅穴建物東壁溝と考えられる溝から土師器が出土している。

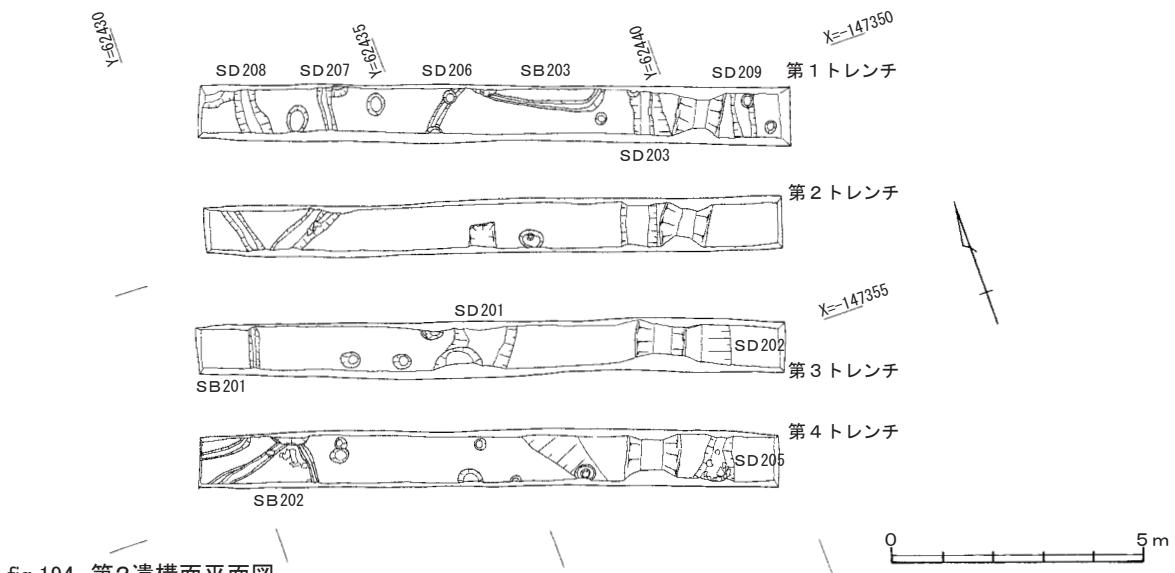


fig.194 第2遺構面平面図

SD 201

第3トレンチで検出した、幅120cm、深さ10cm前後の浅い溝状の落ち込みである。土師器が出士している。

SD 202

第3トレンチ東部で検出した溝で、西側は第1遺構面SD 101に切られている。深さ20cm前後を測り、断面形は皿状を呈している。

SD 203

第1トレンチ、第2トレンチの東部で検出した南北に直線的に流れる溝である。幅70cm、深さ30cmを測る。多量に土師器が出士しており、第1トレンチでは甕2個体、壺1個体が出士している。

SD 205

第4トレンチ東部で検出した、幅40~90cm、深さ15cm前後を測る溝である。埋土上層から土師器壺の碎片、下層から土師器小型丸底壺1個体分のほか、甕の碎片が出士している。

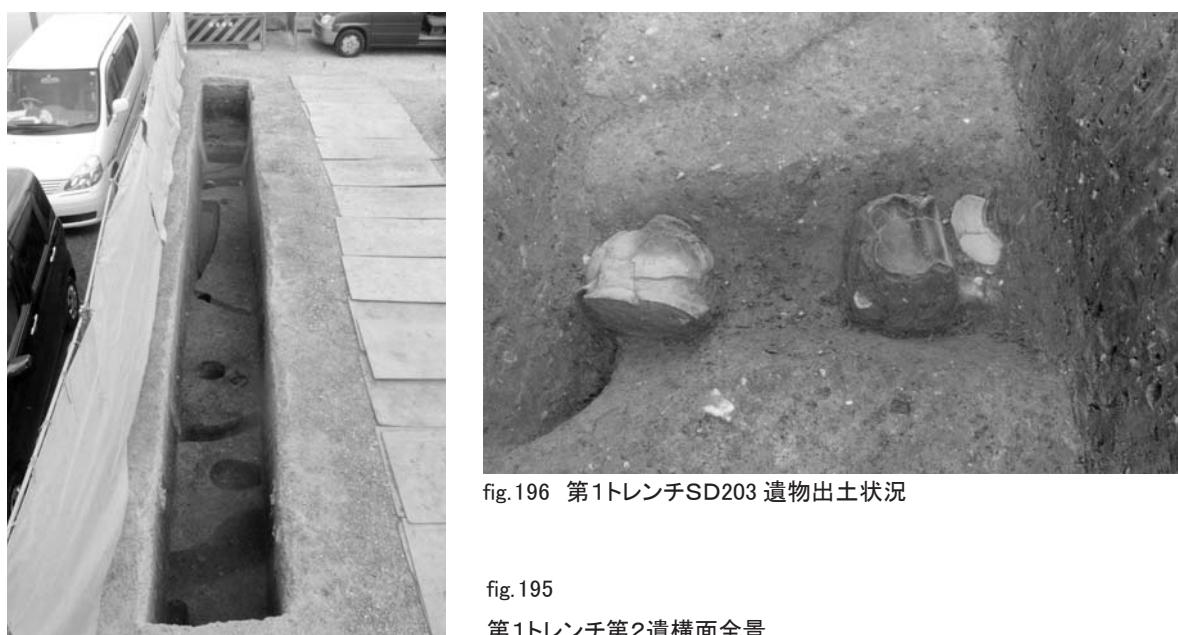


fig.195
第1トレンチ第2遺構面全景

fig.196 第1トレンチSD 203 遺物出土状況



fig.197 第2トレンチSB204 全景



fig.198 第4トレンチSB202 全景

S D206

第1トレンチ中央で検出したやや東に内弯する形状の溝で、断面形はU字形を呈する。幅18cm前後、深さ12cmを測る。土師器細片が出土している。

S D207

第1トレンチ中央西よりで検出した、断面形がU字形を呈する溝である。幅40cm、深さ20cmを測る。土師器が出土している。

S D208

第1トレンチ西部で検出した、やや東側に内弯する形状の溝で、断面形がU字形を呈する。幅40cm前後、深さ12cmを測る。土師器が出土している。

S D209

第1トレンチ東部で検出した断面形が皿形を呈する溝である。幅50cm前後、深さ8cmを測る。遺物は出土していない。

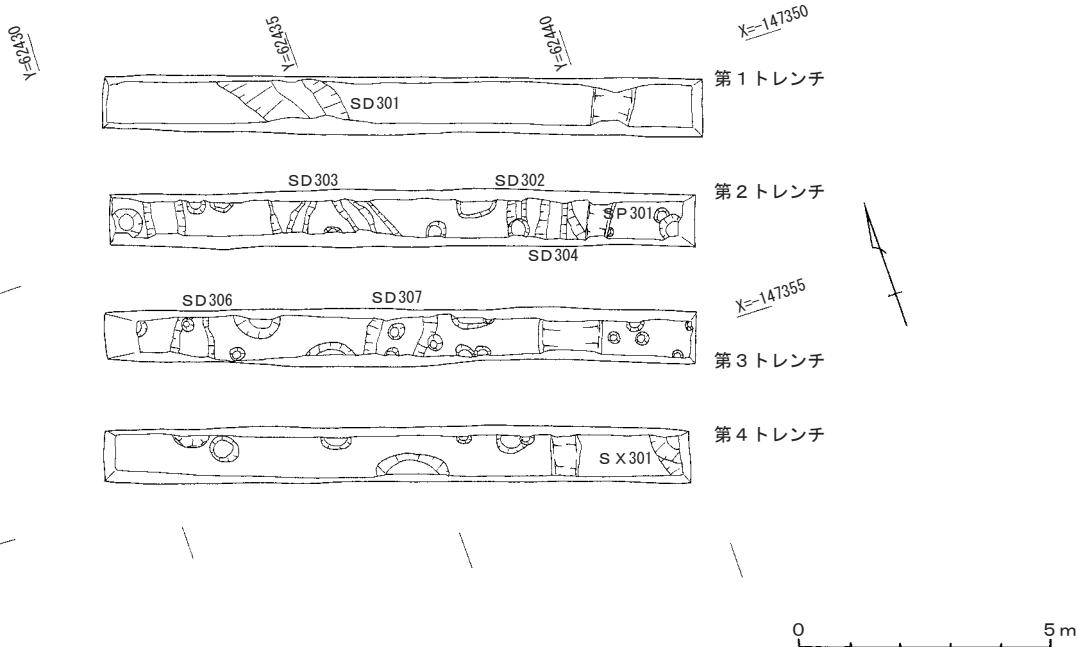


fig.199 第3遺構面平面図

第3遺構面

第2遺構面基盤層の下層には、調査区の東半には厚さ20~30cmの茶褐色極細シルトが、西部では暗褐黄色粘性砂質土が堆積しており、それぞれの層から弥生土器がわずかではあるが出土した。これらの遺物包含層の下層で、やや東に傾斜する堅緻な淡灰黄色極細シルトの上面を検出し、溝状の落ち込み5条、ピット2基、性格不明遺構1ヶ所を検出した。

S D301

第1トレーニング中央西よりで検出した溝状の落ち込みである。幅1.7m、深さ70cmを測る。断面形は椀形を呈する。縄文時代晩期と考えられる深鉢の口縁部片が出土している。遺構は南側の調査区には伸びていないことから土坑状の落ち込みの可能性も考えられる。

S D302

第2トレーニング中央東よりで検出した溝状の落ち込みである。幅36cm、深さ5cm前後を測る。土師器が出土している。

S D303

第2トレーニング中央西よりで検出した幅2.0m、深さ20cm前後の浅い溝状の落ち込みである。底部は2条の溝が走り凹凸がみられる。埋土上層から弥生時代中期の櫛描直線文を施す壺の碎片が出土している。

S D304

第2トレーニング東部で検出した幅60cm、深さ23cmを測る、断面形がU字形を呈する溝である。弥生土器が出土している。

S D305

第2トレーニング西部で検出した幅70cm、深さ10cmを測る、断面形が皿形を呈する溝である。遺物は出土していない。

S D306

第3トレーニング西部で検出した幅70~80cm、深さ6cm前後の断面皿形を呈する溝である。遺物は出土していない。S D305に続く溝の可能性も考えられる。

S D307

第3トレーニング中央部で検出した幅110cm前後、深さ6cm前後を測る溝状の落ち込みで、断面形は皿形を呈する。弥生土器が出土している。

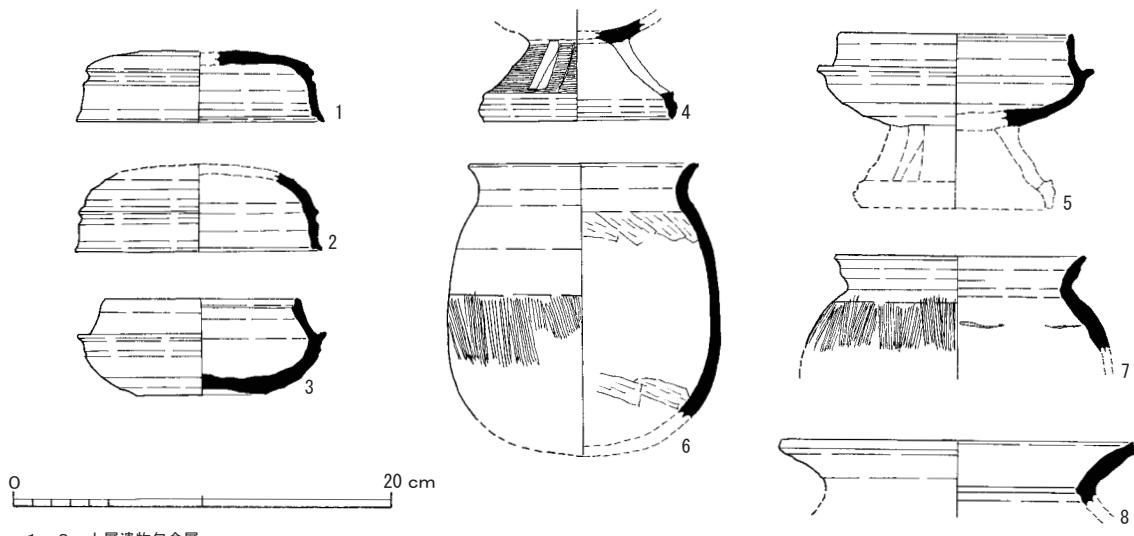
S X301

第4トレーニング東端部で検出した土坑状の落ち込みである。径60cm以上、深さ60cm前後を測り、断面形は皿形を呈する。弥生土器が出土している。

3. まとめ

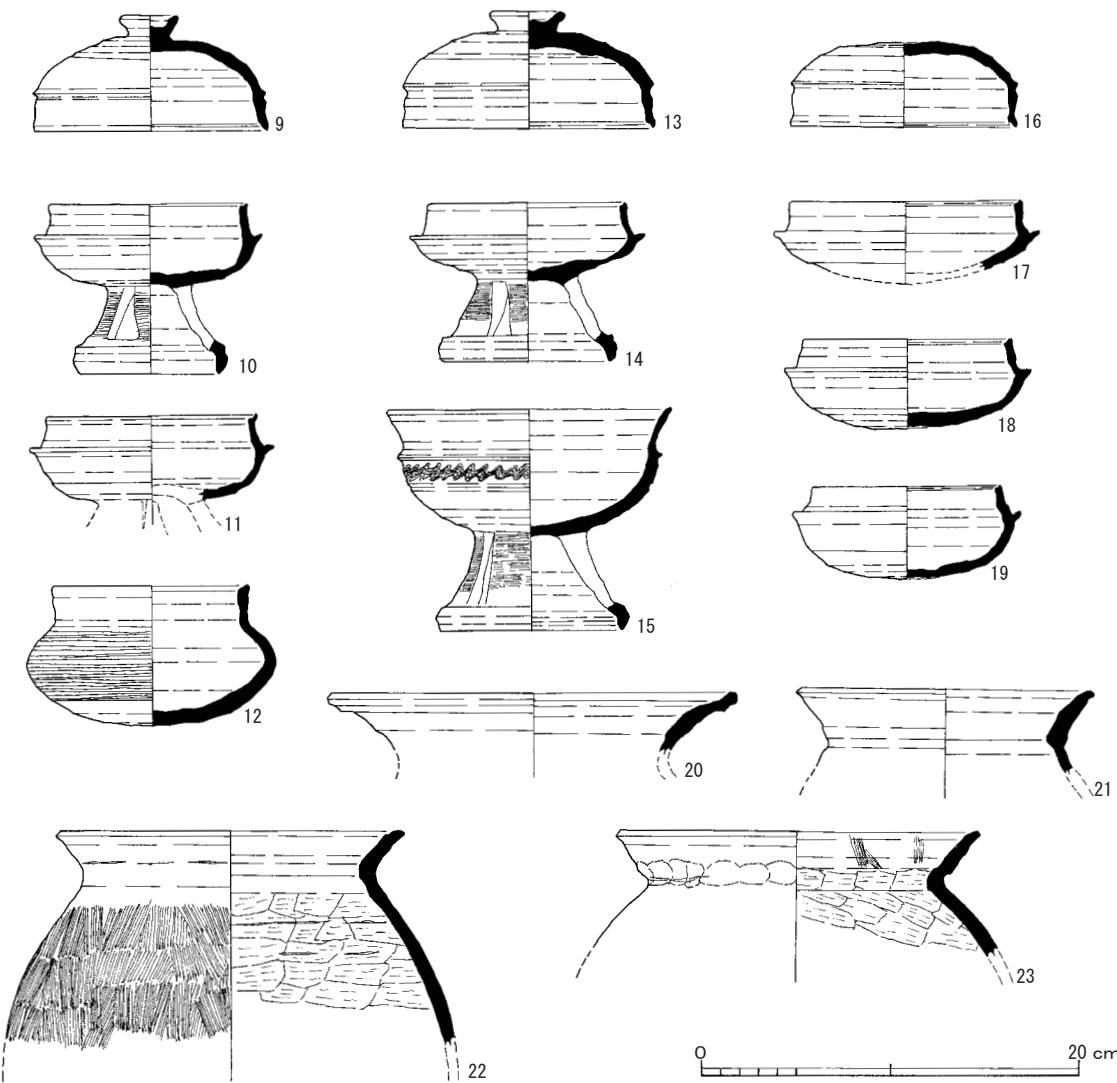
今回の調査では、調査の範囲が狭小であり、各調査区が分離しているため検出した各遺構の関連、性格、層序関係を明確することができなかった。しかしながら第1トレーニング第2遺構面においては古墳時代前期の甕が出土する溝を検出し、また第3、第4トレーニング西部で竪穴建物の一部と考えられる溝を検出した。このような検出状況は第4次調査における竪穴建物の検出状況に類似している。

また、第3トレーニングで出土した古墳時代中期後半の須恵器は属する遺構は明確でないが、南北に貫流する溝S D101とともに古墳時代中期以降の遺構の存在を窺わせるものとして、今後の検討が必要である。



1~8 上層遺物包含層
1~5 須恵器 6~8 土師器

fig.200 出土遺物実測図（1）



9~23 Sado 101上層 9~20 須恵器 21~23 土師器

fig.201 出土遺物実測図（2）

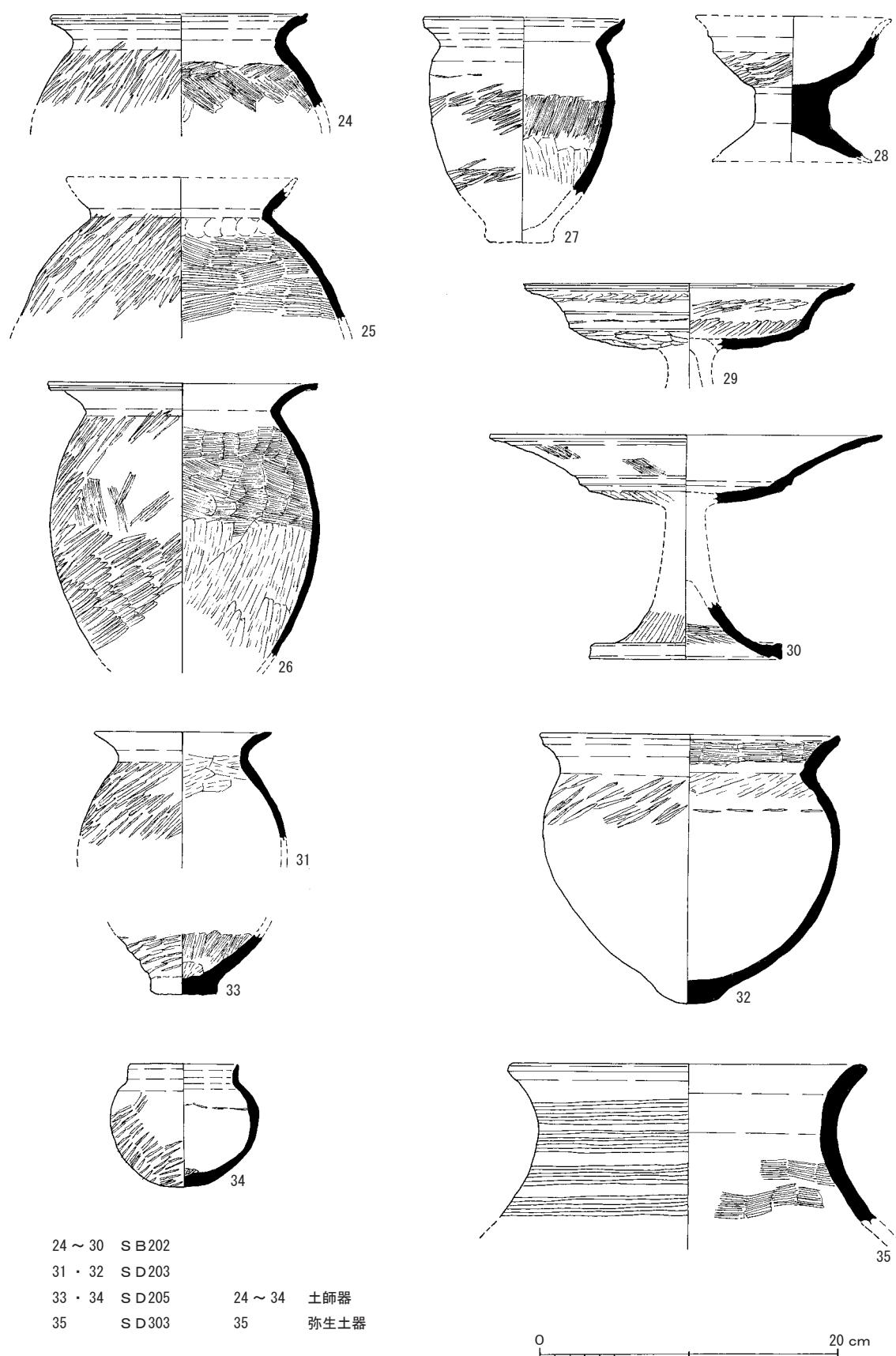


fig.202 出土遺物実測図（3）

29. 潤和横尾遺跡 第1次調査

1. はじめに

潤和横尾遺跡は、土地区画整理事業の開発計画を受け、平成18・19年度に実施した試掘調査によって発見された遺跡である。

調査対象地の地形は、東から西に下がる東西に伸びる尾根状地である。東西約350m、南北約250mの調査範囲で、標高は54～68m前後を測る。調査対象地の北側から西側には明石川の支流である天井川、南西方向には永井谷川が流れる。

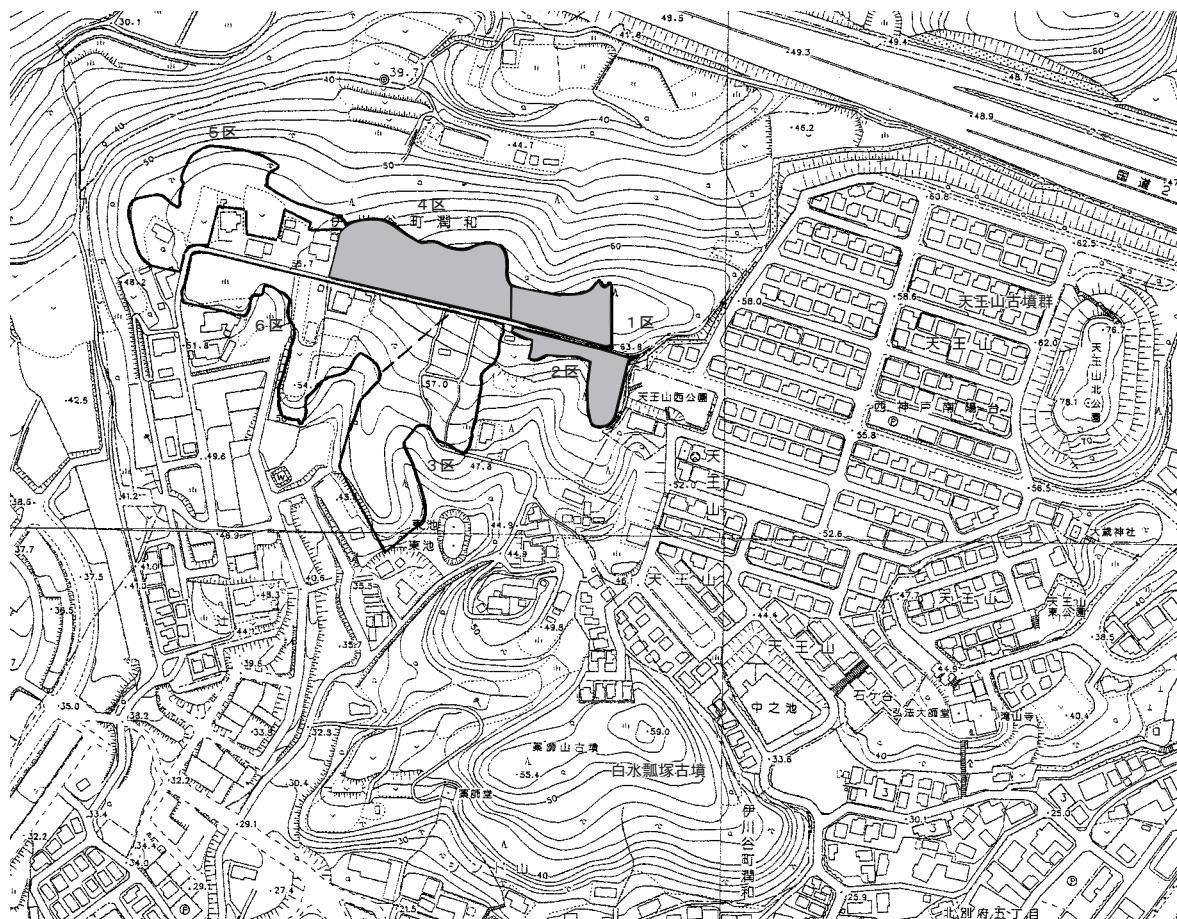


fig.203 調査地位置図 1 : 5,000

2. 調査の概要

調査対象地の面積は、28,730m²である。調査対象地を便宜上1～6区に分割して調査を行うこととし、1区から発掘調査に着手した。平成23年度は、1、2、4区の調査を実施した。

基本層序

基本層序は単純化すると、表土、黄灰色泥砂、黄褐色砂泥（地山、上面が遺構面）である。尾根上では間層はほとんどみられず、南北斜面にはそれぞれ間層が存在した。

間層からは、弥生土器片とともに古墳時代の須恵器、中世の須恵器・陶器、近現代の陶磁器片も出土しており、現状では、出土遺物から弥生時代以降現代に至るまで何らかのかたちで人々が山に入りかかわりを持っていたことが考えられる。また後述するように、SB101の最上層からは、弥生土器片とともに奈良時代の須恵器壺蓋が出土している。

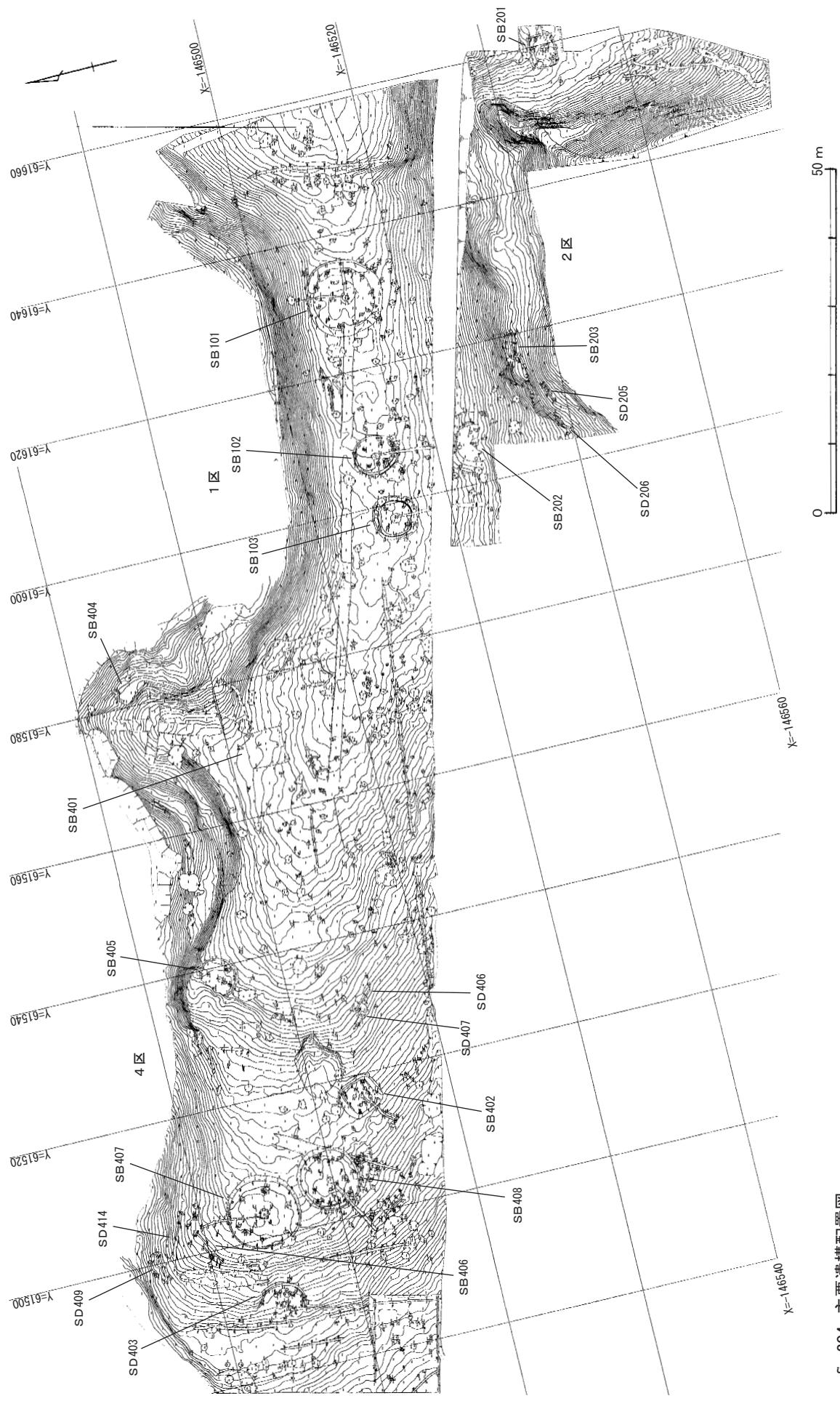


fig.204 主要構造配置図

今回の調査で確認した遺構の時期は、概ね弥生時代、古墳時代、近世である。

1区では、竪穴建物3棟、土坑、落ち込み状遺構、溝状遺構、ピットなどを検出した。

2区では、竪穴建物3棟、落ち込み状遺構、溝状遺構、ピットなどを検出した。

4区では、竪穴建物9棟、土坑、落ち込み状遺構、溝状遺構、ピットなどを検出した。

遺物の内容は前述のとおりで、280コンテナで約30箱出土している。

表21 潤和横尾遺跡第1・2・4区竪穴建物一覧

竪穴建物	形状	規 模		床面 標高	ベッド 状遺構	支柱穴	排水溝	中央 土坑	出土遺物	備考
S B 101	円形	長径11.5m	短径11.0m	66.5m	有	10	有	有	甕、鉢	最高所 最大
S B 102	円形（不整円）	長径6.5m	短径5.8m	66.0m	有	4	有	有	壺、甕	
S B 103	円形（不整円）	長径7.0m	短径6.5m	65.9m	有	4	有	有	壺、甕	
S B 201	方形	東西5.1m	南北4.2m	61.8m	無	4	無	有	壺、甕、鉢	炭化材有
S B 202	円形	東西9.0m		64.7m	有	4?	無	有	甕、砥石、磨石	
S B 203	方形	東西3.9m		61.9m	無	2?	無	—	甕	斜面部流失
S B 401	方形	東西5.2m	南北5.6m	65.1m	無	不明	無	無	甕	
S B 402	方形（当初）	長辺5.0m	短辺4.3m	61.3m	無	2	無	無	壺、甕	焼失 炭化材有
	隅丸方形（拡張後）	長辺6.2m	短辺5.2m	61.5m	有	4	有	有	磨石、砥石	建替有
S B 403	円形	当初 長径6.1m		58.8m	無	4	有	有	甕、磨石	建替有
		拡張後 長径6.6m		58.8m						
S B 404	方形	一辺4.6m以上		62.7m	無	2?	無	—	甕	斜面部流失
S B 405	円形（不整円）	長径5.6m	短径5.1m	63.2m	無	4	無	有	高坏、甕	台石
S B 406	方形	一辺5.2m		60.1m	無	2?	無	—	甕	斜面部流失
S B 407	円形（不整円）	長径11.0m	短径10.6m	60.4m	有?	6	有	有	壺、甕、鐵鎌	支柱穴より鐵鎌
S B 408	円形（不整円）	当初 復元径8.0m		60.4m	有?	7	有	有	壺、甕、砥石	建替有
		長径9.5m	短径8.3m	60.4m						焼土ピット
S B 409	方形	一辺4.5m		58.8m	無	2?	無	—	甕	斜面部流失
その他の竪穴建物の可能性のある遺構										
S D 108	方形	一辺5.9m		65.9m	—	—	—	—		
S D 205	方形	一辺3.4m		61.4m	—	—	—	—		斜面部流失
S D 206	円形	復元径約5.2m		61.9m	—	—	—	—		斜面部流失

1区

東西方向の尾根状地で全調査対象地の最高所に当たり、標高は67m前後を測る。

S B 101

平面形は不整円形を呈し、長径11.5m、短径11.0m、深さ30cmを測る竪穴建物である。床面の標高66.5mを測り、主柱穴10基を検出した。ベッド状遺構をもち、東側半分ほどに周壁溝をもつ。中央土坑をもち、北側に向けて排水溝が掘られている。床面で焼土及び炭化物を含む部分が5ヶ所程度検出した。建物内で検出したピットでは、P07、P10以外すべて焼土及び炭化物が検出している。

主柱穴の直径は40~70cm、深さは30~70cm（P05、P06を除く）を測り、主柱穴間の距離は、2.3~3.1mを測る。中央土坑は、直径東西1.5m、南北1.8m、深さは60cmを測る。堆積途中に厚さ30~50mmの炭化物層を2層確認した。また東端部周壁溝上から、小型鉢が出土した。

S B 101のように直径10mを越す大型竪穴建物の類例として、神戸市内においては現状で当調査例を含め7遺跡9棟（城ヶ谷遺跡は隅円方形）、前記以外兵庫県下では17遺跡28棟が知られている。大型竪穴建物と2~4棟の竪穴建物の組み合わせをひとつの単位として捉える考え方がある。ただし遺構の性格や集落内での位置づけなど必ずしも明確ではないのが現状である。

表22 神戸市内大型豈穴建物一覧

遺跡名(所在地)	遺構名	平面形	規模	時期	備考
池上北	3号住居	円	径10.0m	後期	
白水	S B 201	円	径10.0m	後期	ベッド状遺構内側五角形
城ヶ谷2次	S B 10	隅円方形	長辺10.1m	中期末～後期初	SB07周壁溝上面鉄鎌豈穴建物35棟
宅原 内垣地区	S B 01	円	径11.5m	後期	
菅野	S B 02	円	径10.5m	後期	
日輪寺 6・7次	S H 26	円	径10.0m	終末期～古墳初頭	SH42径9.6m
10・11次	S B 04	円	径10.3m	終末期～古墳初頭	建物床面 鉄鎌 鍛造品
潤和横尾1次	S B 101	不整円	長径11.5m	後期	S B 408長径9.5m
	S B 407	不整円	長径11.0m	後期	S B 407支柱穴より鉄鎌

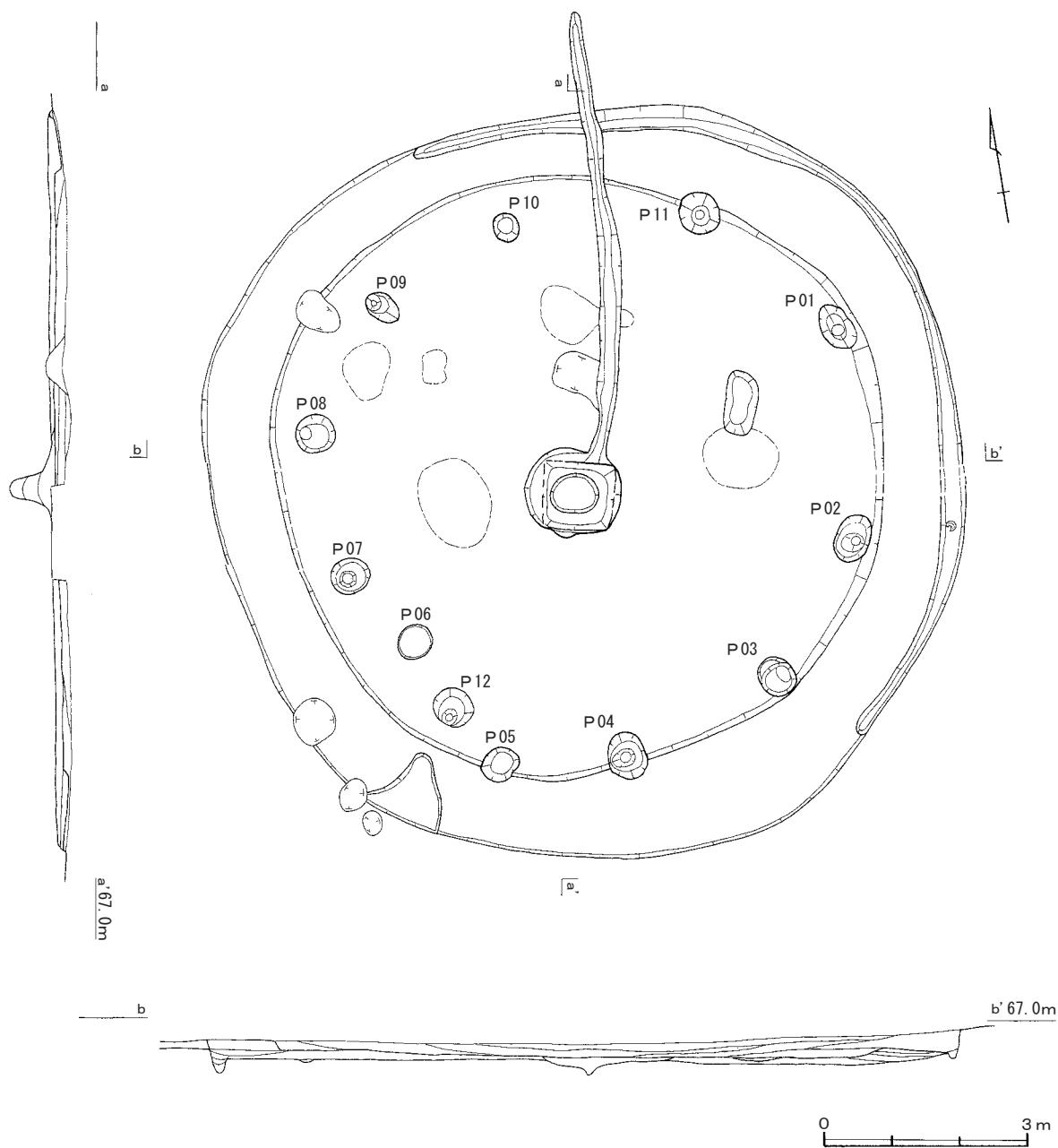


fig.205 SB101 平・断面図

SB102

平面形は不整円形を呈し、長径 6.5m、短径 5.8m、深さ 40cm を測る堅穴建物である。床面の標高 66.0m を測り、主柱穴は 4 基確認した。中央土坑をもち、南側に向けて排水溝が掘られている。この排水溝は、南側に位置する SB202 によって切られている。支柱穴間の距離は、2.5 ~ 2.7m である。

東辺を除いて、ベッド状遺構を検出している。最大幅は 60cm、高さ 20cm を測り、東南部から始まり東北部で消滅する。建物掘形はほぼ垂直に切り込まれ、ベッド状遺構から床面もほぼ垂直に取り付く。最後に遺構構築時の状況を探るために、ベッド状遺構や床面堆積層を除去した。ベッド状遺構直下に、円形に片切彫り状の溝が掘られ中央部分が高く残るという状況となった。

埋土から、壺、甕などの弥生土器が出土した。北東隅部で広口壺の口縁部が出土した。口縁部に鋸歯文と円形浮文をもち、頸部に刻みをもつ突帯とその上下に三角形刺突文を施す。

SB103

平面形は不整円形を呈し、長径 7.0m、短径 6.5m、深さ 50cm、床面の標高 65.9m で、主柱穴 4 基を検出した。中央土坑をもち、南側に向けて排水溝が掘られている。排水溝は未調査部分を含めて約 13m 検出された。支柱穴間の距離は、2.6 ~ 2.8m である。建物遺構は遺構面からほぼ垂直に切り込まれているが、ベッド状遺構から床面にかけての北西部は幅狭になる部分はあるが、四周にベッド状遺構を持つ。ベッド状遺構面には、周壁溝を 3 / 4 度検出した。幅は 10 ~ 20cm、高さは 20cm を測る。

埋土から、壺、甕などの弥生土器が出土した。南西隅部床面から広口壺の口縁部が出土した。この壺は、口縁部から頸部にかけて無文である。

その他の遺構

SB101 の北東で検出した SK113 は、市女笠を逆さにしたように二段に掘られた土坑である。上部直径 1.4m、中段直径 1.1m、中段までの深さ 70cm を測る。さらに掘りくぼめた規模は、直径 60cm、底部直径 40cm、深さ 30cm である。二段に掘られた部分から径 13cm、高さ 15cm を測る蓋付青磁小壺が正位置で出土した。蓋は合せ蓋になっており、幅 15mm、厚さ 1mm の銅板で、十文字に蓋身を封するように括られて出土した。遺構の時代は、出土した小壺から判断すれば近世であろうと考えられる。壺の内容物については調査中である。

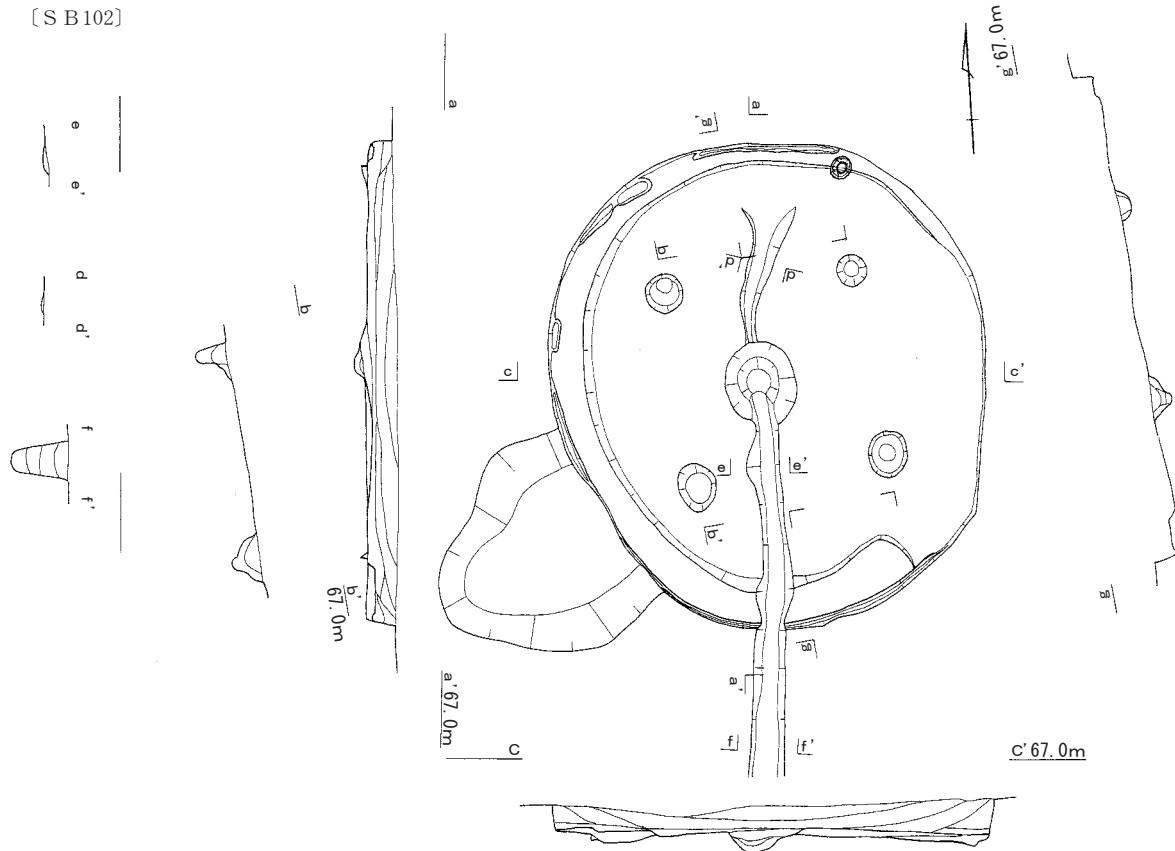


fig.206 SB102 全景



fig.207 SB103 全景

[S B102]



[S B103]

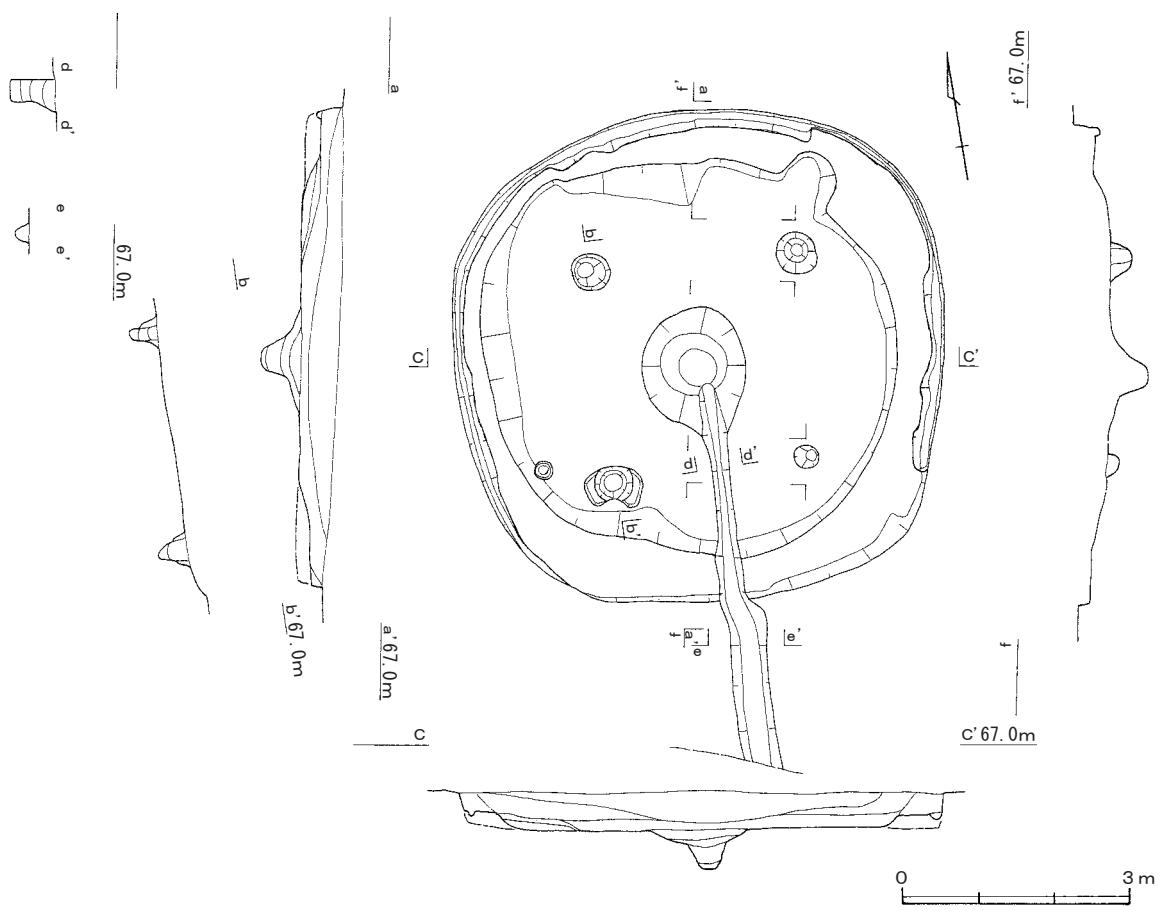


fig.208 SB102・103 平・断面図

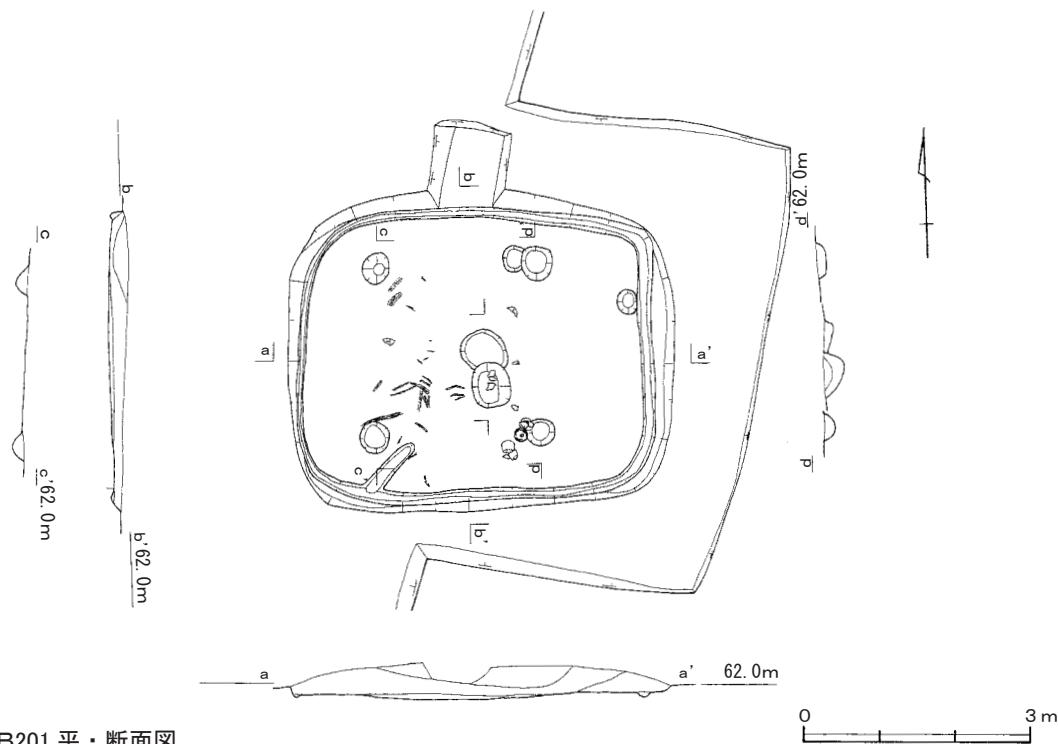


fig.209 SB201 平・断面図

2区

2区は、概ね南向きの斜面地形で、調査区東端部は南に伸びる尾根状地形である。東端部尾根上でSB201を検出した。斜面地では、SB202、203などを検出した。

SB201

SB201は、平面形は方形で、東西5.1m、南北4.2m、深さ30cmを測る。床面の標高61.8mで、支柱穴は4基である。ベッド状遺構はなく、周壁溝は全周する。中央土坑とその南側床面で鉢、甕などの弥生土器が出土した。床面の西半部でわずかながら炭化材を検出したが、周辺が焼けているような状況は認められなかった。

SB202

SB202は、平面形は円形と推定される竪穴建物で、東西9.0m、深さ40cmを測る。床面の標高64.7mで、ベッド状遺構をもつ。北側は道路によって未調査であり、南側は一部流失している。直径1.2m、深さ50cmの中央土坑があり、主柱穴と考えられるピットを4基検出したが、不分明である。甕、砥石、磨石などの遺物が出土した。

SB203

一辺3.9m程度の方形竪穴建物と考えられる遺構である。南向き斜面に東西3.9mを測る、竪穴建物の周壁溝と考えられる溝状遺構を検出した。遺構及び遺物の出土状況から、方形竪穴建物と考えた。南斜面は流失しており、ピットなどは検出していない。遺物出土量はやや多い。

その他の遺構

SB203の西側には、竪穴建物の周壁溝と考えられる溝状遺構SD205とSD206を検出した。両遺構ともSB203のように床面と考えられる空間は全く存在しないが、竪穴建物の可能性が考えられる遺構である。両遺構からは、少量の弥生土器が出土した。SD205の底面東半から直径10cm、深さ15cmの小さいピットを3基検出した。

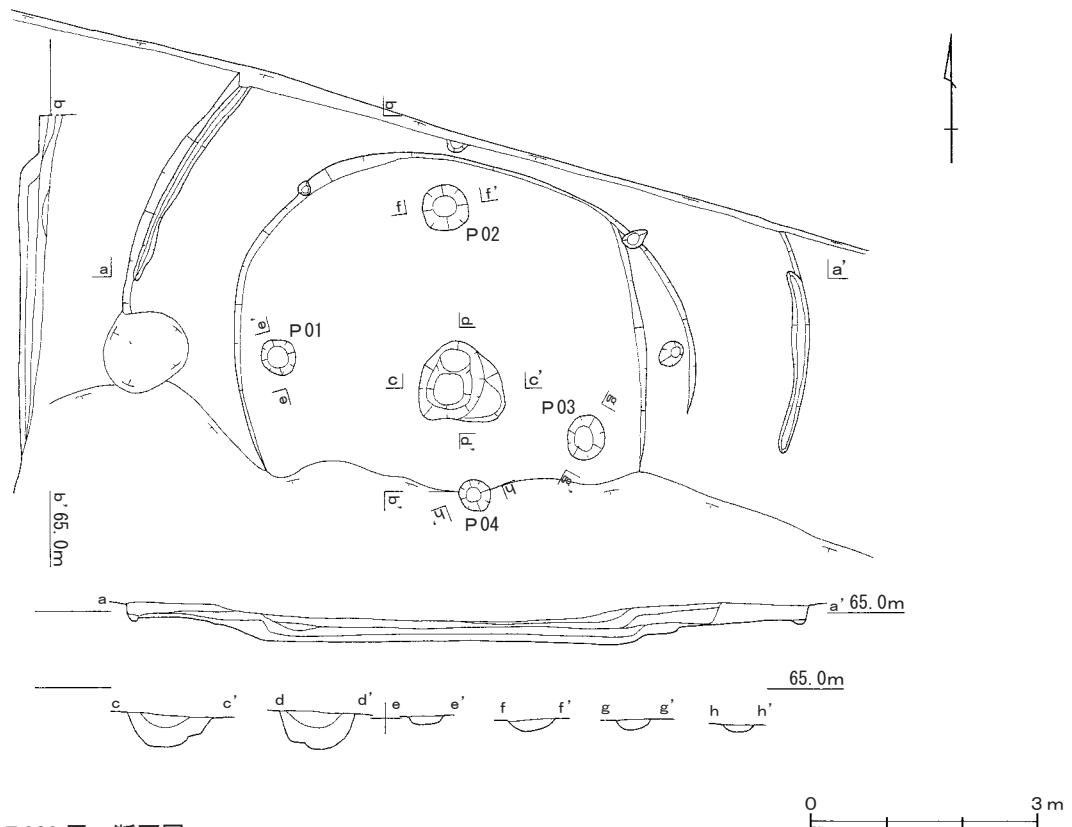


fig.210 SB202 平・断面図

その他に竪穴建物の周壁溝の可能性が考えられる遺構として、1～4区にかけて検出したSD108、SB408の南で検出したSD408が考えられる。また、SB401の南で検出したSD403や、さらに南側で検出したSD404、405などがあげられる。

4区

1区より西へやや下がった西にのびる尾根状地である。

SB401

東西5.2m、南北5.6m、深さ10cmの規模で、平面形が方形の掘形を検出した。掘形の立ち上がりは緩慢である。床面の標高65.1mを測る。少量の弥生土器片が出土した。床面でピットや土坑は検出していない。方形の掘形をもつことや遺物の出土状況から竪穴建物と推定した。

SB402

建替えがあり焼失した竪穴建物である。当初長辺5.0m、短辺4.3mの四周に周壁溝があり、主柱穴は2基と考えられる。次に周壁溝を埋め四隅に拡張してベッド状遺構を設け四隅に柱穴を掘る。西側に伸びる排水溝をもつ。西側斜面は流失しているが、やや胴張りの長辺6.2m、短辺5.2mの規模に拡張する。ベッド状遺構の上と下で周壁溝を検出している。この後、火災があり焼失したようである。

梁材、桁材は明確ではなかったが、垂木材とワラ状炭化物を検出した。

炭化材については適宜サンプリングを行っており、今後樹種同定を実施する予定である。

当初建物からは、壺、甕などが出土している。拡張後建物からは、壺、甕、砥石、磨石などが出土地している。

[炭化材検出状況]



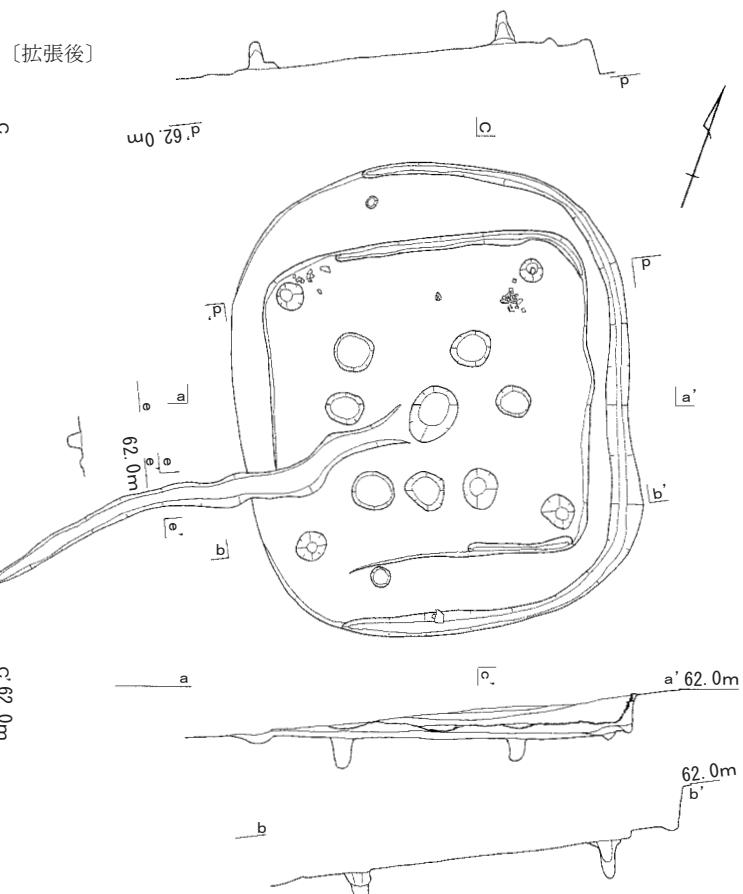
fig.211 SB402 平・断面図



fig.212 SB402 炭化材検出状況



fig.213 SB402 拡張後全景



[当初建物]

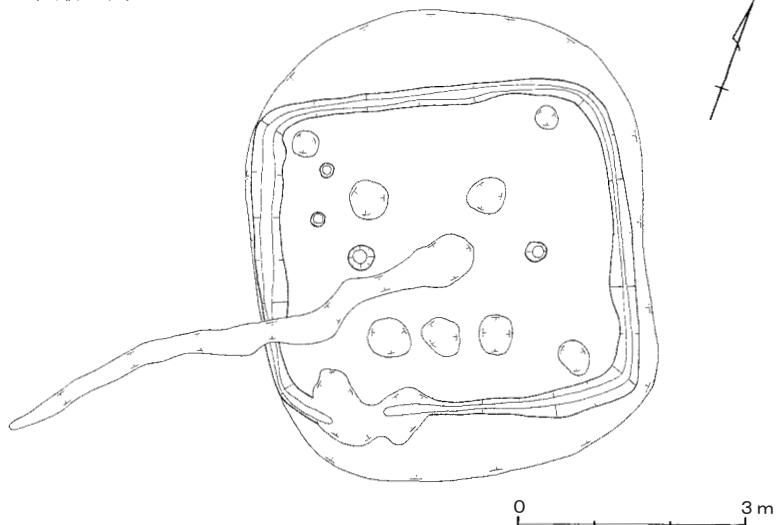


fig.214 SB402 当初建物全景

S B403

S B 403も建替えが行われたと考えられる堅穴建物である。当初の直径6.1mの建物から直径6.6mの建物に拡張されたものと考えられる。建物の西側は流失しており、中央土坑からわずかに南西方向に排水溝が伸び、支柱穴は4基と考えられる。壺、甕、磨石などが出土した。

S B404

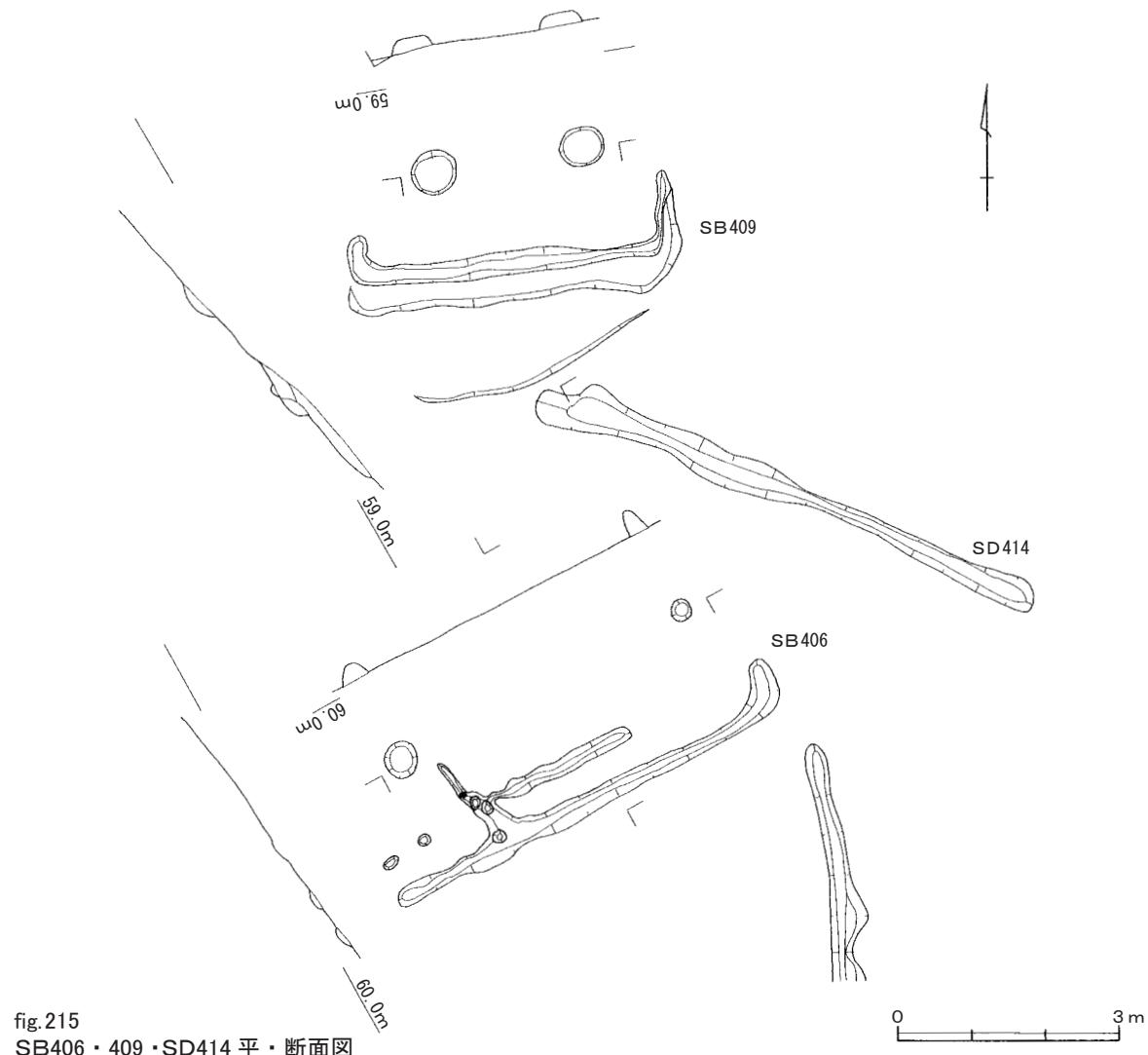
4区北東部で検出した。堅穴建物の周壁溝と考えられる溝状遺構から一辺4.6mの方形堅穴建物と推定した。弥生土器が少量出土している。

S B405

4区中央北部分で検出した堅穴建物である。長径5.6m、短径5.1mを測り、平面形は橢円形を呈すると考えられるが、北西部分は一部流失している。中央土坑と支柱穴4基を検出した。排水溝、ベッド状遺構はない。床面南東部には、長径40cm程度の台石と考えられるチャートと壁際では、高坏、甕などが出土した。

S B406、409

4区北西斜面で検出した堅穴建物である。検出した周壁溝から、S B 406は一辺5.2m、S B 409は一辺4.5mをそれぞれ測る、平面形が方形を呈する堅穴建物である。支柱穴はそれぞれ2基検出しており、支柱2本以上の建物であることが判る。それぞれ少量の弥生土器が出土した。



SB407

長径 11.0m、短径 10.6m、深さ 50cm を測り、平面形がほぼ円形を呈する、大型堅穴建物である。ベッド状遺構と断定できるほど明確ではないが、幅 1m 程度で、中心より 10cm 程度高く検出している。周壁溝が巡り、中央土坑から北側へ排水溝が伸びる。支柱穴は 6 基検出し、直径 60~80cm、深さ 70~80cm でやや大型のピットである。6 基の支柱穴の底は、すべて固い地山層に到達している。柱間距離は、3.8~4.0m である。主柱穴断面形より柱は建物中心に向かって転びが観察される。

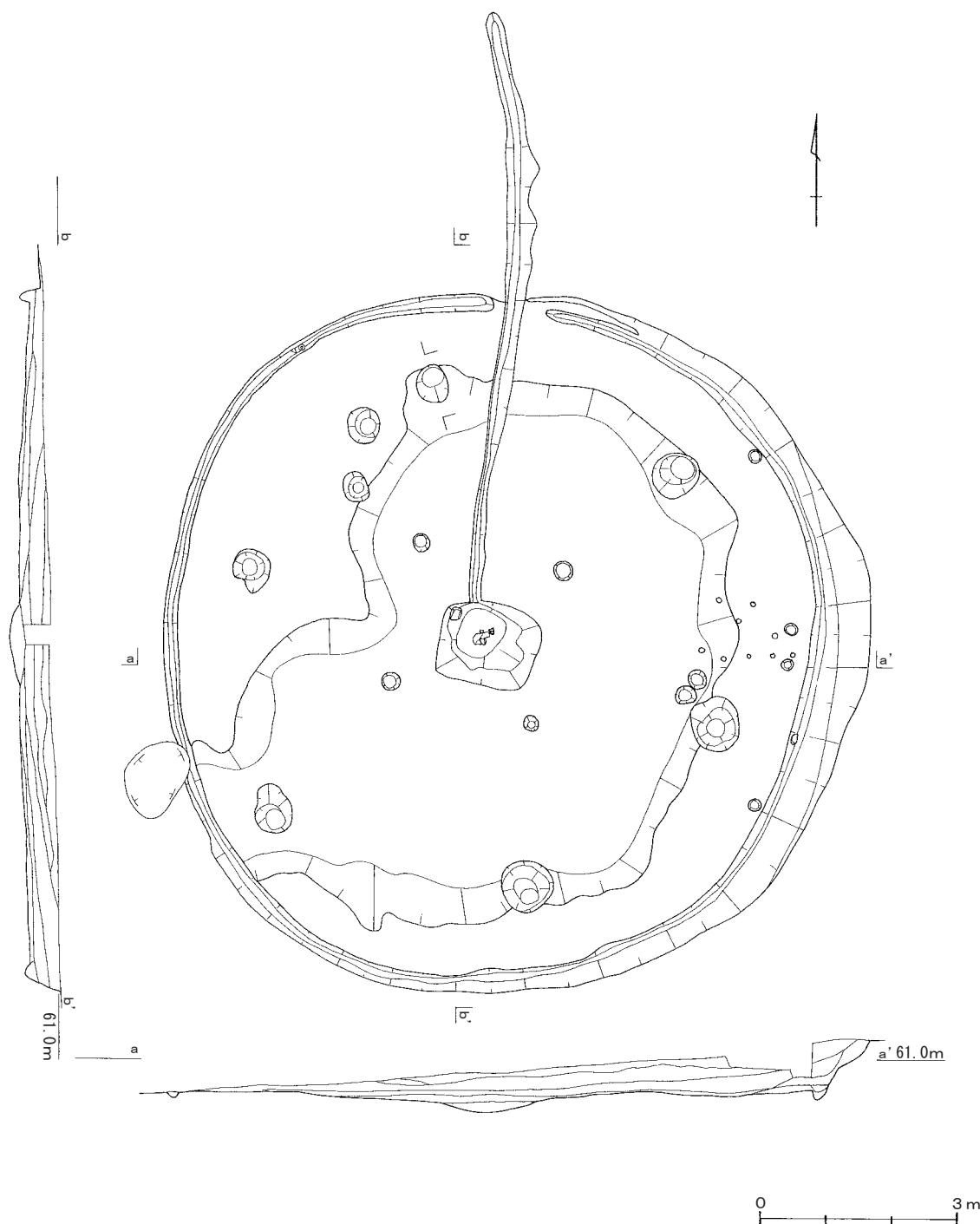


fig.216 SB407 平・断面図

中央土坑は上部が東西1.5m、南北1.3mの方形を呈し、北西部は下層部分が径70cmで、円形にさらに掘り窪められている。深さは40cmを測る。中央土坑の四方に直径30cm、深さ20cmのピットを検出している。これらのピットも断面形より中央土坑に向かって転びが観察される。4基のピット間の距離は、2.2~2.4mで、中央土坑に対し何らかの架構を行おうとしたものであろうか。

壺、甕などの弥生土器が出土した。支柱穴P07からは、現存長幅15mm、長さ30mmの鉄鏃が出土した。他に後述するようにSD407からも鉄鏃が1点出土している。

SD407及びSB407-P07出土の鉄鏃は、現状で市内では、当例を含め他に10遺跡11例、前記以外県下では7遺跡21例の出土例が知られている。また遺跡内の弥生時代鉄鏃の複数出土例は、市内では初例である。

S B408

SB408は、西側で周壁溝を二重に検出していることから、建替えが行われたと考えられる堅穴建物である。当初直径8.0mの建物を長径9.5m、短径8.3mに拡張して建替えを行なったようであり、深さ60cmを測る、平面形がほぼ円形を呈する大型堅穴建物である。SB407と同様にベッド状遺構ほど明確ではないが、床面が中心部より周辺部が少し高くなっている。周壁溝が西側で一ヶ所、ベッド状遺構を切って中心に向かって掘られている。

主柱穴は7基検出している。直径30~50cm、深さ20~70cmを測り、やや規模にばらつきが認められる。柱間距離も同様に1.9~2.9mと一定ではない。7基のうち2基の支柱穴は、明らかに柱の位置をずらしている。上記の建替えと関係するものと考えられる。

中央土坑は長径1.0m、南北0.8m、深さ20cmを測り、平面形が橢円形を呈する浅い土坑である。中央土坑から西側へ排水溝が延びる。床面西側で直径20~50cm、深さ20cmを測り、被熱により遺構周縁が赤変したピットを5基検出した。それぞれ微量の弥生土器片が出土したが、現状では遺構の性格は不明である。堅穴建物内から壺、甕などの弥生土器と砥石が出土した。

なおSB407、408では、掘削作業中に床面付近の土壤採取を行ない、現地で水洗選別作業を行なった。また平行して建物床面付近で、磁石を用いて鍛造剥片などの有無を確認する作業を実施した。作業の結果、水洗選別作業では炭化物や弥生土器の小片が検出された。磁石を用いての作業によっても金属の剥片などは検出されなかった。従って金属加工に関連する遺物の検出はできなかつた。

表23 兵庫県下鉄鏃出土弥生時代遺跡一覧

遺跡名	遺物番号	鏃形	出土層位	時期	その他の鉄製品	備考
奈カリ寺（三田市）	鉄鏃-1	三角形・有茎	包含層	中期後半	板状鉄斧・鉄鏃	鉄製品計21点
川除・藤ノ木（三田市）	鉄鏃M2・M6	柳葉形M2 圭頭M6	堅穴建物SH06M2多角形・SH28M6方形	後期～古墳時代前期	武具・工具・不明品	鉄製品計7点 SH25径11.5m・SH52径10.35m・SH53径10.35m
有鼻（三田市）	M6-7	柳葉形	段状遺構・溝状遺構	中期後期	板状鉄斧・鉄劍	鉄製品計13点鉄劍230mm幅20mm
与呂木（三木市）	鉄鏃-143	三角形・有茎	堅穴建物中央土坑	中期後半～末	鉄器片	建物径9.1~9.52m
周世入相（赤穂市）	鉄鏃M3	柳葉形	包含層	後期	—	
塩壺西（淡路市）	鉄鏃F1-F2-F3	柳葉形	堅穴建物・土坑	後期後半～末	鉄鏃片	大型鉄鏃136mm、鉄製品計6点
五斗長垣内（淡路市）	鉄鏃1～11	五角形鏃1・2 柳葉式鏃3～8 圭頭鏃9～11	遺物包含層・SH313 SH205・SH302・SH313 SH205・SH302・SH304	後期	板状鉄斧・棒状鉄片・板状鉄片・刀子・錐・針・鉗	堅穴建物23棟、鍛冶作業・石器製作、赤色顔料付石器、SH203径10.3m・SH303径9.7m
伯母野山（神戸市）	168	柳葉形	採集？	中期末～後期	板状鉄斧4点	169鉄鏃？古墳時代
篠原29次（神戸市）	R017	柳葉形	包含層	後期	無	堅穴建物付近出土
表山（神戸市）	鉄鏃F1	無茎	環壕桶状遺構	後期	釣針（50mm以上）	鉄製品計3点
玉津田中（神戸市）	鉄鏃4009	柳葉形	溝状遺構	終末期	刀子・鑿	埴輪・羽口・銅鏡（五角形）
北町T.内第4地点（神戸市）	鉄鏃	三角形？有茎	試掘	中期末～後期	袋状鉄斧	試掘調査 現状保存 埋文C常設
城ヶ谷3次（神戸市）	鉄鏃R045	柳葉形	堅穴建物SB07 周壁溝上面	中期末～後期初	堅穴建物SB315R129	堅穴建物35棟
長田神社境内12次（神戸市）	鉄鏃	柳葉形？	堅穴建物SB01床面	後期	無	謙先端部欠損？
兵庫松本4次（神戸市）	鉄鏃84	柳葉形？	SR201	終末期～古墳初期	無	方形堅穴建物約15棟
日輪寺11次（神戸市）	鉄鏃235	有茎	堅穴建物SB04床面	終末期～古墳初期	無	SB04直径10.3m 鍛造品
祇園15次（神戸市）	鉄鏃R205	柳葉形	包含層	後期	—	H23年度調査
出合46次（神戸市）	鉄鏃R482	柳葉形	堅穴建物	後期	後期溝不明鉄製品	H23年度調査
潤和横尾1次（神戸市）	鉄鏃R143・R272	柳葉形	溝状遺構・堅穴建物 SB407支柱穴	後期	無	SB407直径11.0m H23年度調査



fig.217 SB201 全景



fig.218 SB202 全景



fig.219 SB203 全景



fig.220 SB405 全景



fig.221 SB407 全景



fig.222 SB408 全景

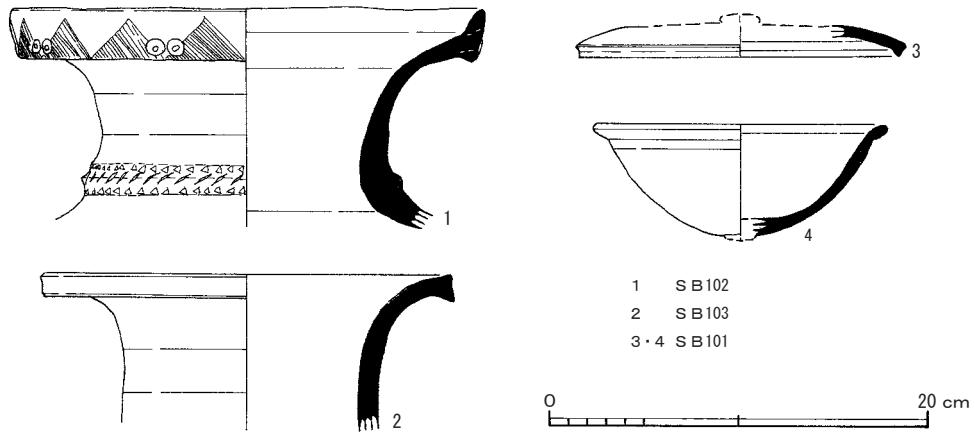


fig.223 出土遺物実測図

その他の遺構

S D 406、407は、S B 402の東で検出した、幅30cm、深さ10cmと、幅0.5m、深さ20cmの平行に走る溝状遺構である。2条の溝状遺構は、平面形が不整形なS X411の堆積土内に、N-45°-Wの方向に検出している。それぞれ少量の弥生土器が出土した。さらにS D407の東端部からは現存長幅18mm、長さ57mmの柳葉形鉄鎌が出土した。

S D412は、S B 404の南側で検出した溝状遺構である。幅40cm、深さ10cmの規模の溝状遺構で、古墳時代の須恵器甕片が少量出土した。

S X412は、4区西南端で地山を東西、南北に約10m切り落とし、造成された平坦面である。この平坦面には、15基程度の土坑、ピットなどが掘削されている。うち土坑1基には、口縁部を欠く近代水甕が正位置に据えられていた。土坑の規模は直径80cm、深さ60cmを測り、水甕の法量は直径40cm、残存高40cmである。堆積土から、弥生土器高坏、甕、サヌカイト片、近世～近現代の陶磁器などが出土した。

S X416は、S B 402の北東で検出した、東西9.0m、南北6.5m、深さ50cmを測る、比較的大きな落ち込み状遺構である。堆積土から、近世陶磁器、砥石が出土した。

また多数の弥生時代のピットを検出したが、地区によっては直線に並ぶもの（S B 401南側、S B 408南側など）も見られるが、建物等としてのまとまりは現状では認められない。

3. まとめ

今回の調査では、弥生時代竪穴建物15棟、土坑、溝状遺構、落ち込み状遺構、ピット、古墳時代溝状遺構、近世土坑、落ち込み状遺構など数多くの遺構を検出した。少なくとも弥生時代後期頃～近世にかけて、当遺跡と人々とのかかわりが数多くみられた。

現状では、調査予定面積の3分の1弱について調査を実施できたにすぎず、不確定な部分が多いが、弥生時代竪穴建物15棟の検出から、大型建物S B 101に近接する、S B 102、103、202、203のまとまりと、大型建物S B 407、408に近接する、S B 402、403のまとまりに空間的には、まとめることができそうである。ただし出土遺物や個々の建物の建替えなどは今後検討すべき課題である。今後遺物の整理作業を待ってさらに検討したい。

30. 馬掛原遺跡 第2次調査

1. はじめに

馬掛原遺跡は、平成15年の試掘調査によって発見された遺跡である。都市計画道路出合新方線築造に伴い、第1次調査が実施された。調査の結果、弥生時代後期～末頃の区画墓の溝状遺構や同時期の掘立柱建物が検出されている。未だ発掘調査事例が少ないため、今後の調査の進展により次第に遺跡の全容が明らかとなることが期待されている遺跡である。

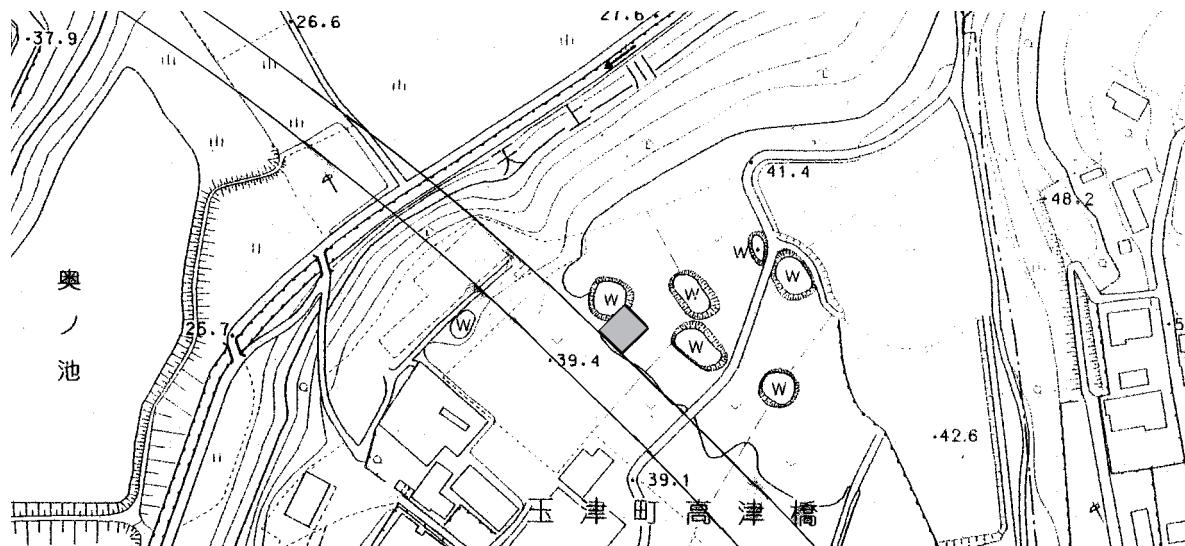


fig.224 調査地位置図 1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、区画整理事業に伴うもので、同事業のうち、工事用進入路敷設によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。なお今回の調査地は、第1次調査地の北側に隣接する地区にあたっている。

基本層序

基本層序は、現代耕土、旧耕土、黄褐色砂泥（地山、上面が遺構面）となる。近現代における耕作作業などに伴う地形改変によって遺構面は削平を受け、遺構面や遺構の遺存状況は悪い。遺構面の標高はT.P. 39.6m前後を測る。

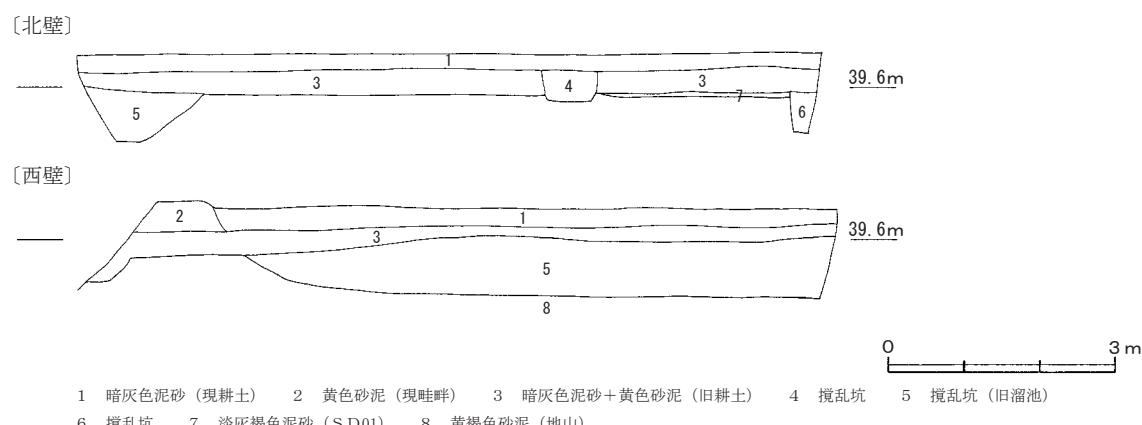


fig.225 調査区北・西壁土層断面図

SD01

調査区東隅で検出した、深さ10cmを測る二段に落ちる浅い溝状遺構である。微量の弥生土器片が出土している。

SD02

調査区を東西に横切るSD02は、幅約50cm、深さ5cmを測る浅い溝状遺構で、東端部分のみ深さ30cmと深くなる。遺構内2箇所で、中世の鍋片が出土している。

SD03

幅約60cm、深さ30cmを測る溝状遺構である。遺物は出土していない。遺構の規模や出土遺物が皆無であることが、第1次調査検出のSX01、02などと共に通する。第1次調査で想定された区画墓を構成する一要素の可能性も考えられる。

ピット

P07は、直径20cm、深さ10cmを測るピットで、弥生土器が出土している。P07の検出により、第1次調査で検出されているSB01が、東へ1間分伸び、東西2間×南北1間以上の建物になることが判明した。

P03～P06は、東西方向に柱間約1.8mで直線的に並んでおり、柵状遺構の可能性がある。直径は4基とも25cm前後であるが、深さは一定せず、P03は20cm、P04は40cm、P05は30cm、P06は30cmと様々である。P04とP05から微量の弥生土器片が出土している。

3. まとめ

今回の調査では、後世の土地利用によって改変を受けながらも、第1次調査と同様の遺構面を検出し、遺跡の範囲がさらに北東方向に広がることを確認した。当遺跡は調査件数が少なく、遺跡の全容解明は今後の課題であるが、今回の調査により貴重な資料を追加できたといえる。

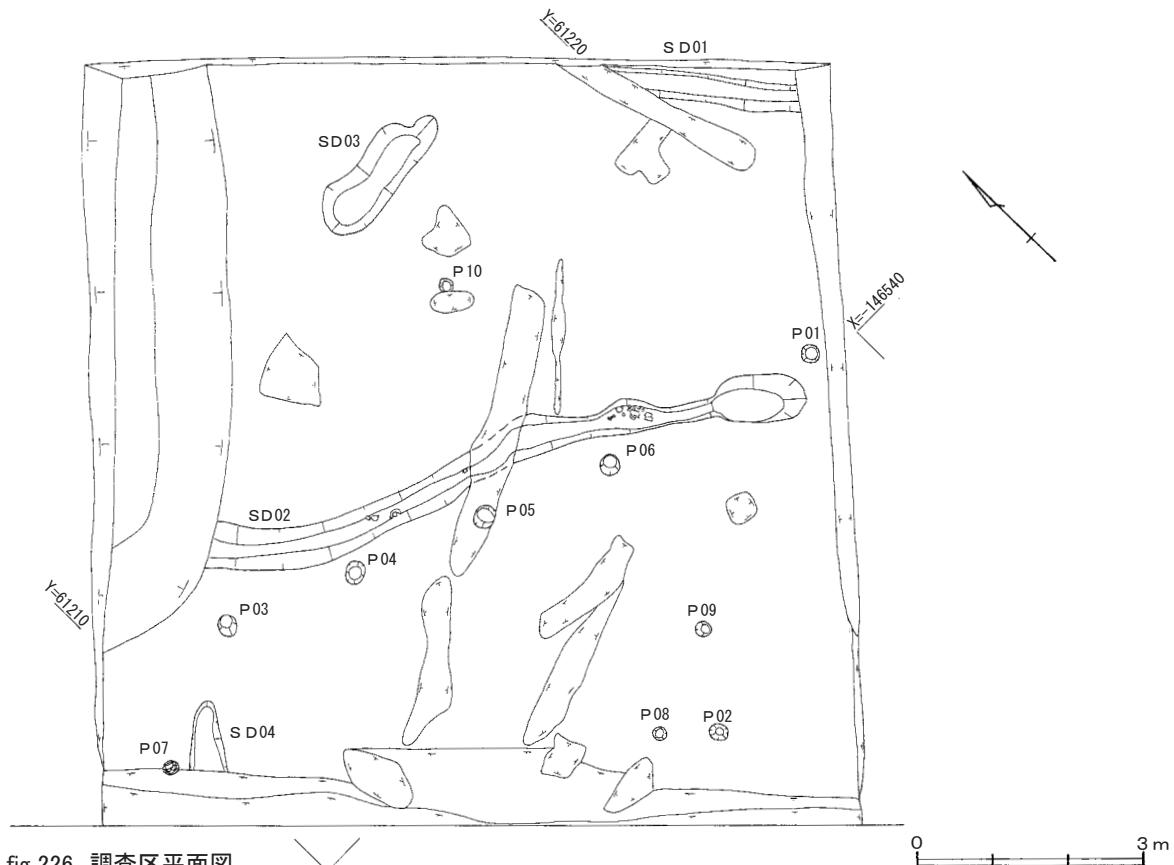


fig.226 調査区平面図

31. 潤和遺跡 第5次調査

1. はじめに

潤和遺跡は、明石川の支流、伊川の右岸の自然堤防上に立地する遺跡である。これまでに4回にわたる調査が実施されている。これまでの調査では、古墳時代の土坑、溝、平安時代後期～鎌倉時代の土坑、柱穴、溝、中世の土坑、溝などの遺構が検出されているほか、弥生時代の遺物包含層も確認されているが、調査件数が少なく、未だ遺跡の全容が解明されるには至っていない。

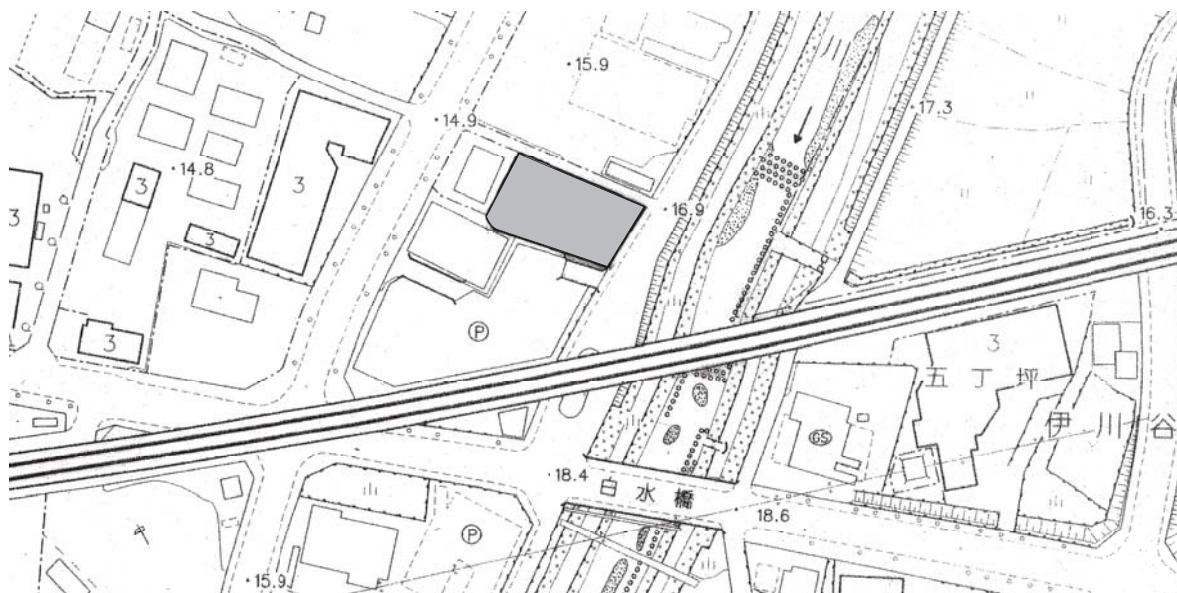


fig.227 調査地位置図 1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、共同住宅建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。調査対象範囲は2ヶ所に分かれており、西側の調査区をI区、東側の調査区をII区と呼称する。I区より調査を開始した。

基本層序

上層より、耕土、中世旧耕土が堆積し、その下層に12～15世紀の遺物を含む遺物包含層が存在し、その直下で中世の遺構面を確認した。溝、旧河道を検出している。

I区SD01

I区で検出した溝で、幅50cm、深さ15cmを測る。東西方向に流れる。後述するII区SD04につながるものと考えられる。土師器碎片が1点出土している。

II区SD01

II区中央部付近で検出した溝で、幅100cm、深さ30cmを測る。

II区SD02

II区北部で検出した溝で、幅30cm、深さ10cmを測る。S字状に屈曲しながら流れ、SD04に切られ途切れています。

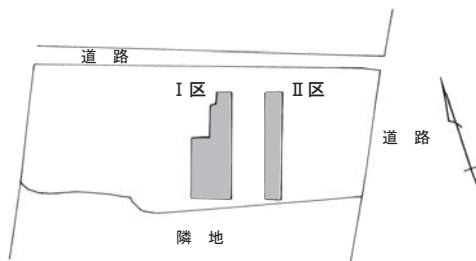


fig.228 調査範囲位置図

II区SD03

II区北部で検出した溝で、幅25cm、深さ5cmを測る。SD02に並走し、SD04に切られて途切れている。

II区SD05

II区北部で検出した溝で、幅60cm、深さ15cmを測る。この溝のみ遺物包含層上面より掘りこまれており、他の遺構よりも新しい時期の遺構といえる。

II区SD06

II区北部で検出した溝で、幅30cm、深さ5cmを測る。SD05によって切られて途切れている。

旧河道

I区南半部からII区の南半部にかけて東西方向に流れる旧河道を検出した。東・西側ともに調査地の外へ延びていることが想定される。幅9m以上、深さ50cm以上を測り、かなり深い深度をもつものと想定されるが、遺物が全く出土しないことから、安全面を考慮して以下の掘削は行わなかった。

河道内に堆積している土層は、いずれも粗砂～砂、砂礫層となっており、一過性の急流による堆積層と判断される。旧河道の上位には中世の遺物包含層がほぼ水平に堆積していることから、この旧河道の時期も中世と考えられる。

3.まとめ

今回の調査で検出した複数の溝の性格については、限定された範囲のなかでの調査であったため、今回の調査成果のみで断定することには困難が伴うが、中世段階で当地に農村集落が展開していたことに伴う遺構と考えられる。今後周辺地における調査の進展とその調査成果を加味しながら、さらに検討を加えていきたい。

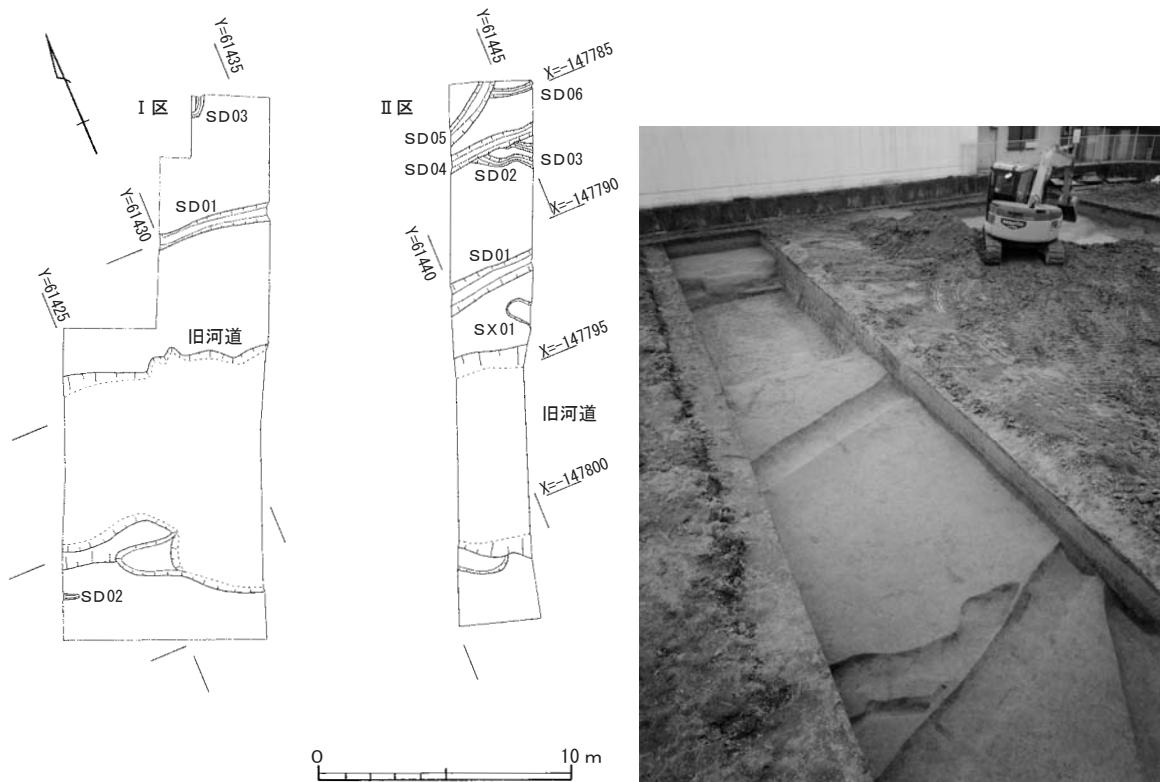


fig.229 調査区平面図

fig.230 II区全景

32. 今池尻遺跡 第4次調査

1. はじめに

今池尻遺跡は、伊川の支流あるいは天上川が形成した埋没する自然堤防上あるいは微高地上に立地している。今回の調査地の東側を通る都市計画道路出合新方線築造に伴って2次にわたる調査が実施されているが、遺跡全体の調査件数が未だ3回しか行われていない状況からは、遺跡の全容解明にはなお時間がかかるものと考えられる。

これまでの調査では、弥生時代中期～後期末の土坑、弥生時代後期の竪穴建物、土坑、古墳時代後期の竪穴建物、掘立柱建物、平安時代後期の掘立柱建物などの遺構や、各時期の遺物が確認されている。

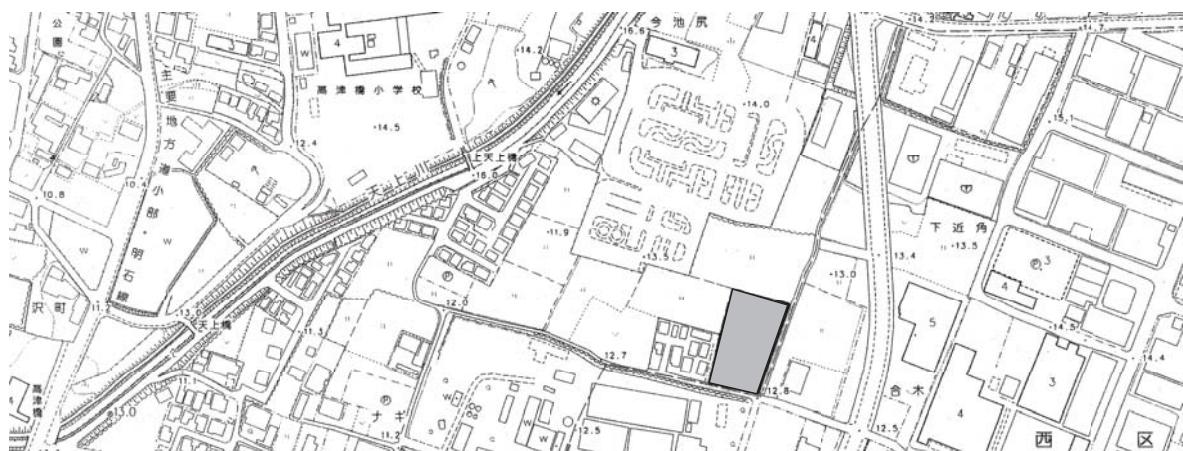


fig.231 調査地位置図 1 : 5,000

2. 調査の概要

今回の調査は、共同住宅建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。調査対象部分は2ヶ所に分かれており、西側の調査区をI区、東側の調査区をII区と呼称する。I区より調査を開始した。なお、I・II区とも調査対象範囲の北側は時期不明の旧河道にあたっている。テストピットやサブトレーンチを設定して確認作業を実施したが、旧河道内には遺物がほとんど含有されず、自然堆積により埋没したものと考えられたため堆積状況の確認作業を行った上で埋め戻しを行い、調査範囲から除外した。除外範囲は、I区で北端から約16m、II区で北端から約23mの範囲である。

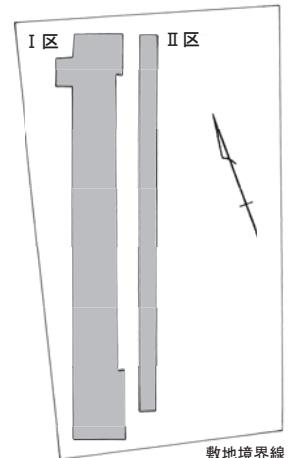
基本層序

上層より、盛土、中世旧耕土、古墳時代遺物包含層が堆積しており、その下層、標高約11.0mで遺構面を確認している。

遺構面基盤層は河川堆積層で、古墳時代後期の遺物を含み、土器のほか、ガラス玉や袋状鉄斧が出土している。

なお遺構面基盤層の下層には黒色粘土が堆積しており、弥生時代中期～後期の土器が含まれるため、遺構面基盤層となる河川堆積層の形成は当該時期に行われたと考えられる。

I、II区ともに古墳時代後期のピットなどの遺構を検出した。 fig.232 調査範囲位置図



ピット

直径70～100cm、深さは10～100cmを測り、規模にばらつきがみられる。検出状況にも規則性が認められず、建物を構成する柱穴である可能性は低いと判断される。I区で検出したものの中には断割を実施した結果柱痕が認められなかったものや断面形が袋状に末広がりになるなど不定形のものも含まれており、人為的なものではないものも含まれている可能性が高い。

II区で検出したピットは柱穴状断面を呈する大型の掘形をもつものが認められ、人為的な遺構と判断される。建物としての配置はほとんど認められないが、わずかにII区中央部で建物の一部の可能性が考えられるものがあるが、大半が調査区外に延びており、現段階ではI区に同一の建物が延びている可能性も低いことから断定には至っていない。

S D01

II区南部で幅20cm、深さ5～10cmを測り、やや蛇行して流れる溝を検出した、耳環1点が出土した。性格については不明である。

3. まとめ

今回の調査では多数のピットを確認したが、明確に建物としてのまとまりを見出すことはできなかった。限定された調査範囲の中で建物としての配列の把握が困難であったこともその一因としてあげられよう。

I、II区とも北端部付近には時期不明の旧河道が存在し、北側には遺構の広がりが認められない。一方南東部ほど遺構の密度が高い傾向にあり、古墳時代後期の集落の中心は当調査地の南東側に存在する可能性が考えられる。

出土遺物の中では、ガラス玉、鉄斧、耳環の出土が注目される。一般的な集落からの出土は稀な遺物であるだけにその出土の意味については現時点では明確ではないが、今後さらに検討を加えたい。

今回の調査は限定された範囲で実施したものであるが、弥生時代中期～後期、及び古墳時代後期における調査地周辺の地形環境などを考慮するうえでは貴重な成果を得ることができたといえよう。今後周辺地で実施される調査成果を加味しながら、今回の調査成果についてさらに検討を加えていきたい。



fig.233 出土遺物

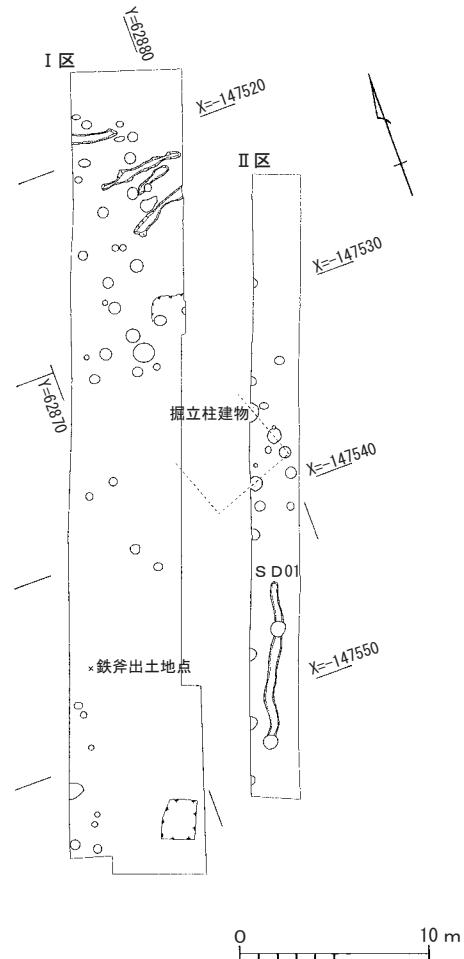


fig.234 調査区平面図

33. 出合遺跡 第46次調査

1. はじめに

出合遺跡は明石川中流域西岸の沖積地及び洪積台地上に位置する。1977年に実施された第1次調査以来、45次にわたって調査が実施され、弥生時代前期～近世の複合遺跡であることが明らかになっている。

なお、今回の調査成果については、平成22年度に実施した第45次調査成果とともに平成24年度に『出合遺跡第45・46次発掘調査報告書』を刊行しており、調査の詳細については報告書を参照されたい。

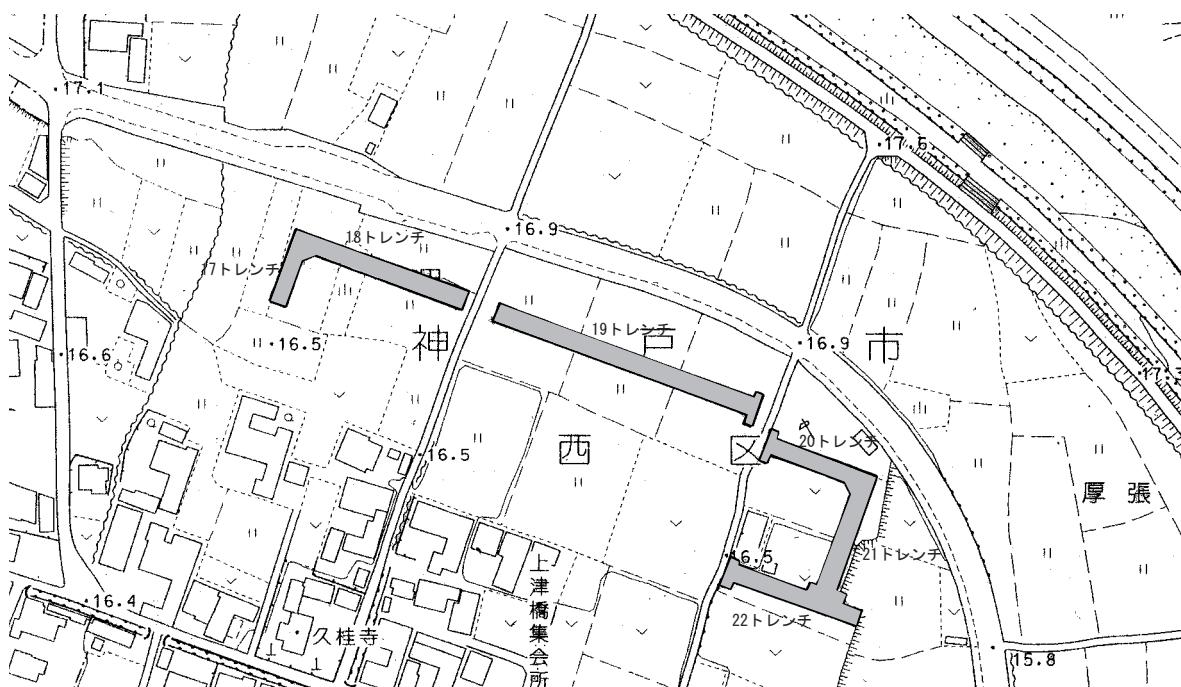


fig.235 調査地位置図 1 : 2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、宅地開発事業に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。弥生時代前期～近世の遺構・遺物を検出したが、特に、弥生時代前期、弥生時代後期～古墳時代前期の遺構を数多く確認しており、当該時期の集落の存在が明らかになった。当該事業に伴う発掘調査は、平成21年度より実施しており、今回の調査区や検出遺構の名称（番号）等は、平成21、22年度調査（21年度試掘調査：1～8トレンチ、22年度試掘調査：9～13トレンチ、第45次調査：14～16トレンチ）に連続させている。

今回の調査対象範囲は開発事業地内の街路設置部分であり、西側から17～22トレンチと呼称して順次実施した。17、18、20～22トレンチでは3面、19トレンチは4面の遺構面を確認した。

基本層序

地点によって若干異なるが、現地表面より盛土及び整地土、旧耕土が存在し、いずれの地区においても、旧耕土の下層上面が第1遺構面となる。

旧耕土の層厚は、各トレンチとも20～40cmを測り、第1遺構面の標高が、概ね17～19トレンチでT.P. 15.6～15.8m、20～22トレンチでT.P. 15.2～15.3mとなっている。

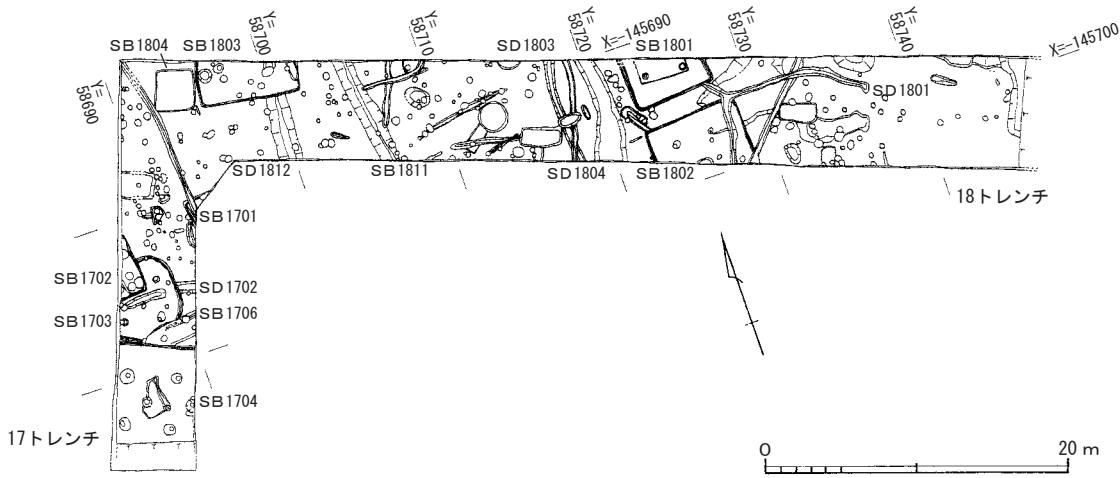


fig.236 17・18トレンチ第1遺構面平面図

17、18、20～22トレンチの第2遺構面、19トレンチの第2、第3遺構面については、第1遺構面より10～30cm下層において確認した。17、18、20～22トレンチの第3遺構面、19トレンチの第4遺構面については、上層遺構面より70～150cm下層において確認できるが、地区によって状況の差異が大きく、遺構面の上層の沖積層や洪水砂層の堆積状況や層厚も異なり、遺構面の標高も様々である。また、18トレンチ西半部・東半部、19トレンチ、20トレンチ、21トレンチ北半部・中央部で確認した遺構面直上の遺物包含層（黒灰色粘質土、黒灰色シルト、黒灰色粘砂土、暗灰色シルト）も層厚10～40cmと一定ではなく、遺物の出土量も地区によって異なる。同遺構面の標高は、概ね18トレンチでT.P. 13.8～14.3m、19トレンチでT.P. 13.5～14.2m、20トレンチでT.P. 14.4m、21トレンチでT.P. 13.7～14.4mを測る。

17トレンチ、18トレンチ中央部・東端部、19トレンチ西端部・中央～東半部、21トレンチ中央部～南半部、22トレンチについては、砂、砂礫が中心の流路状堆積層、シルト、粘質土が中心の湿地状堆積層となっており、これらに挟まれた微高地状の部分において遺構を確認した。

17・18トレンチ

今回の調査地の西側に位置する調査区で、3面の遺構面を確認した。

第1遺構面

竪穴建物をはじめ、溝、土坑、ピットなど数多くの遺構を検出し、特に、17トレンチから18トレンチ中央部にかけてはその密度が高い。これらの遺構の時期については、弥生時代後期末～室町時代に該当し、弥生時代後期末～古墳時代中期に属するものが多い。

竪穴建物の中には、建築部材の可能性が高い炭化材を多く検出したもの（SB1703）や屋内高床部をもつもの（SB1706）、また、一辺約3mの小規模なもの（SB1804）などを確認した。溝には、遺物がまとまって検出したもの（SD1803、SD1811、SD1812）などがある。

第2遺構面

竪穴建物、溝、土坑、ピット、落ち込みなどを検出している。第1遺構面に比べて遺構密度は低く、出土遺物も少ない。遺構の時期は、概ね弥生時代後期の範疇に入るものが多い。

第3遺構面

先述したように、大半が流路状堆積にあたる。遺物包含層に該当する黒灰色粘質土が存在する部分においても、その下層において遺構は検出していない。遺物包含層、流路状堆積層から弥生時代前期末～中期に属する遺物が出土しているが、数量的には少ない。

19トレンチ

今回の調査地の中央に位置する調査区である。4面の遺構面を確認したが、17・18・20～22トレンチの第1遺構面が当トレンチの第1・2遺構面に該当し、当トレンチの第3・4遺構面が他トレンチの第2・3遺構面にそれぞれ該当する。

第1遺構面

掘立柱建物、溝、土坑、ピット、落ち込みなどを検出し、主として平安時代後期～室町時代に属すると考えられるが、奈良時代～平安時代前期に属するものも存在する。

第2遺構面

溝、土坑、ピットなどを検出しており、特に西半部～中央部において多く存在する。弥生時代後期末～古墳時代後期に属するものと考えられるが、古墳時代中期以降のものが中心である。

第3遺構面

中央部～東半部で遺構を確認した。溝あるいは溝状遺構が大半で、その多くが弥生時代後期～古墳時代前期に属するものと考えられる。

第4遺構面

遺構面の西端部で流路状堆積となって大きく傾斜し、また、中央部～東半部の一部に湿地状堆積で若干低くなる他は、比較的安定した地勢を呈す。弥生時代前期の溝などを検出している。

特に、中央部～西半部に遺構が集中しており、溝、土坑、ピット、落ち込みなどを検出し、その出土遺物から弥生時代前期に属すると考えられる。

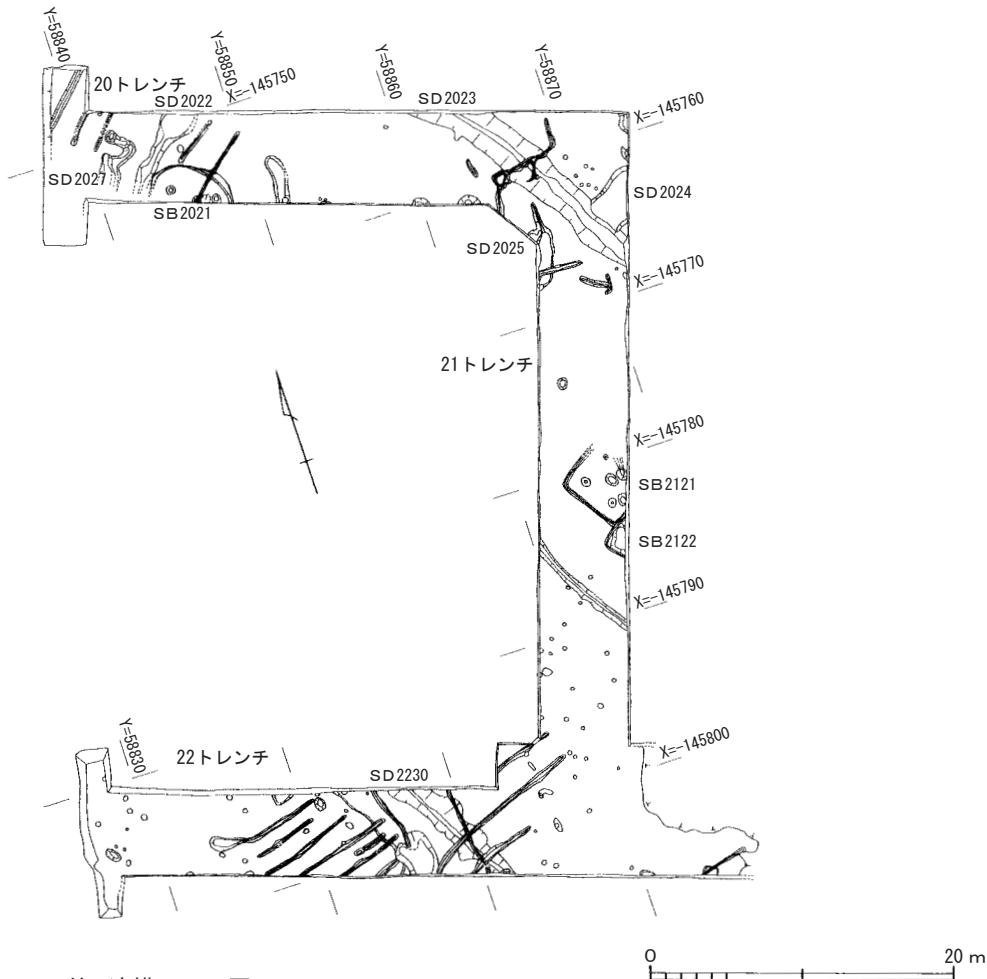


fig.237 20～22トレンチ第2遺構面平面図

20～22トレンチ

今回の調査地の東側に位置する調査区で、3面の遺構面を確認した。

第1遺構面

掘立柱建物をはじめ、土葬墓（木棺墓）、溝、土坑、ピットなどを検出した。これらの遺構は古墳時代後期～中世に属するものと考えられ、掘立柱建物、土葬墓については、平安時代後期～鎌倉時代前期に属するものと考えられる。

第2遺構面

堅穴建物2棟をはじめ、溝、土坑、ピットなどを検出した。これらの遺構は出土遺物から、概ね弥生時代後期～古墳時代前期に属するものと考えられる。

第3遺構面

20トレンチ～21トレンチ中央部にかけて、堅穴建物1棟をはじめ、溝、土坑、落ち込み、ピットなどを検出した。遺構が存在する地区は比較的安定した地勢を呈するが、21トレンチ中央部～22トレンチにかけては、湿地状堆積あるいは流路状堆積となる。

出土遺物

今回の調査においては、弥生時代前期～近世に属すると考えられる遺物が出土しており、その大半が土器類である。その他では、木製品類、石製品類、金属製品類などが挙げられる。

木製品類としては、堅穴建物の炭化材や木棺墓の棺材の他、農具（鍬）、容器（槽）を含む多くの製品などが出土している。

石製品類の大半は弥生時代前期に属すると考えられ、その多くは石製品製作時に排出されるサヌカイトの剥片で、製品にはサヌカイト製石鏃や片岩及び粘板岩製磨製石包丁などがある。

金属製品の多くは鉄製品で、20トレンチSB2021において出土した鉄鏃は特筆すべきものである。

3. まとめ

今回の調査成果については、主として4時期の盛行期（弥生時代前期末～中期初頭、弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代中期～後期、平安時代後期～鎌倉時代前期）の遺構、遺物が基軸となる。

弥生時代前期末～中期初頭の遺構、遺物については、時期差が若干みられるものの、ほぼ大半が前期末に属するものと推測される。また、19トレンチ西半部～中央部、20トレンチ～21トレンチ北半部といった比較的安定した土壤の地区において遺構を多く確認しており、当時の土地利用を考察する上で有効である。

弥生時代後期、古墳時代初頭（庄内式併行期）、古墳時代前期（布留式併行期）に属する遺構、遺物は、過去の当遺跡の調査を含む明石川流域の遺跡の調査において、数多く確認されており、今回の調査においても数量的割合が高い。

古墳時代中期～後期に関しては、近年の出合古墳群（出合遺跡第37・39・40次調査）の調査成果もあり、クローズアップされる時期もある。今回の調査においても、木製品類を多く検出した溝（SD1912）を含む集落の一端と考えられる遺構を確認している。

平安時代後期～鎌倉時代前期の遺構は、その多くを20～22トレンチにおいて検出し、同地区が集落の中核部と推測される。

以上、今回の調査成果からは集落の中核部を調査したことがうかがえる。多大なる成果が得られたものと考えられ、当遺跡の諸相についてかなり明らかにできたものと推察される。

III. 平成23年度の保存科学調査・作業の概要

平成23年度に神戸市教育委員会で実施した保存科学業務について、概要を以下に記す。

遺構の保存科学

北青木遺跡第7次調査：脆弱遺物の取り上げ～室内での保存処置

北青木遺跡は東灘区北青木周辺の臨海平野に展開する遺跡で、平成23年度に実施された第7次調査において、弥生時代中期の周溝墓6基をはじめ、奈良時代にかけての遺構、遺物が出土した。これらのうち、奈良時代の溝（S D202）からは、貝類等遺存体が密集した状況で検出された。これらは溝中に長さ6mにわたって断続的に分布しており、人為的に投棄されたものと考えられた。これらはかなり脆弱化が進行した上、それぞれが塊状に積層して固着しており、個別に取り上げることが困難であったため、いくつかの単位に分けて、周囲土壤ごと発泡ウレタンフォームで梱包し取り上げることとなった。

最初に取り上げ対象範囲を設定して周囲から切り出す。今回は7ブロックに分割して取上げることとした。切り出し後、下部土壤にトンネルを掘削、トンネル内にウレタンフォームを充填する作業を繰り返し行い、遺物と遺跡土壤を切り離していく。続いて切り取り対象の周囲にダンボールの型枠を設置し、ウレタンフォーム（日清紡：エアライトフォーム）を流し込む。ウレタンフォームは切り取り対象物の隅々にいきわたり硬化するため、脆弱な遺物も安全に取り上げることが可能となる。周囲土壤と共に取り上がった遺存体は、そのまま神戸市埋蔵文化財センターに搬入し、引き続いての保存処置を待つこととなった。



fig.238 貝類等遺存体出土状況



fig.239 周囲土壤掘削作業



fig.240 ウレタンフォームでの梱包作業

埋蔵文化財センターに搬入された動物遺存体は、まず天地を逆さまに置いた状態でウレタンフォームを開梱し、下部土壌を除去した。貝殻表面のクリーニングを行い、詳細な調査を行った。この後保存処置に移るが、貝殻群を塊状で保存するため、どの面を見せて保存するかを決める必要がある。当然のことではあるが、出土時の下面が上面に比べて残存状況が良好であったため、今回は天地を逆にした状態で保存することとした。まずは露出している下面について、脆弱化した貝殻を物理的に強化するため、酢酸ビニル系合成樹脂（新成田総合社：ナチュラルコート）を滴下、含浸した。また周囲土壌はシリカ系合成樹脂（ワッカー：OM-25）を塗布、含浸強化措置とした。その後、ウレタンフォームで再梱包し反転、正位置に戻し、上面を開梱した。上面もナチュラルコートで含浸強化した後、遺存体が露出した部分について、バックアップとしてシリコーンゴム（信越：KE-12）を塗布した。その上からパテ状のエポキシ系合成樹脂（コニシ：Kモルタル）を盛り、ウレタンフォームで再び梱包した。反転・開梱し、土台となるウレタンフォームを切削成形し、完成した。



fig.241 開梱・下部土壌掘削作業

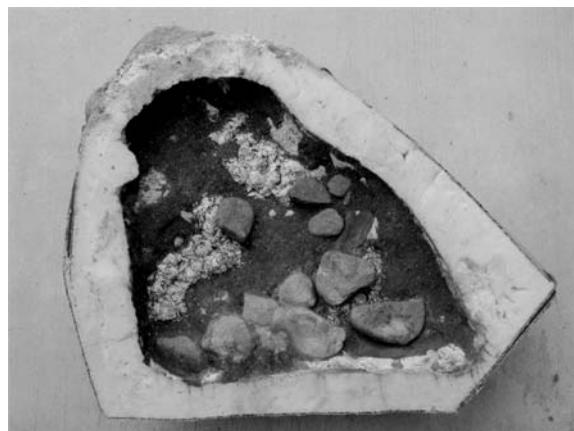


fig.242 遺物下面検出状況



fig.243 バックアップ材設置作業



fig.244 完成状況

旧神戸外国人居留地遺跡第1次調査：土層転写

平成21年度に発掘調査が行われた中央区旧神戸外国人居留地遺跡第1次調査では、1868年の神戸開港に際し、現在の三宮から元町周辺に設けられた外国人居留地の遺構の一部が出土した。調査中、上部構造物の基礎として設置された木杭などの構造物と、調査地の基本土層の保存を目的とし、調査区壁面の土層転写を実施した。転写した土層はシート状のまま埋蔵文化財センターにて保管していたが、平成23年度、恒久的な保管のため、パネルに貼付することとなった。

保管されていた転写土層は2点あり、いずれも変性ポリウレタン系合成樹脂（トマック：N S-10）および寒冷紗によってバックアップされており、柔軟性のあるシート状を呈している。これに大きさを合わせて木製のパネルを製作した。パネルへの接着には、エポキシ系合成樹脂（アラルダイト：A E R 2400）+硬化剤（日本チバガイギー：H Y837）を用いた。なお、土層塗膜の接着面には凹凸があり、パネルとの間に空隙ができる。この空隙を充填するため、増量剤としてアルミナシリケート系マイクロバルーン（Fillite:52/7（F G））を適宜、接着剤に添加した。貼付け後、土壤の剥落止めとして、シリカ系合成樹脂（ワッカー：OM-10）を刷毛で塗布し、完成した。完成した土層パネルは埋蔵文化財センターにて保管している。

なお、この転写土層には現地調査中に判明した、18~19世紀に発生した地震による津波の堆積層が含まれていたため、現地調査終了後にも、実際の堆積物の詳細な観察が可能であった。これは土層転写の有効性が示された例と言える。



fig.245 転写土層および専用パネル



fig.246 転写土層シート貼付け作業



fig.247 剥落止め用樹脂塗布作業



fig.248 完成状況

遺物の保存科学

奥平野浄水場：木製遺物の保存（※1）

兵庫区に位置する奥平野浄水場は、神戸市の水道が開業した明治33年（1900年）より110年以上にわたり機能し続けている。中でも、「神戸市水の科学博物館」として場内に残っている旧急速ろ過場上屋は、大正6年（1917年）、河合浩蔵の設計によるドイツルネサンス様式の建物であり、平成10年、国登録有形文化財として登録されている。

去る平成22年6月、大容量送水管の設置工事にともない、浄水場内に既設の低層配水池甲号池の解体工事が行われた。甲号池は大正4年（1915年）に建造され、100年間近く使用されてきた。解体作業中、基礎工として合計約1,700本打設された松杭の一部が残存していることが判明し、比較的残存状態の良好な3点について、保存を図ることが決定した。松杭は取上げ後、浄水場事務所内において新聞紙で包み大気との緩衝材としつつ、ゆっくりと乾燥させていた。しかしカビの発生を見たため、エタノールによる洗浄と噴霧をしながら経過を見守っていたが、今回、埋蔵文化財センターにおいて改めて保存処置を施すこととなった。

松杭は3点あり、いずれも直径約15cm内外の、表皮を剥がれた芯持ち丸太材である。一端を尖頭加工しており残存状態は良好であるが、もう一端は解体工事の際に破損し、全長は定かではない。

これらは平成23年3月、埋蔵文化財センターに搬入後、エタノールにて付着土砂等を洗浄した。保存処置については、物理的な劣化はさほど顕著ではないと考えられたため、樹脂含浸処置は行なわず、真空凍結乾燥法での乾燥処置のみ実施することとした。ただし、最も長い杭①（残存長223.5cm）については、埋蔵文化財センターの真空凍結乾燥機の資料庫に入らなかつたため大気暴露状態での乾燥とし、杭②（同127.0cm）、杭③（同91.0cm）のみ同法により作業を実施した。

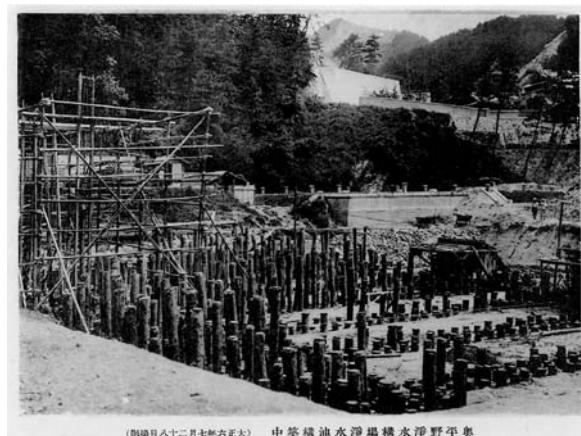


fig.249 低層配水池の建設工事（大正6年）※2

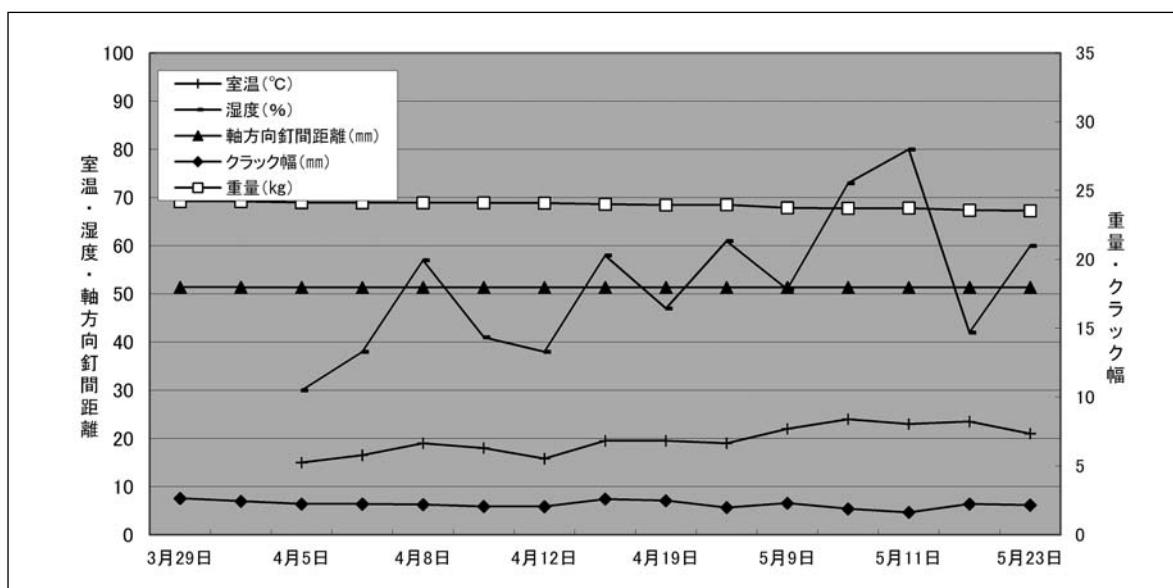


fig.250 杭① 処理経過

乾燥中、室内温湿度の変化による影響を観察するため、杭表面に生じたクラックの幅と、杭の主軸方向について2点間距離をモニタリングしたところ、fig. 250のように室内湿度の上昇時にクラック幅が狭まり、低下するとクラック幅も広がる現象がわずかに見られた。これは当然の現象ではあるが、材そのものが今も十分な復元力を保持している証左と考えられた。

乾燥作業の結果、表24に示したように、杭①：2.8%、杭②：6.07%、杭③：7.51%（昇華水分量／搬入時重量×100）の水分を除去するに到った。杭②・杭③にくらべ、杭①の昇華した水分率が低いのは、真空凍結乾燥を実施しなかったことが要因と考えられる。クラック幅、軸方向寸法については変化も僅少であり、対象遺物の保存方針として許容範囲内と考えられる。

杭は処置後重量が安定することを確認した上で、調湿剤（富士シリシアArtsorb：55%調湿）を同梱したハイバリアフィルムチューブに封入し、返却した。

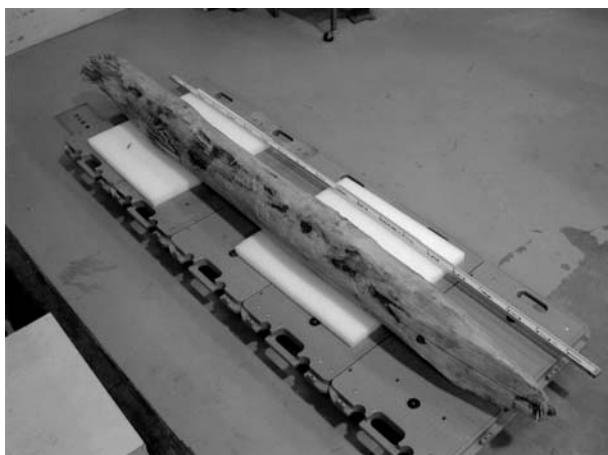
今回の保存処置にあたっては、材そのものがあまり劣化していない状態であったことと、劣化に対して比較的耐久性のあるマツ材であったこと、またすでに大気レベルでの乾燥がほぼ終わっていたことなどから、樹脂含浸をあえて行わなかった。これがカビの発生などに対して如何なる影響を与えるか、また、大気環境下での寸法安定度についても、今後の経過観察が必要である。

※1 奥平野浄水場の記述については、神戸市水道局三宅啓太氏よりご協力を賜った。

※2 出典：神戸市役所編『神戸市水道擴張誌』上巻1922

表24 乾燥前後状況

	杭①	杭②	杭③
搬入時重量：3/29 (kg)	24.22	7.58	4.93
乾燥後重量：5/23 (kg)	23.54	7.12	4.56
昇華水分量 (kg)	0.68	0.46	0.37
ウェットベース 昇華水分率 (%)	2.8	6.07	7.51



左上) fig. 251 杭①搬入時状況

左下) fig. 252 杭①クラック状況（搬入時）

右) fig. 253 杭②乾燥処置後状況

東日本大震災被災文書：紙製資料の保存

2011年3月11日、東日本一円を襲った未曾有の震災が与えた影響は、ここで記述するべくもないが、人的被害の大きさもさることながら、文化財に与えた影響も決して看過できない状態であった。被災文化財は多種にわたる上、その量は膨大である。これら被災した文化財は文化庁の要請により、全国各地の諸機関が救出し、一次的な安定化措置から本格的な保存修復措置まで、各組織の力の及ぶ限りのレスキューが行われてきた。神戸市教育委員会では、平成23年6月24日付、(独)国立文化財機構文化財研究所奈良文化財研究所の要請により、水損した文書類の保存処置に協力することとなった。

神戸市教育委員会が受け入れた水損文書類は、気仙沼市大島漁協①（8月1日搬入：18点／約60kg）、気仙沼市大島漁協②（9月2日搬入：44点／約139kg）、東北大学（12月27日搬入：96点／約139kg）の3次にわたる合計約340kgである。これらはそれぞれ現地にて一次クリーニングされた後、凍結状態で神戸市埋蔵文化財センターに搬入された。文書は全て洋紙で、昭和前半から平成にかけての公文書関係と、昭和以後に刊行された洋紙洋綴じの書籍類である。書籍には布装丁のものが多い。

これらの資料について真空凍結乾燥法による乾燥作業を実施した。神戸市保有の真空凍結乾燥機は通常、水浸出土木製品の保存処置に使用している。これは水分を多量に含んだ木製品を-40°C前後で凍結させ、そのまま庫内環境を真空にシフトすることによって昇華させた水分を、-50°C前後のコールドトラップによってキャッチし、遺物を乾燥させる保存手法である。合成樹脂含浸法との併用で、形状安定性と工程の短縮化、遺物の軽量化などを実現している。これを水損文書の乾燥に適用するが、当市では以前にも平成16年度（台風23号にて被災／豊岡市）、平成21年度（台風9号にて被災／佐用郡佐用町）の2回、水損文書類の乾燥作業を行なっており、この手法の実効性を確認済みである。

各資料は搬入記録として写真撮影、法量測定を行ない、レーヨン紙で梱包し、真空凍結乾燥機にかけた。1回の工程につきおよそ60～70kg程度の資料について処置が可能であった。乾燥の進行状態の目安とするため、ばね式の上皿自動秤に資料を乗せ、観察窓から重量変化をモニタリングしながら乾燥作業を進めた。

乾燥終了後、処理前後の重量差を昇華水分量とし、乾燥後重量で除した値の百分率を各工程において比較した。この値は搬入時の資料の含水率に近似する値である。東北大学文書の最大値（洋紙洋綴布装丁）が101.6%と高いものの、全体的な平均値はおよそ10～20%と低い。平成21年度の佐用町文書の最大値は、大正年間の和紙和綴の帳簿で、含水率378.3%であった。また、これまでに受け入れた他の資料においても高含水率であった。水浸出土木材などでは、含水率の高さは構造的な劣化度を表す指標に用いられる。しかし被災文書中含水率の高い和紙において

表25 被災文書類乾燥処理結果

凍結乾燥工程名	主な資料	搬入時重量	乾燥期間	乾燥後重量	乾量基準水分率（%）
気仙沼①	昭和以降公文書	58.6kg	2011/8/18～9/12（26日間）	47.6kg	9.2～57.8（平均値19.1）
気仙沼②-1/2	昭和以降公文書	76.1kg	2011/11/22～12/14（23日間）	64.5kg	9.5～46.3（平均値15.6）
気仙沼②-2/2	昭和以降公文書	63.0kg	2011/12/14～2012/1/13（31日間）	55.6kg	8.9～22.7（平均値13.2）
東北大-1/2	昭和以降書籍類	65.4kg	2012/1/23～2/14（23日間）	58.5kg	6.1～101.6（平均値20.6）
東北大-2/2	昭和以降書籍類	73.2kg	2012/2/14～3/1（17日間）	76.5kg	6.0～40.1（平均値12.2）

ても柔軟性をかなり保っているため、含水率＝劣化度ということは、水損した文書類には成立しないようで、どちらかというとこの数値は、水分保持能力を表していると考えられる。

また、含水率と乾燥工程に要した日数の間には相関関係は見出せなかつたが、これは、モニタリングした資料そのものの性質に統一性が無かつたため、乾燥終了を決定するタイミングに差が生じたためと考えられる。ただし、乾燥工程にはおよそ20～30日はかける必要があると結論付けることができた。

今回は、列島規模の災害における文化財レスキュー活動の一端に参加する機会を与えられた。しかし、ゲリラ豪雨などによる局地的な災害に即応し得る、地域ごとの連携体制の構築も重要である。



fig.254 搬入後仮保管状況



fig.255 搬入時状態記録作業

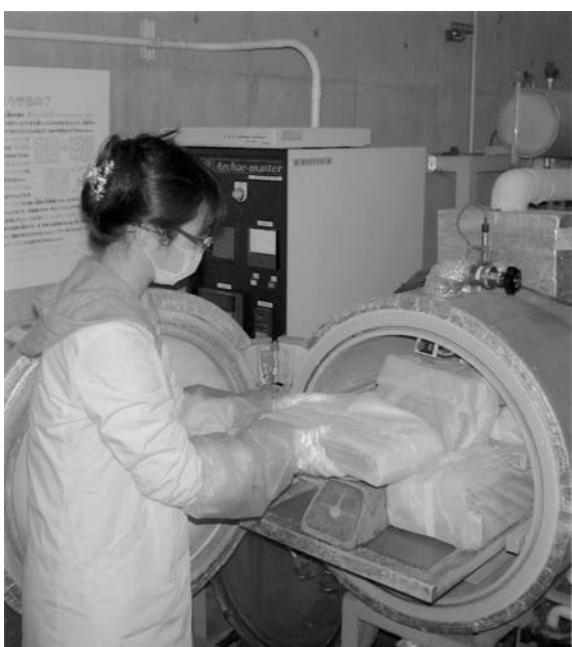


fig.256 真空凍結乾燥作業



fig.257 乾燥処理終了後梱包作業

表26 平成23年度出土保存科学関連遺物一覧

	遺跡名	次数	主な出土遺物	点数
金属製品	深江北町	12	鉄製鉗具、鉄釘、鉱滓	14
	北青木	7	鉄釘、鉱滓	7
	郡家	86	鉄刀子、鉄釘	3
	祇園	14	鉄釘、鉱滓	83
	祇園	15	鉄鏃、刀子、鉄釘	20
	戎町	68	鉄釘、鉱滓	2
木製品	深江北町	12	木簡、下駄、紡織機	2622
	北青木	7	木棺材、下駄	77
	出合	46	木棺材、柱材、杭	67
動物遺存体	深江北町	12	獸齒	7
	北青木	7	貝類・哺乳類	多數
	篠原	30	鳥類	1
	祇園	14	ウシ・げっ歯類・鳥類	3
	祇園	15	哺乳類	1
	兵庫津	54	骨製品・魚類・貝類	13
	兵庫津	55	貝類・魚類	8
	兵庫津	56	貝類	3
	御藏	69	哺乳類	2
	戎町	68	獸骨	6
	出合	46	パイプウニ	1

表27 平成23年度自然科学分析一覧

遺跡名	次数	分析項目	資料名	資料数
北青木	5	蛍光X線分析	銅鐸	1点
		ICP発光分光分析		1点
天王山5号墳	1	蛍光X線分析	玉	1点

平成23年度 神戸市埋蔵文化財年報

平成26年1月 印刷

平成26年1月 発行

発行 神戸市教育委員会文化財課

神戸市中央区加納町6丁目5番1号

TEL 078（322）5799

印刷 株式会社 プロミック

神戸市兵庫区本町2丁目2-16

TEL 078（652）2747

